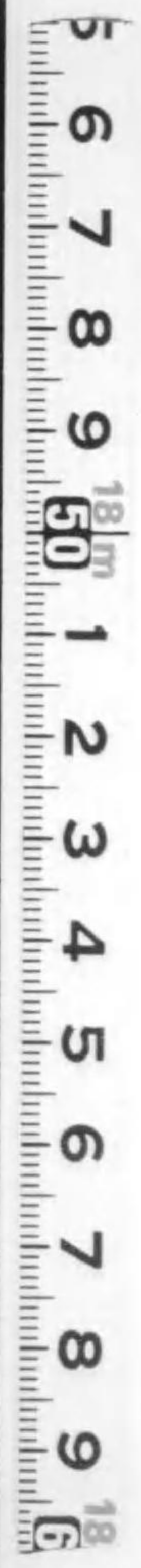


342
381



始



26Q-41

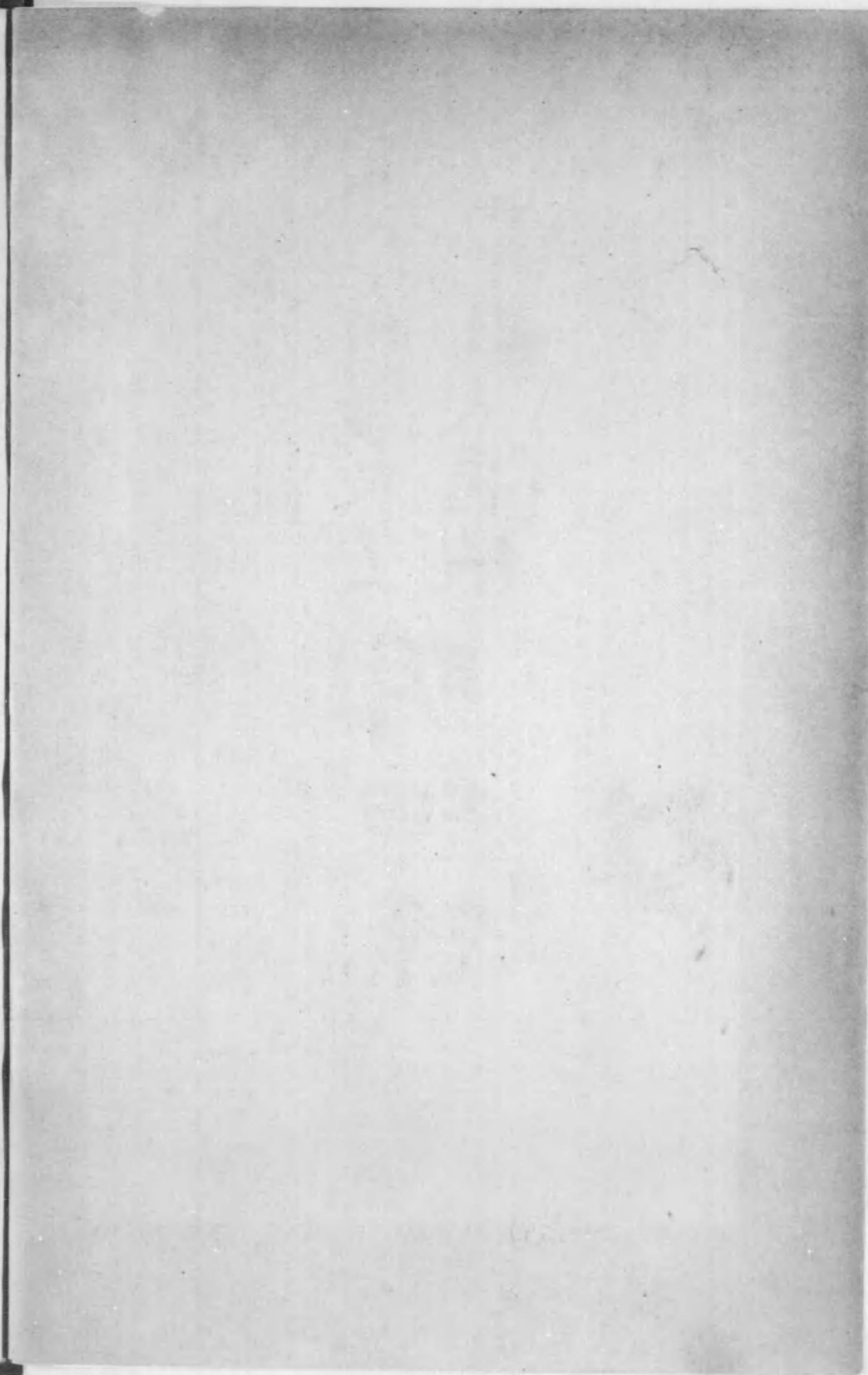
342-381

明治天皇
御大喪儀

明細録

大正
2. 9. 23
内交

影尊御下陸皇天治明



明治天皇陛下御尊影



明治天皇陛下御束帶の尊影



影尊御下陸皇天上今



影尊御下陸后太皇



下殿子太皇



下殿王親仁宣宮光

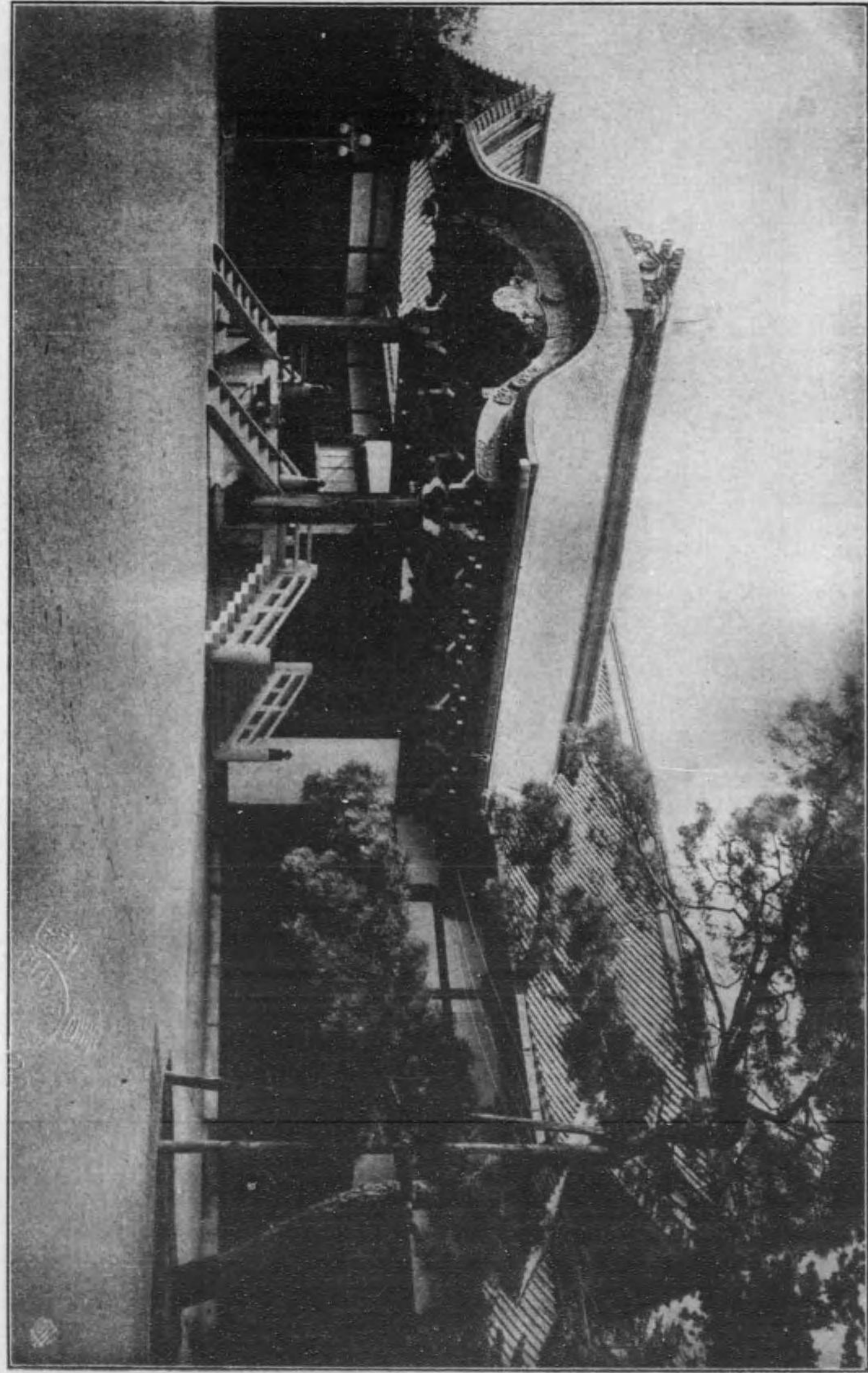


下殿王親仁雍宮淳

影尊御下陸后皇



大喪儀當日ノ宮城御車寄



北白川宮内子親王殿下



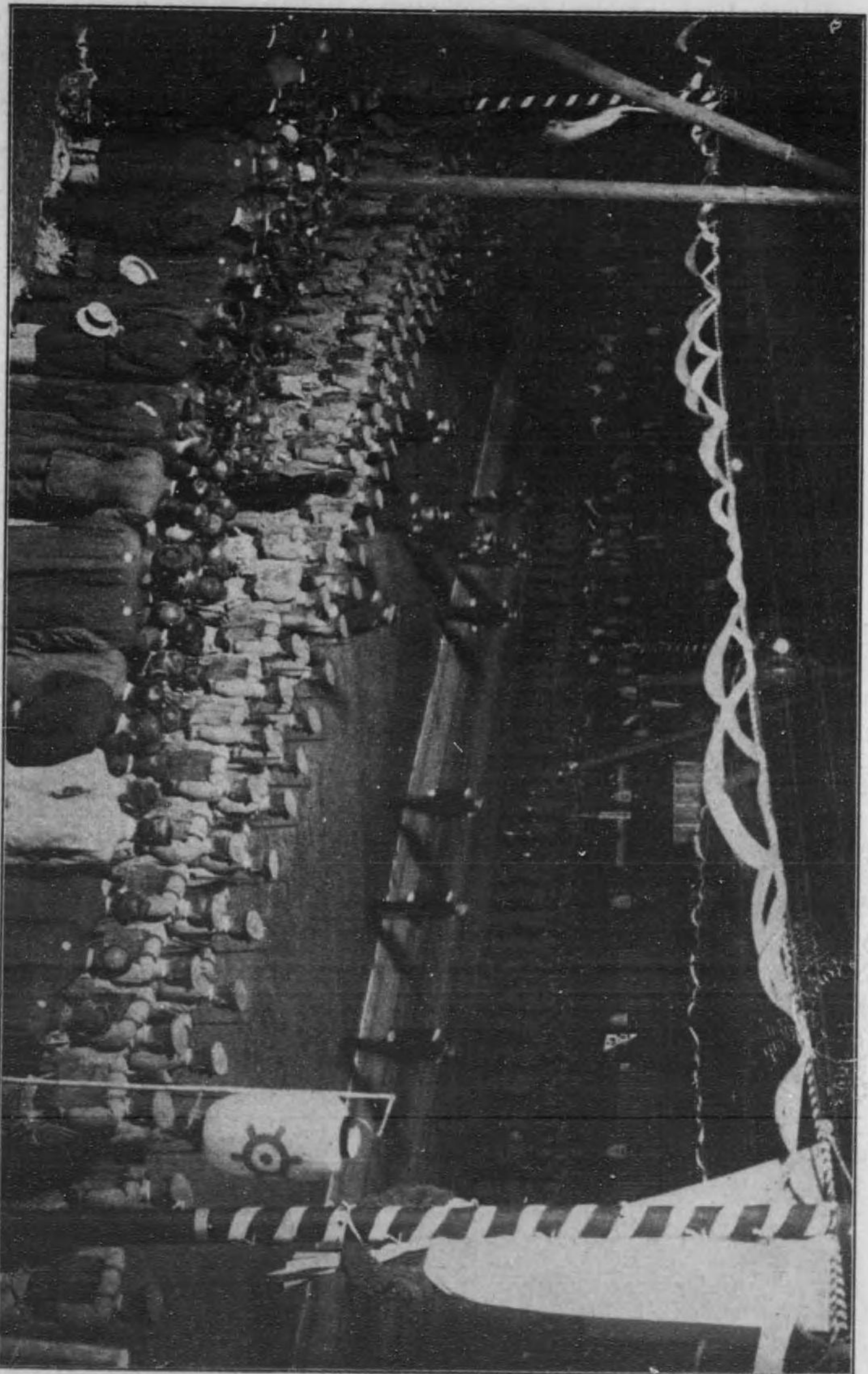
泰宮内子親王殿下



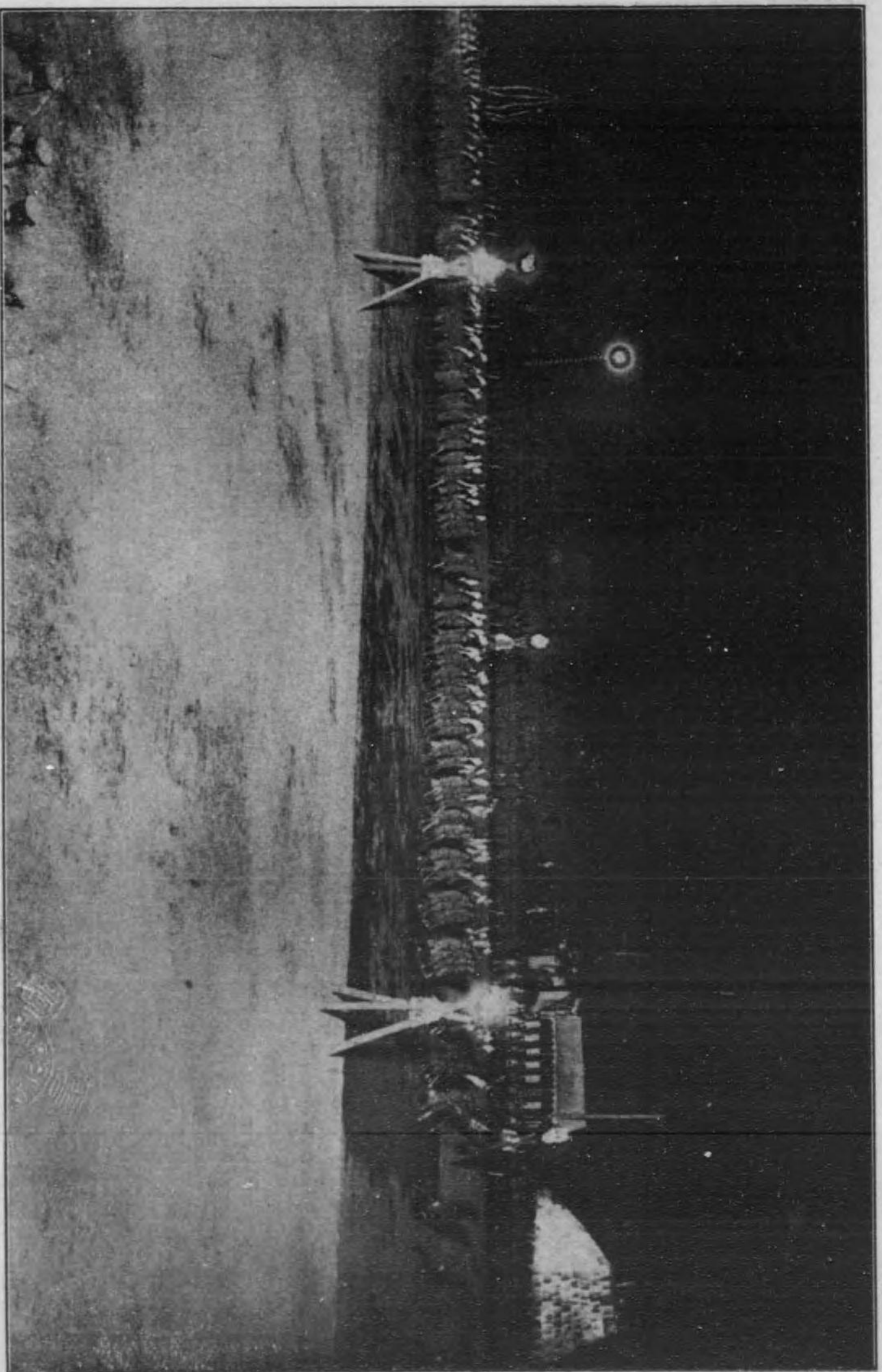
竹田宮内子親王殿下



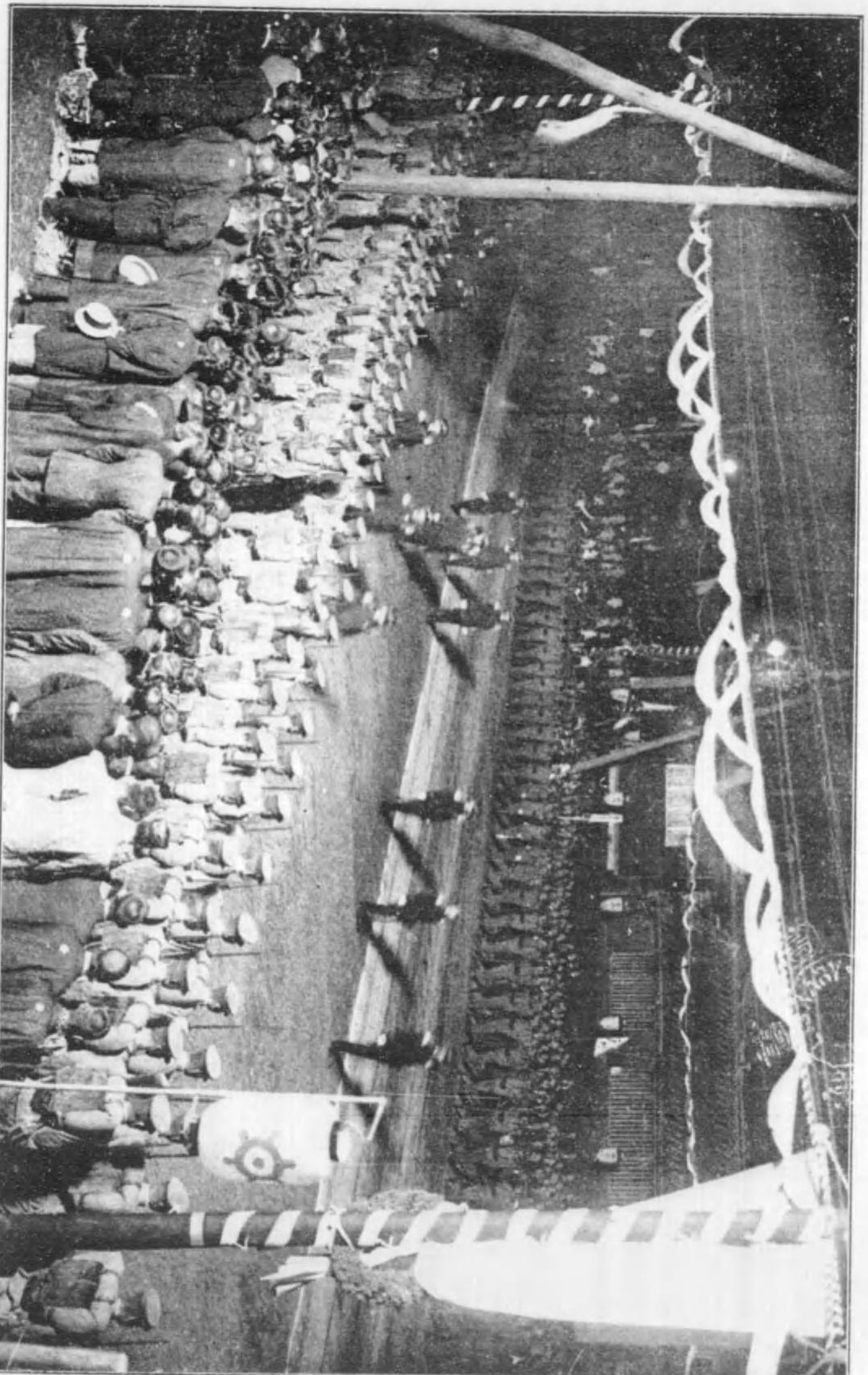
朝香宮内子親王殿下



驅先 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
すき監總樂安なものむ歩人ーに央中。りな所しりた來で出を門ノ虎もし今てへ隨を名二十部管道兼樂安監總視警てしき頭先の軍旗



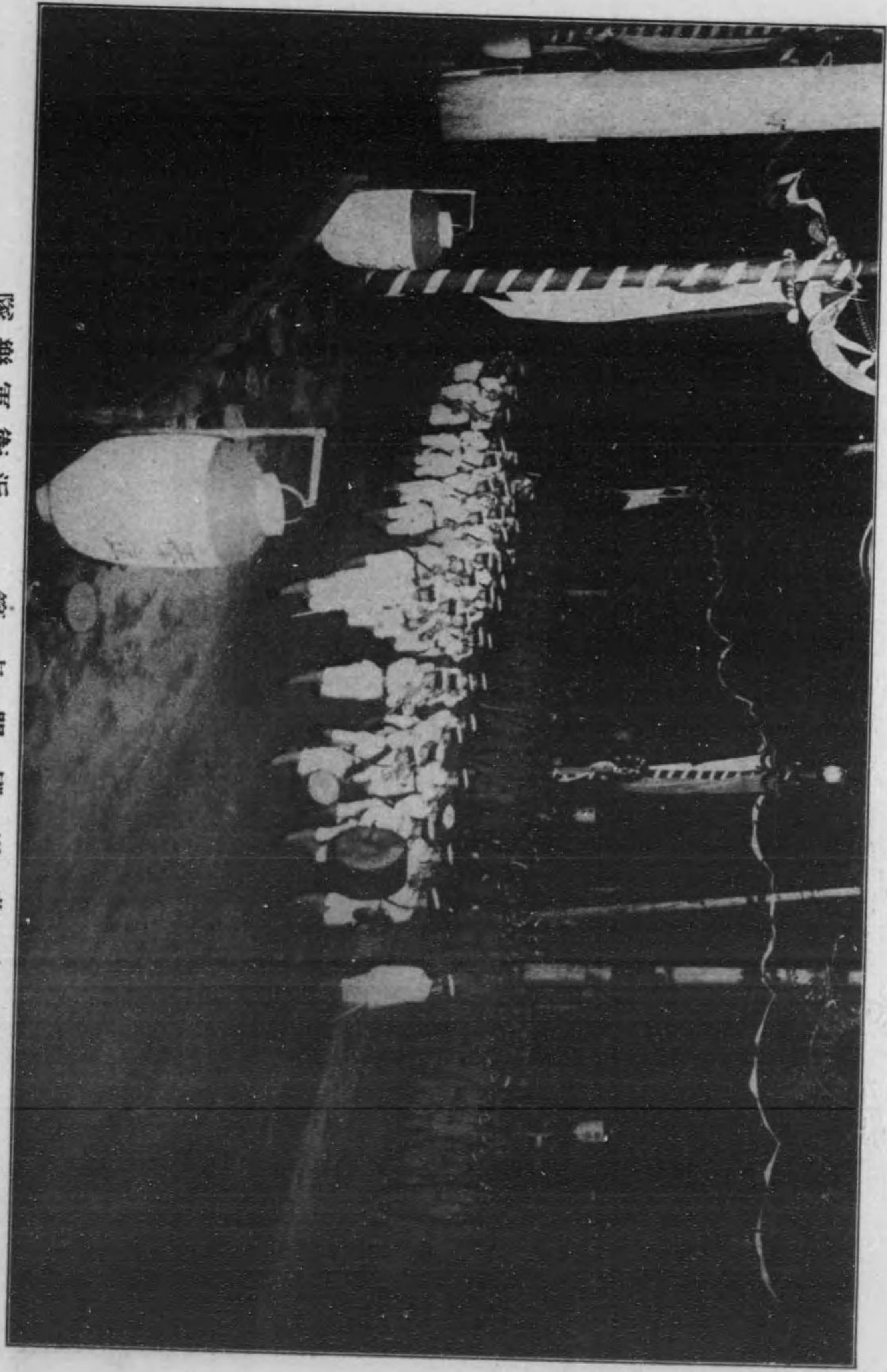
隊 聯 兵 騎 衛 近 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
隊 聯 兵 騎 衛 近 て 次 に 驅 先



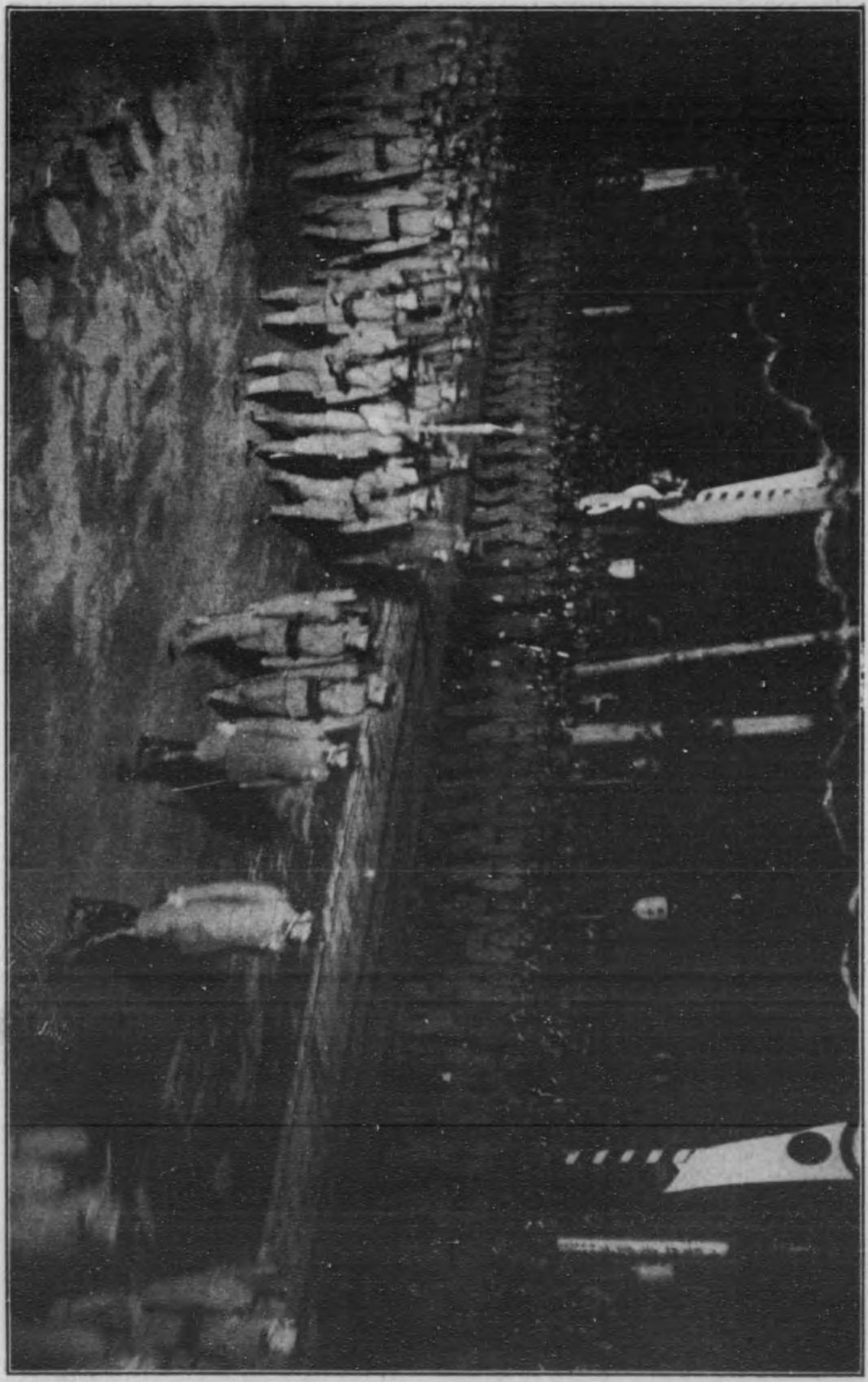
驅先 篠 岡 殿 場 葬 宮 殯
すこ監總樂安なのもむ歩人一中に央中、りな所しりた来で出を門ノ度もし今でへ圖を各二十部警道兼樂安監總視警てしと頭先の軍相



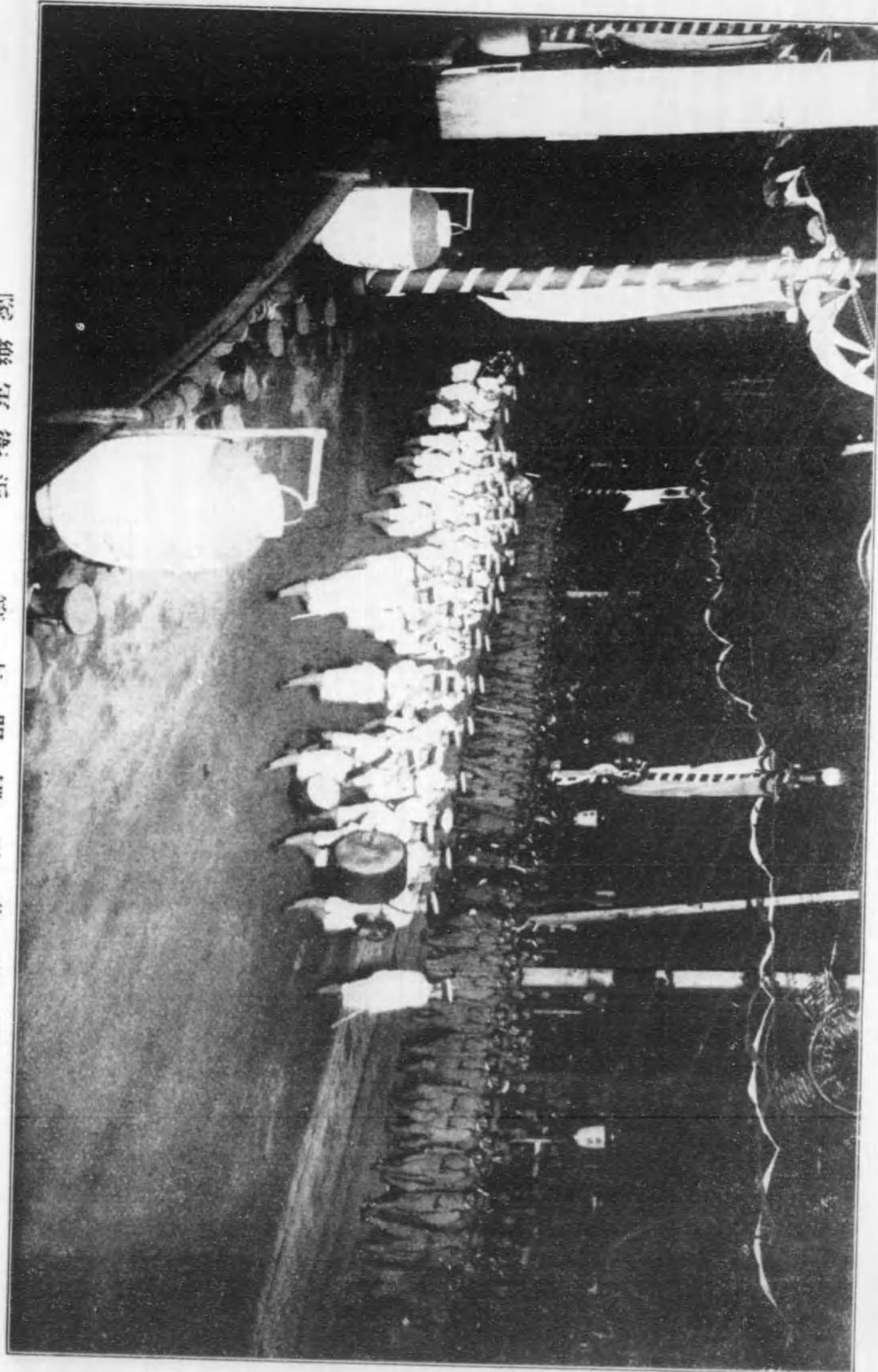
隊 騎 兵 騎 衛 近 篠 岡 殿 場 葬 宮 殯
隊 騎 兵 騎 衛 近、次に驅先



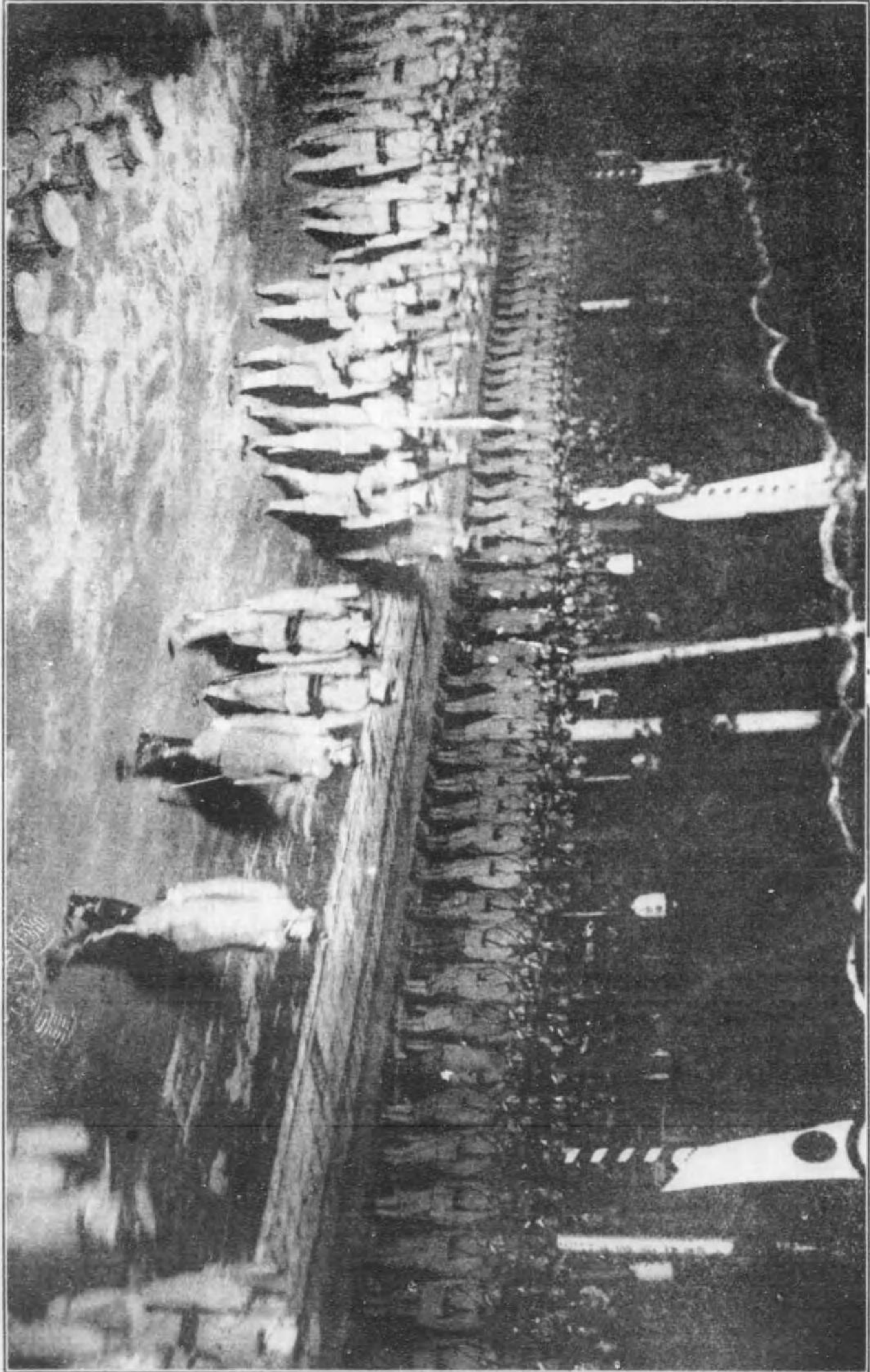
隊 樂 軍 衛 近 簿 鹵 間 殿 場 非 宮 寶
部 令 司 團 旅 一 第 兵 步 衛 近 次 に 是 寸 進 行 一 つ し 奏 せ し 極 の 哀 隊 樂 軍 衛 近 次 に 隊 聯 兵 騎 衛 近



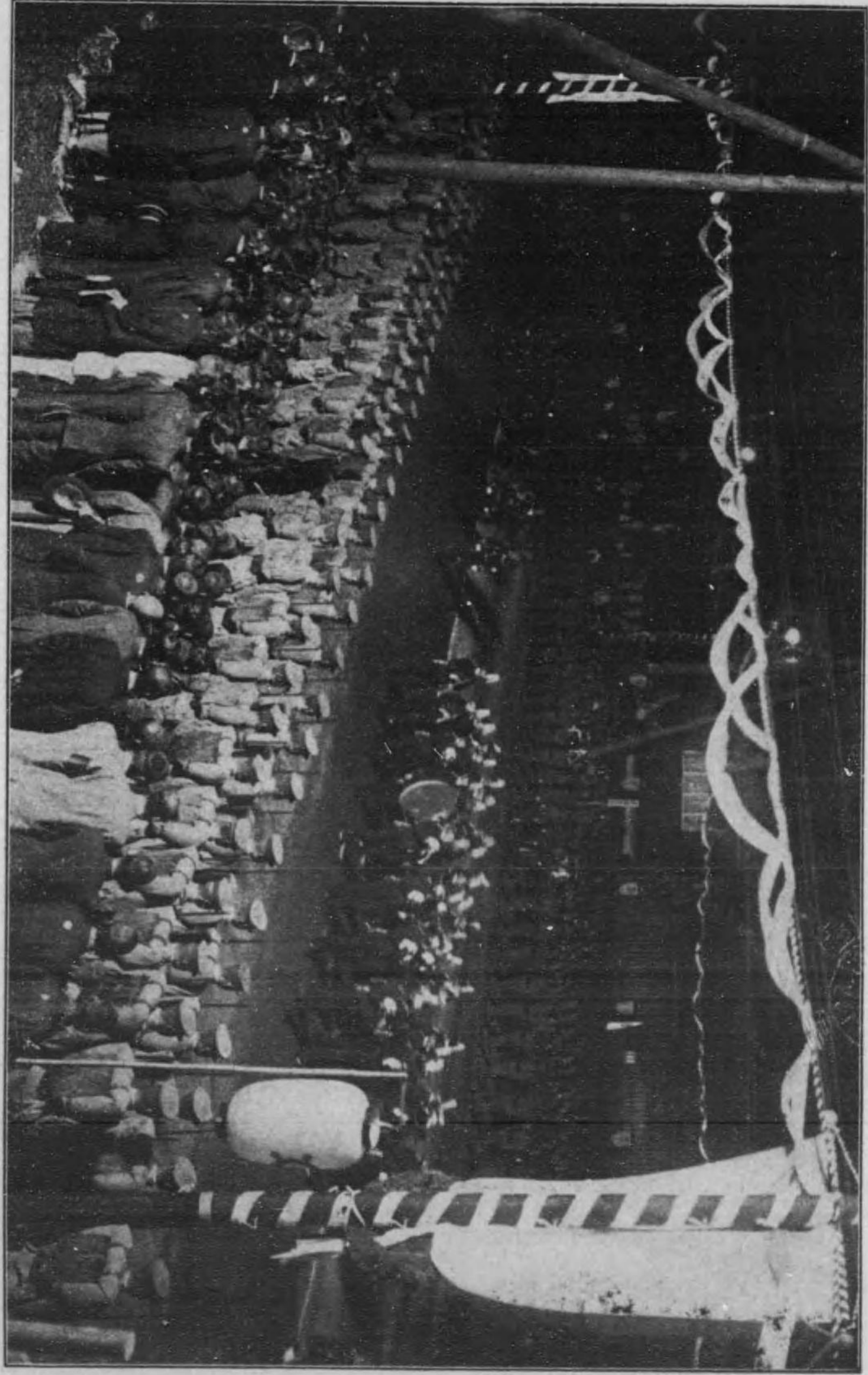
隊 聯 二 一 第 兵 步 衛 近 簿 鹵 間 殿 場 非 宮 寶
隊 仗 儀 の 隊 聯 二 一 第 兵 步 衛 近 隊 前 て 次 に 部 令 司 團 旅 一 第 兵 步 衛 近



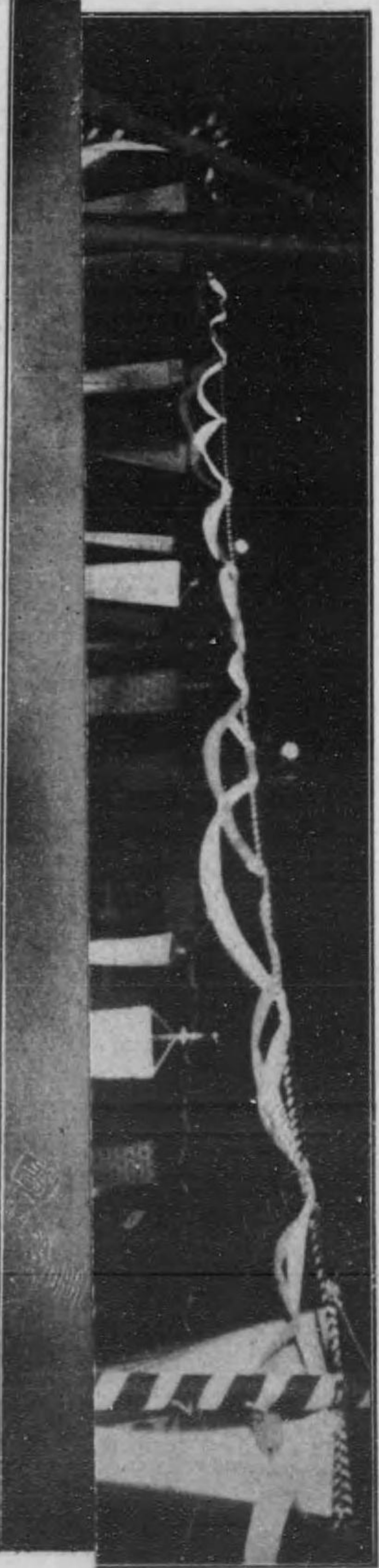
隊樂軍衛近 篠 函 間 殿 場 葬 宮 殯
部令司團旅一第兵歩衛近々次に是ヲ進行、つし奏をし毎の夜隊樂軍衛近々次に隊聯兵騎衛近



隊聯二一第兵歩衛近 篠 函 間 殿 場 葬 宮 殯
隊仗儀の隊聯二一第兵歩衛近隊前で次に部令司團旅一第兵歩衛近

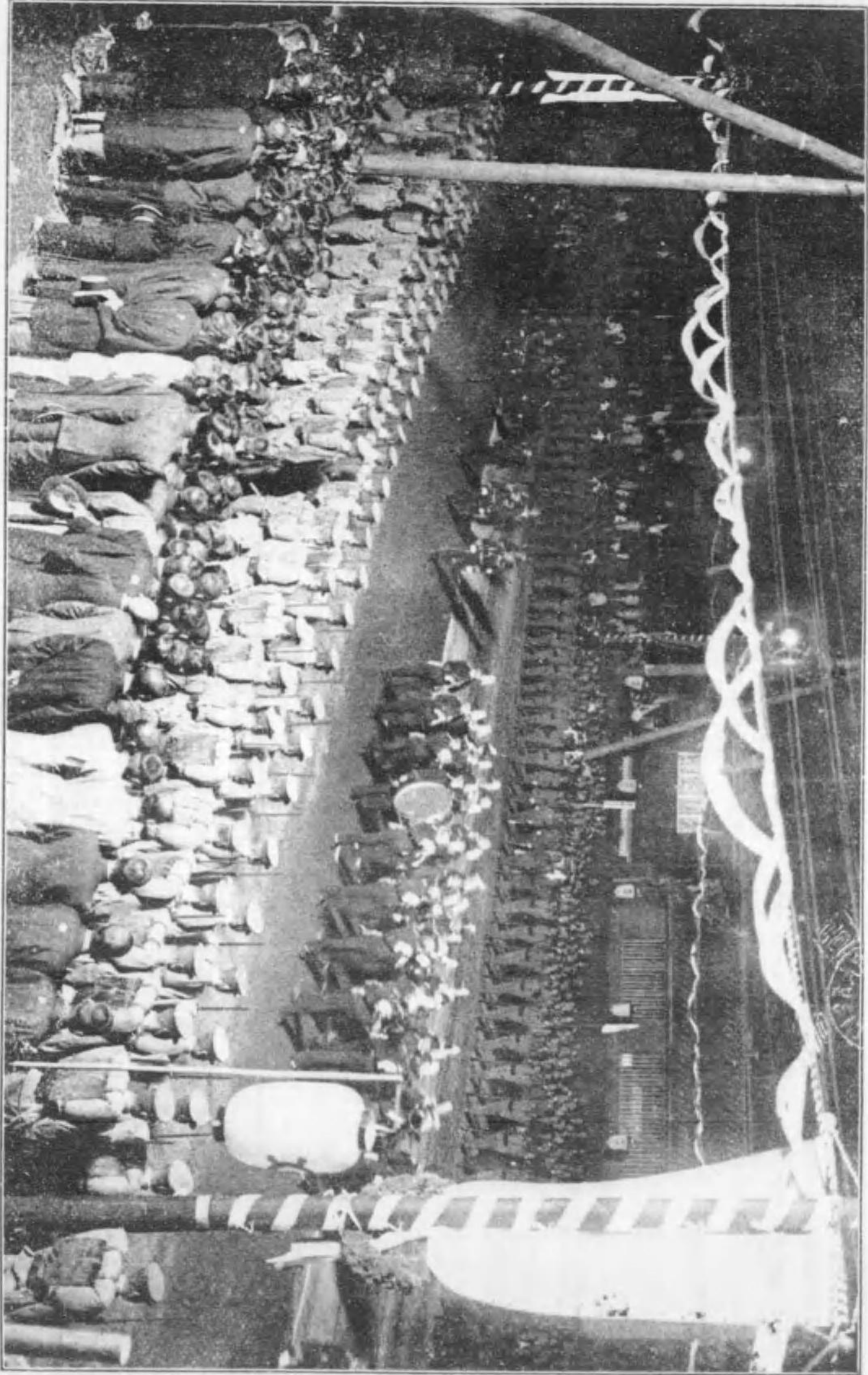


隊仗儀軍海及隊樂々軍海 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
隊仗儀軍海さ次に是寸進行しつつ奏を『極の哀』隊樂々軍海て次に隊樂二・一第兵歩衛近

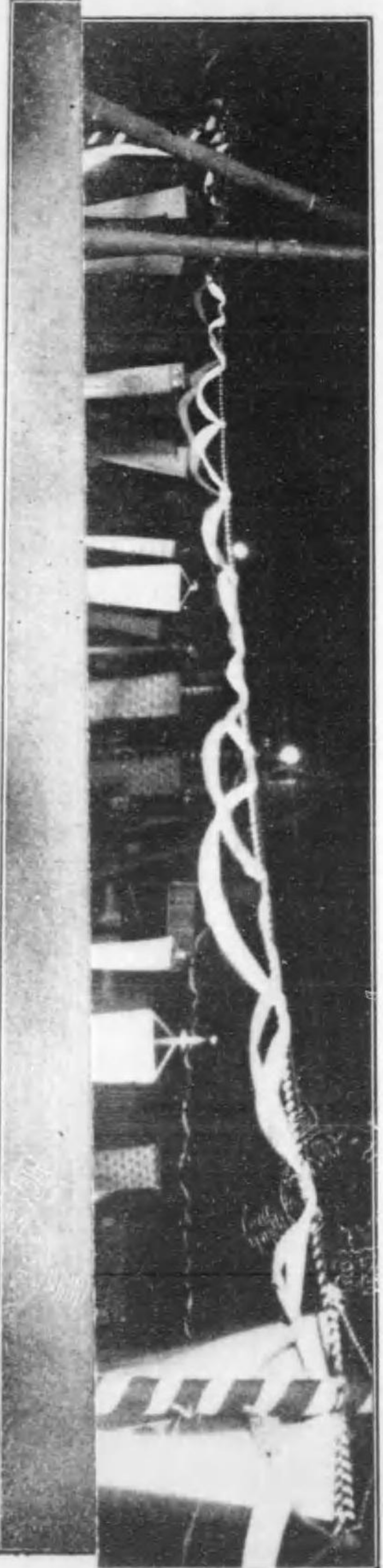


旗 轟 像 月 日 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
りめ進てび進和(金地紅盟)旗轟像日(銀地白)旗轟像月て大官隊軍使喪人に後の此。く行對十梓てさ次に色雜の持飾

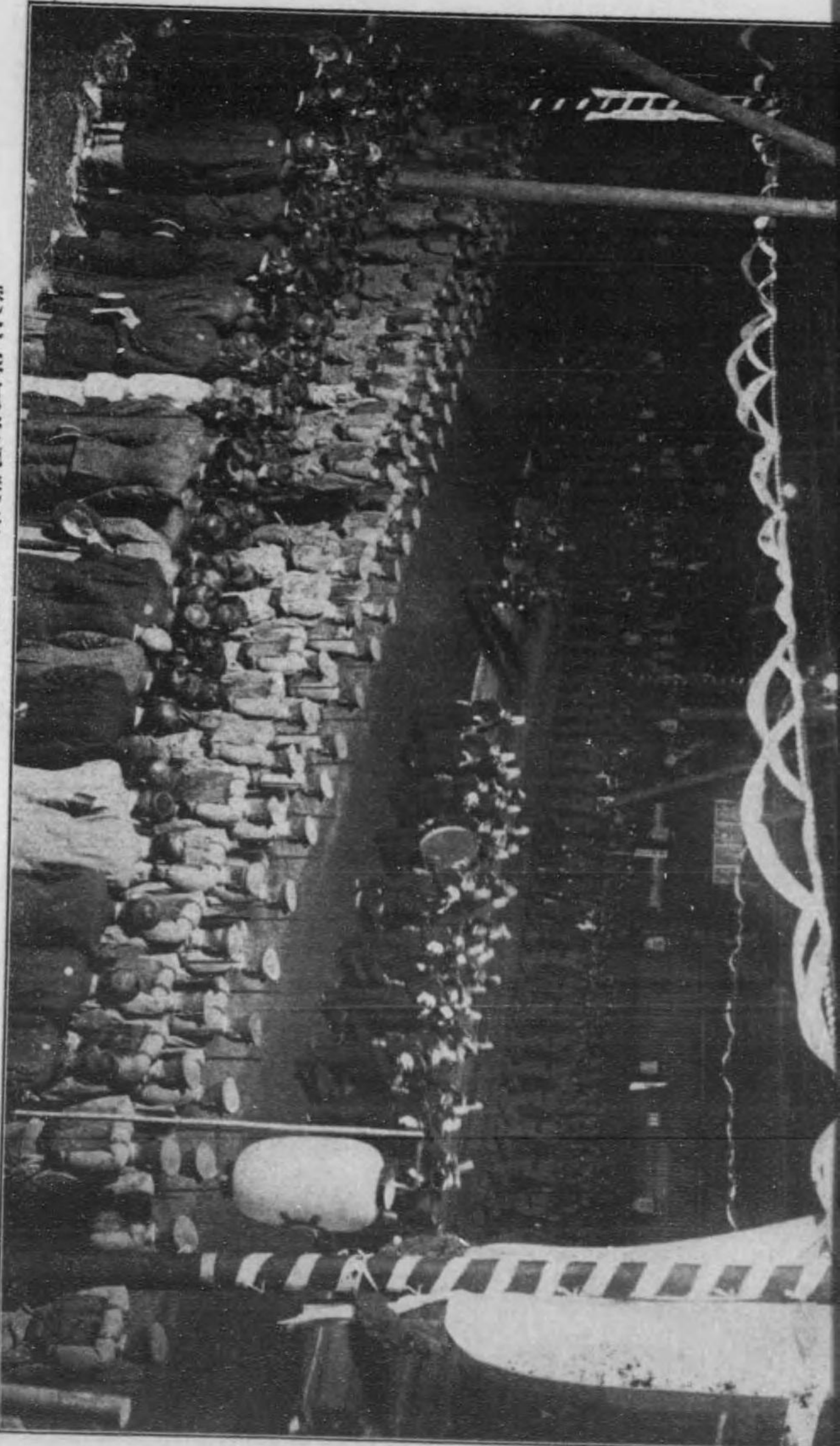
露光量違いの為重複撮影



隊仗儀軍海及隊樂々軍海 簿 函 問 殿 場 葬 宮 殯
隊仗儀軍海さ次に是す進行すつし奏を1極の哀隊樂々軍海て次に隊職二一第兵葬第近



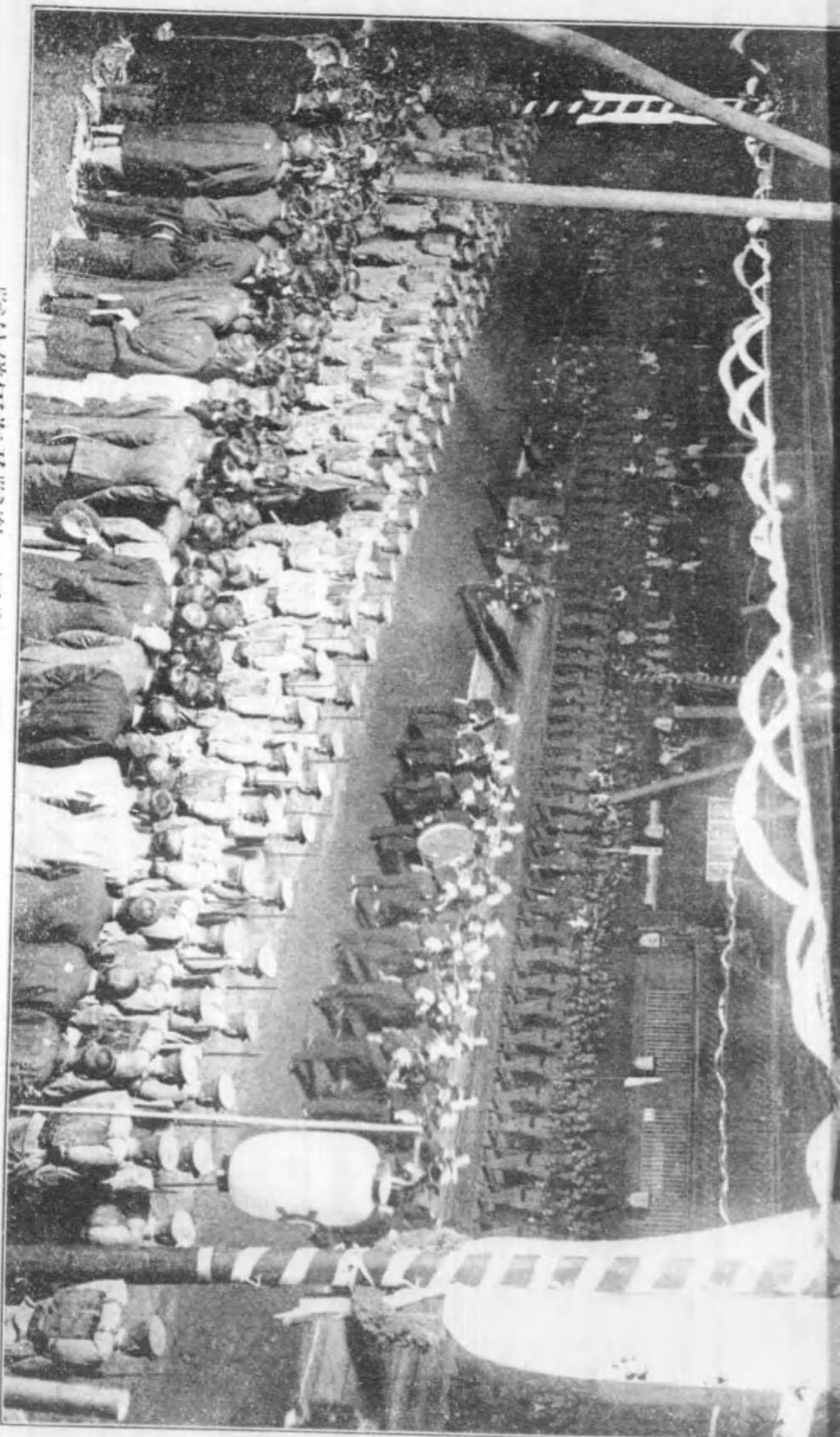
旗 幟 像 月 日 簿 函 問 殿 場 葬 宮 殯
りの進ての軍軍(金地紅道)旗幟像日(銀地白)旗幟像月て大官葬事使喪人に後の此より行到す梓てさ次に色雜の特照



隊仗儀軍海及隊樂々軍海 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
隊仗儀軍海さ次に是す進行、つし奏を「極の良」隊樂々軍海て次に隊樂二・一第兵葬殯近

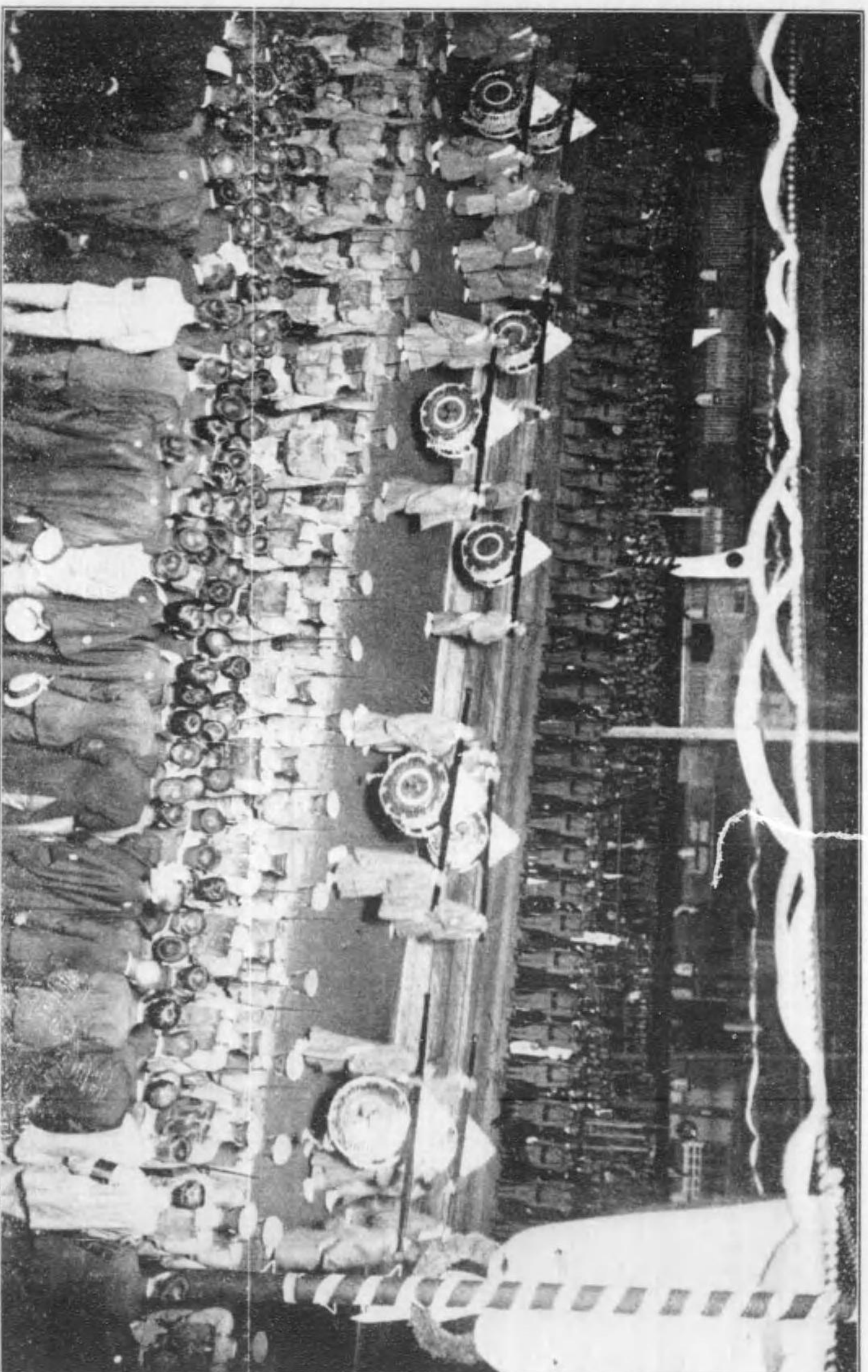


鼓 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
喪大てしら照を路に明然るぐ攝が「人仕。る入に列本は篠鹵。て果隊仗儀軍海
す進行、つ打に靜對五鉦。對五鼓ふ攝が「人仕りよ夫か進官務事の劍帶冠衣

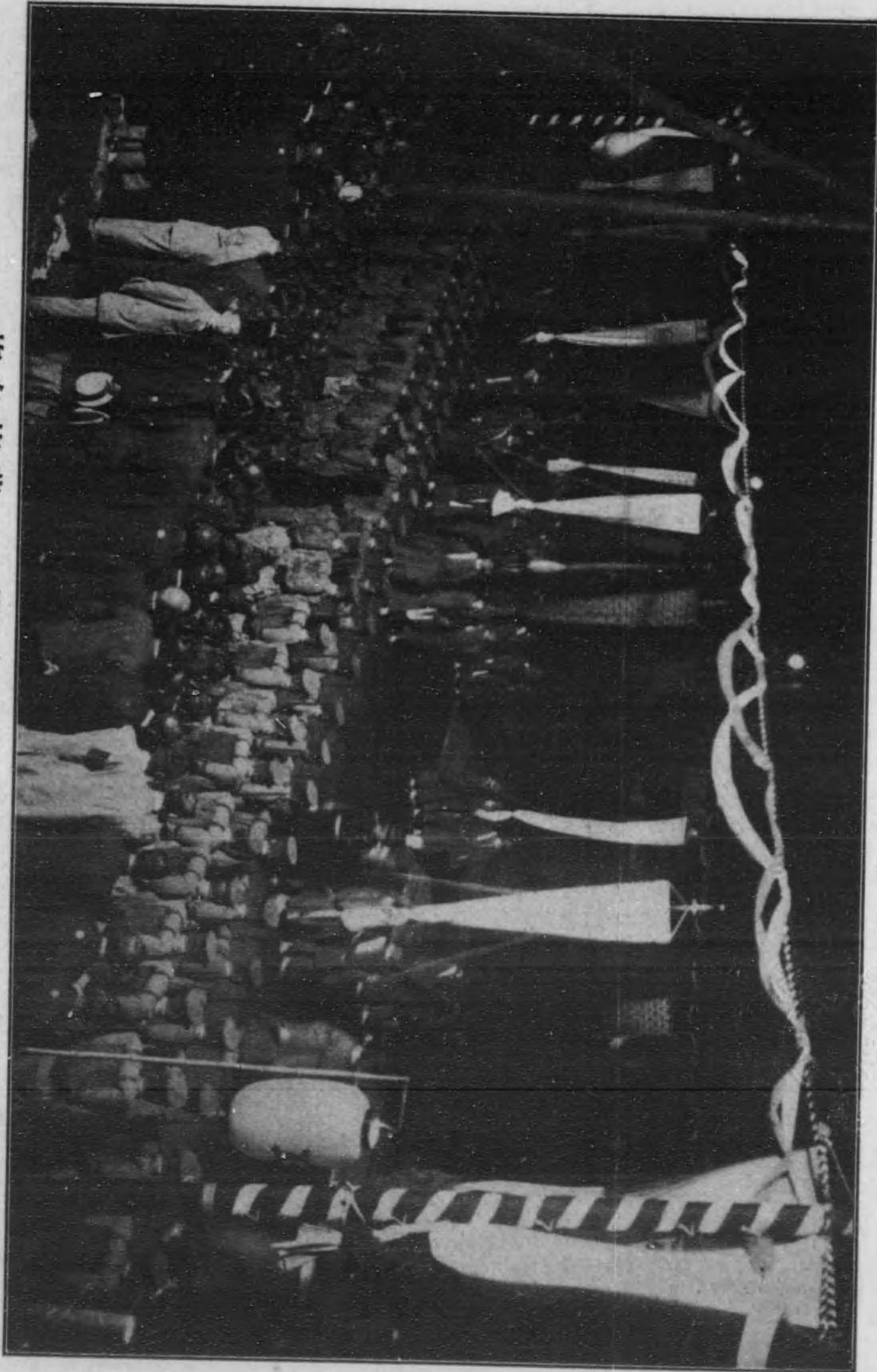


隊仗儀軍海及隊樂々軍海 簿 函 間 殿 場 非 宮 濱
隊仗儀軍海さ次に是す進行、つし奏を、極の哀、隊樂々軍海、次に隊輔二、一第兵非海迎

露光量違いの為重複撮影

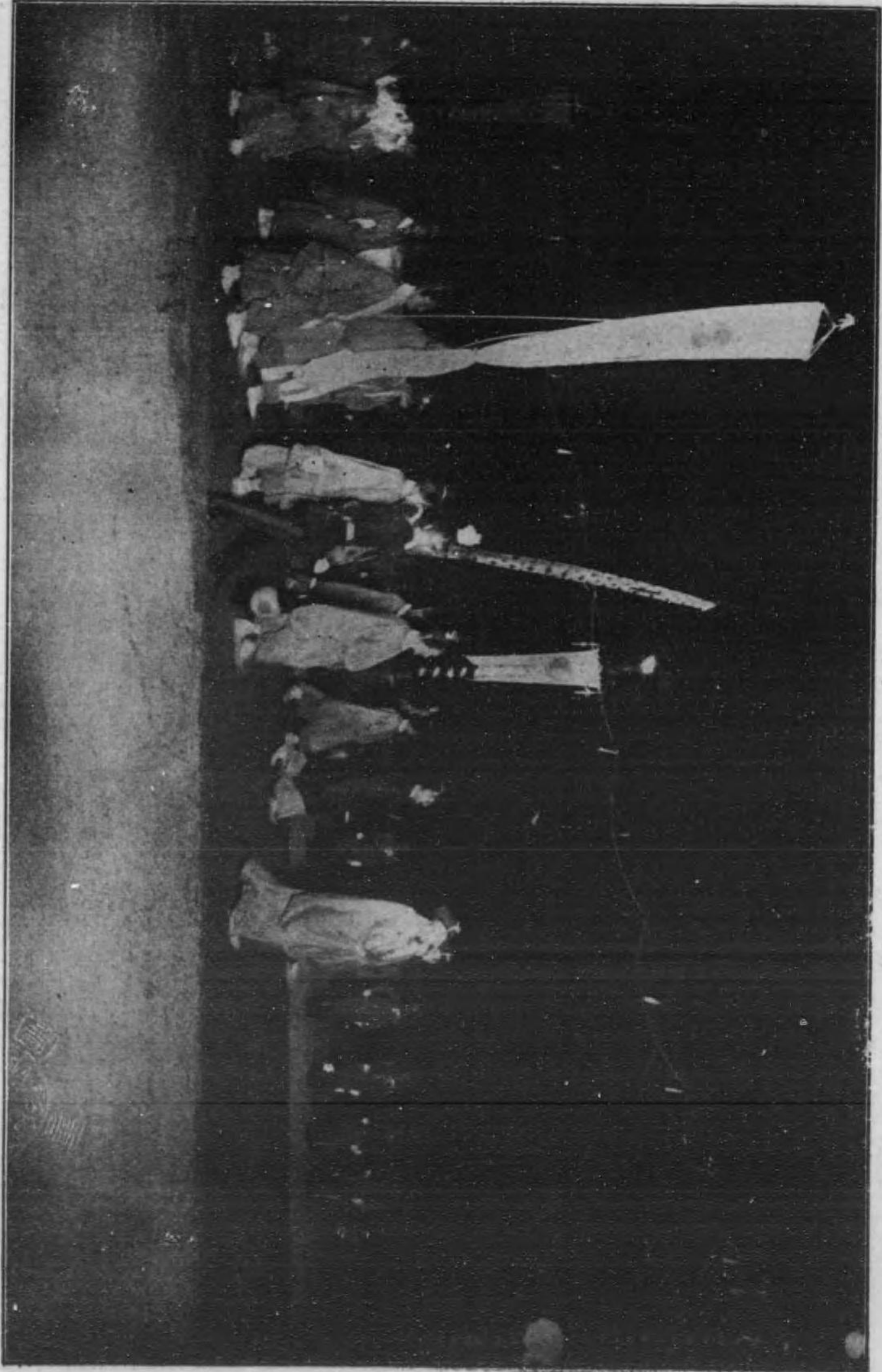


鼓 簿 函 間 殿 場 非 宮 濱
夷大でし照を路に明松る、と掲げ、人仕。る人、に列本は、簿函。て、果隊仗儀軍海、す進行、つし打に、部野五鉦。野五鼓、掲げ、人仕り、よ夫か進官務事、の、劍帶冠衣

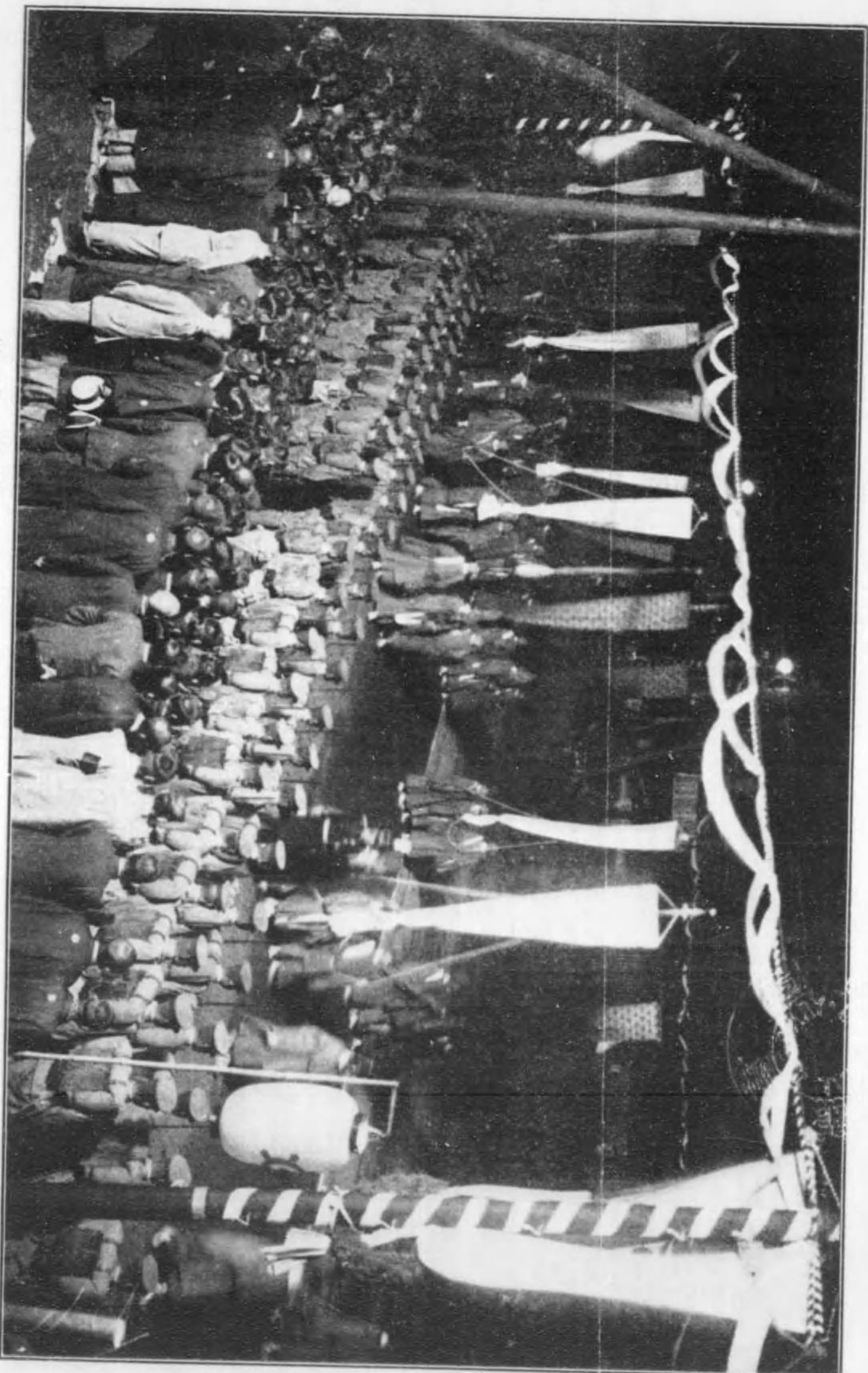


旗白旗黄 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 。るなご列行の對十番。對十号。對十露胡。て際を行一の官務事使喪大りよ旗
 。すら入にマソレは列の露胡。てにみのあるたれさ出し寫の旗白黄はにマソ

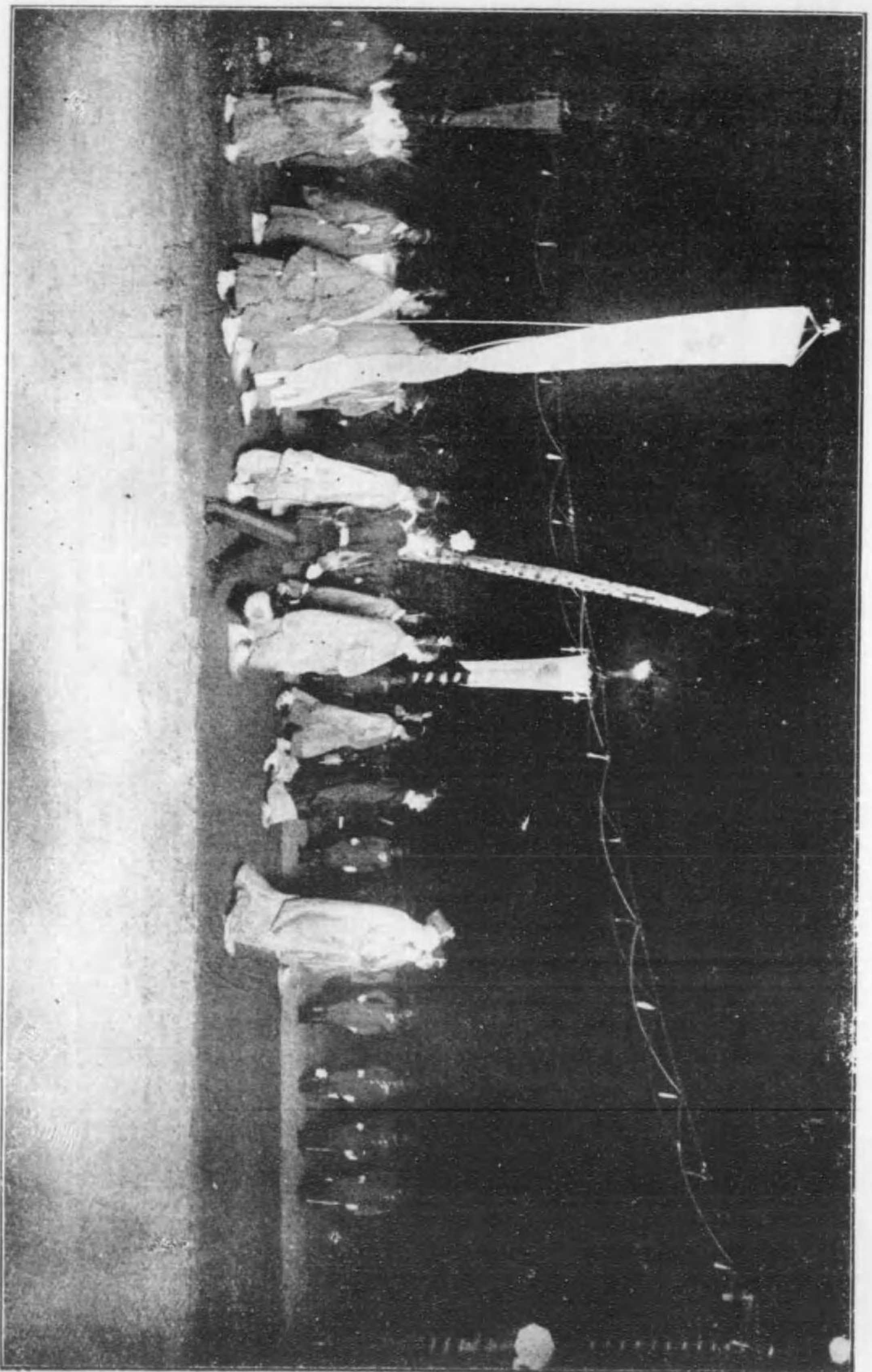
此は露光量違いの為重複撮影。左は露光量の多いもの、右は露光量の少ないもの。



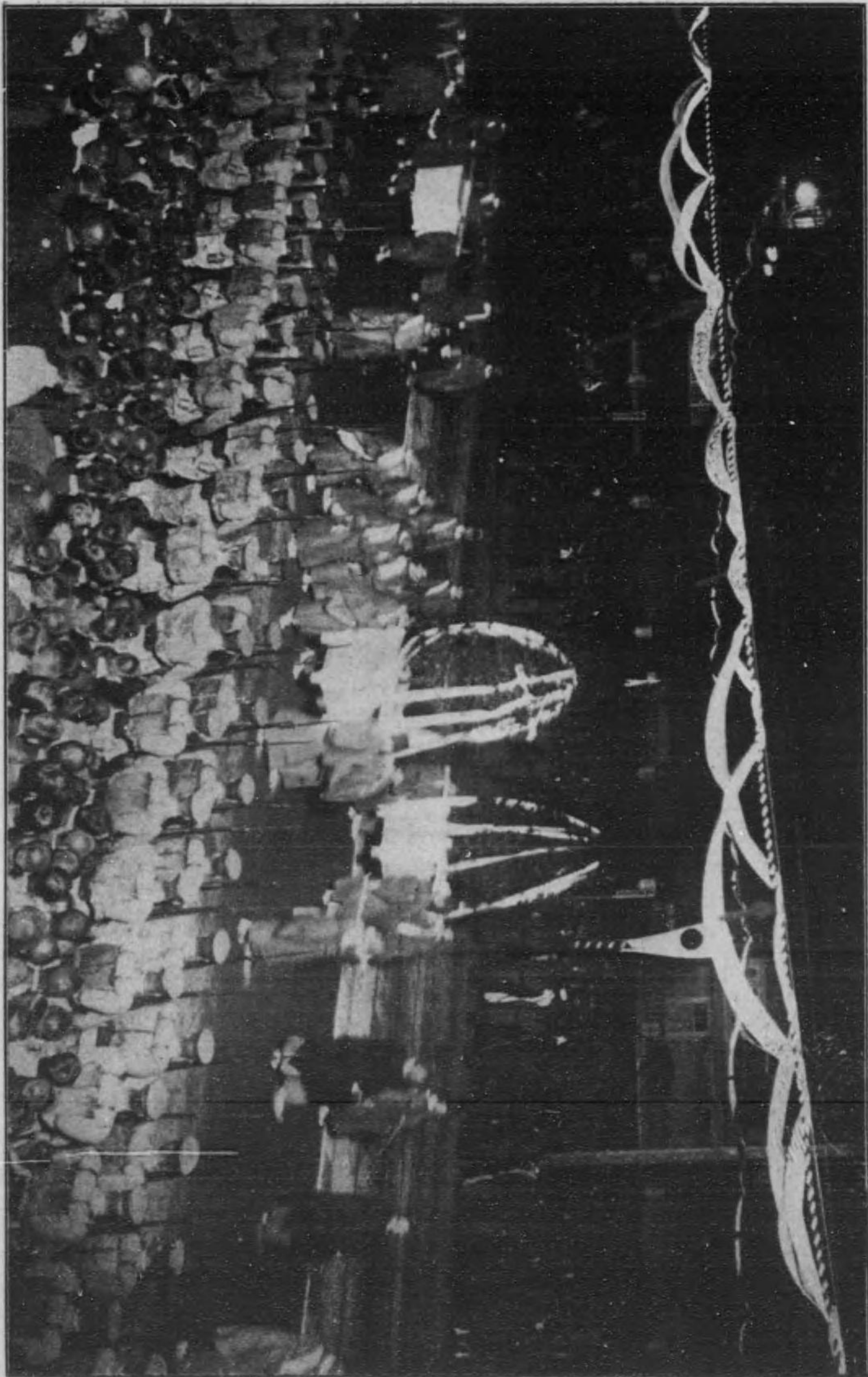
旗 露 像 月 日 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 りめ進ての並に(金地紅型)旗露像日(銀地白)旗露像月て次官務事使喪大に後の此。く行對十梓てき次に色雜の持幡



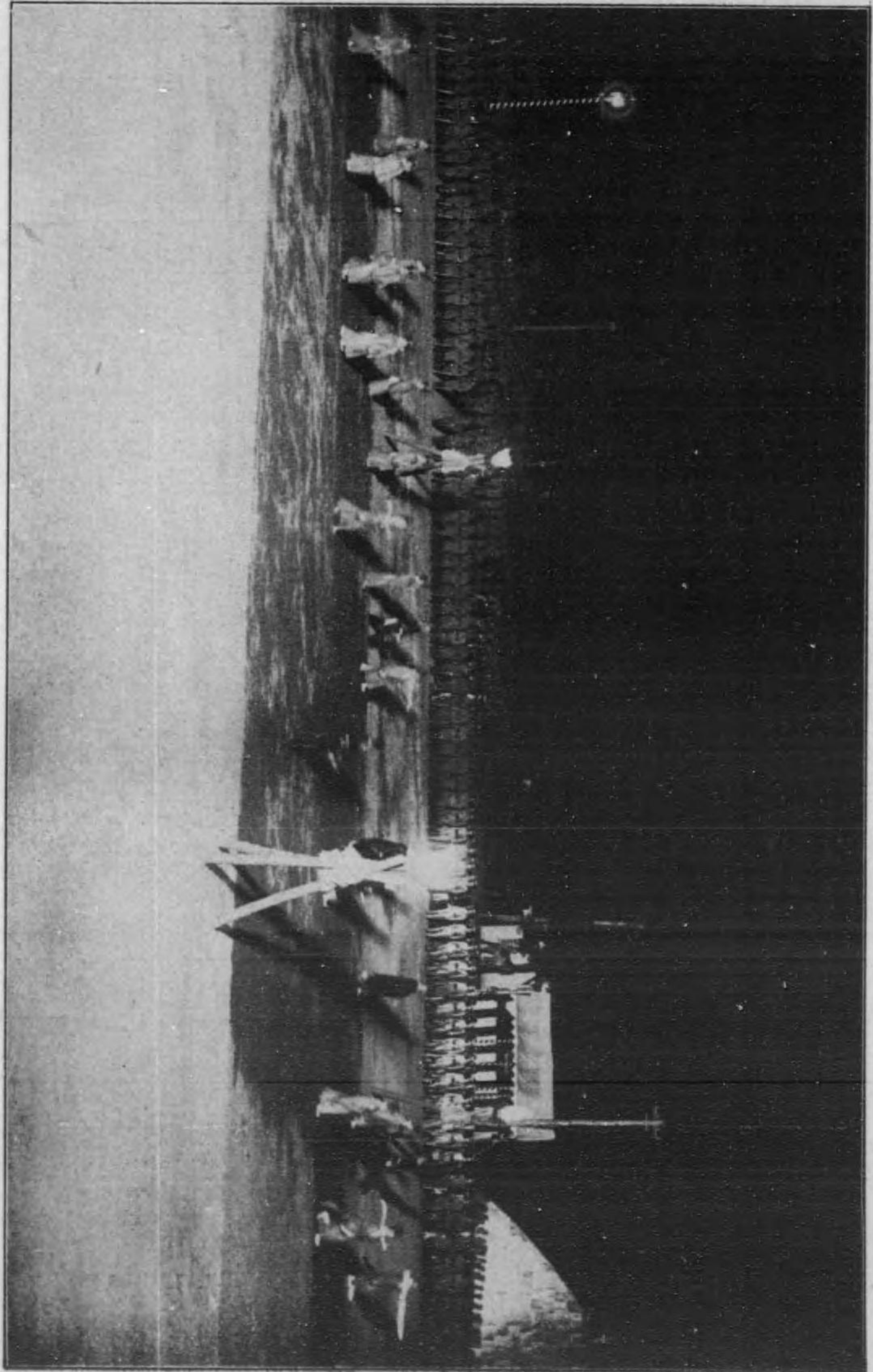
旗白旗黄 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 。るなご列行の對十番。對十子。對十孫胡。て際を行一の官務事使喪人りよ旗
 。さら入にマシレは列の孫胡。てにみのるたにさ出し露の旗白黄ははにまこ



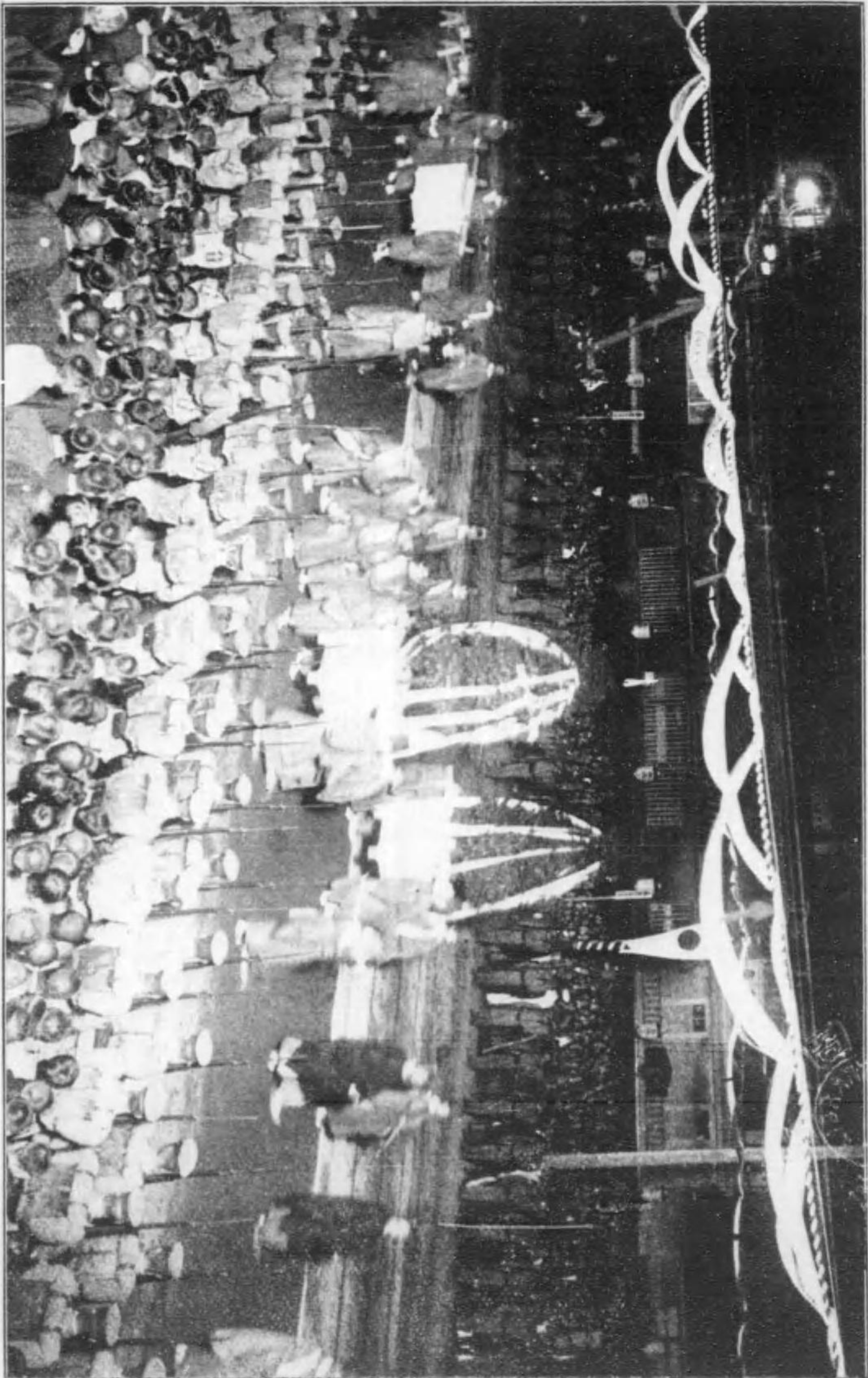
旗 旗 像 月 日 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 りの進ての並行(金地和建)旗旗像日(銀地白)旗旗像月(大官務事使喪人)に後の此。く行對十持てき大に色雜の持照



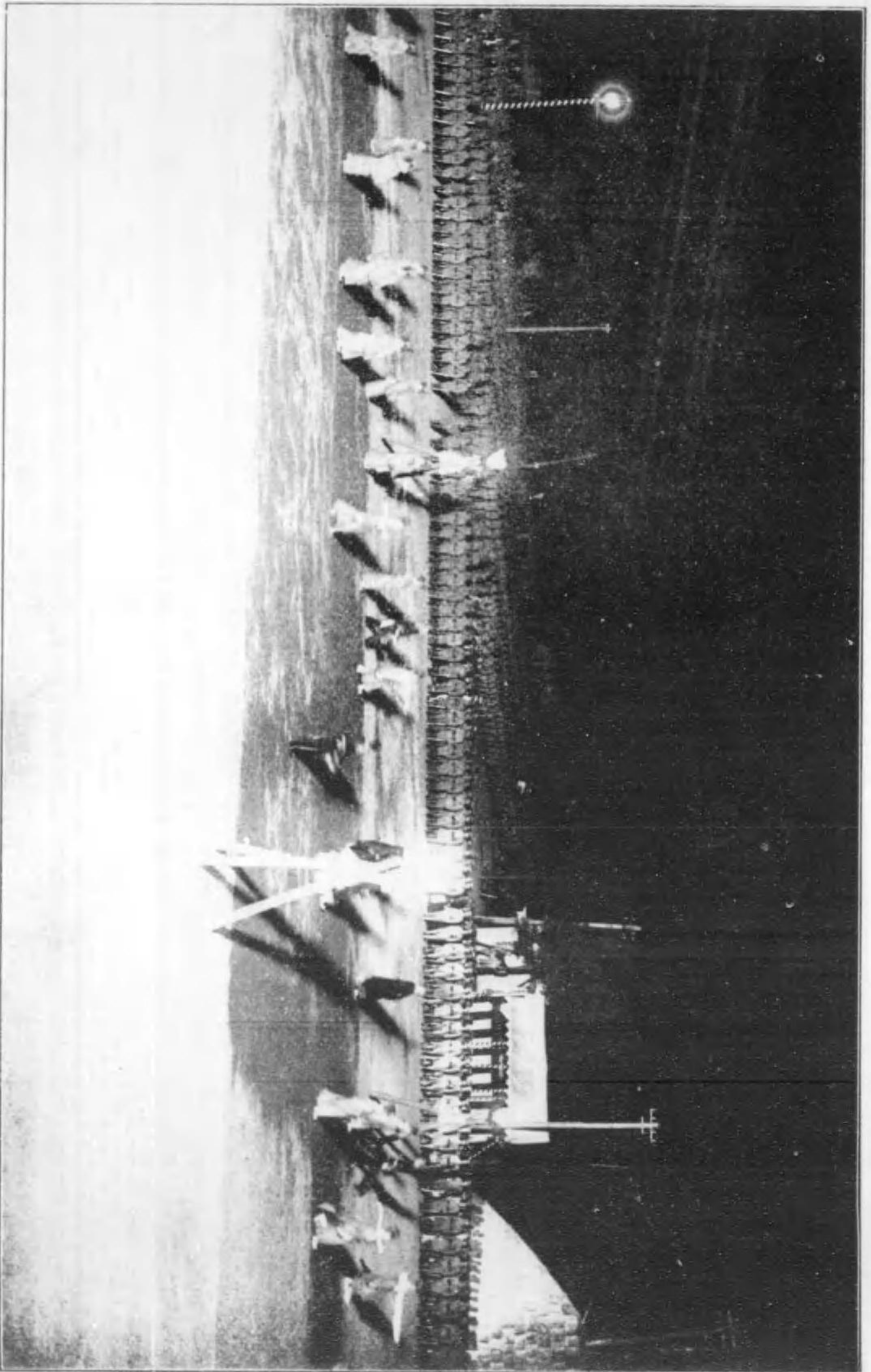
神真大 篠 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 。りた監儀御はるゆ見く白に次。く行對一構真大。て隔を人二官務事使喪大。雁弓御。雁箭御りよ夫



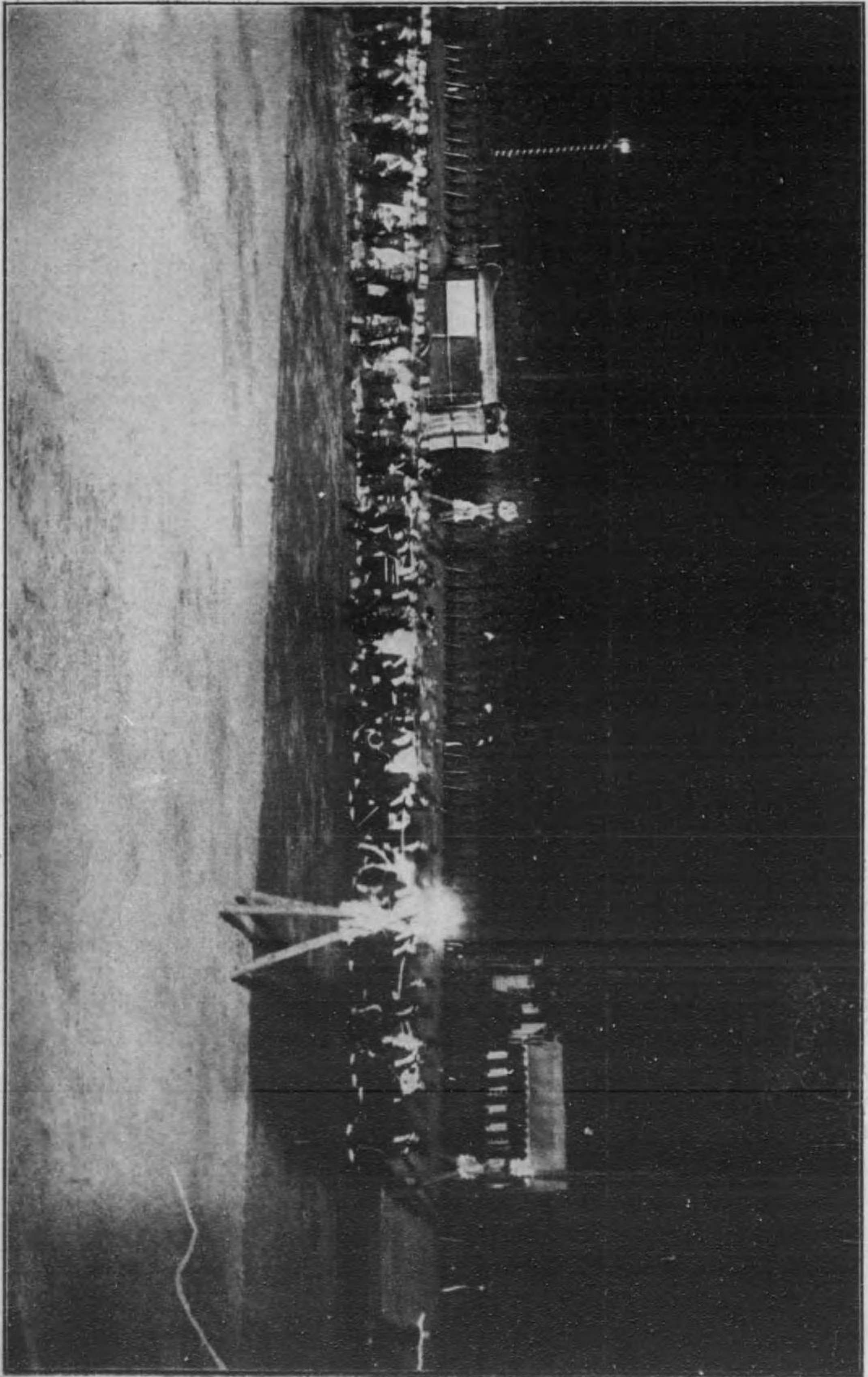
師樂及長官祭 簿 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 諸口山に次長樂及師樂に次。司憲長官祭町親正長副官祭に次。雁箭御に次。雁箭御
 。らせ在御渡にる徐懸羅てりわ行一の臣大宮遠渡に次。官長部式田月に次。頭殿



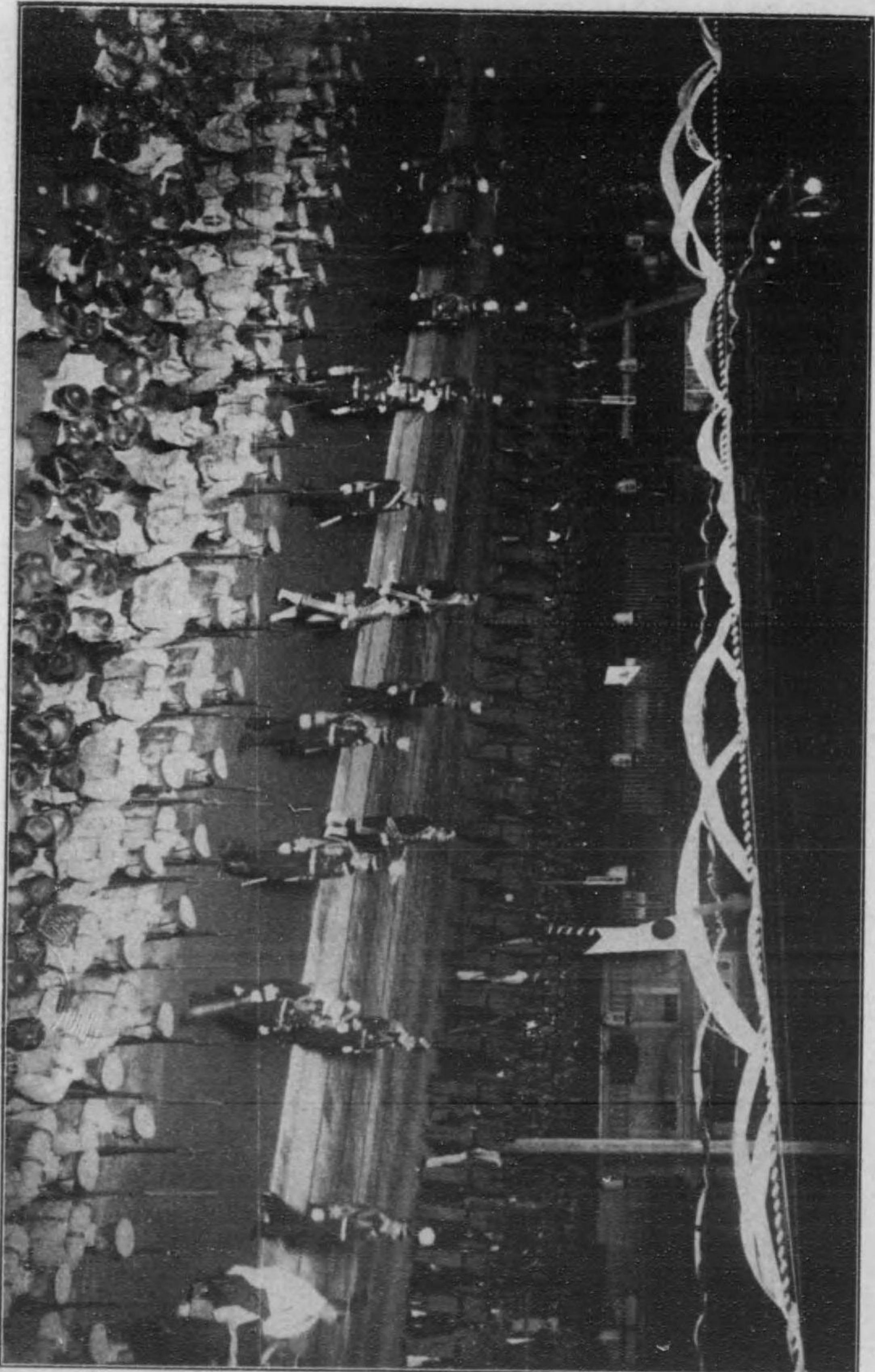
榊真大 篠岡殿場奉宮 殖
 りな燈籠御はる見く白に次。く行野一榊真大よて隔を人二官務事使兼大。榊弓御。榊箭御りよ夫



師樂及長官祭 篠岡殿場奉宮 殖
 諸口山に次長樂及師樂に次。司憲長官祭町親正長副官祭に次。燈籠御に次の燈籠御
 るらせ在御流に乃孫懸纏てりあ行一の臣大宮邊渡に次。官長部式田月に次。頭殿



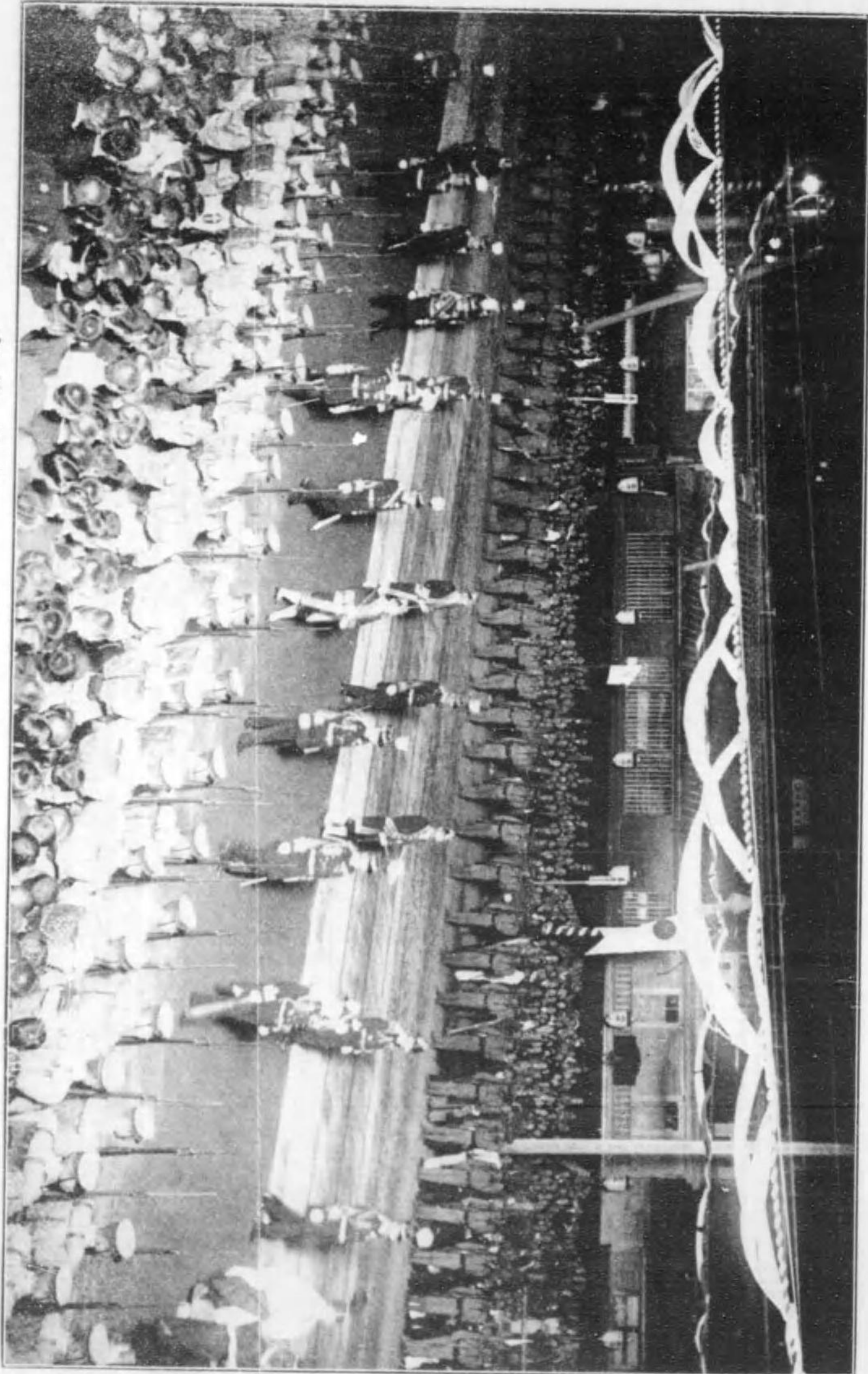
御通車籠 籬 鹵 間 殿 場 非 宮 殲
 せか牽に頭一牛本頭三牛割るたれらせ護てにハゴウ人匹飼牛の禮平彩布襟人二長飼牛の刀佩禮平布彩襟に毎頭一は車籠御
 本宮將少四國森島。藤伊。橋高。井白。佐少生王はに右し待近てに服兼加劍帶冠衣從侍の名八はに右左ふ給し幸御に靜て
 堀大い。馬有山。佐大澄山。村松はに左。將陸の帥元典。將大二木原。追大將中六島高。原沖。知瀬伊。島志比。木々佐
 守衛侍將海の將大郷東。帥元二東伊。上井。將中(實)藤齋。將大院集伊。將中四地有。垣寺。藤齋。代八。將少三島川



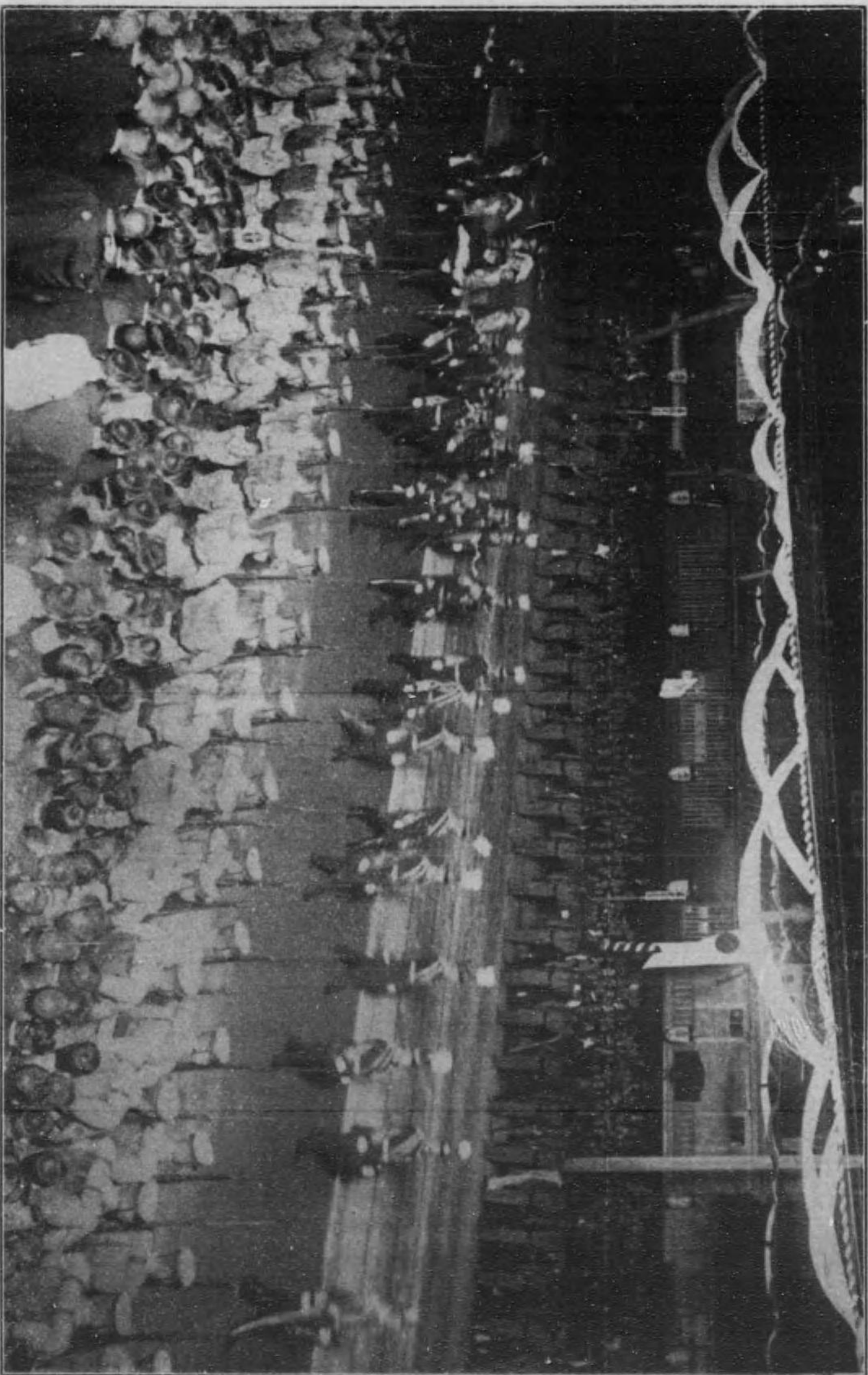
宮代名御 籬 鹵 間 殿 場 非 宮 殲
 事幹職從侍。頭馬主で次に皮雨。芋垣。構。棧。け棒を註揮御從侍次はに後御の籠籠
 るらせら波王親仁殿宮院期代名御皇天に次。り奉し從扈人玉官武從侍。長官武從侍。代



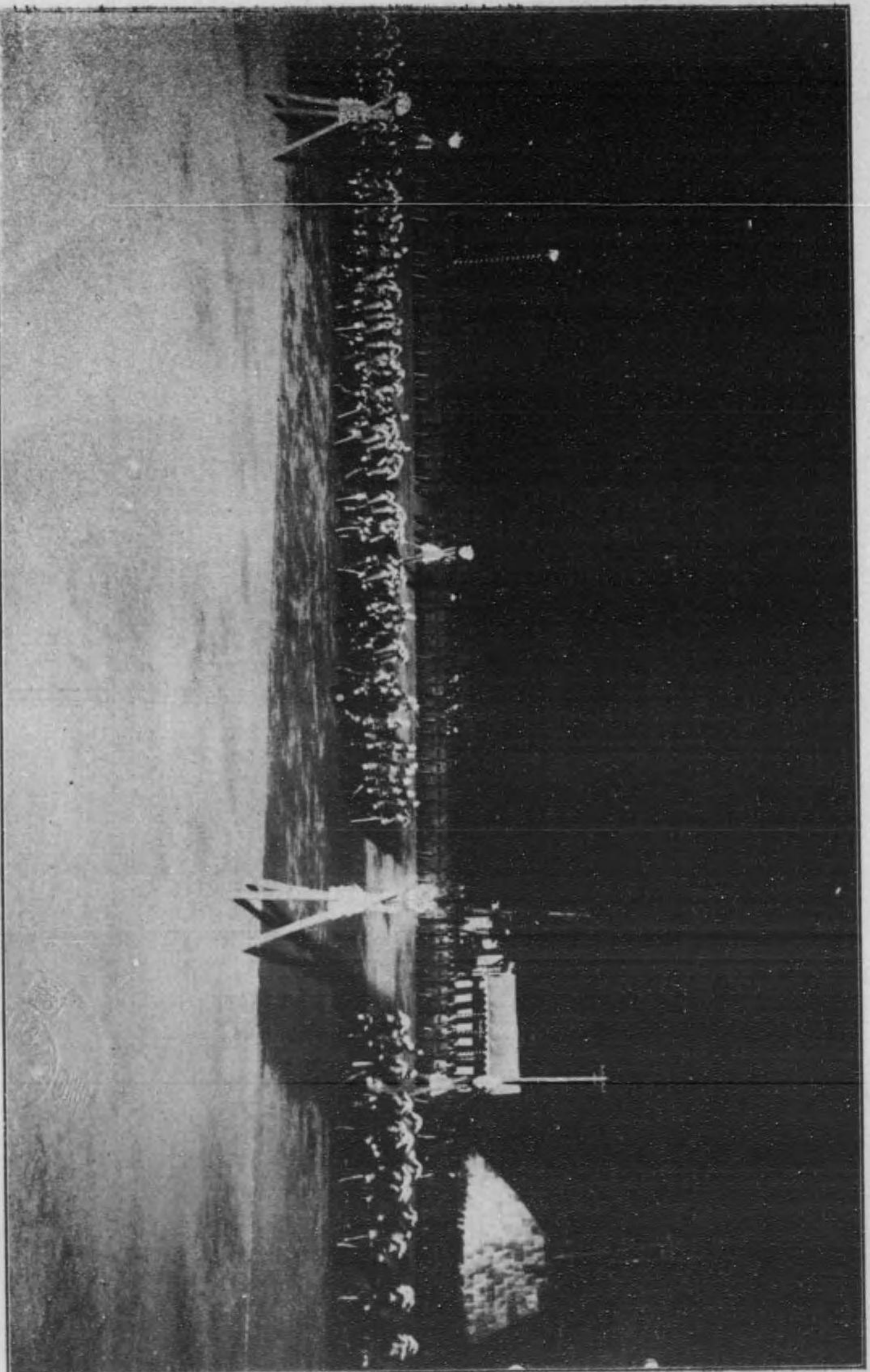
御通車轆 籬間殿場 葬宮 殲
 せか泰に頭一牛本頭三牛副るたれらせ護てにマツ人匹飼牛の禮平移布樺人二長飼牛の刀佩禮平布衫樺に毎頭一は車轆御
 本宮將少四岡森。藤伊。橋高。井白。佐少生壬はに右し侍近てに服業加劍帶冠衣從侍の名入はに右左ふ給し幸御に靜て
 城大。馬有井。佐大澤山。村松はに左。將降の御元奥。將大二木黑。追大將中六島高。原沖。和瀨伊。島志比。木々佐
 守衛侍將降の將大柳東。帥元二東伊。上井。將中(實)藤齋。將大院集伊。將中四地有。垣寺。藤齋。代入。將少三島川



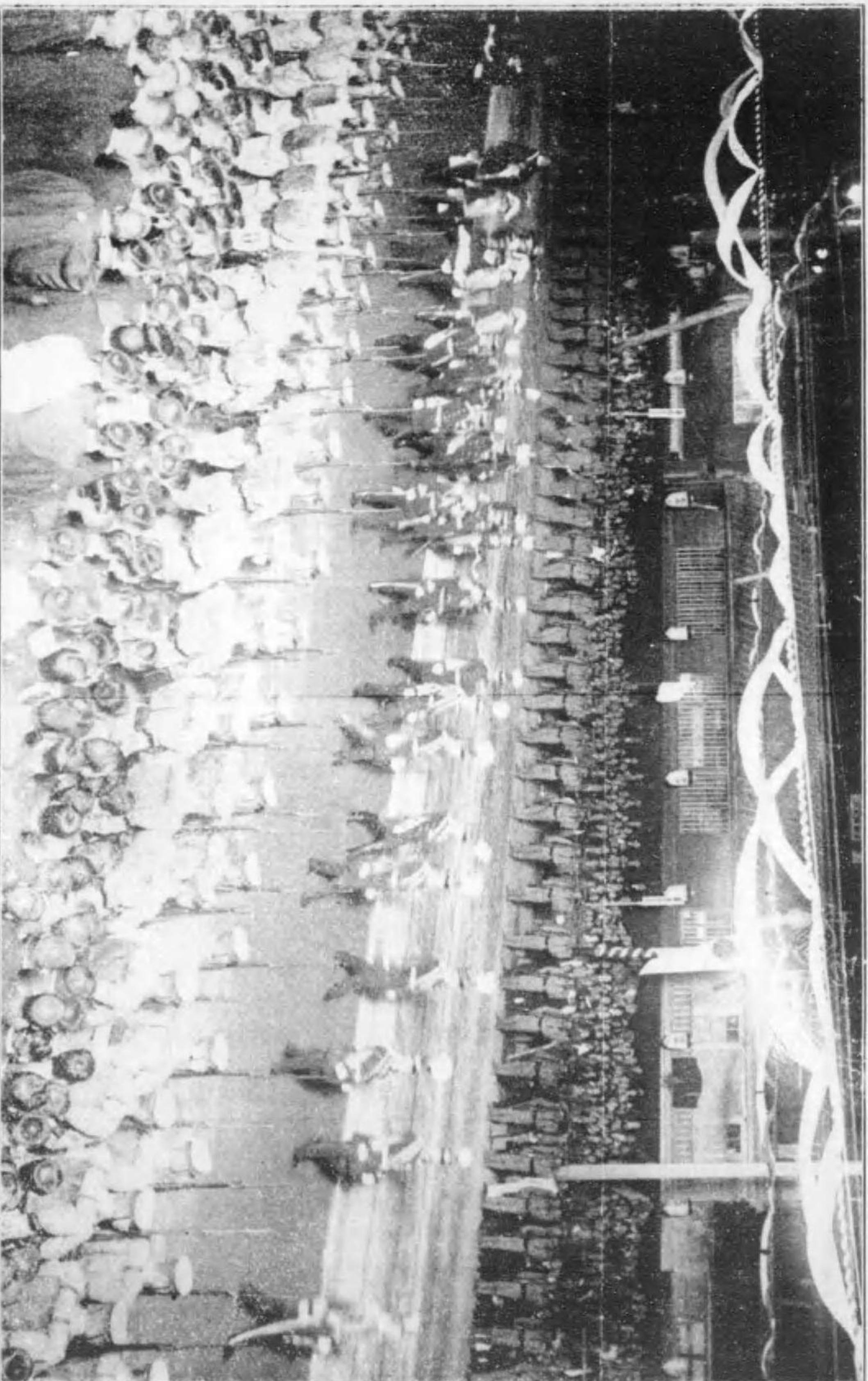
宮代名御 籬間殿場 葬宮 殲
 事終職從侍。頭馬主で次に皮雨。笠掛。掛。棧。が棒を柱掛御從侍次に。後御の標置
 。るらせら波玉親仁威宮院相代名御皇天に次。り奉し從冠入五官武從侍。長官武從侍。代



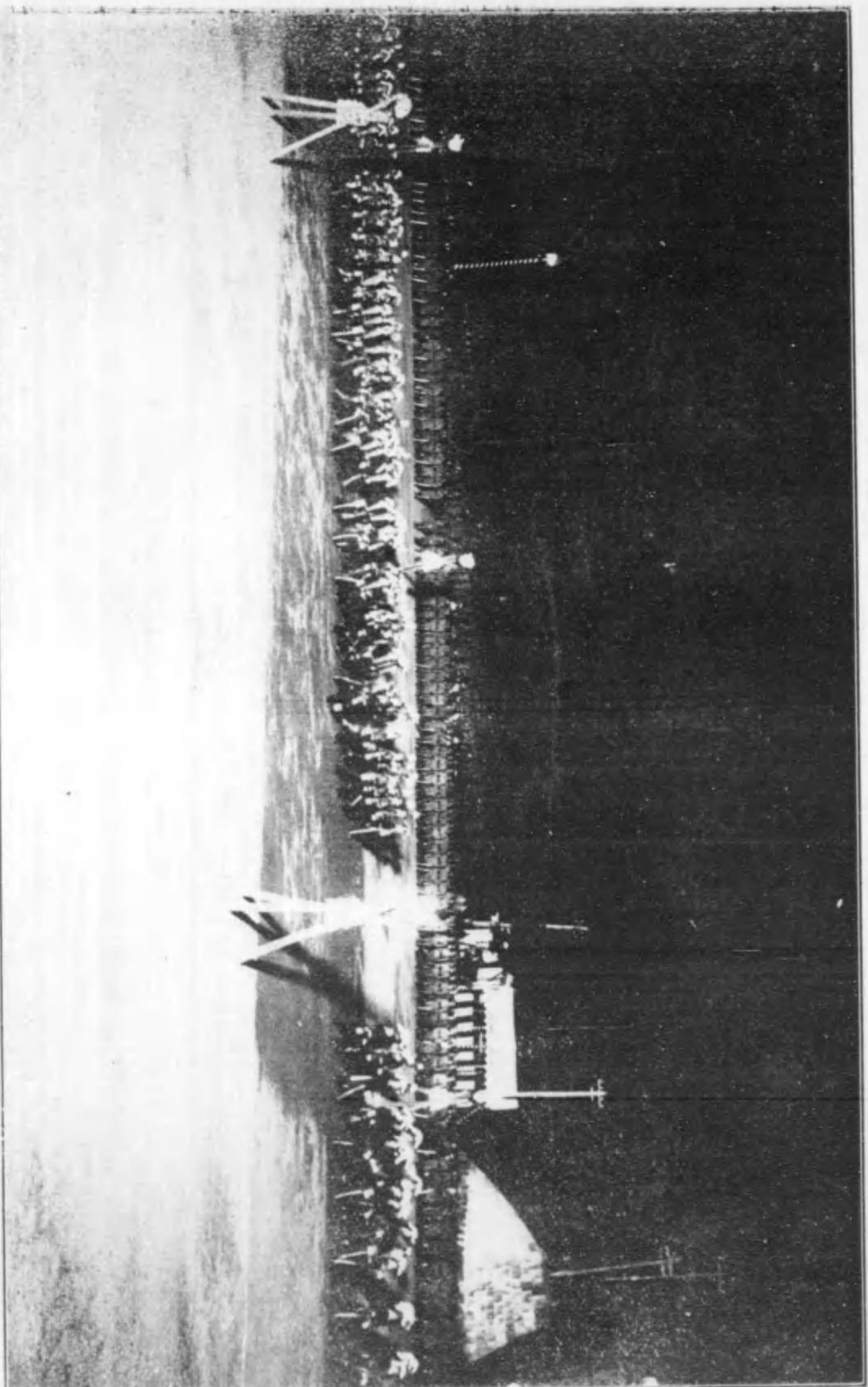
族公皇 簿鹵間殿場非宮殯
 伏東は列右中圖。るなご列御族皇りよ夫の給せら渡てり執を杖桐てに服葉加玉親愛員宮見侍裁運使東大てき續に宮代名御
 りな爾公條二代攝族親御で欠に明松。下殿公塚李は央中。方宮各の田竹。瀬久東。本梨。宮名見代列左。川白北。香餅。瀬久。見



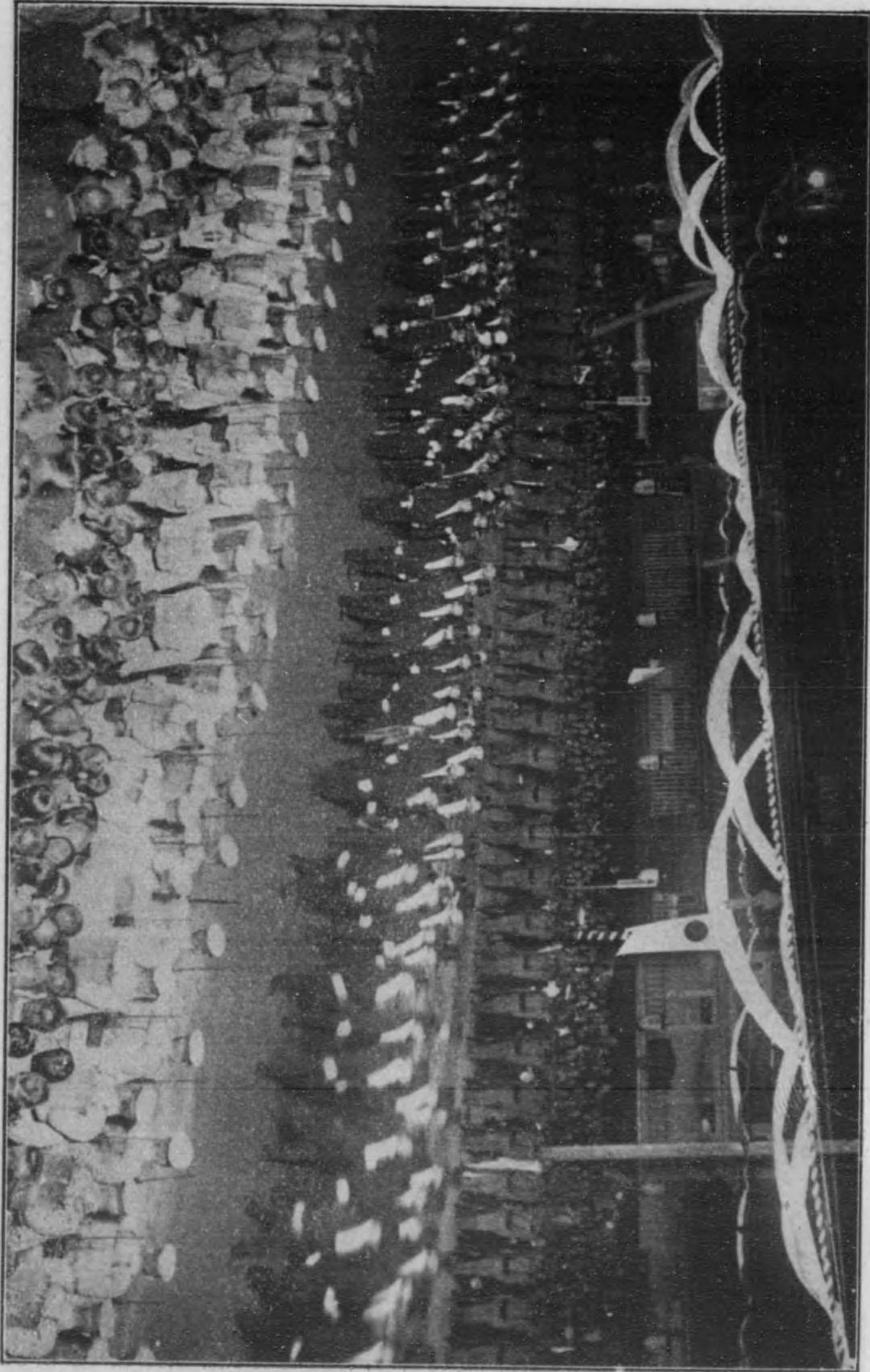
官任親 簿鹵間殿場非宮殯
 臣大各。督總鮮朝。帥元。臣大運總。位勅大て次りな官任親の奉供は進行列三
 。る至に行一の此て經を長議副院宮攝。使大權全命特。將大軍海陸。遇待臣大



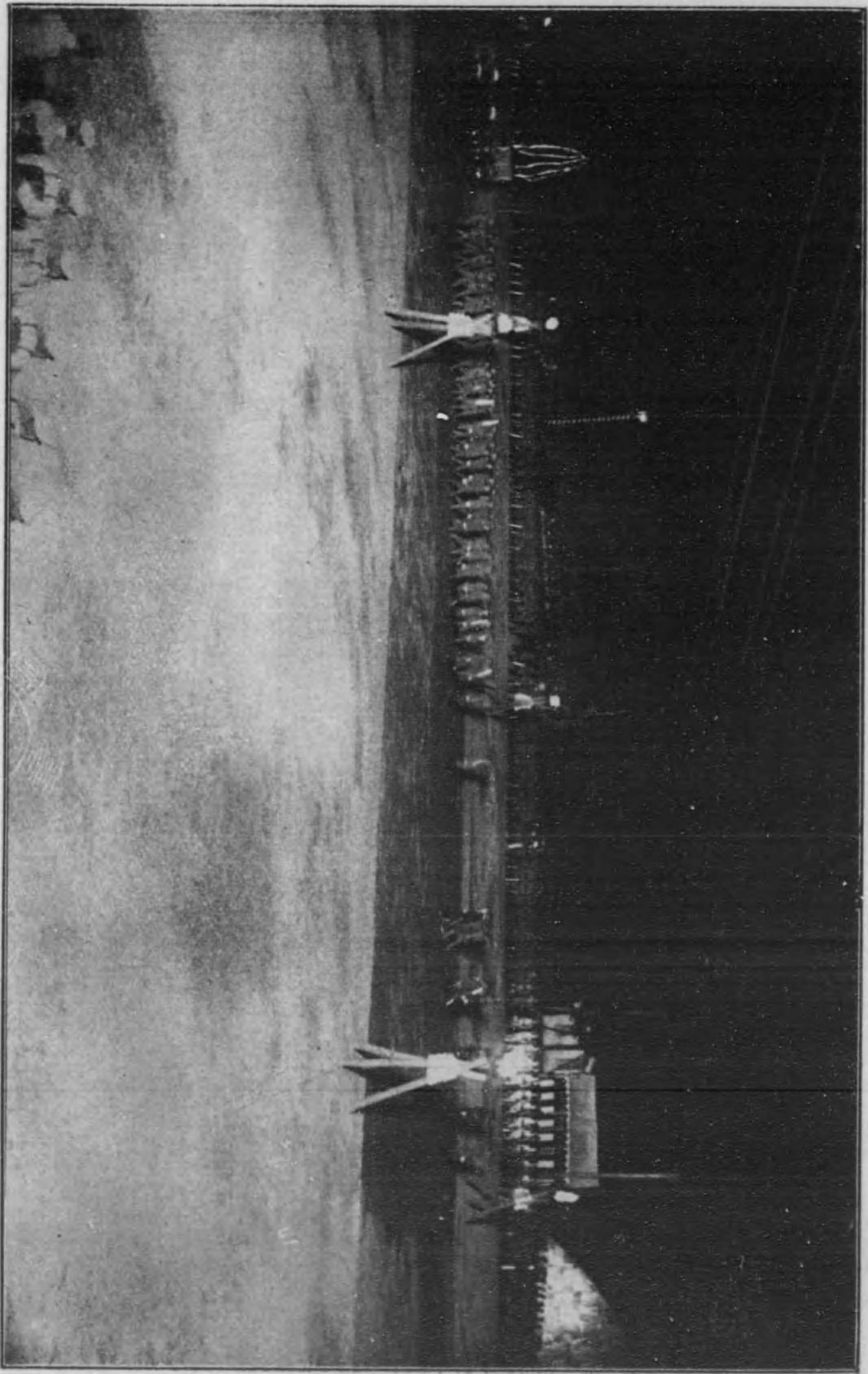
旗公皇 薄 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 伏見は列右中圓。るなき列御族皇りよ夫の給せら渡てり熱な杜桐にてに服兼加玉親愛貞宮見伊庭渡使夷大てき結に宮代名御
 りな爵公隆二代總族親御て次に明松。下殿公取李は央中。方宮各の田竹。瀬久東。本梨。宮名見伏列左。川白北。香朝。瀬久。見



官 任 親 簿 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
 臣大各。督總群務。帥元。臣大理總。位動大て次りな官任親の本供は進行列三
 。る至に行一の此て經久長議副院官輔。使人權全命特。將大軍海陸。遇符臣大

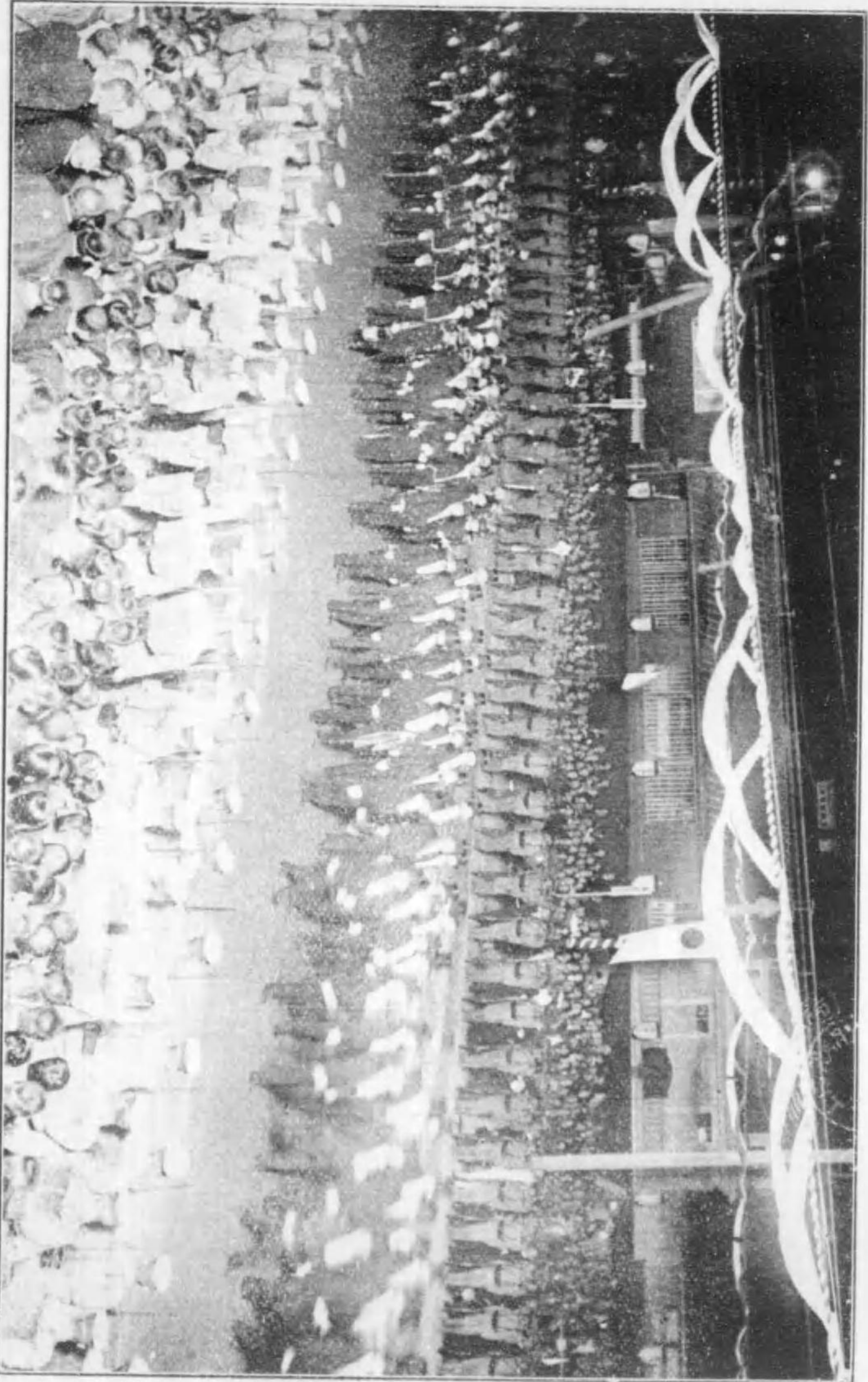


員議院兩衆貴 籀 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
長議會市京東。長議會臨府。長市京東。上以等五官等高。員會院士學に後の此。りな團員議院兩衆貴はるて放な影異に平組服尾燕

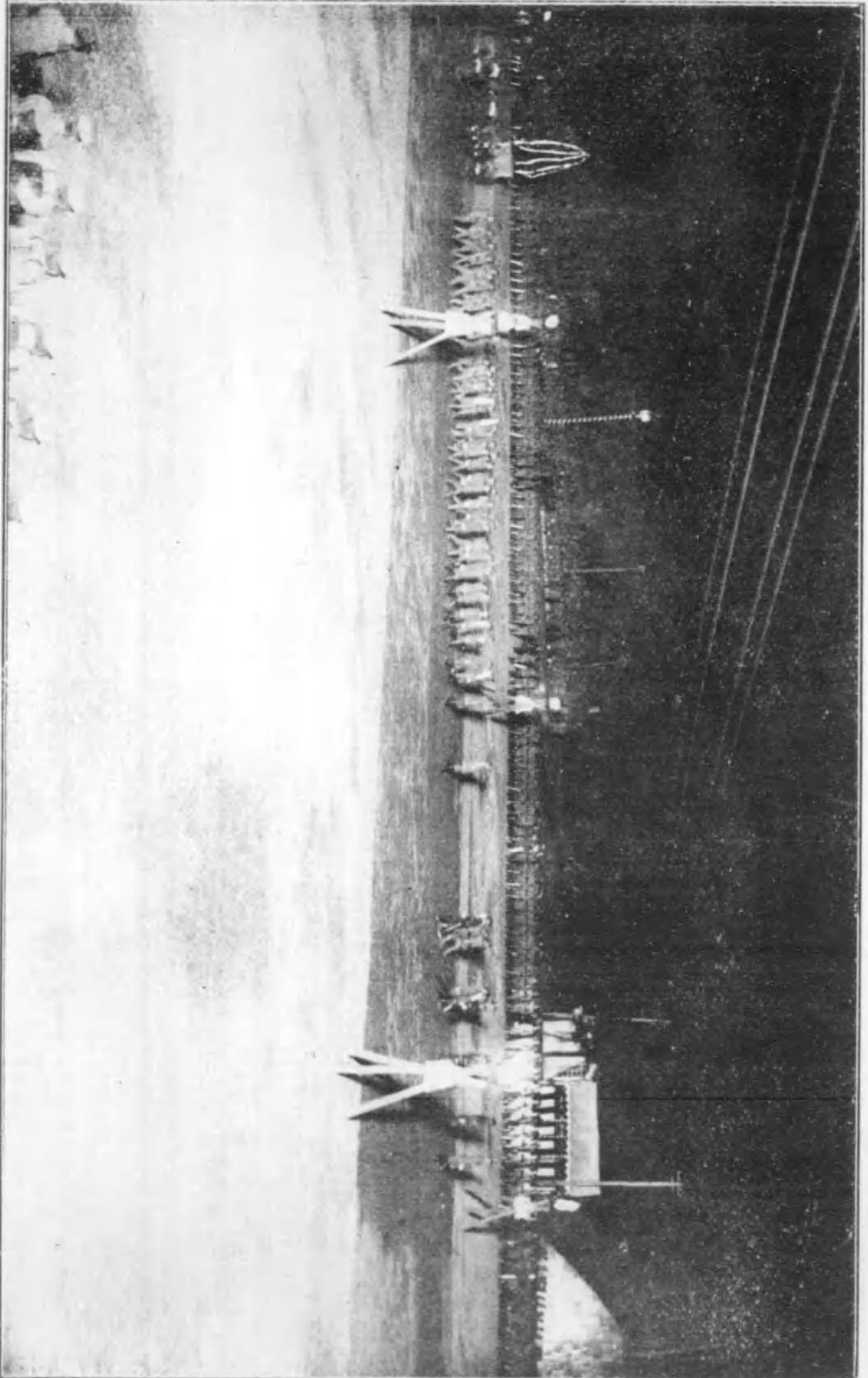


隊仗儀軍海陸 籀 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
僚幕及官令司隊仗儀軍海部令司團師衛近て次僚幕及官揮指兵諸軍海陸

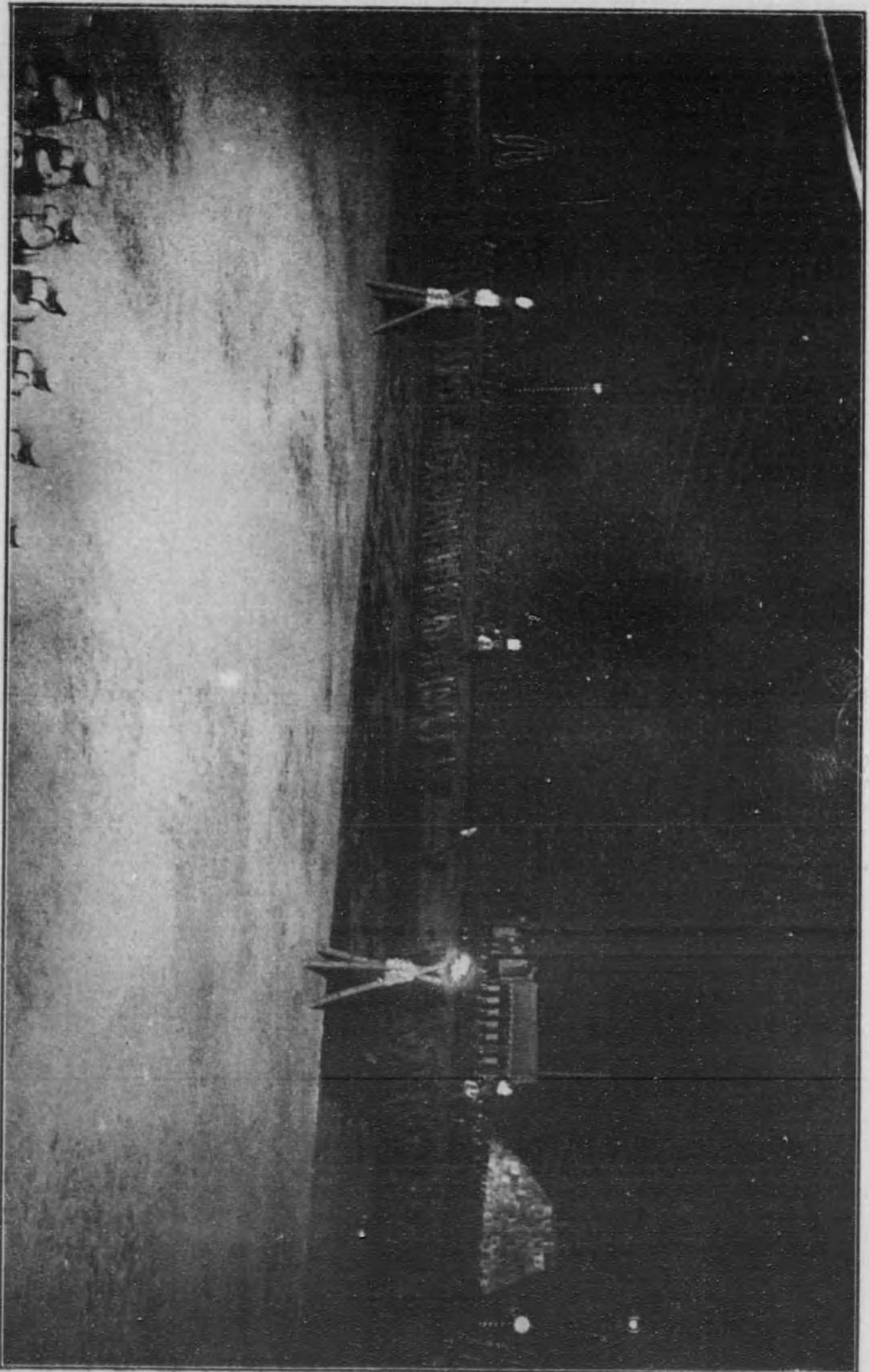
露光量違いの為重複撮影



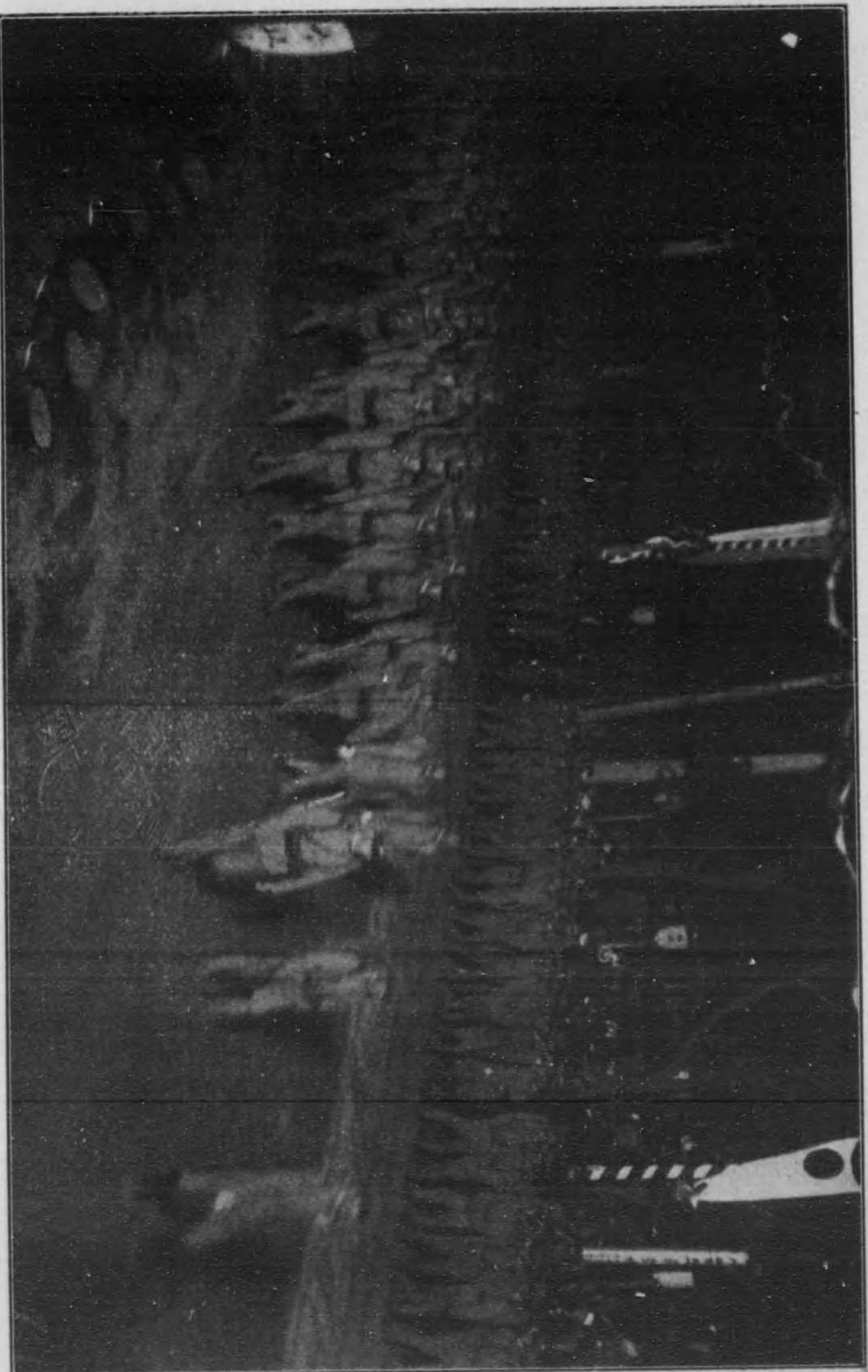
員議院兩衆貴 簿 函 問 殿 場 葬 宮 殯
長議會市京東。長議會縣府。長市京東。上以等五官等高。員會院上葬は後の此。りな開員議院兩衆貴はるて放な影裏に写紙照尾燕



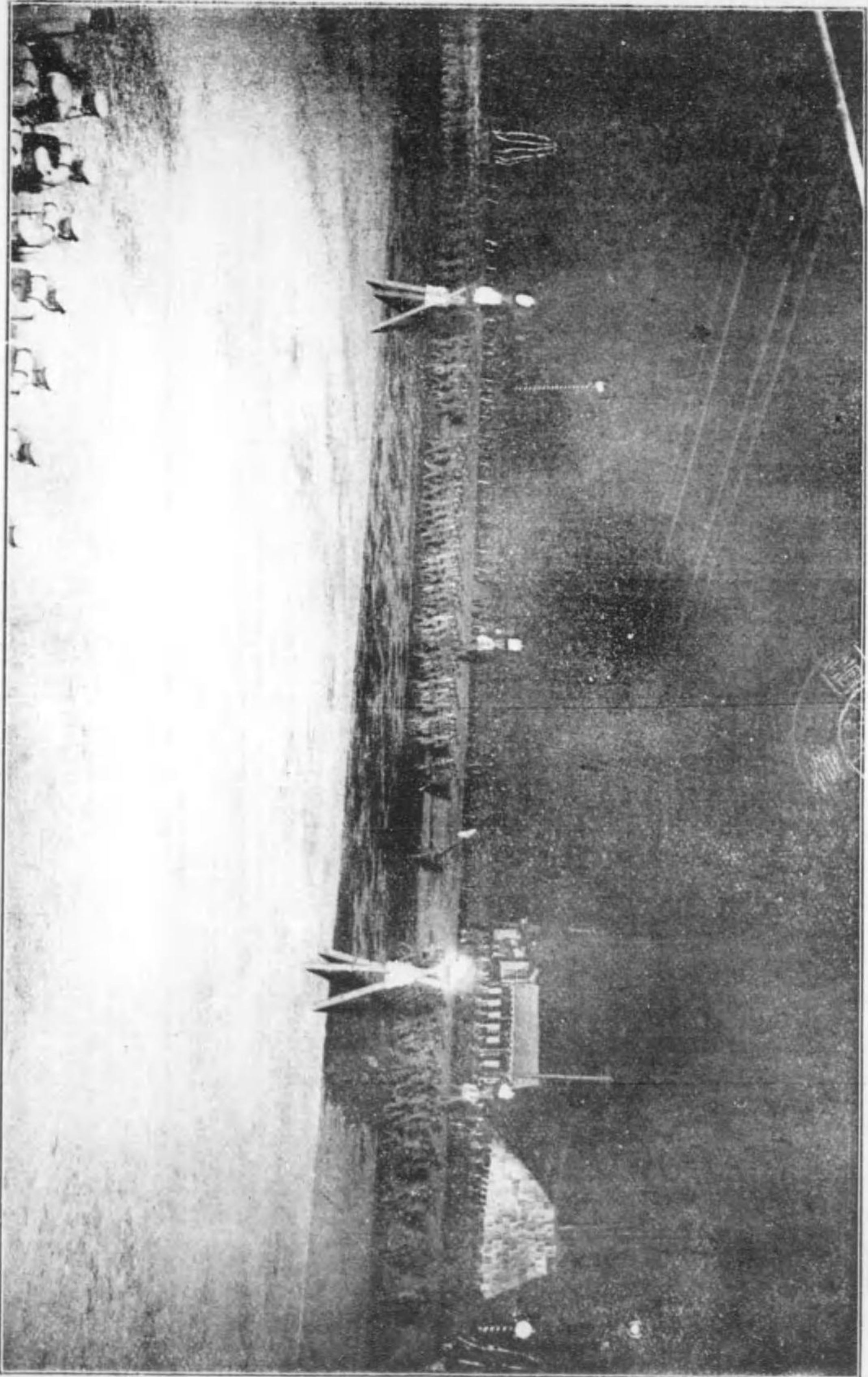
隊仗儀軍海陸 簿 函 問 殿 場 葬 宮 殯
隊幕及官令司隊仗區軍海部令司團部軍近て大隊幕及官部指兵諸軍海陸



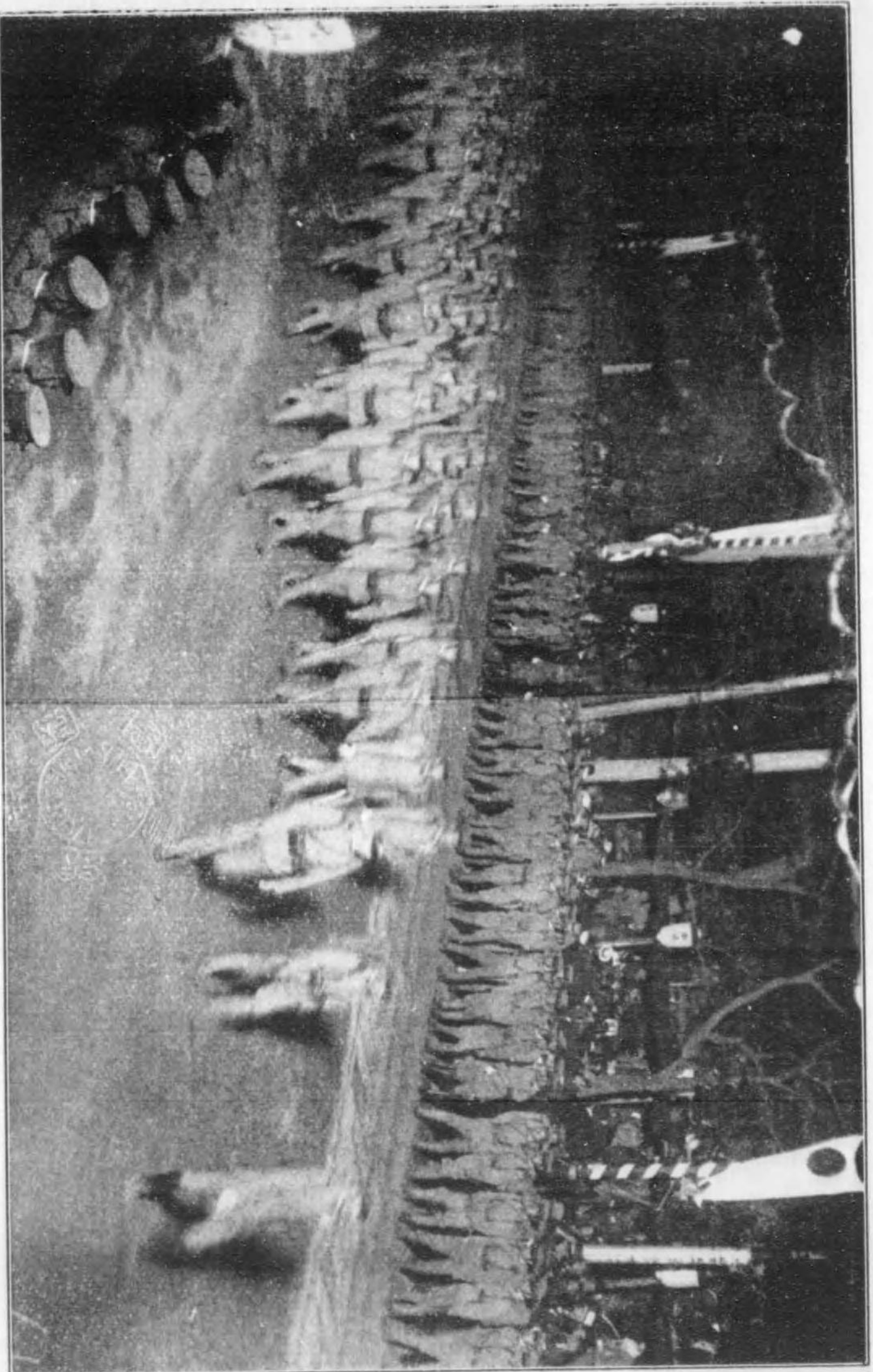
隊 仗 儀 軍 陸 簿 鹵 間 殿 場 葬 宮 殯
隊 大 兵 工 衛 近 及 隊 騎 兵 砲 野 衛 近 (大 隊 騎 四 。 三 第 兵 步 衛 近)



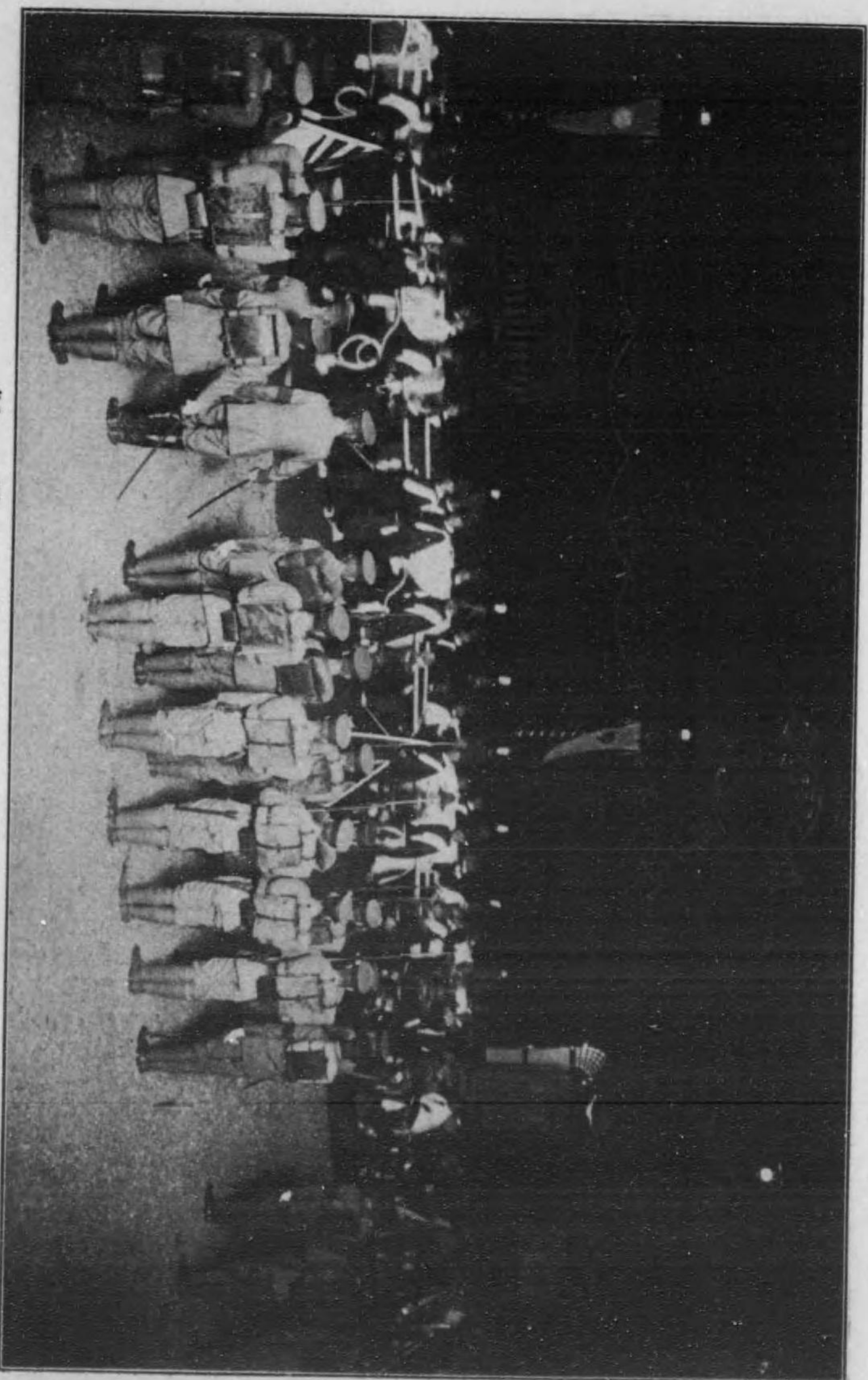
隊 仗 儀 軍 海 陸 簿 鹵 殿 場 葬 宮 殯
司 隊 大 合 聯 隊 仗 儀 軍 海 陸 葬 々 軍 葬 。 等 大 兵 重 備 衛 近 (次) 隊 大 兵 工 衛 近
る 終 備 備 の 儀 葬 大 七 一 名 八 部 警 。 視 警 濱 小 。 隊 大 第 二 隊 仗 儀 軍 海 。 部 令



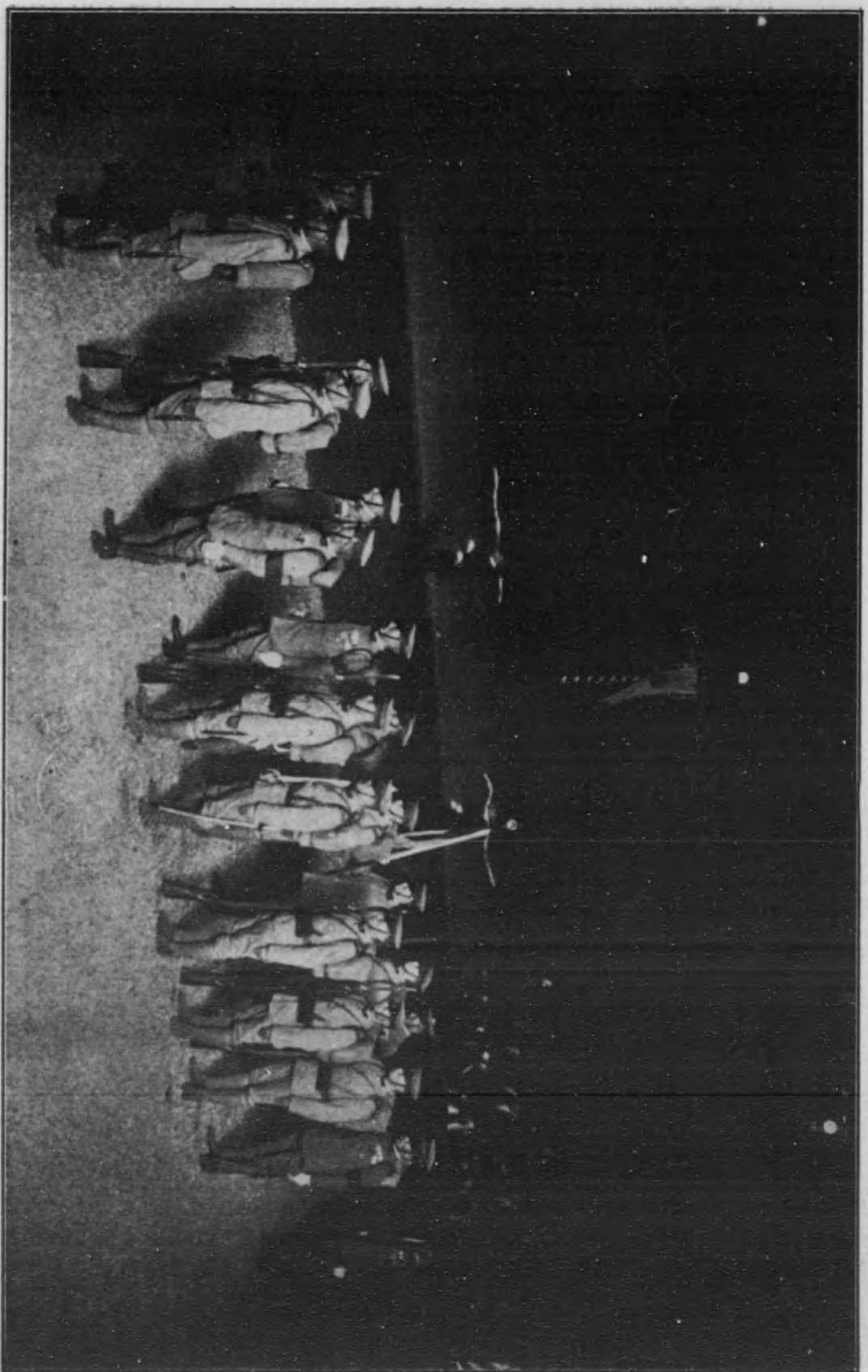
隊 仗 儀 軍 陸 簿 函 間 殿 場 葬 宮 寶
隊大兵工衛近及隊聯兵砲野衛近(大隊聯四。三第兵基衛近



隊 仗 儀 軍 海 陸 簿 函 殿 場 葬 宮 寶
司隊大合聯軍仗儀軍海軍樂々軍砲。隊大兵重糧衛近(次)に隊大兵工衛近
る終簿函の儀喪大(に)名入部警。視警濱小。隊大第ニ隊仗儀軍海。部令

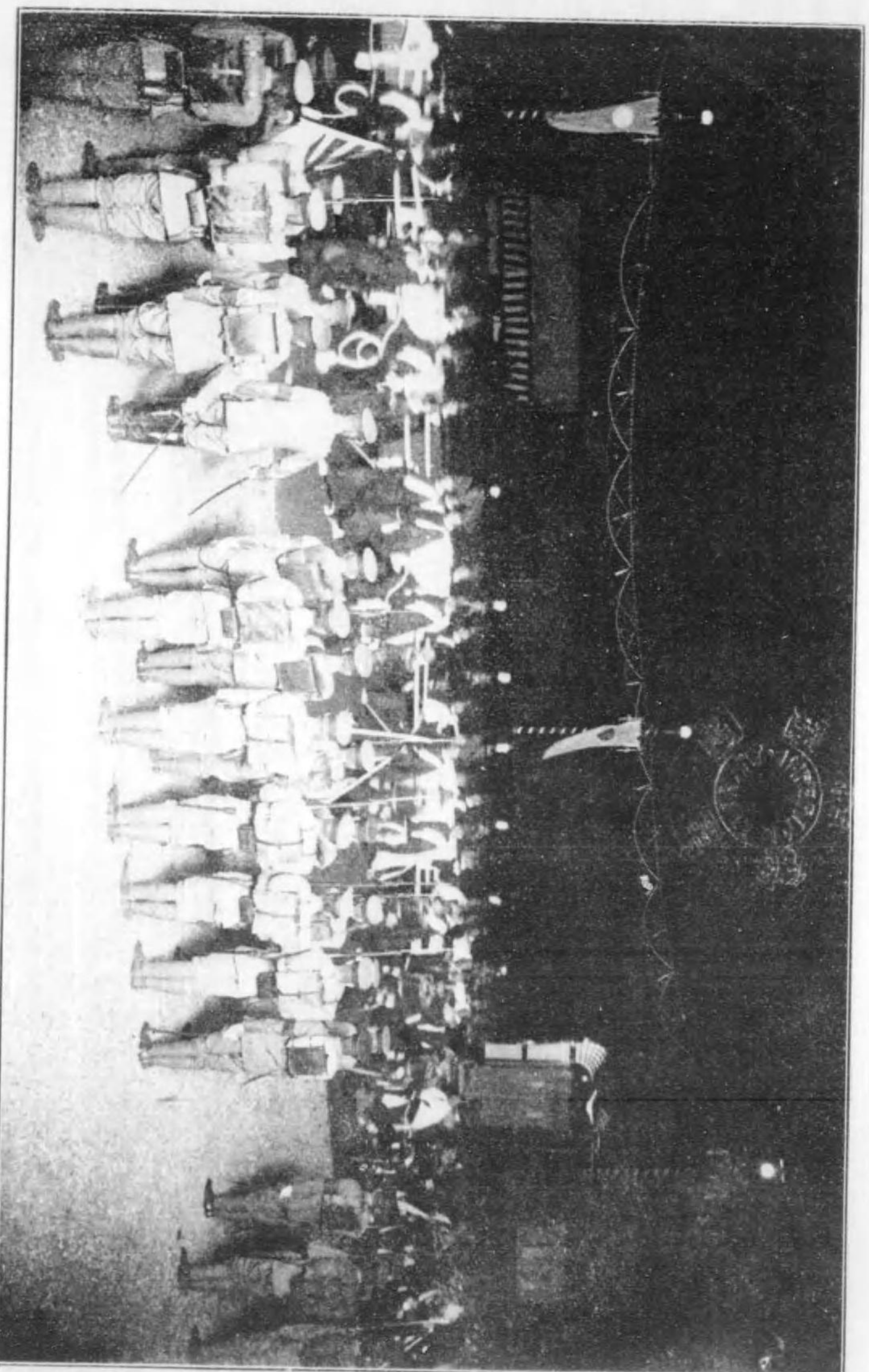


種 靈 御 着 殿 場 非 靈
 。引れた来じ本を需靈牛五てへ傳く機音哀。げ捧く高く如の芒の野秋は劍銃。れ垂に前々やは旗軍さめ冥劍の校將

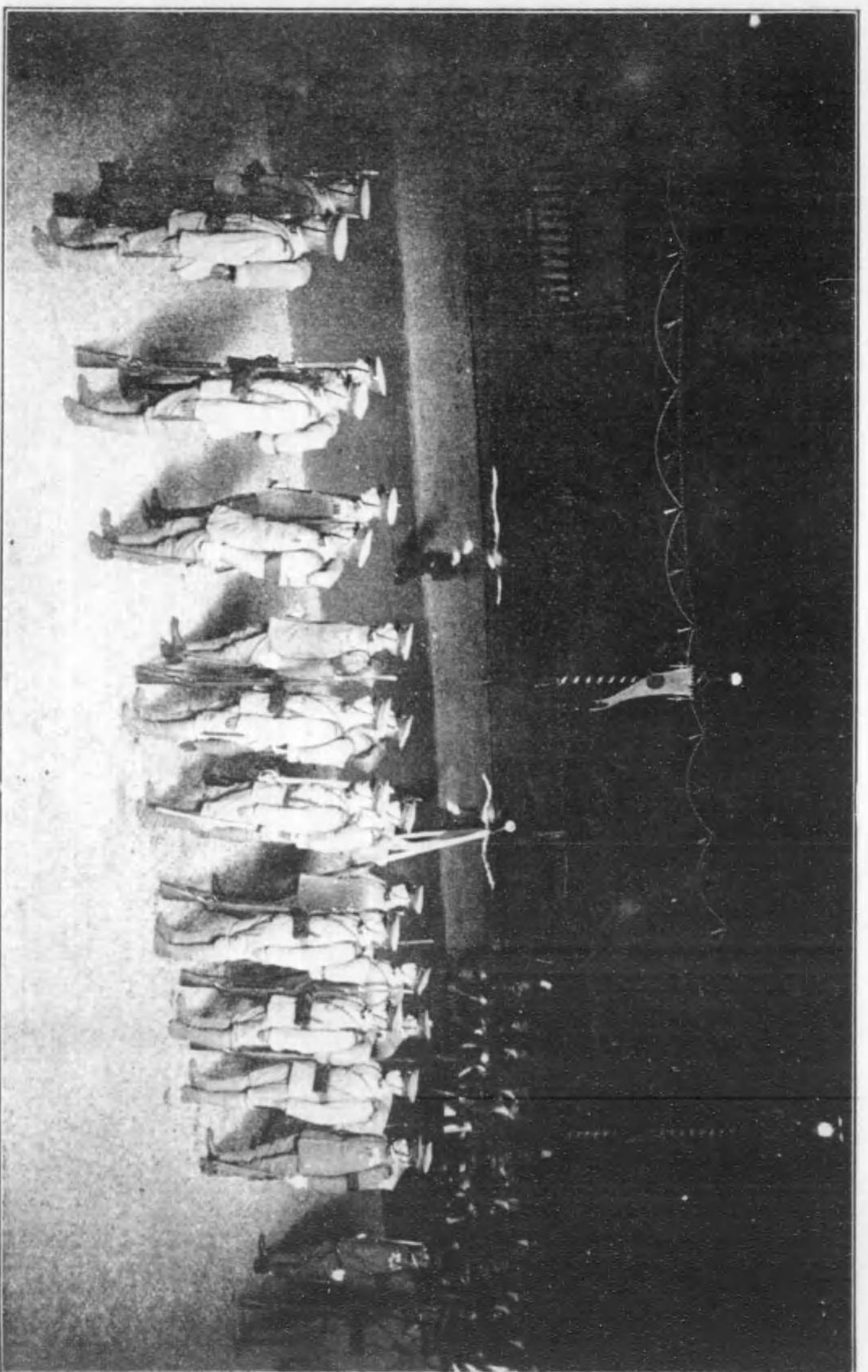


隊 樂 軍 軍 海 國 英 御 着 殿 場 非
 。ぞくは濃れ其のもるざらた惶促てし對に度懸るな蕭殿の隊々軍海國盟同く聞を譜哀の國英るれ来し奏

露光量違いの為重複撮影

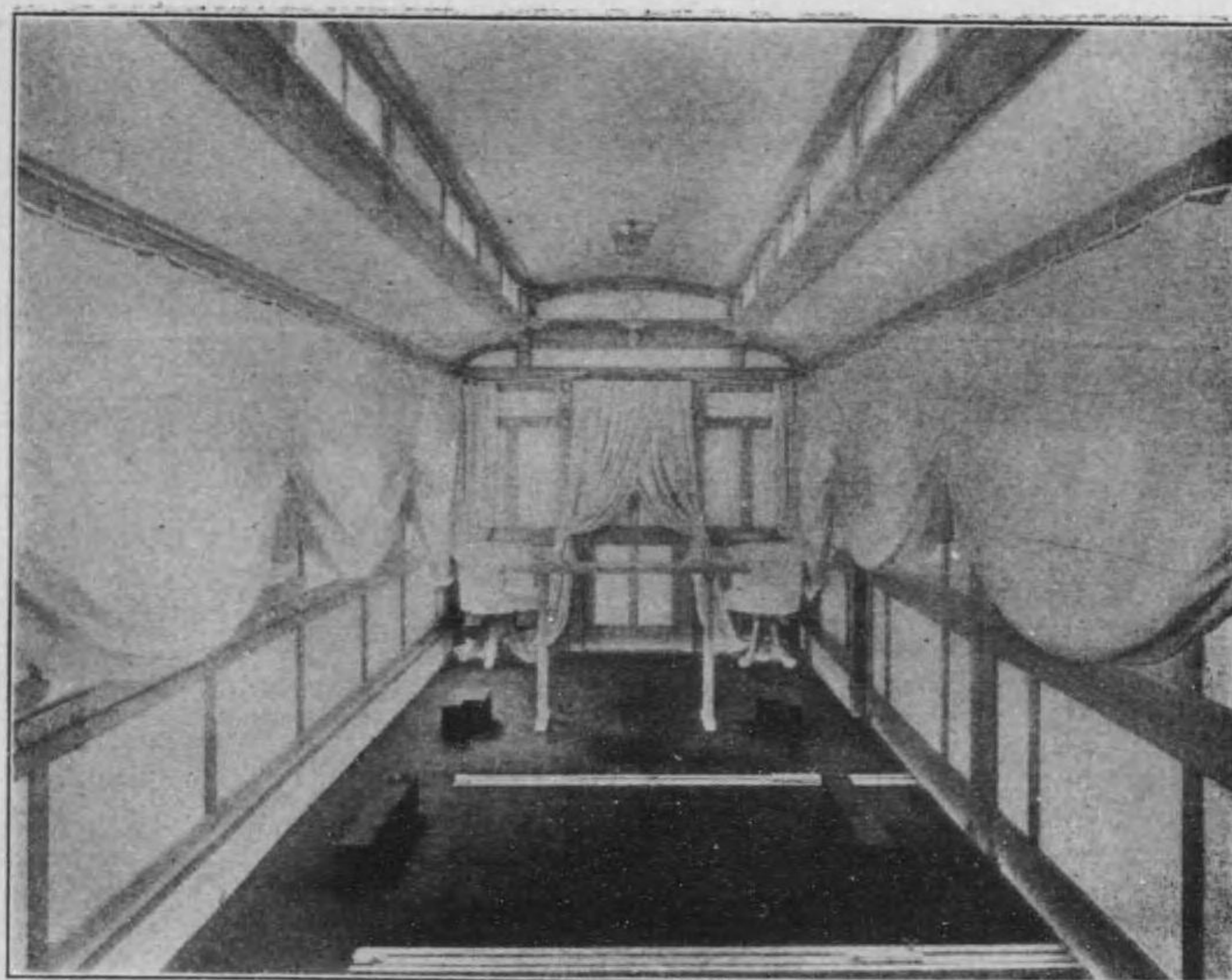
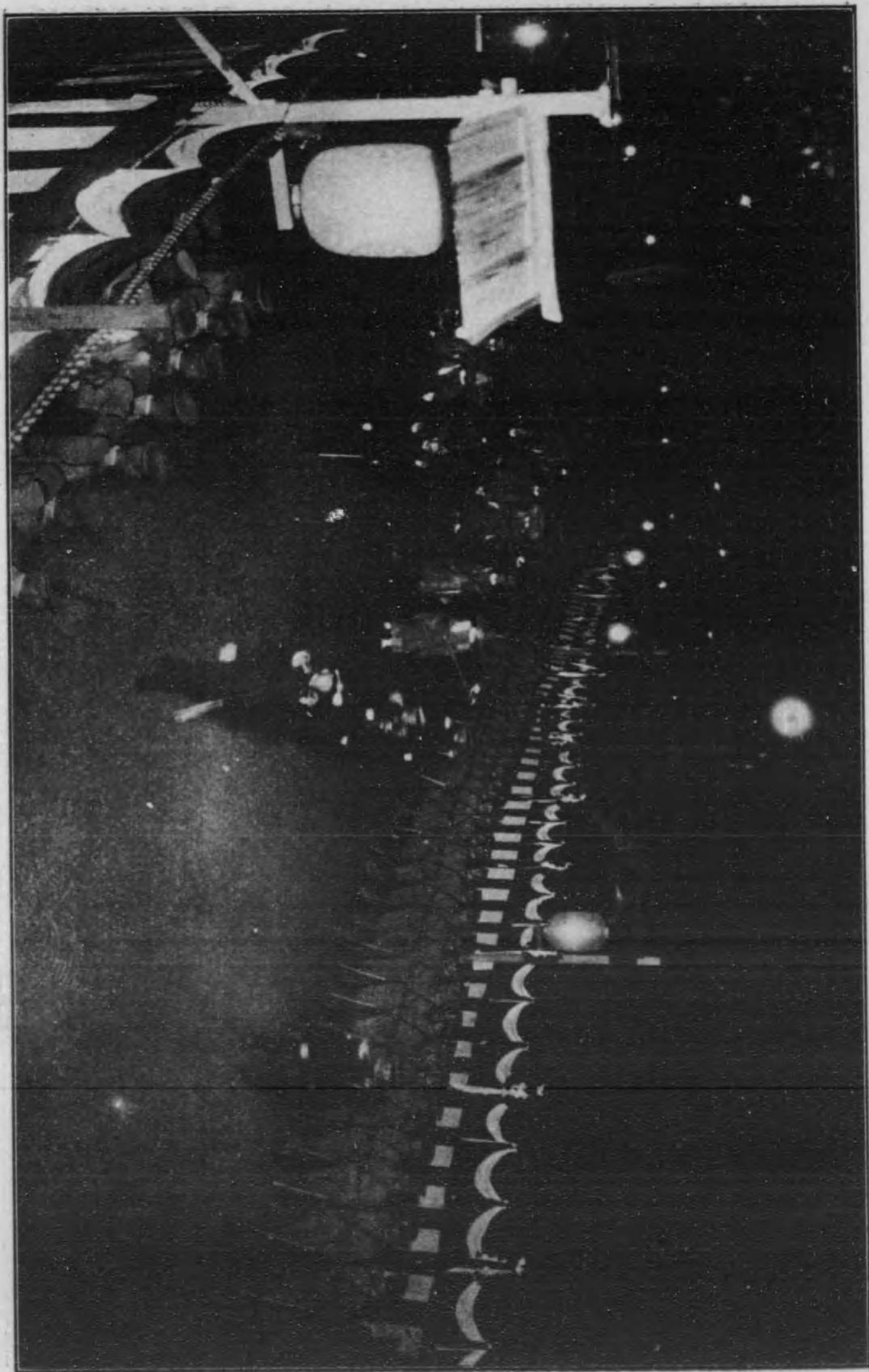


艦 隊 御 着 殿 場 非 艦 隊
 。引いた米じふを露光半五にてへ修く観音哀。け修く高く如の世の野戦は劍銃。れ垂に前、やは旅軍さめ冥劍の校將

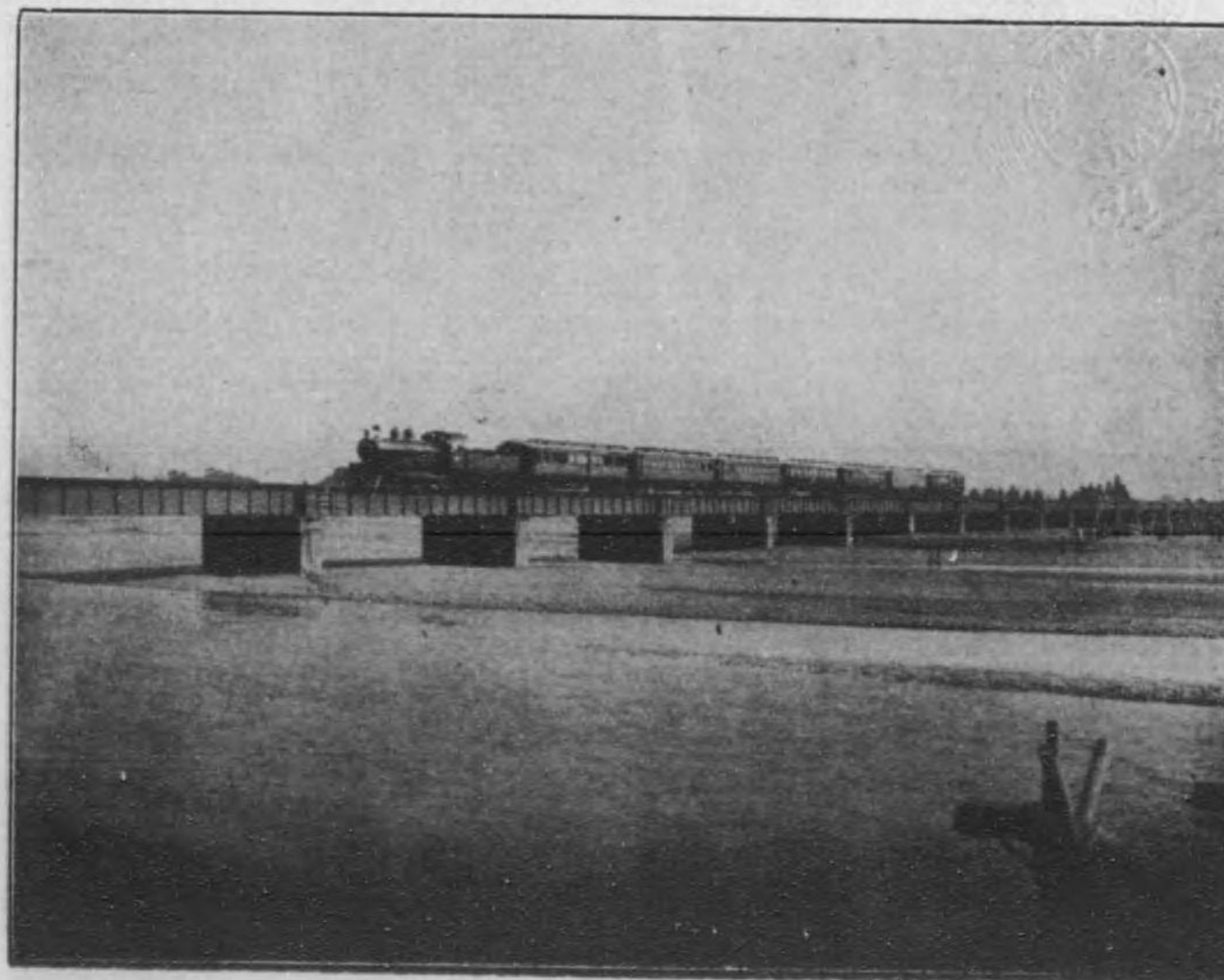


隊 樂 軍 軍 海 國 英 御 着 殿 場 非
 。そくは濃れ其のもるさらた相能てし對に復態るな露光の隊々軍海國盟同く聞な語哀の國英るれ米し奏

。おひ拂を先御てお事を名四部警長務警府都京。るつ奉し御進てき開を門候し安奉に蒙華慈を概靈分十三時六後午

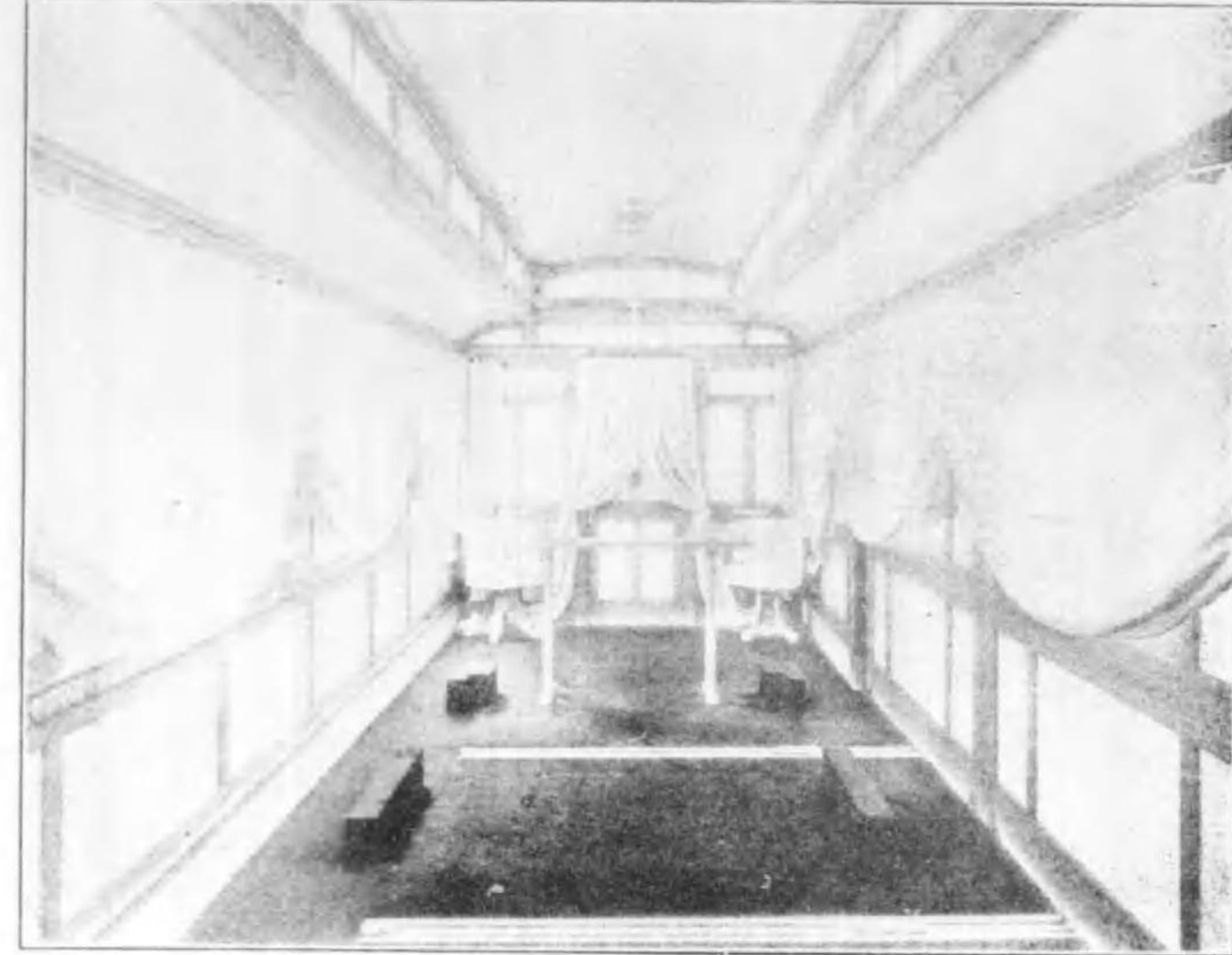


部内車枢靈

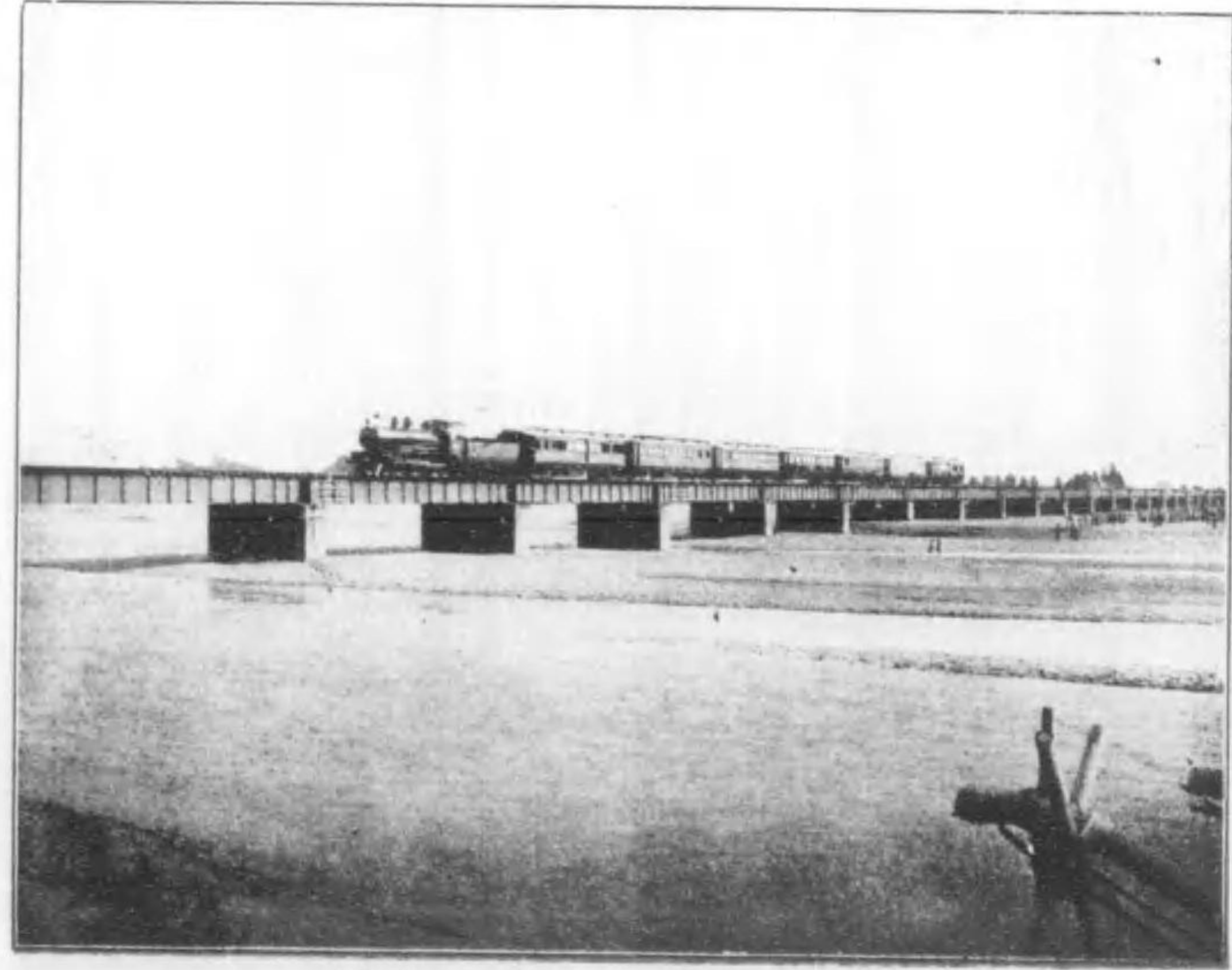


過通橋鐵川部安車列枢靈

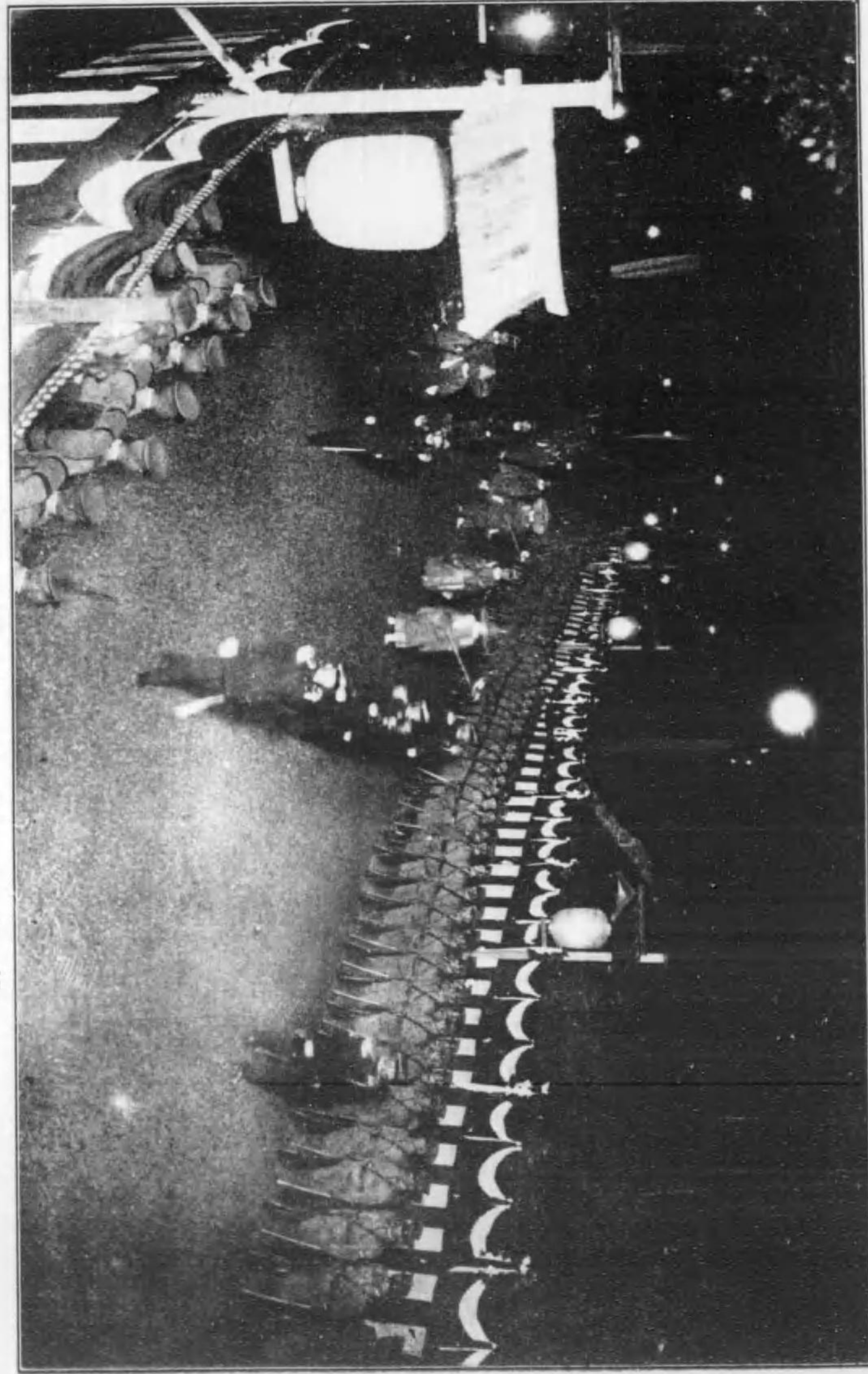
露光量違いの為重複撮影



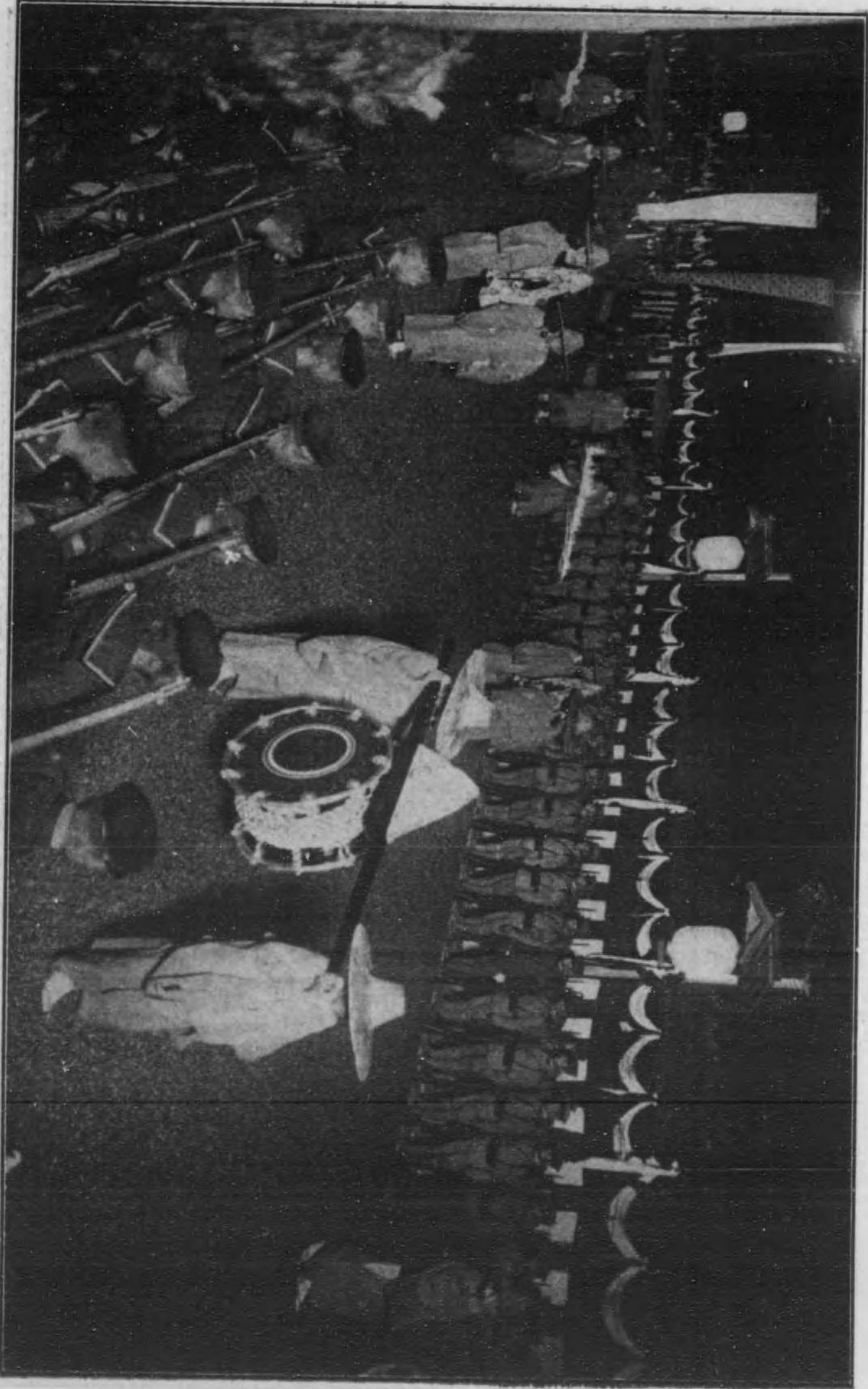
靈柩車内部



靈柩列車安部川鐵橋通過



桃山ニ於ル御進遊門開奉送名四部將長府府都京
 前 聖 於 桃山ニ於ル御進遊門開奉送名四部將長府府都京
 午後六時三十分鐘

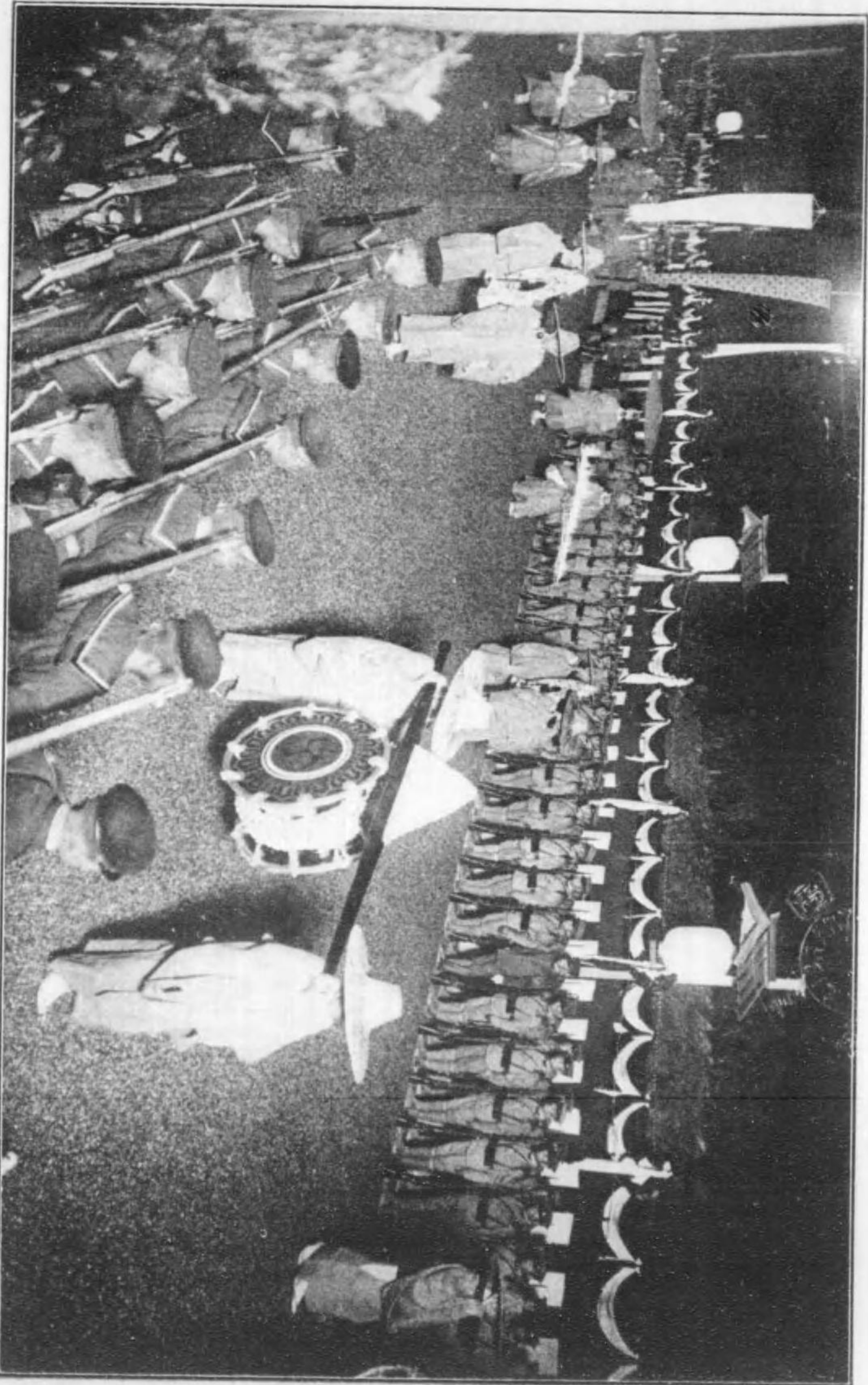


旗、鉦、鼓、箏、笛、鹵ル於ニ山挑
。る流に内てれら煽に風山の火の明松りなま野二にか僅も旗其旗白じ減に、づ對一はてに、こも鉦も鼓

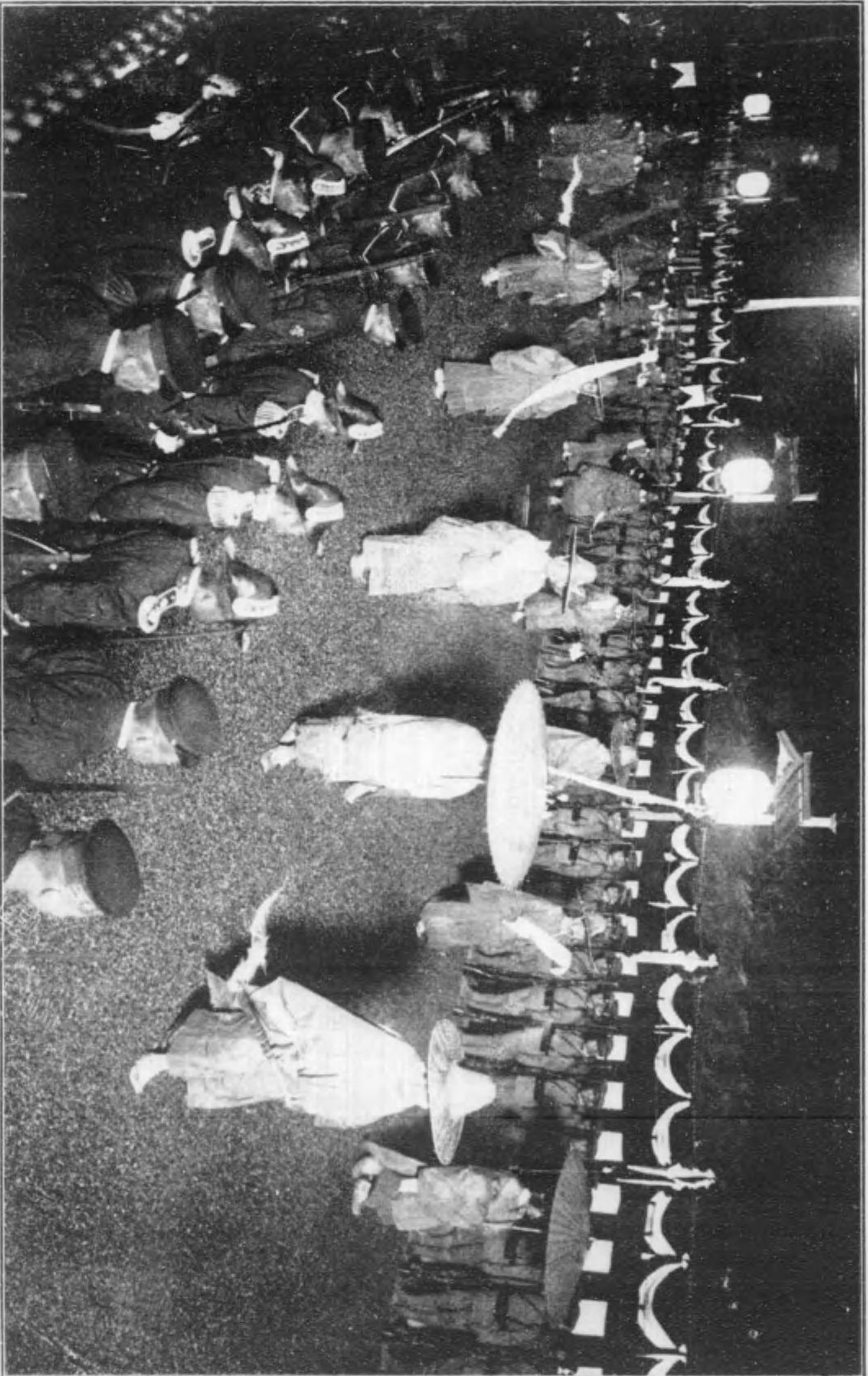


梓、盾、弓、箏、胡、箏、鹵ル於ニ山挑
。に減を數に對一各梓御。盾御。弓御。箏胡

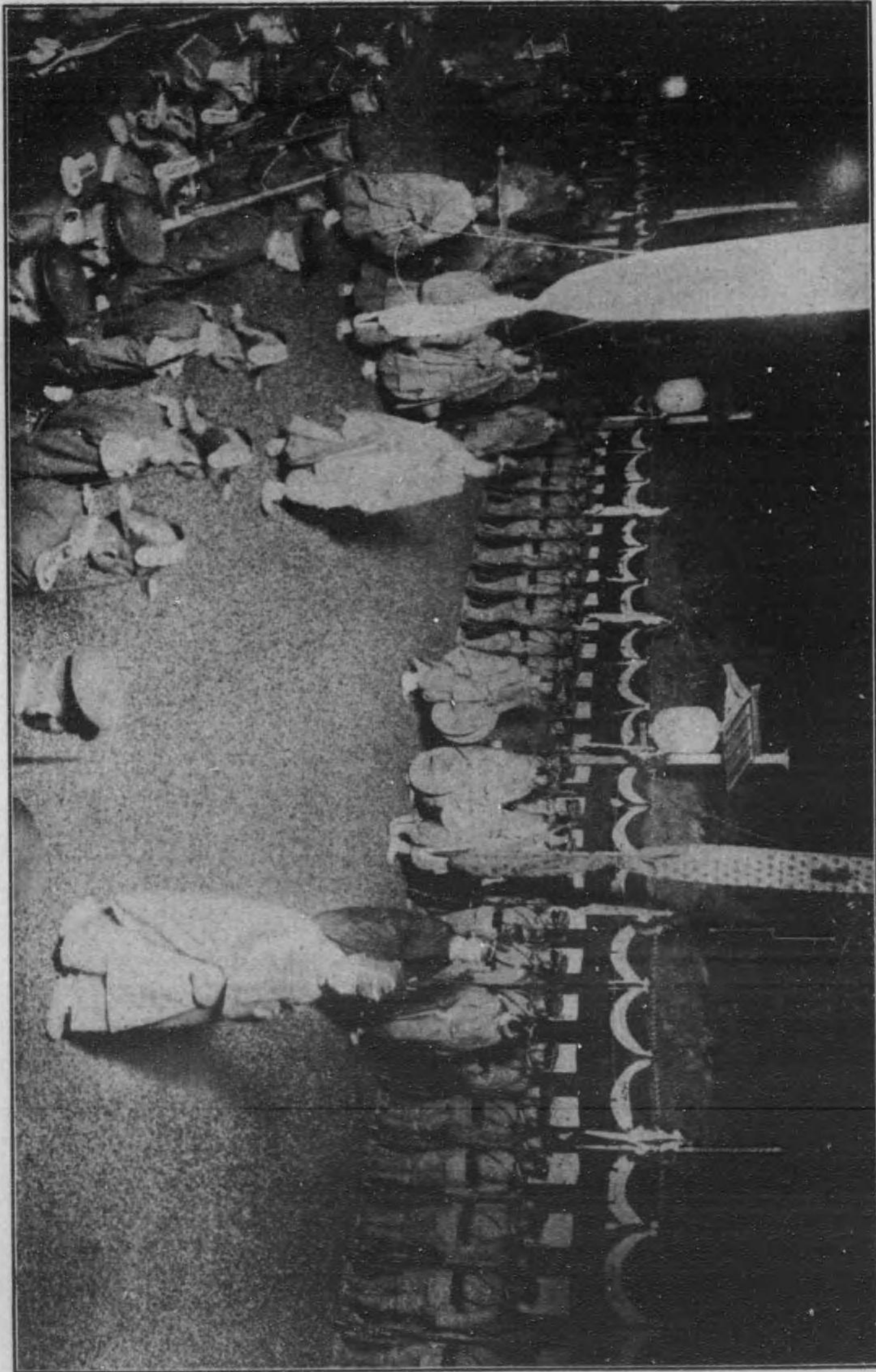
露光量違いの為重複撮影



旗、鉦、鼓、箏、笛、鹵ル於ニ山桃
 。る流に内てはら類に風山の火の明松りなと野二にか僅も備黄離白じ威に、フ對一はてに、こも鉦も鼓



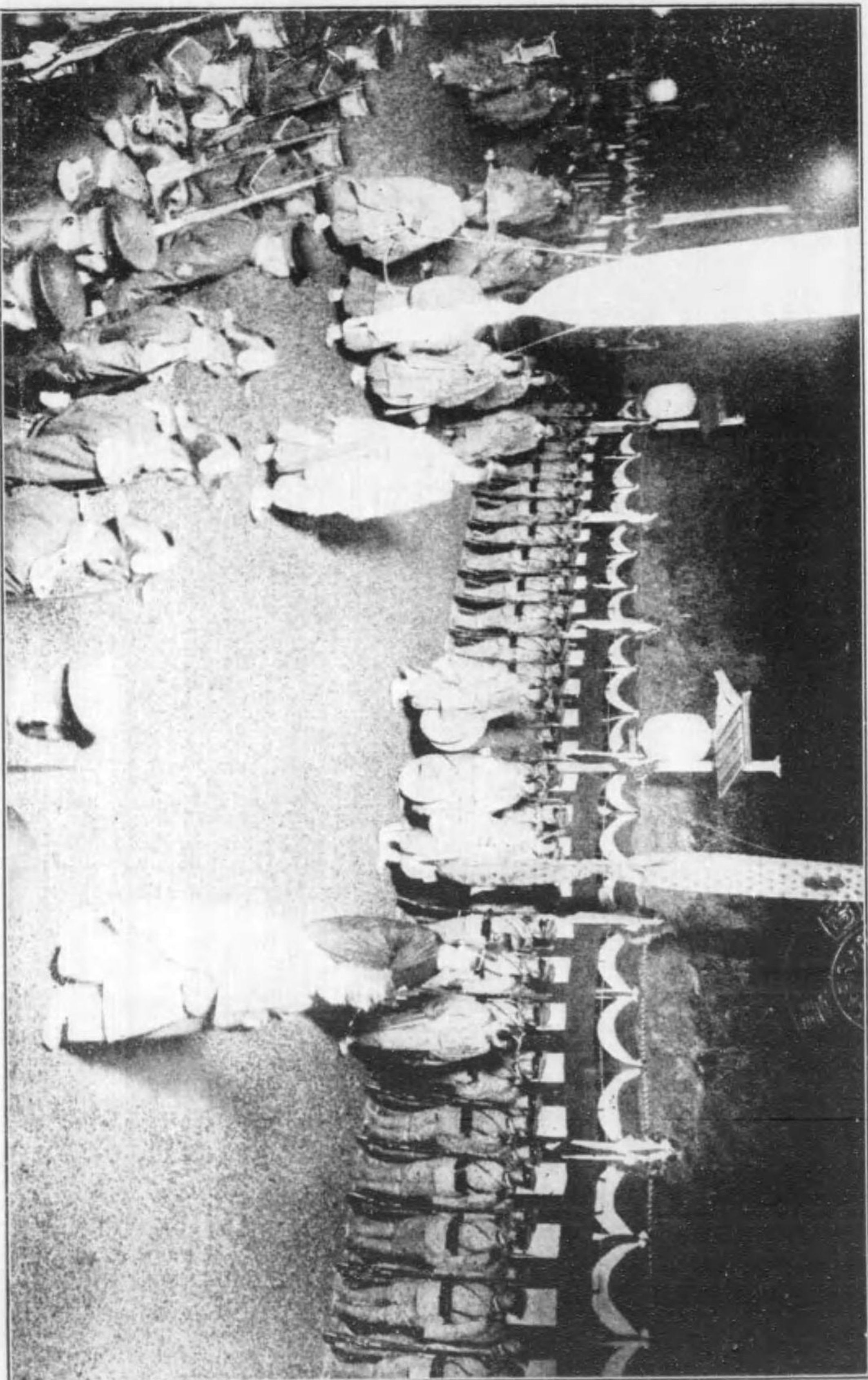
柁、楯、弓、箏、胡、箏、鹵ル於ニ山桃
 ぬじ減を數に對一各伴御。楯御。弓御。箏胡



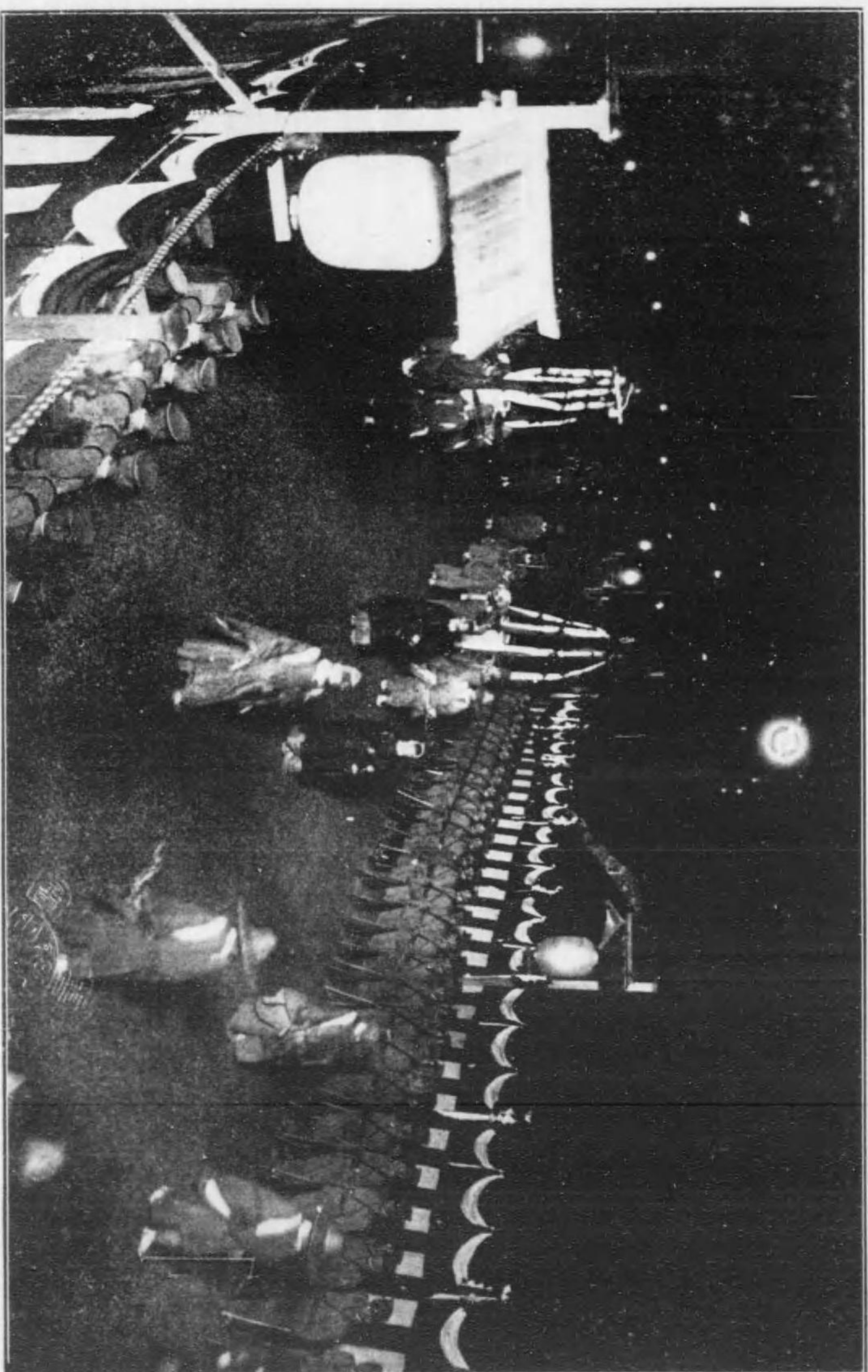
旗 藤 像 日 月 篠 鹵 ル 於 ニ 山 桃
。す 進 行 せ し と 勝 爾 ず は 服 を 雨 し 々 重 く な と 何 ま さ る す 壓 を 路 の 旗 藤 像 日 旗 藤 像 月



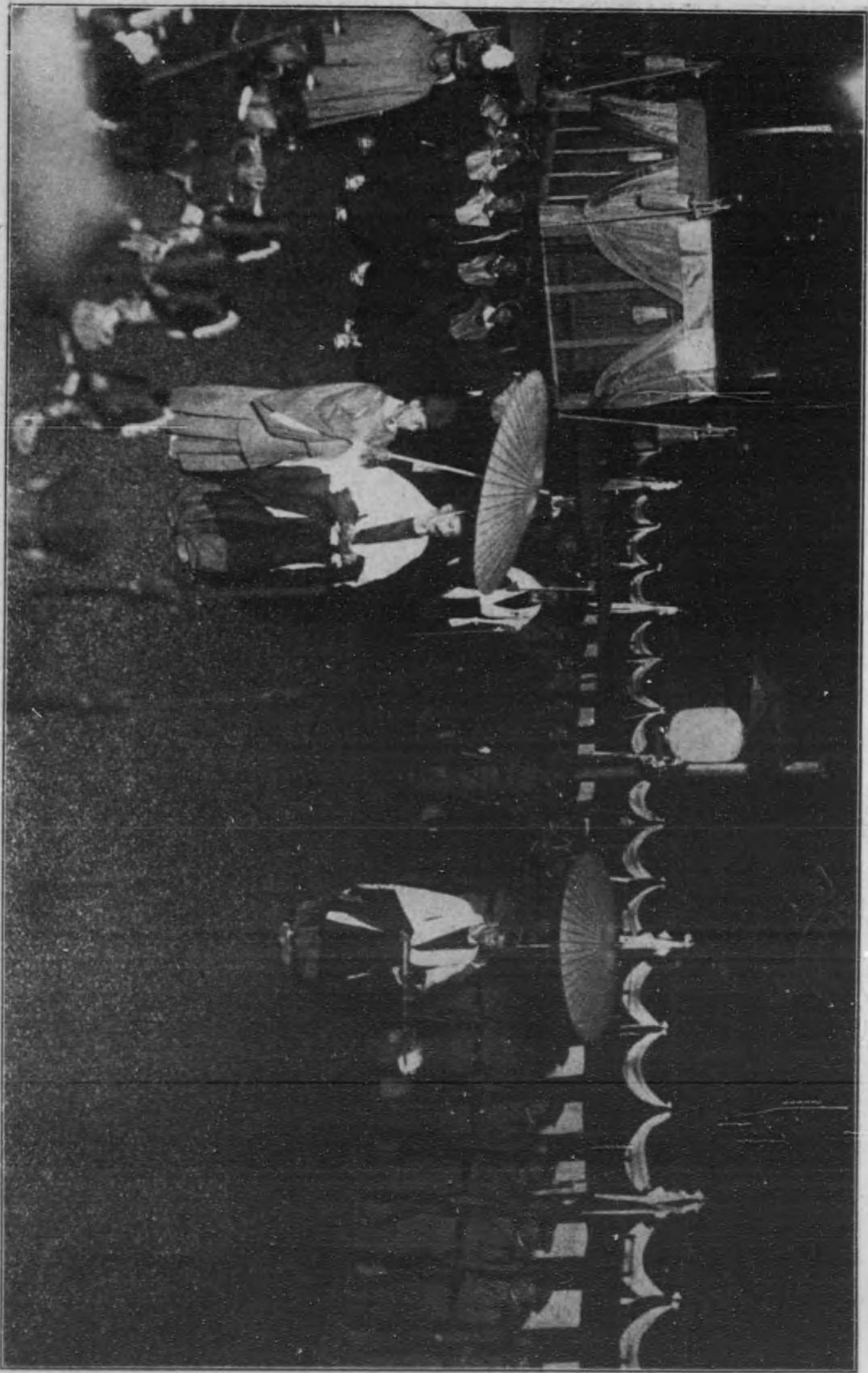
神 真 大 篠 鹵 ル 於 ニ 山 桃
。ん ら あ そ に ふ 給 せ か つ 近 の 警 備 は る す 目 注 に 才 彼 く 遠 の 校 將 軍 隊 。 れ ら け 懸 を と 鏡 即 と 劍 即 は に 神 真 大



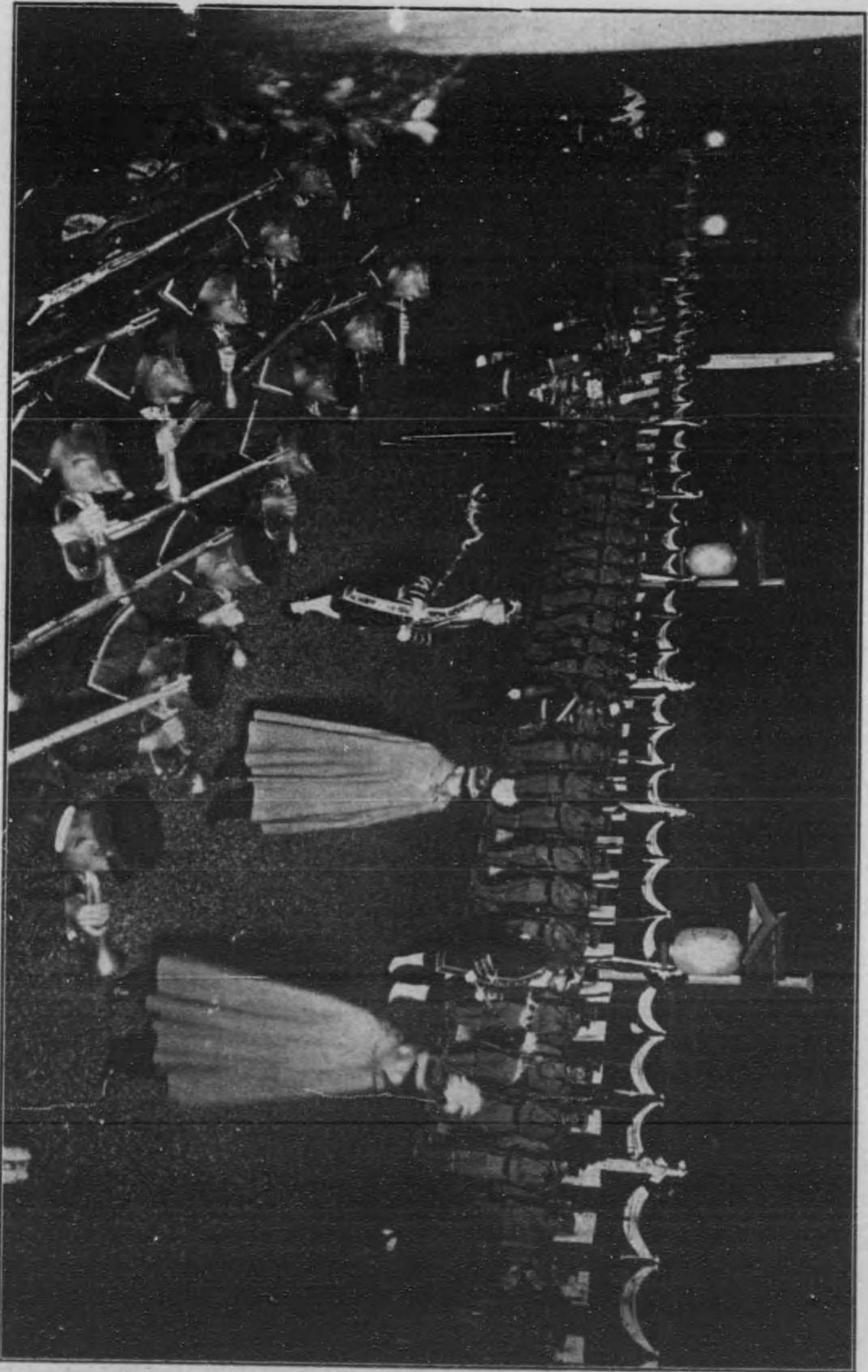
旗 轟 像 日 月 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
。十 進 行 せ し と 晴 霽 中 には 照 耀 せ し 重 々 な 何 ま ぎ る 十 隊 を 路 の 旗 轟 像 日 旗 轟 像 月



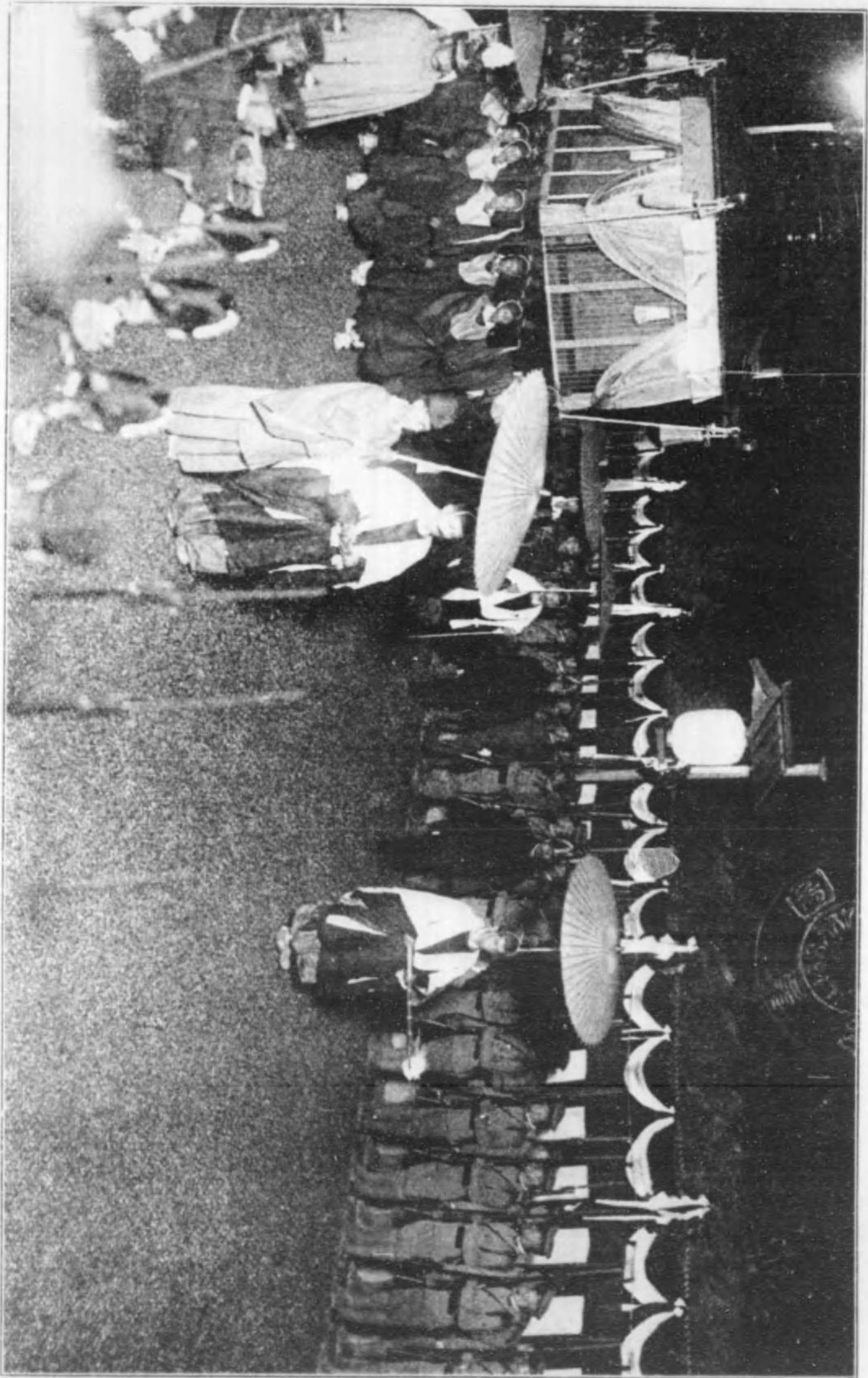
旗 轟 大 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
。ん ち あ ぞ に ぶ 給 せ かつ 近 の 景 観 は る す 目 注 に 方 彼 く 遠 の 校 將 軍 隊 。れ ち け 懸 を と 鏡 即 と 劍 即 には 旗 轟 大



幕 靈 簿 鹵 ル 於 ニ 山 挑
 が開てれらせ身本に子童混入は数歳し持棒を明松にてに服兼加刺帶單冠衣もいた執務部職従侍の(左)山石(右)門御炊大
 。やんらかは派益。きべるあく斯にかいばでらな戴雨姿トソへの軍將の衛侍。衆さまの従侍の列輩御りへ給せら渡に

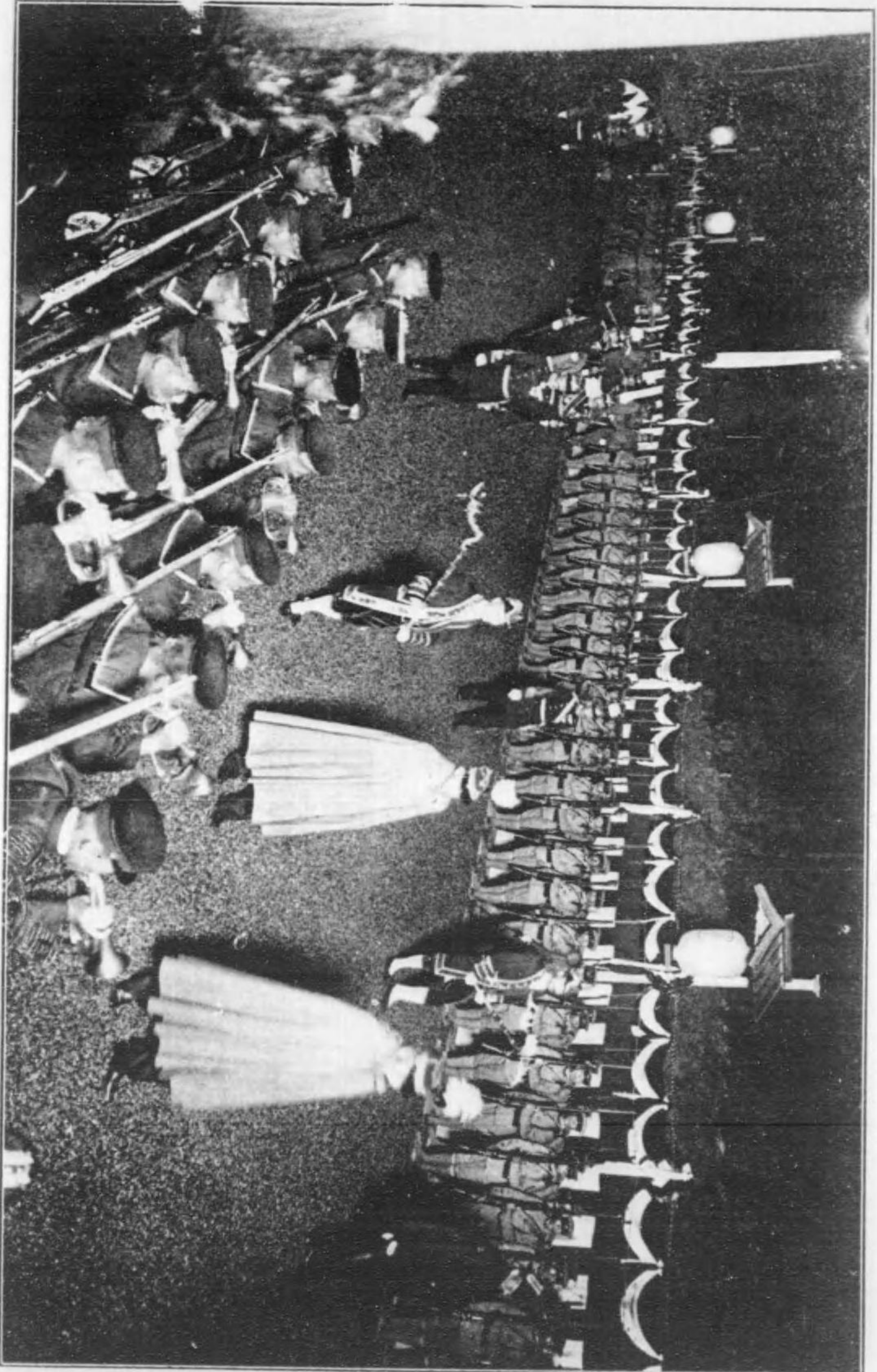


宮 代 名 御 簿 鹵 ル 於 ニ 山 挑
 官武從侍剛の田ト。西はトソへの前。ふ給しは現を身中御にか置に肩左の仁中ヲ参拜するな夫の明松列右は宮院閣代名御



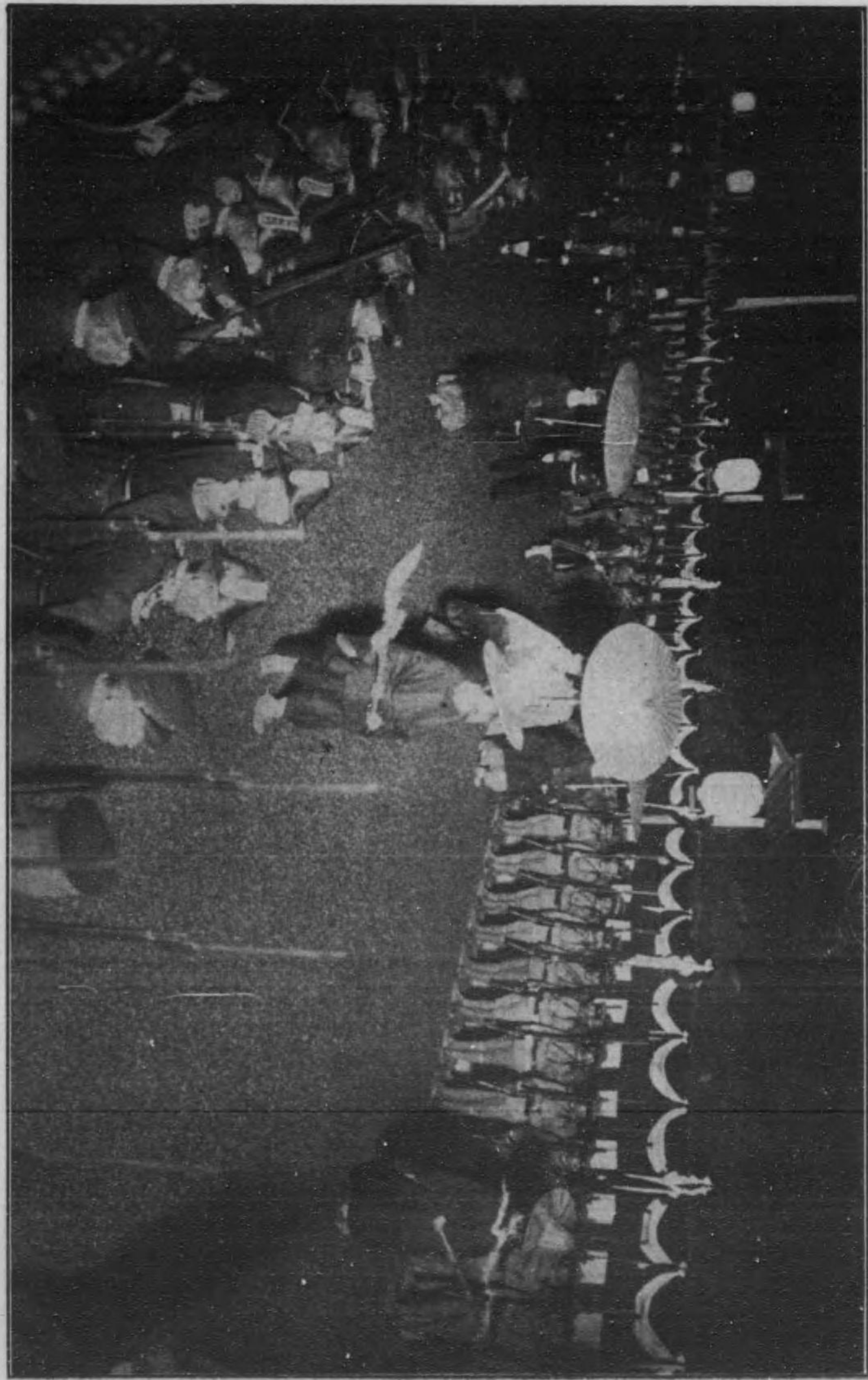
紫 雲 簿 函 ル 於 = 山 桃

が却てはらせ昇本に予童流入は紫雲と持株な明松にて服基加刺帶軍冠衣とに眞務御職從侍の「左山石」右門御次大
やんらかやな所置さへなるあふ斯にかいはててな夜雨姿トマツの軍將の御侍。衆しきの從侍の別當御り、給ては渡に

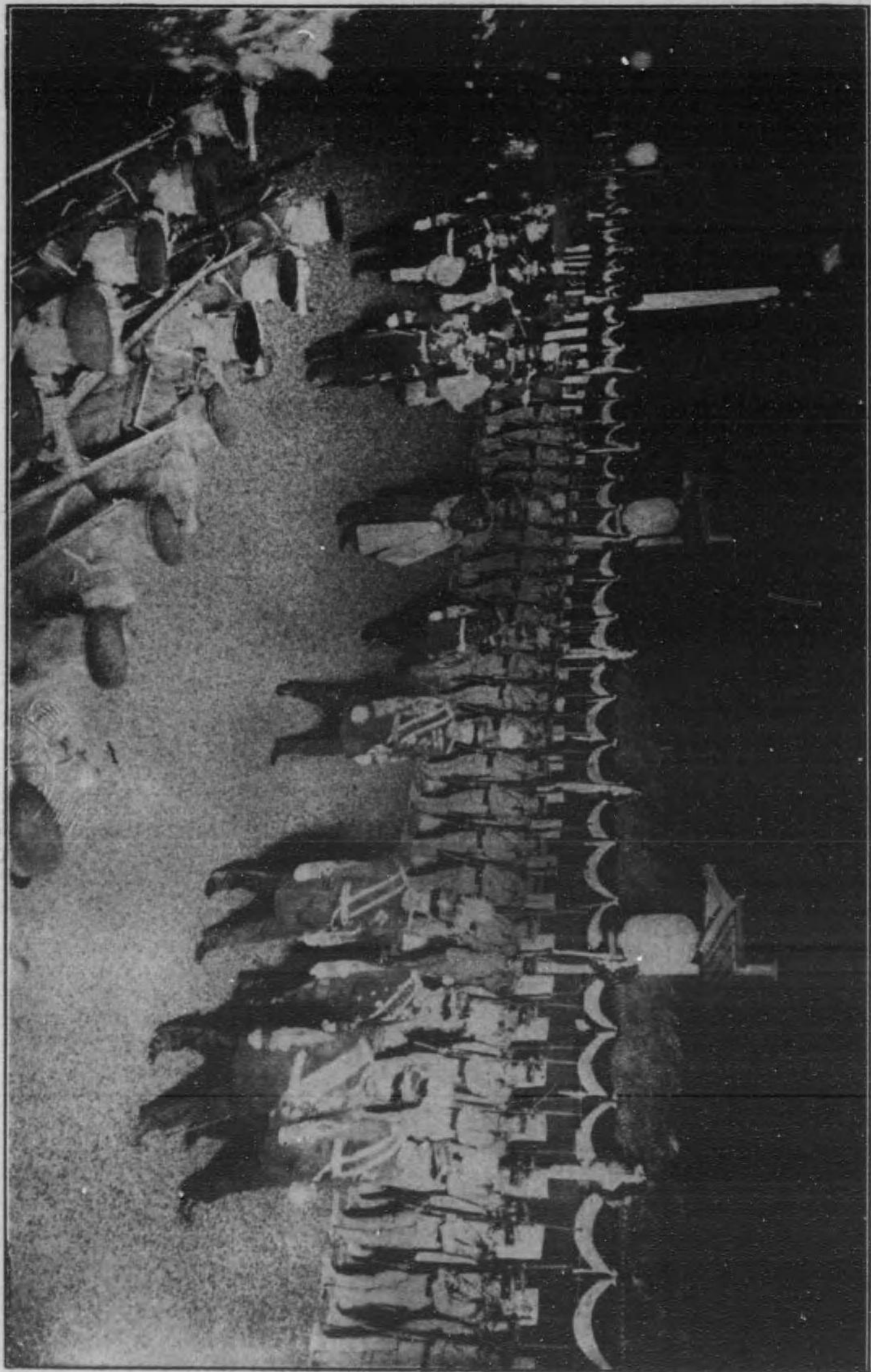


宮 代 名 御 簿 函 ル 於 = 山 桃

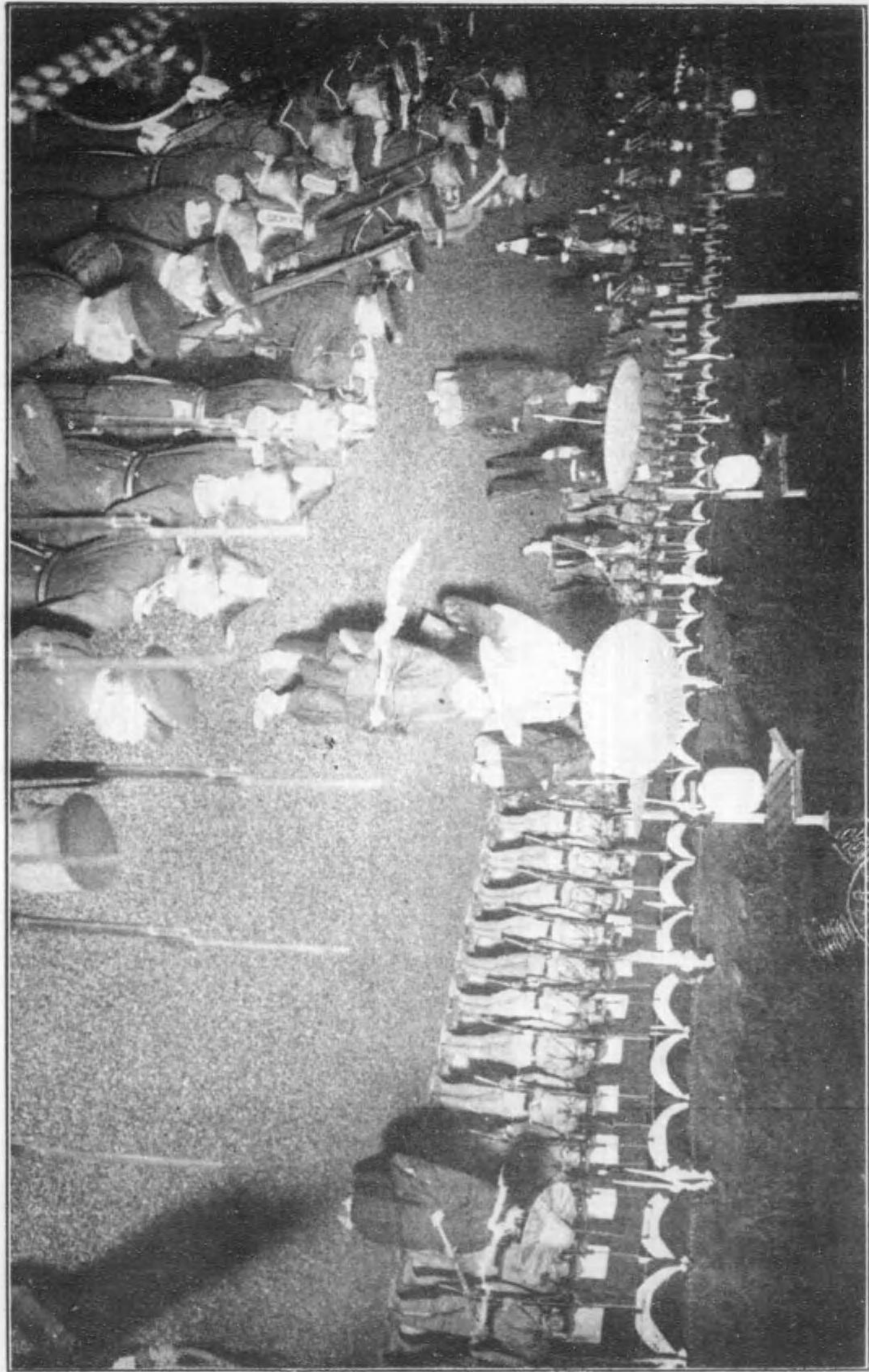
宣武從侍御の田し。別はトソフの御さ給しは現在身半面にか置に月左の在中で赤田下を以て大の明松列右は宮院別代名御



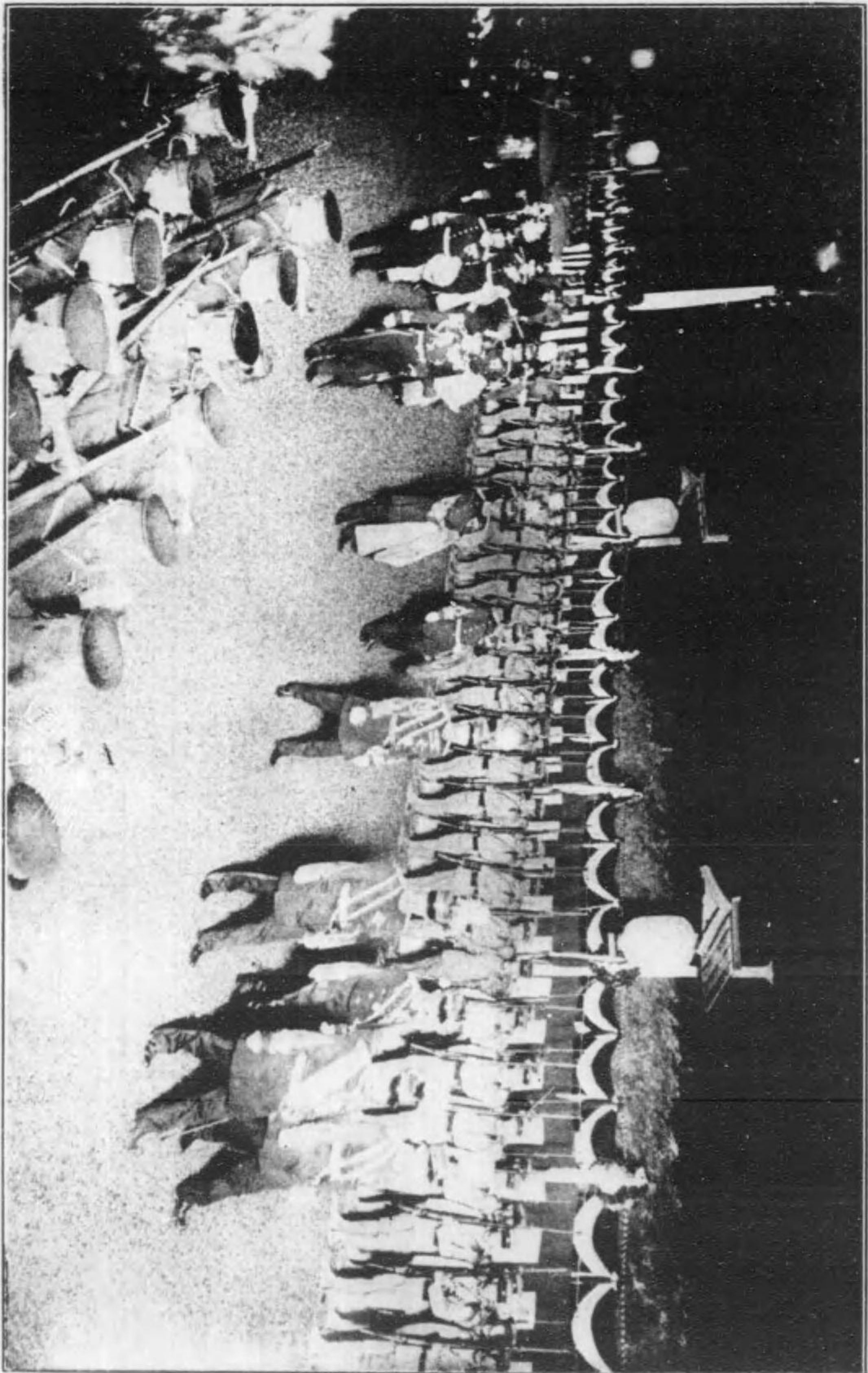
宮裁總 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
度と然哀の宮裁を見伏ふ給せば運を杖欄に内の傘るすら豊けかしさの人仕
。やんらあ人わら押を袖もさくた雨はてし拜を様有御る。さばお念出にさ敬



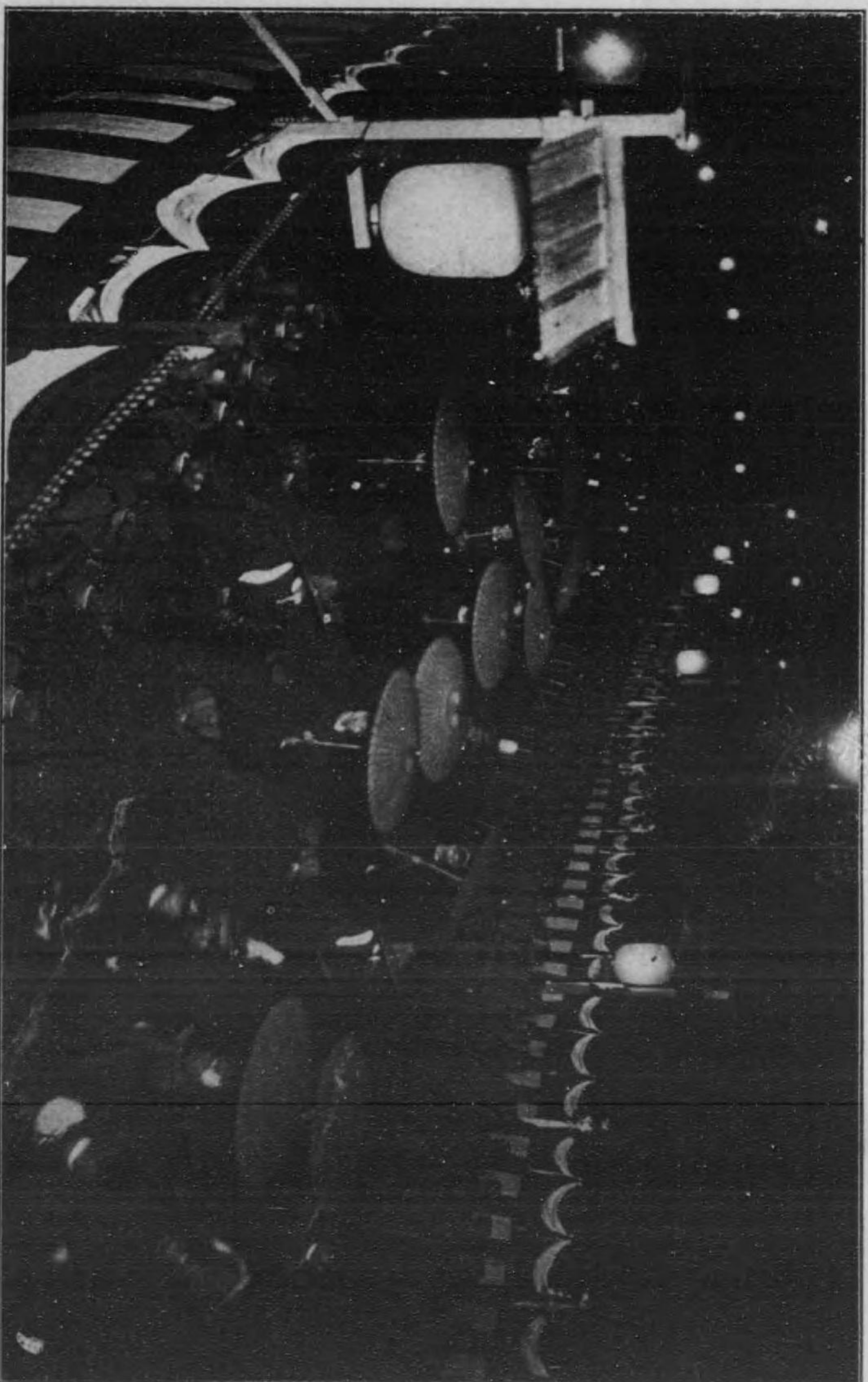
族 公 皇 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
竹王久成宮川白北(列前)王彦彦給宮遷久東王正守宮本梨はふ給せさえ見にさこ
。官武附族皇各はるす從隨へ携なトソマ。下殿五の公堀李(列後)王久恒宮田



宮裁總 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
度々然其の宮庭を見伏ふ給せば運な杖棚に内の衆をすらすら参りかじきの人仕
やんらわ人ねら權を袖もさく雨はてし拜を様有御る。さきは念世にぞ敬

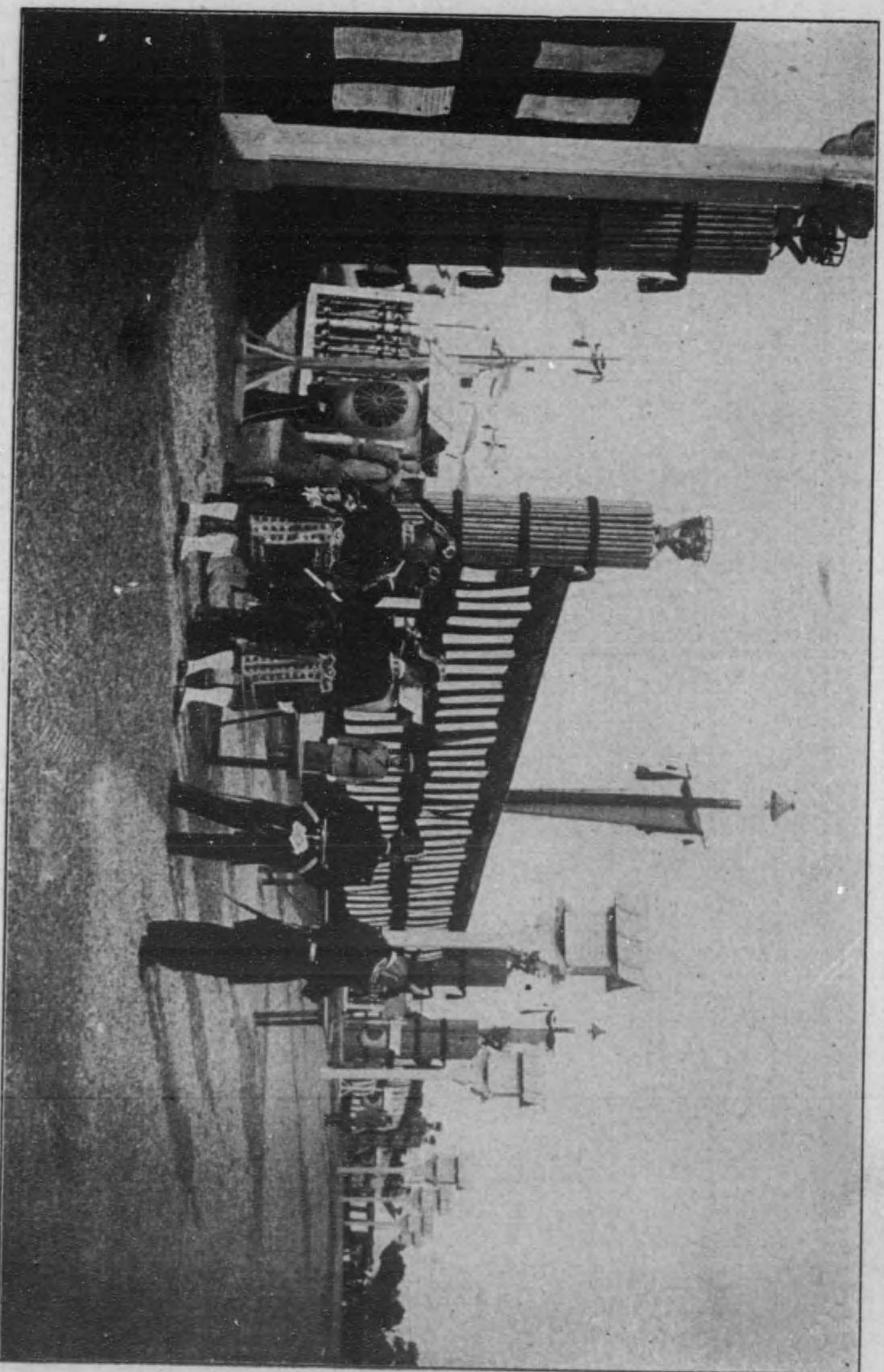


族 公 皇 簿 鹵 ル 於 ニ 山 桃
竹王久成宮川白北(列前)王彦総宮瀬久東王正守宮本梨はふ給せきえ見にんこ
。官武附族皇各はるす從隨へ携なトソマ。下照五の公相李(列後)王久恒宮田

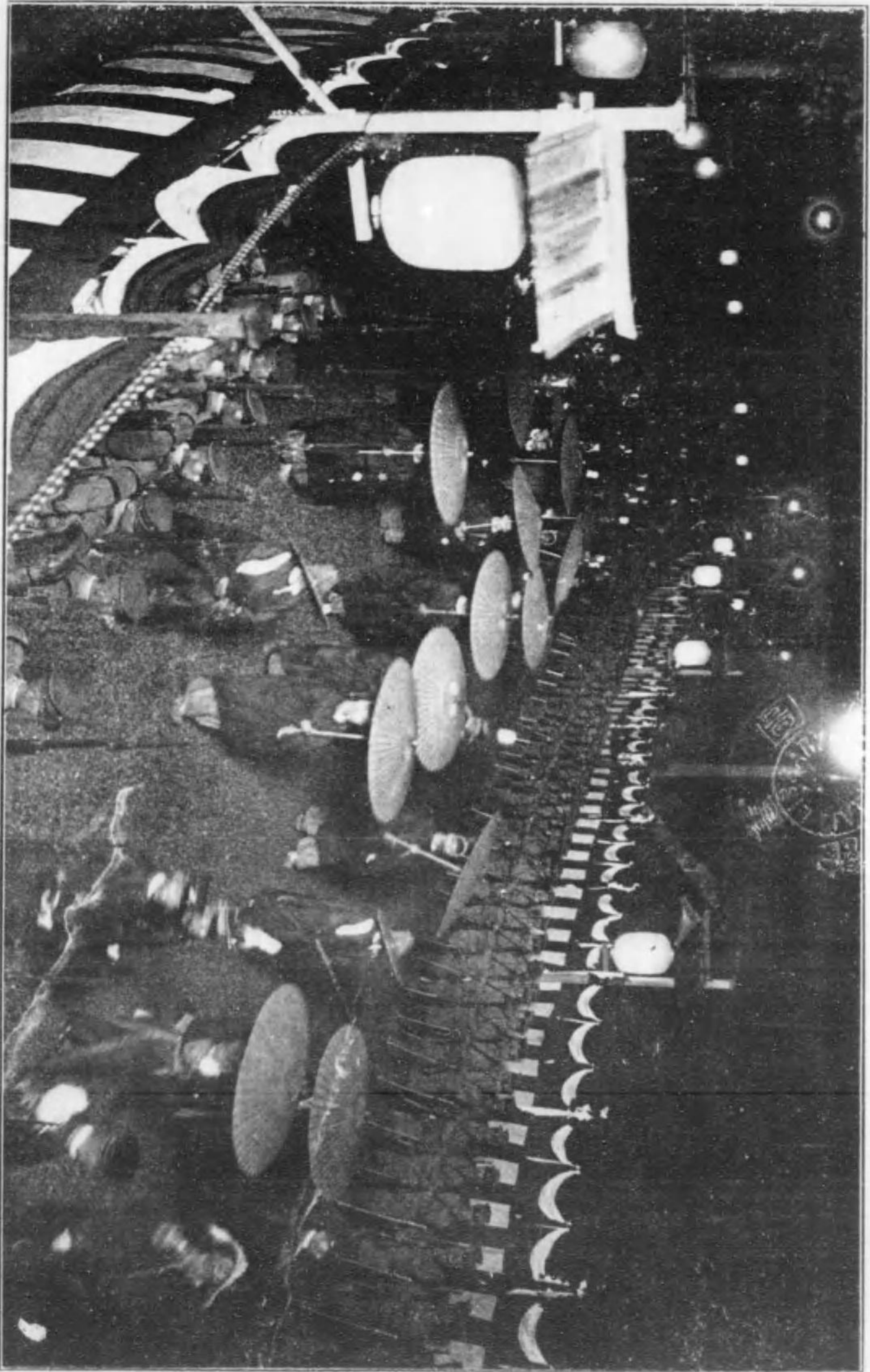


等代總族親御 簿 鹵 於 山 桃

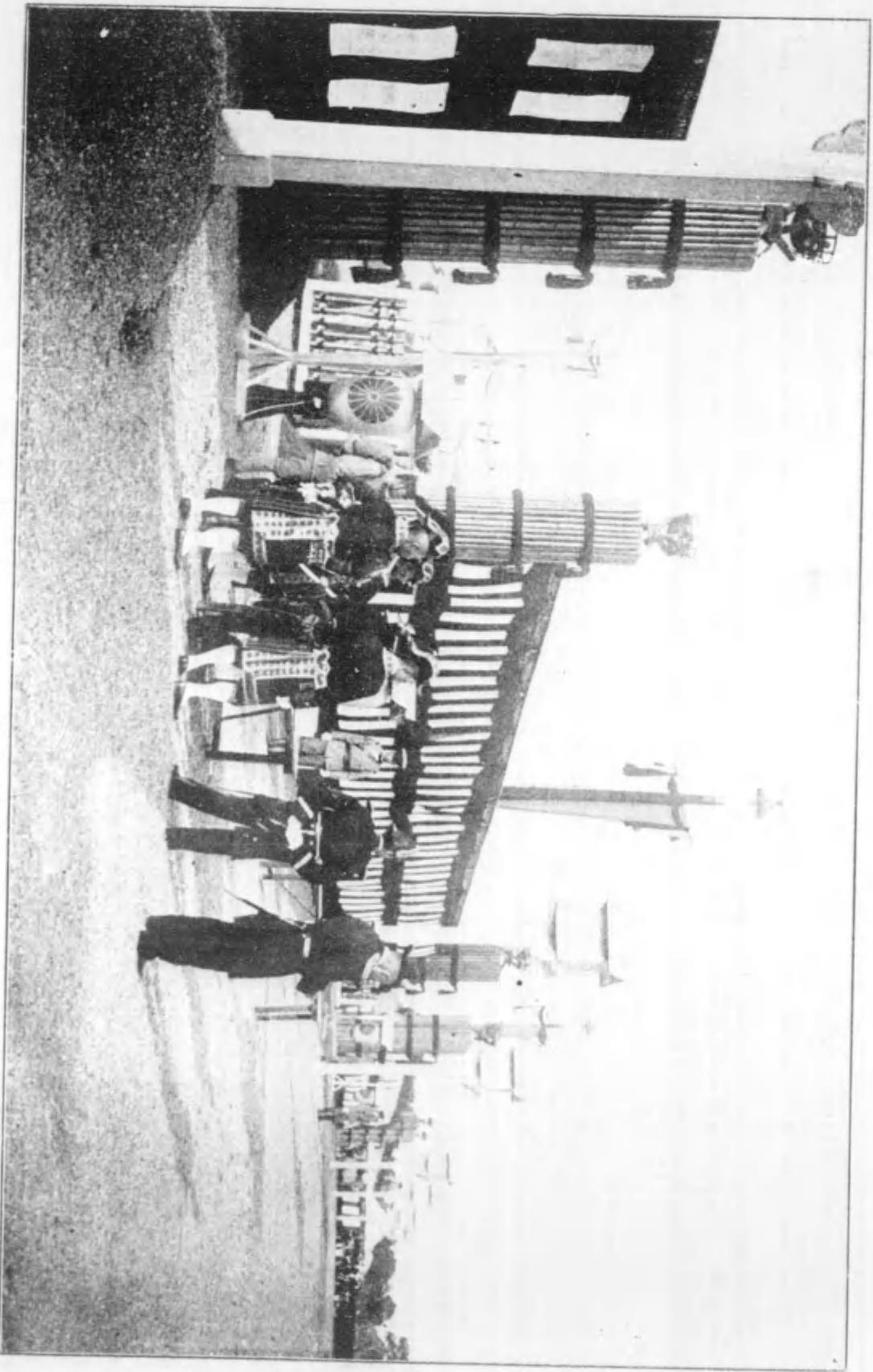
こ。りな團一の等國。山片。牛平。崎屋。波藤。野股官務事使夷大は次。團醫侍は次。爵公寮二代總族親御は頭先
 兩衆貴。官長令司府守瀧崎舞。皇國師六十輩の及代地の還寺同官任親將大軍津邊 皇待臣大臣大務國位勳大は後の
 すと殿の簿鹵て以を部警衛後てしに等事印府都京代也官任勅内宮。爵公の住在府都京官任勅代總爵公。長議院



場祭御山青ル々見リヨ面側

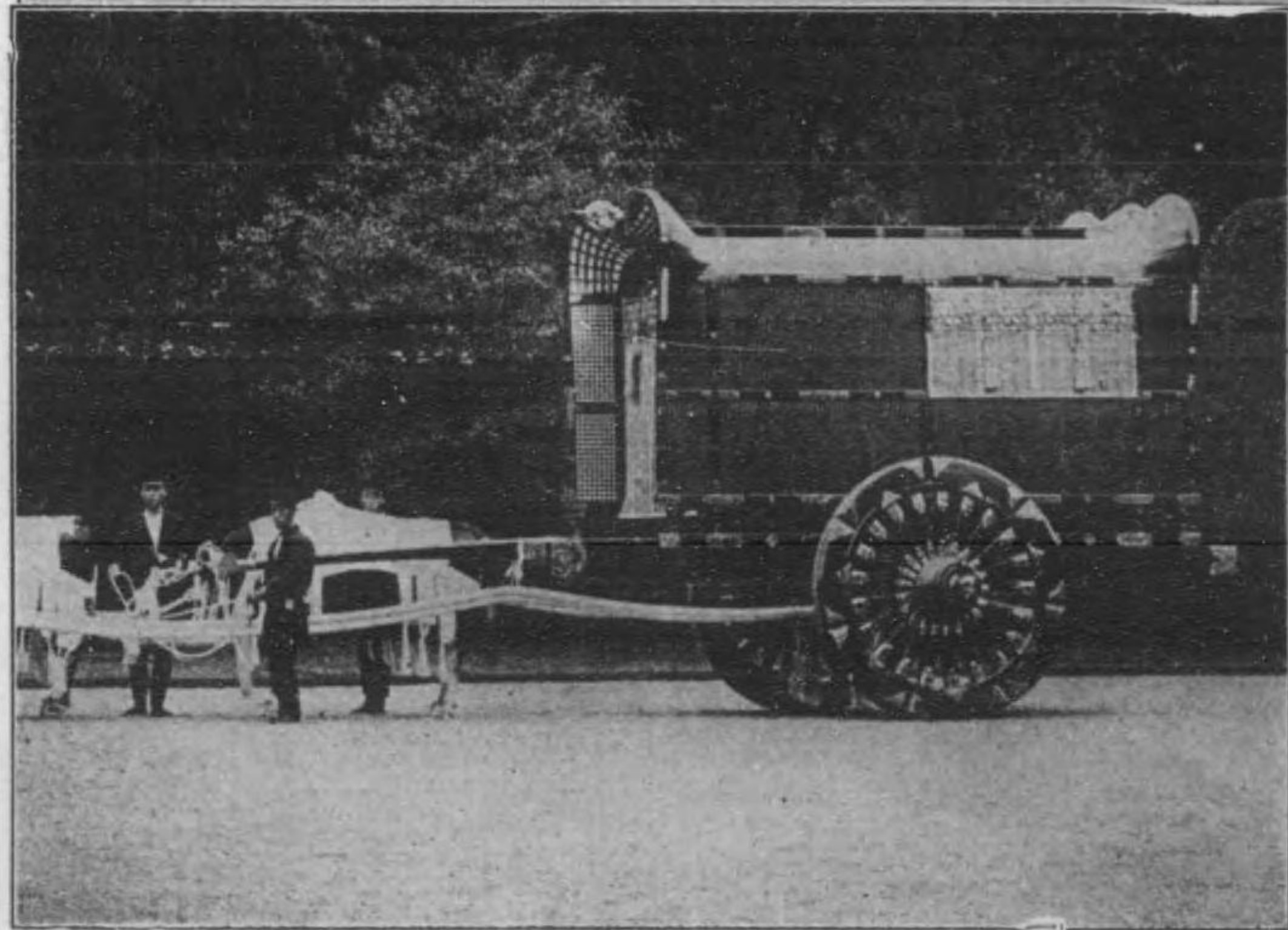
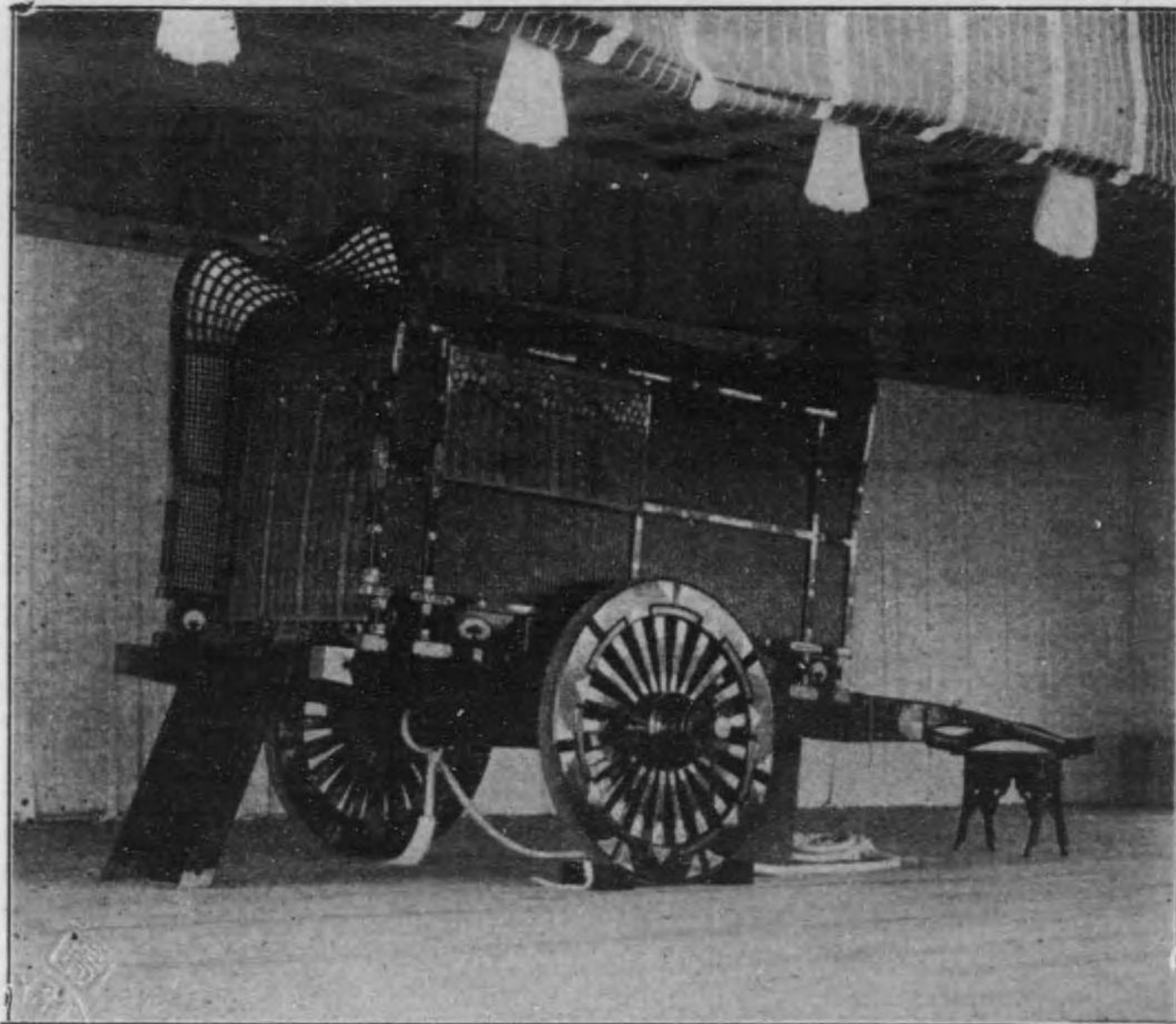


等代總族親御 符 函 ル 於 ニ 山 桃
 こゝりな團一の等圓。山片。中平。崎長。波藤。野股官務事使東大は次。國醫侍は次。爵公繁二代總族親御は頭先
 兩衆貴。官長合司府守鎮總舞。曼園師六十第び及代地の遇待同官任親將人軍海陸。玉待臣大臣。大務國位勅大は後の
 すと殿の簿函て以な部警衛後てしに等事知府都京代。總官任初内宮。爵公の住在府都京官任勅代總爵公。長議院

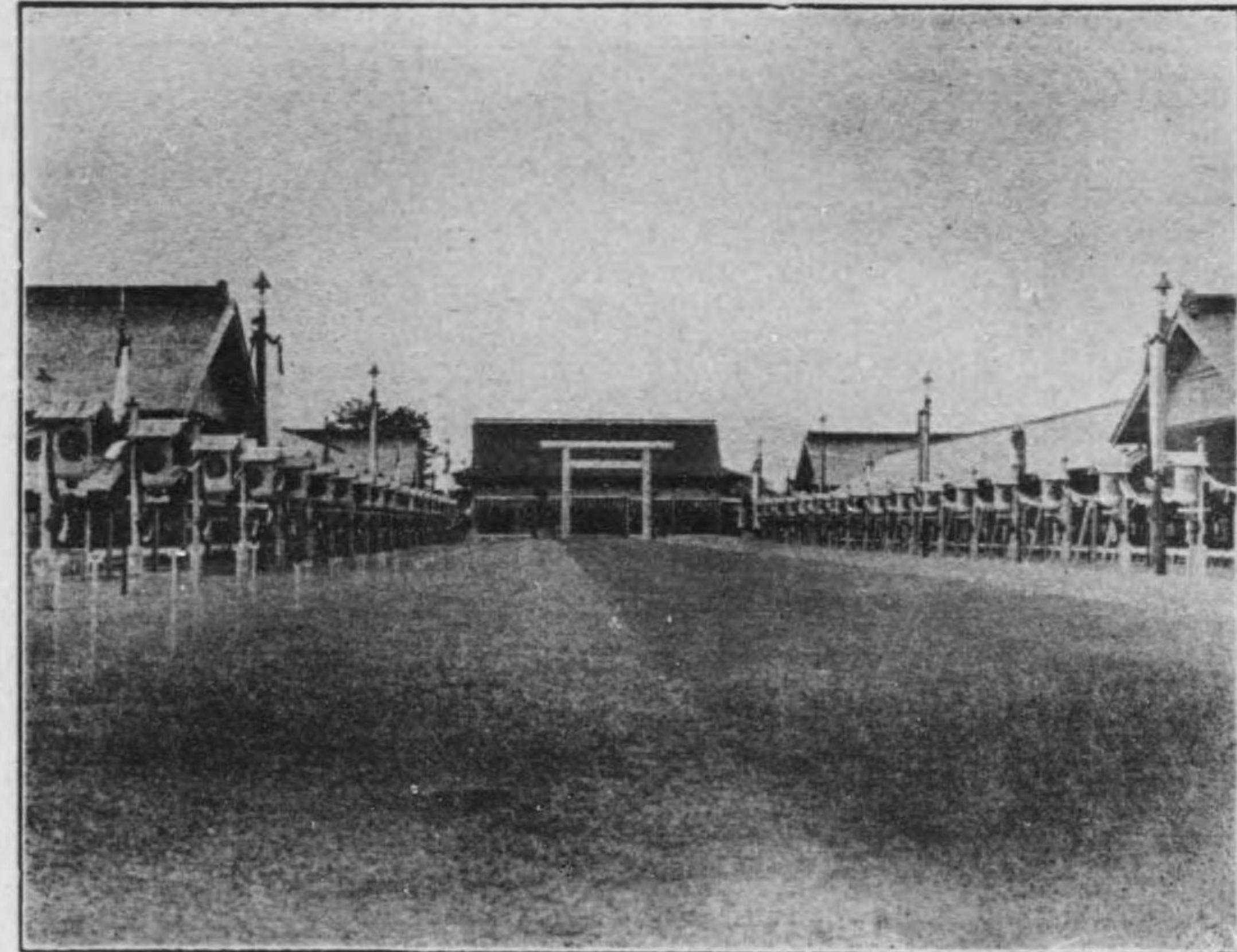


場祭御山青ル々見リヨ面側

青山葬場内御輦車



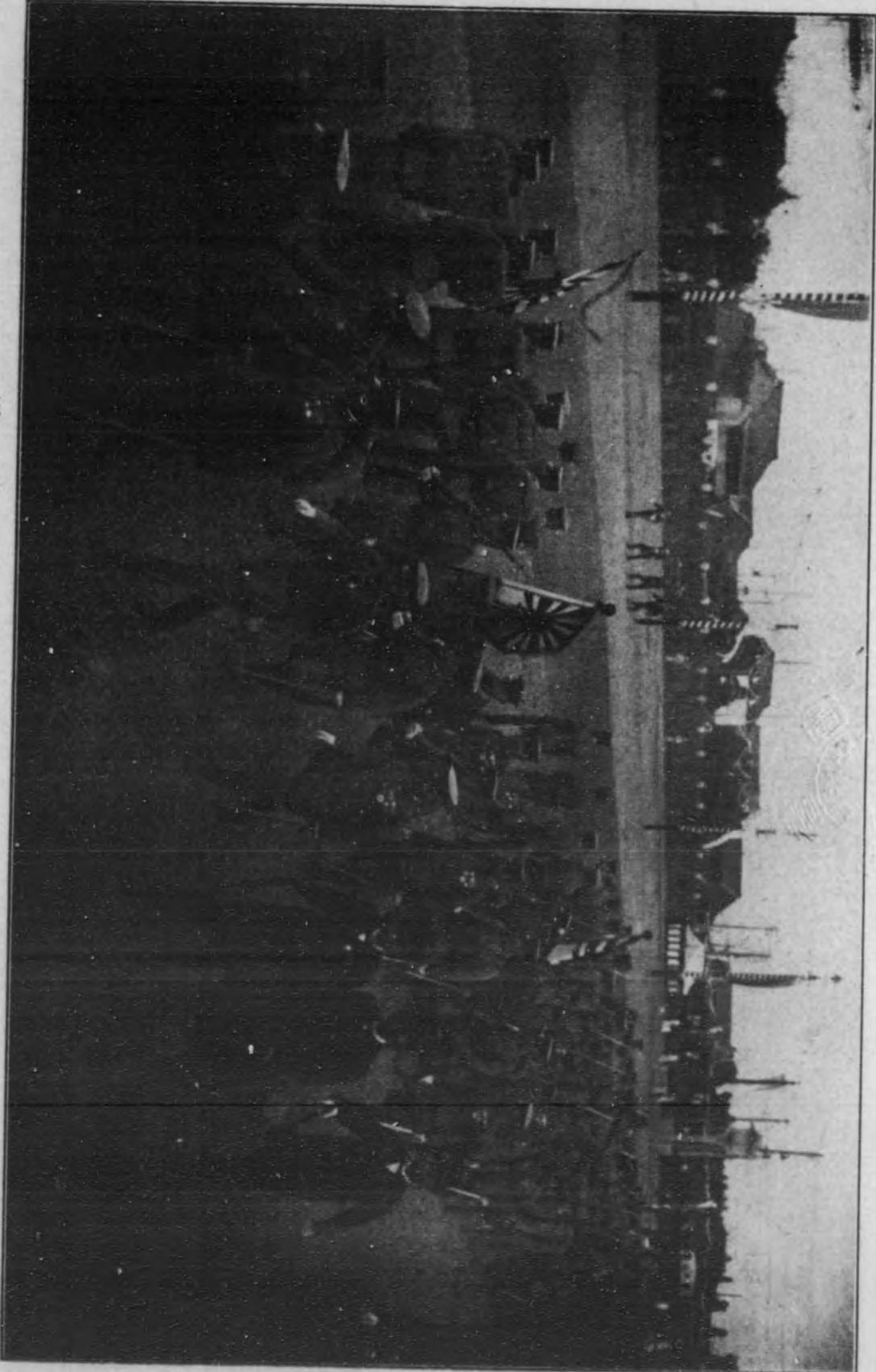
御輦車牽引練習



葬場第一鳥居内

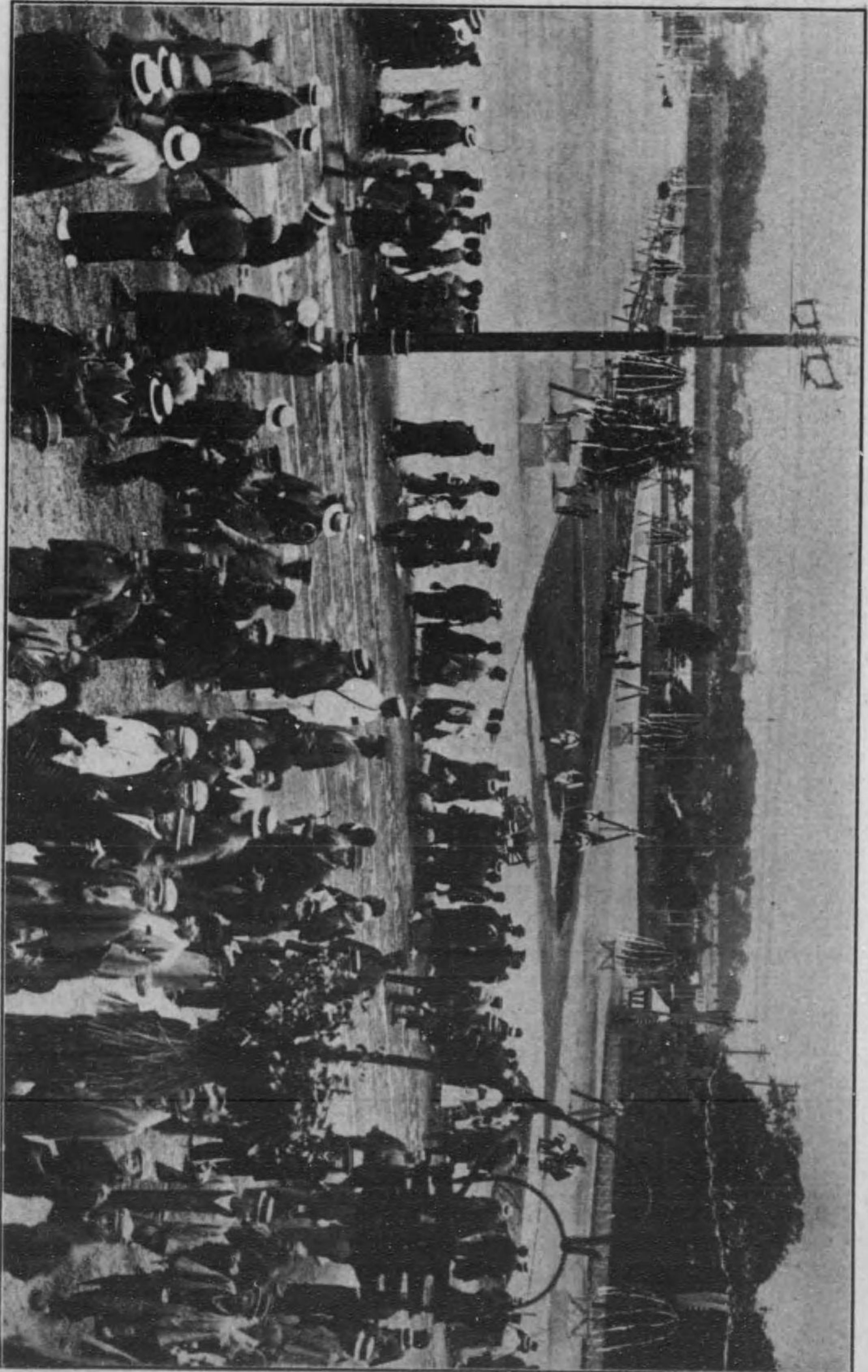


葬場殿



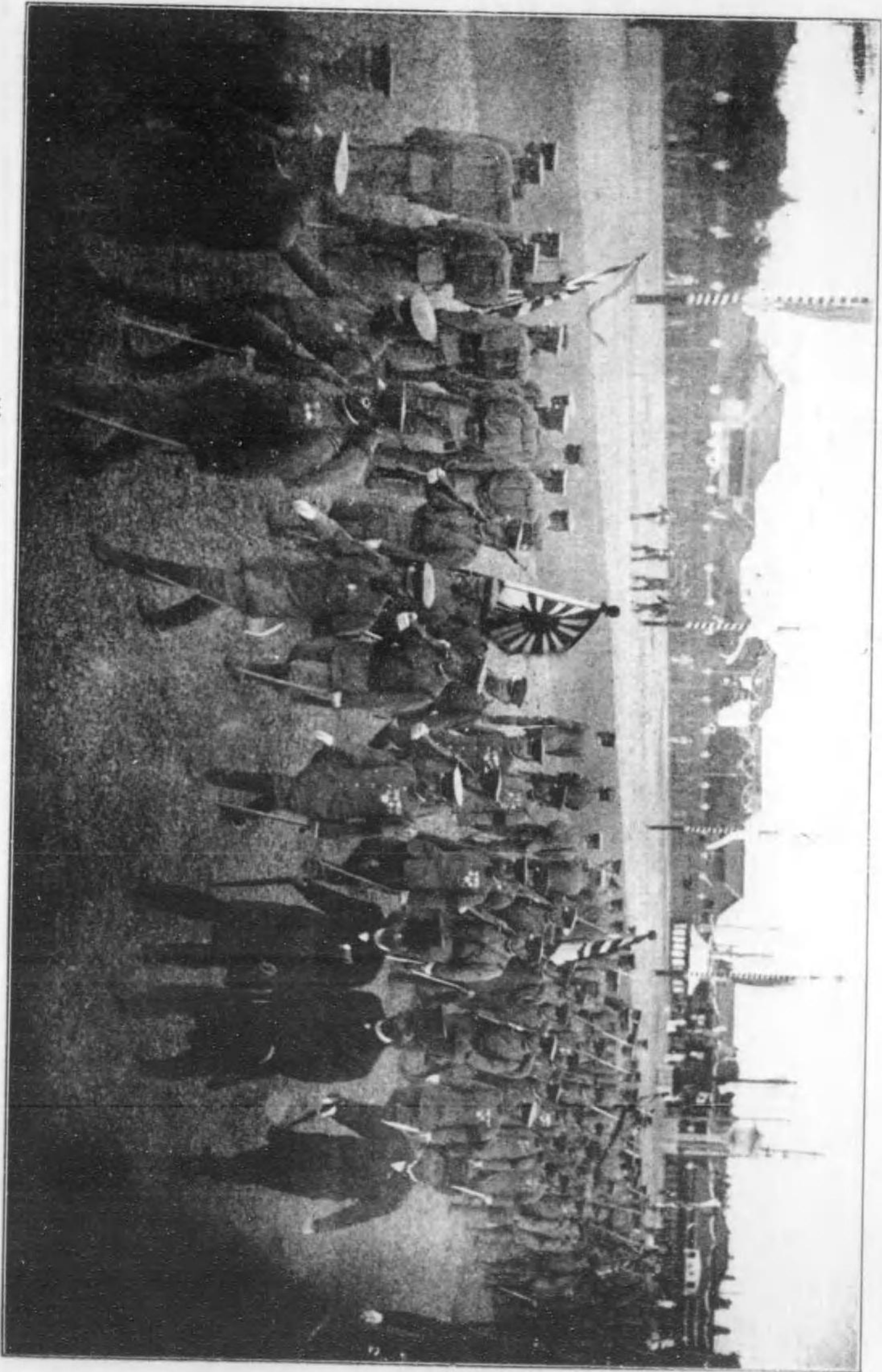
場 入 の 隊 表 代 軍 陸

めして列参を隊表代てし奉を旗軍は陸軍軍陸全るたき除を成衛の道沿間陸御殿場集
りな景光るす場入に間の時六りよ時五後午ち即五時三つ先に引發御は圖の此、可た



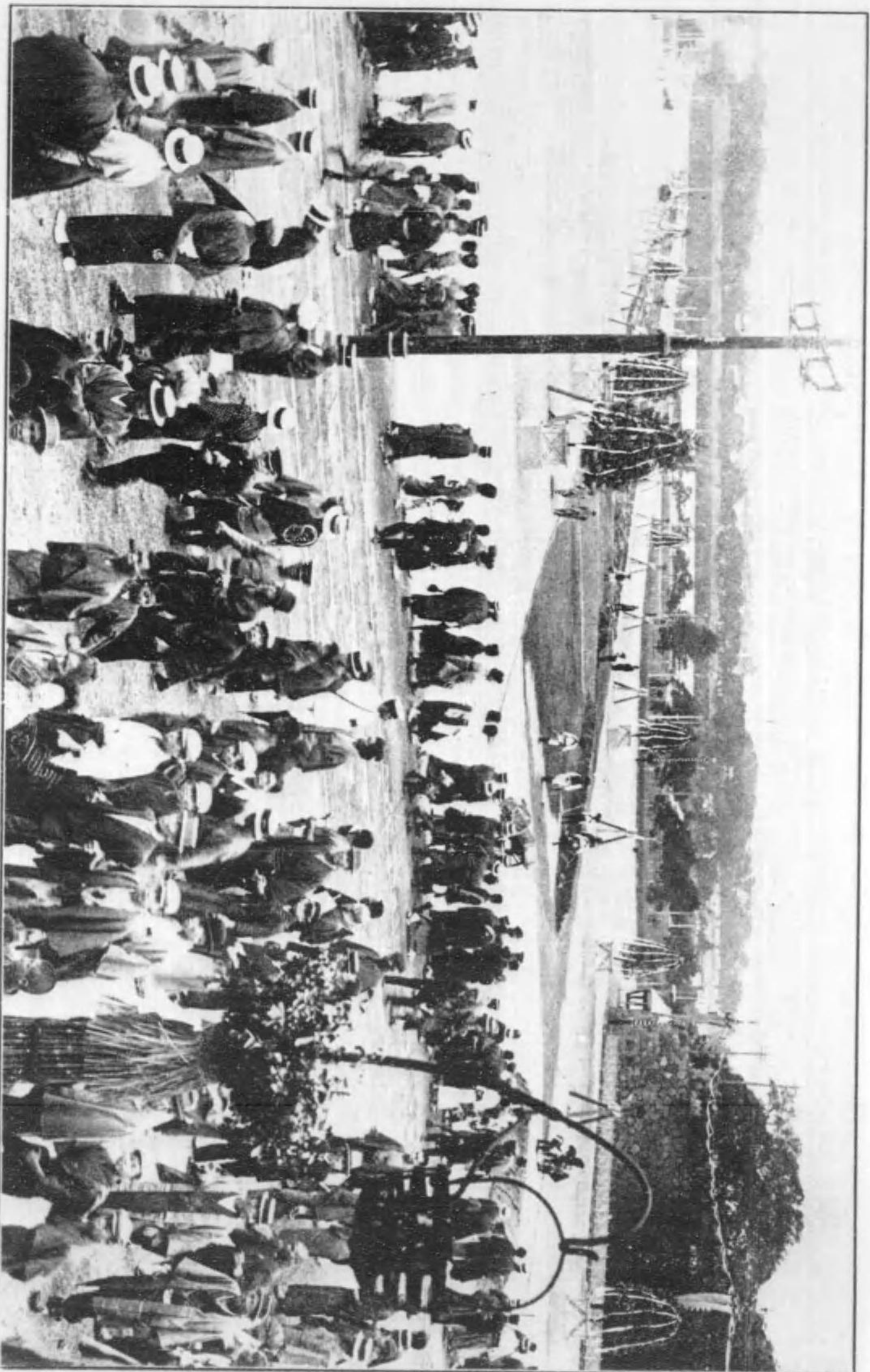
外 先 場 馬

もな来往や今れか布を砂め淨はに路通御の内苑御し止朱を轉運に氣は車電、時二後午
。る道に人く海氣の露森。る見軍を方の城皇に心一み歩を側左にひ互。すさんれらめ止



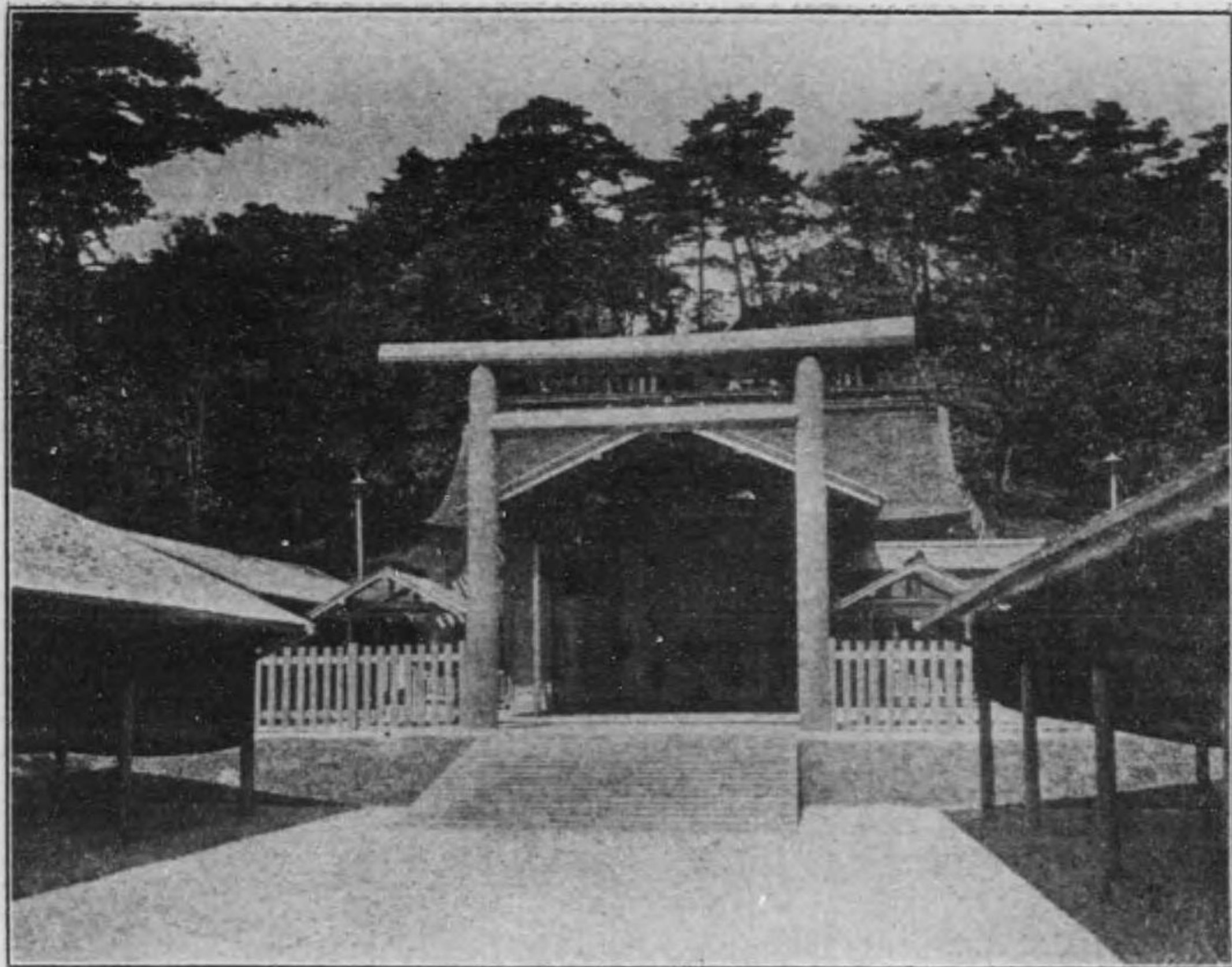
場 人 の 隊 表 代 軍 陸

めしは列巻を隊表代てじ本を旗軍は時軍軍陸全るたき除な成勝の送送開陸御殿場舞
りな景光るす場入に間の時ナリよ時五後午ち即軍時三つ先に引發御は圖の此、斗た

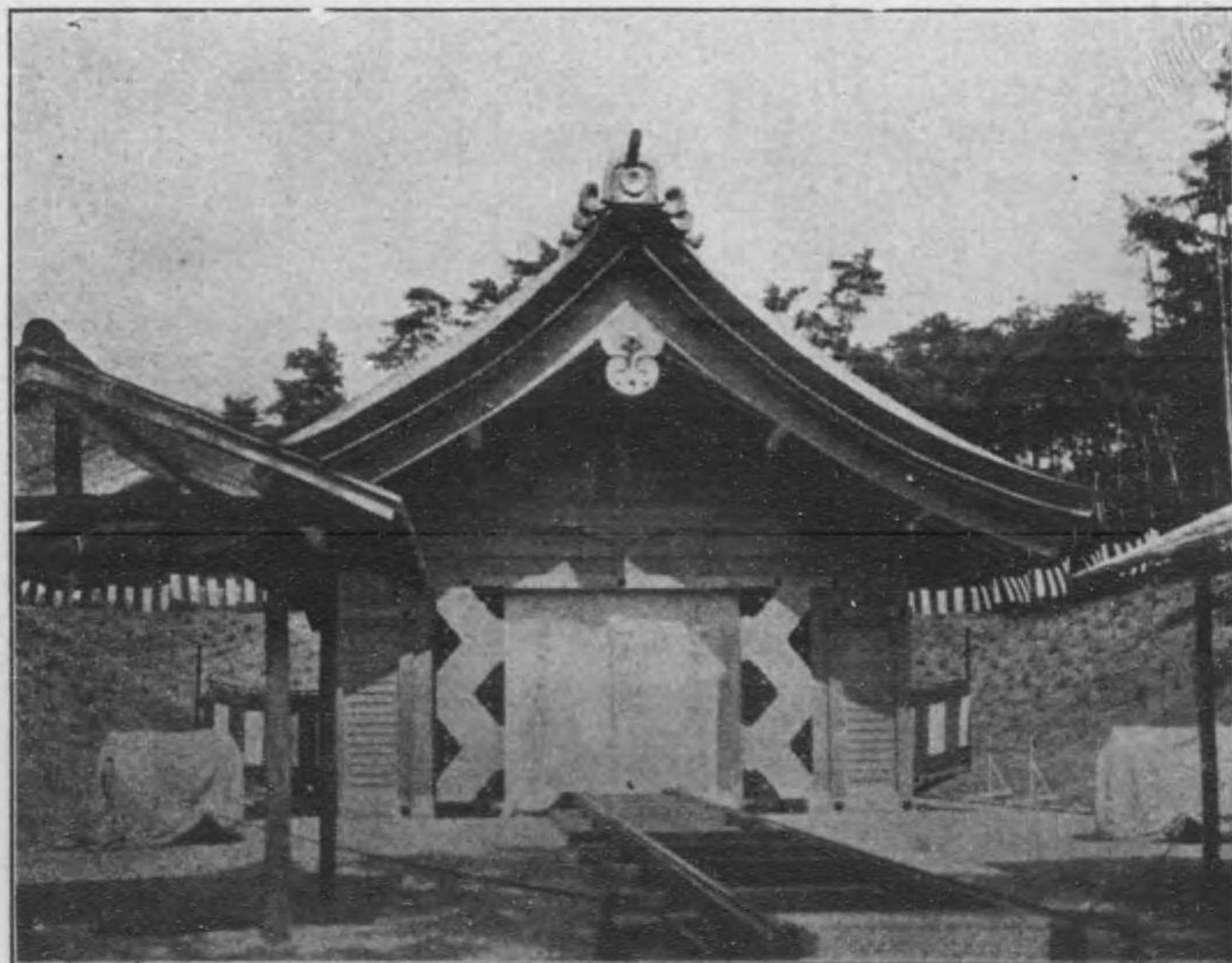


外 先 場 馬

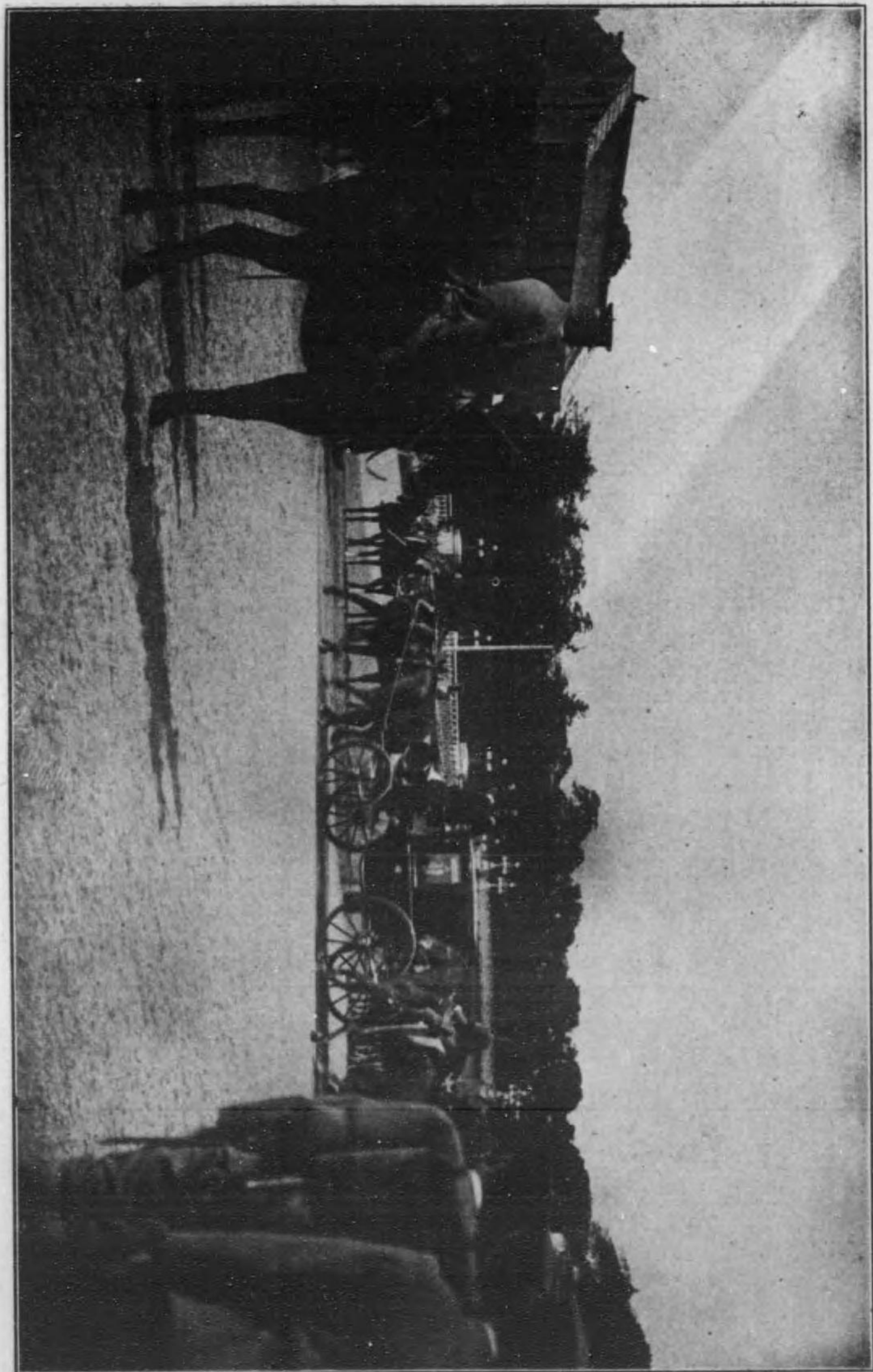
しな米往や全はか布な砂め淨ほに路通御の内死御し止米を轉運に軍は車電。時二後午
。る道に入く潮氣の嚴森。る見軍を方の城皇に心一み歩を御左にの互。すさんれらめ止



舍唄殿場祭所陵



屋須御所陵



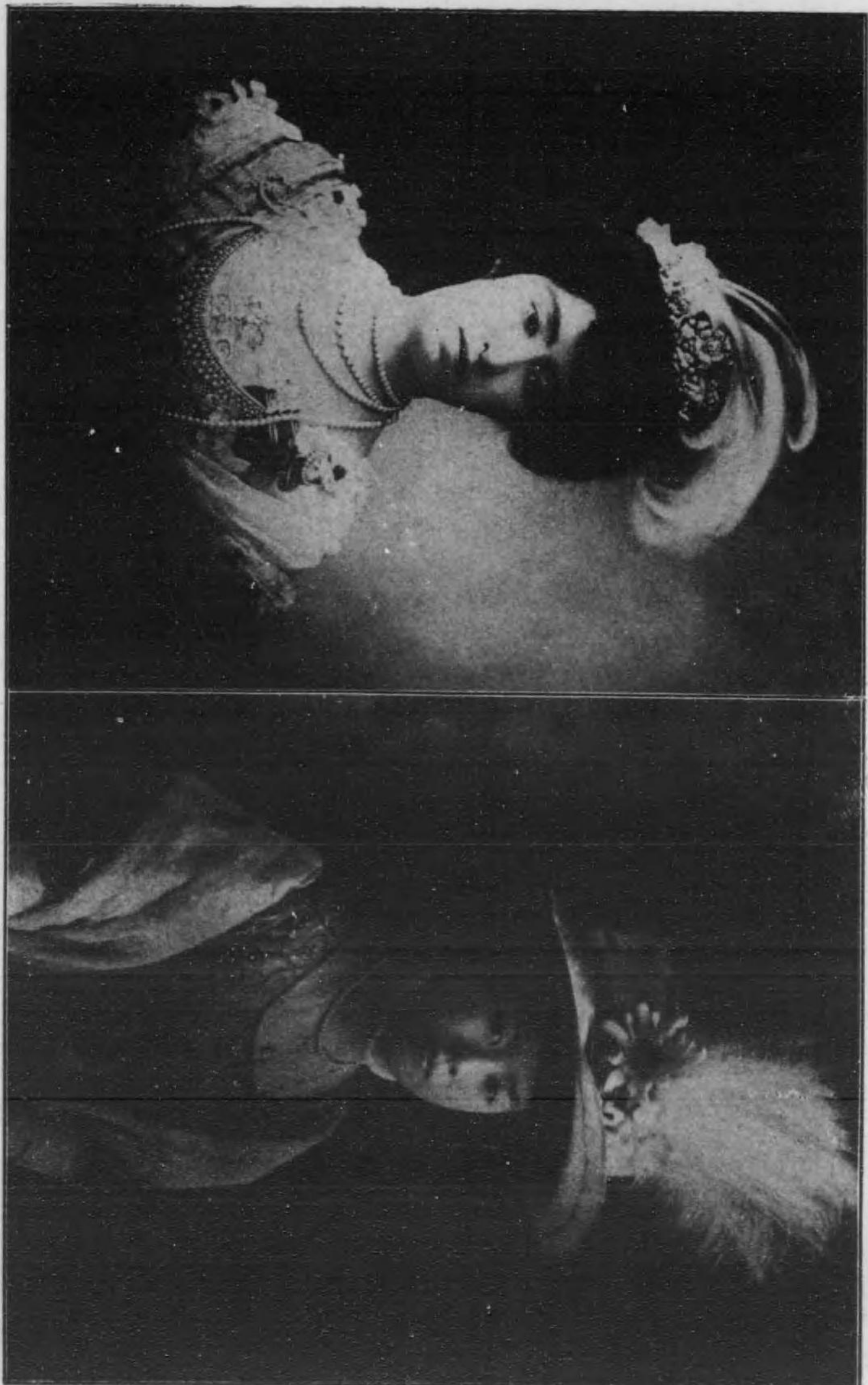
啓行山桃中陸后太皇
三時十同送親御上陸后皇。るらせ在啓行～陸山桃見伏門出御時九前午日三十月十。
るらせ在御着～邸用御にち直。車着御岡靜くなり滞。十時四後午。車御分七。

下殿子利妃同王親愛真宮見伏成總使喪大



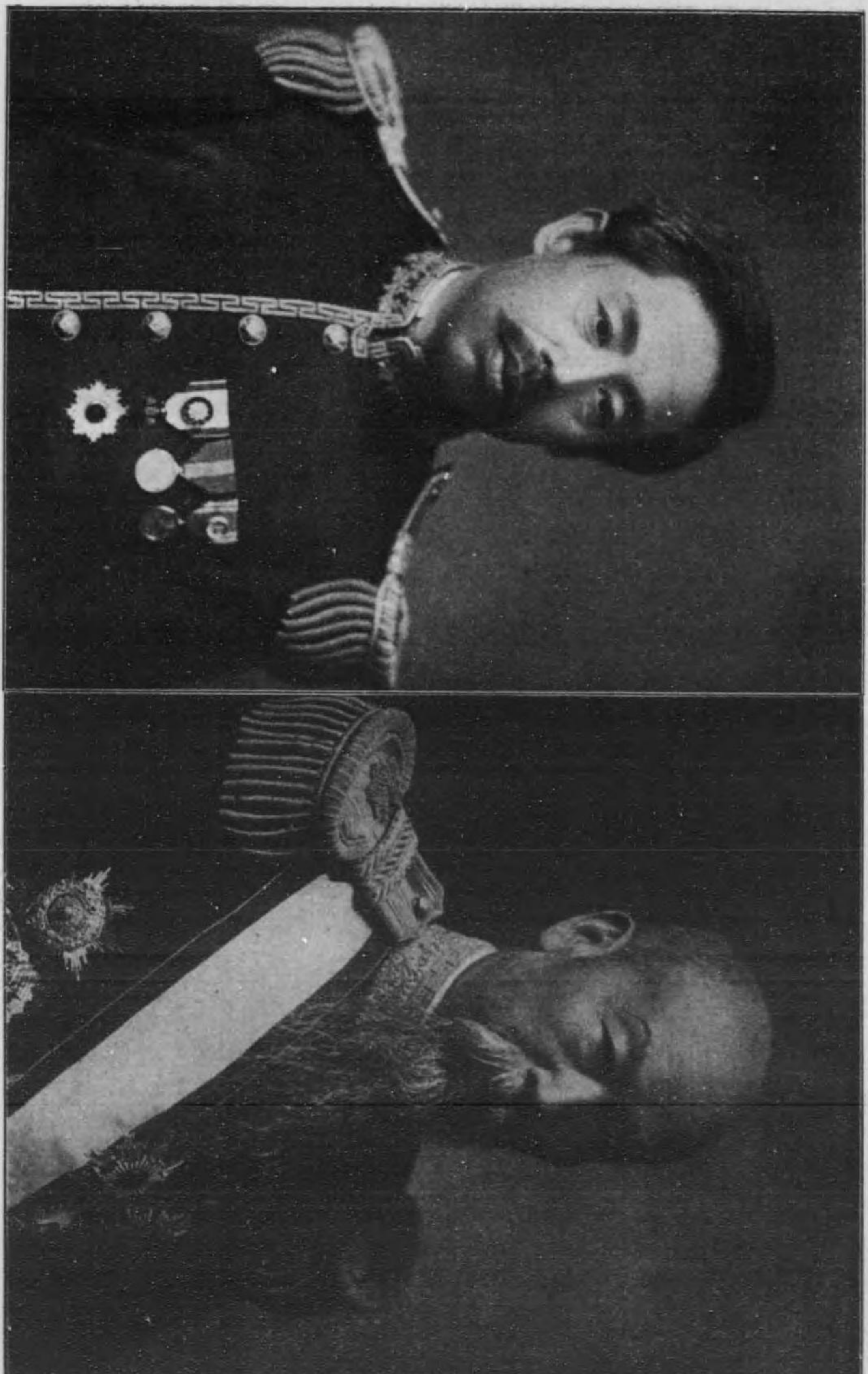
下殿子惠智妃同王親仁載宮院閑代名御皇天喪大御





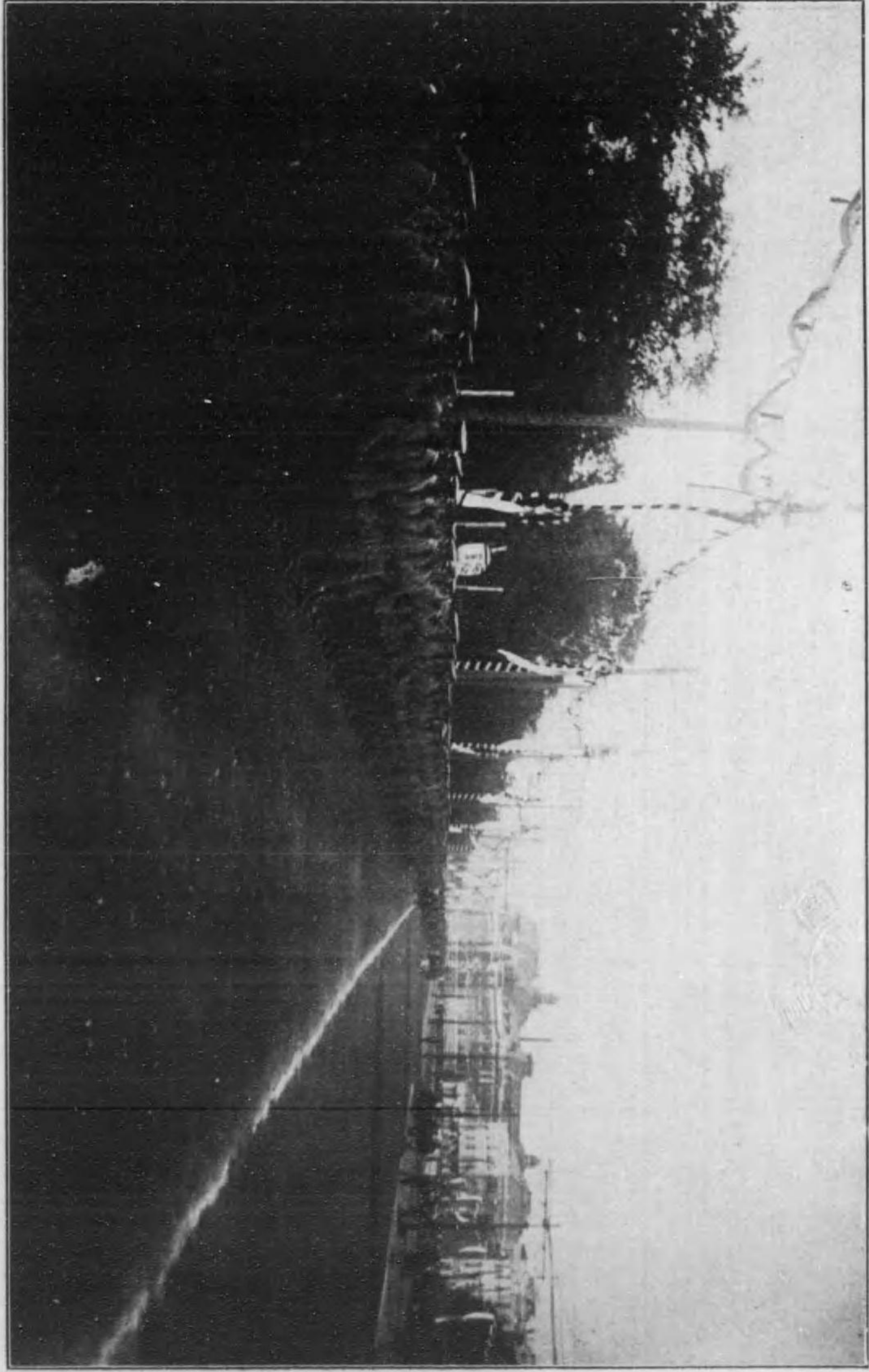
代名御山桃宮后太皇
下殿子周妃王親仁依

代名御山青后皇太皇
下殿王親内子昌妃王久恒

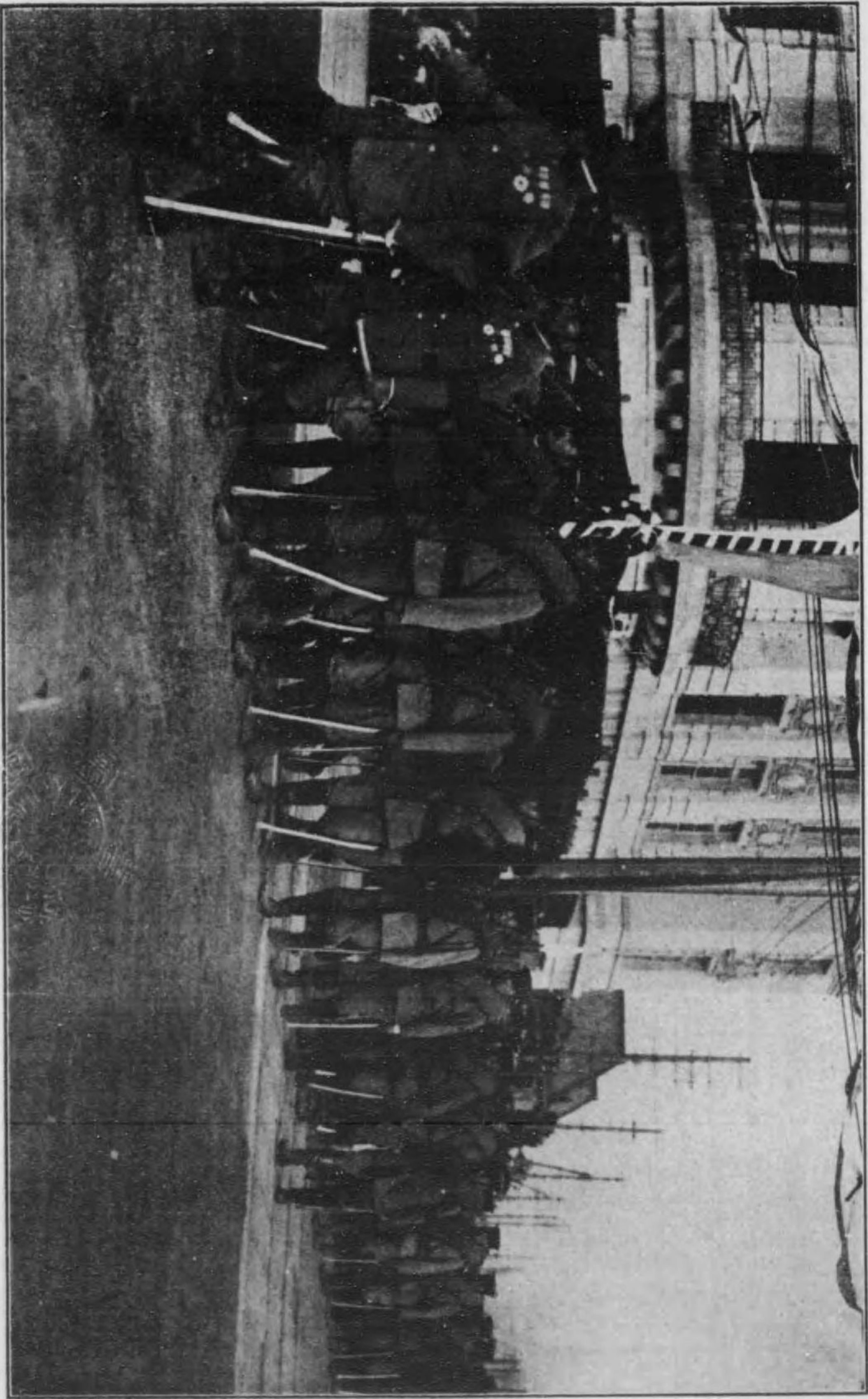


代總族親御皇天治明
公 弘 基 條 二 爵

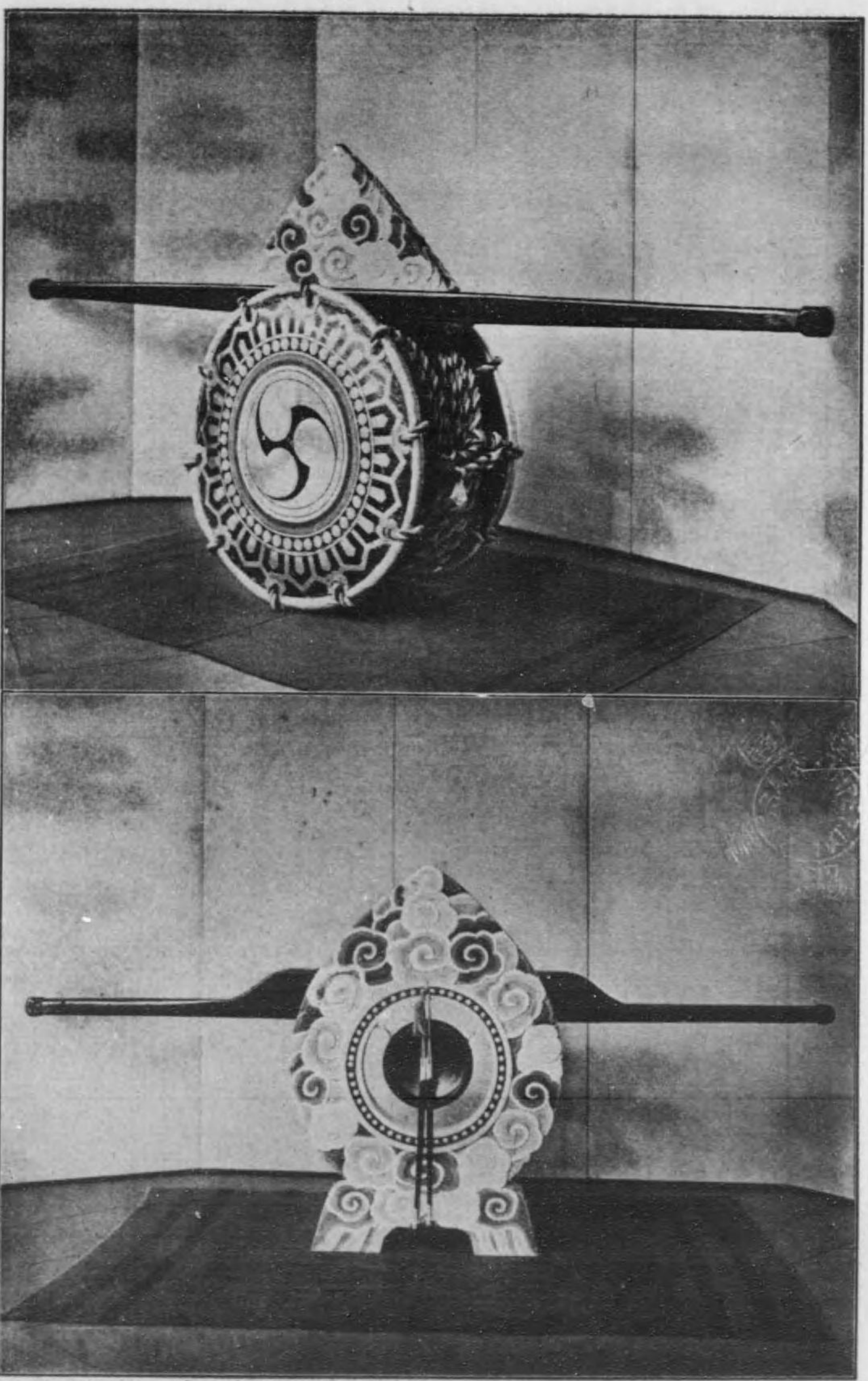
裁總副使襄爵大
伯 秋 千 邊 渡 爵



日比谷公園前ノ陸軍塔列隊

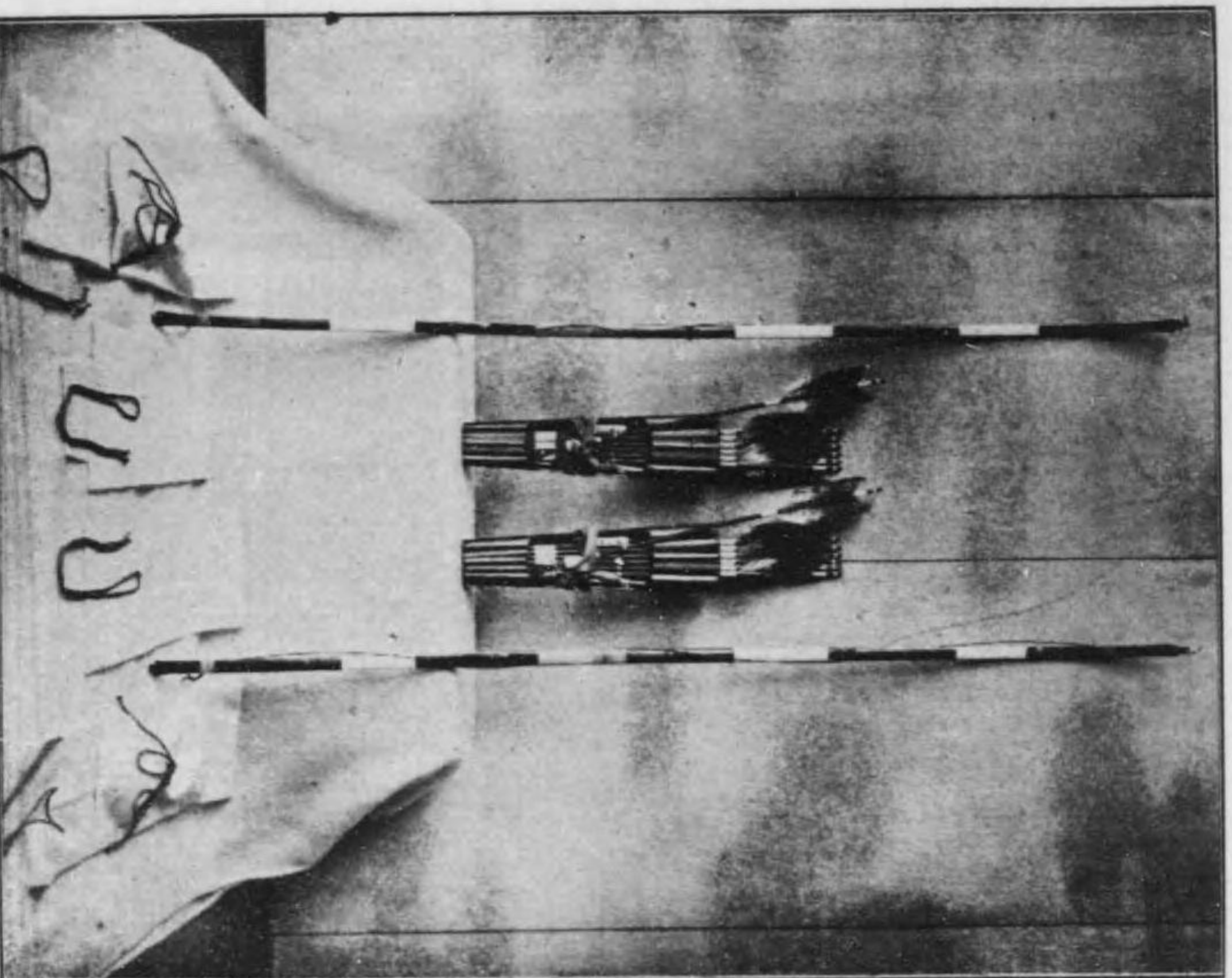


第一師團塔列隊愛國生命保險會前通過

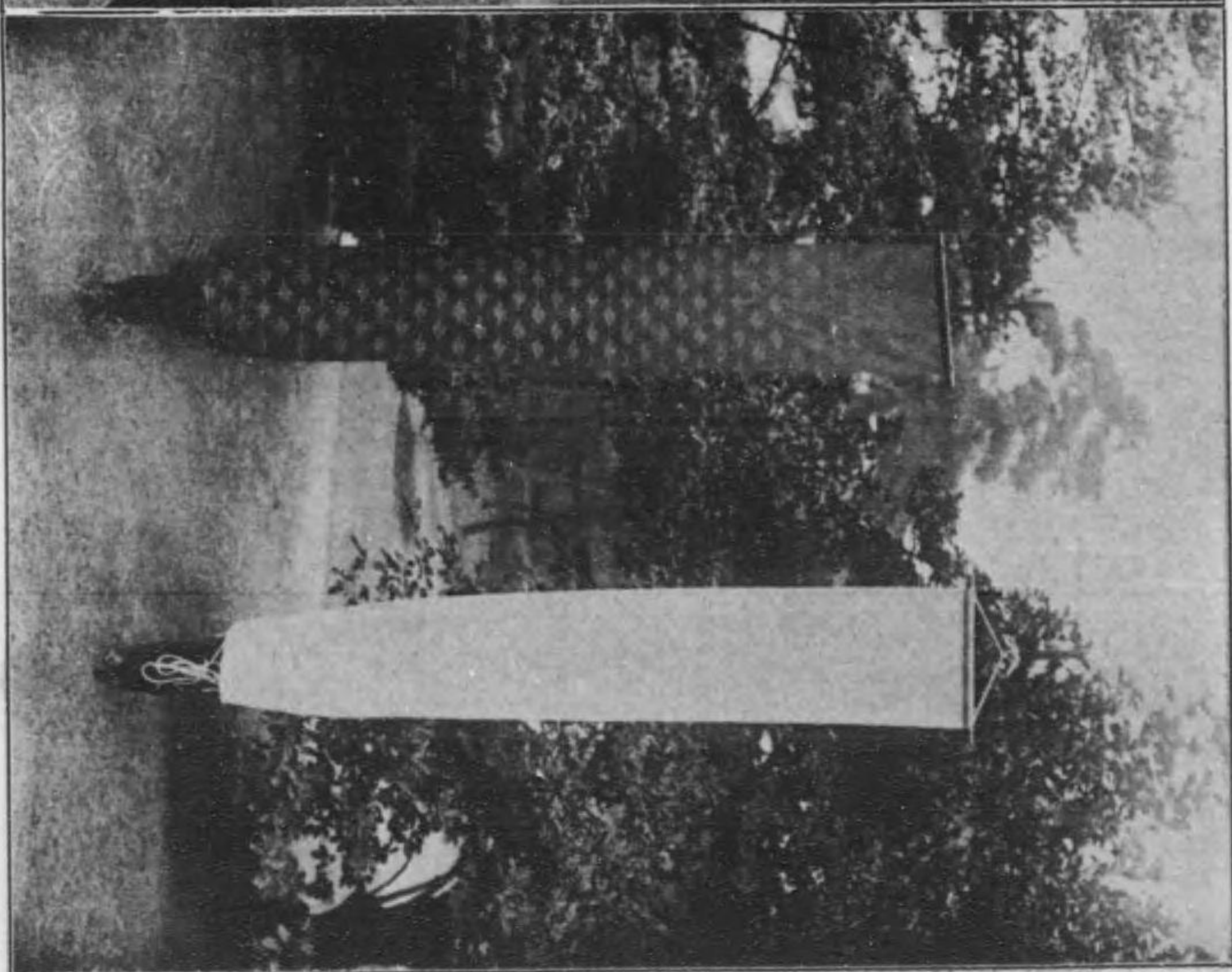


鼓

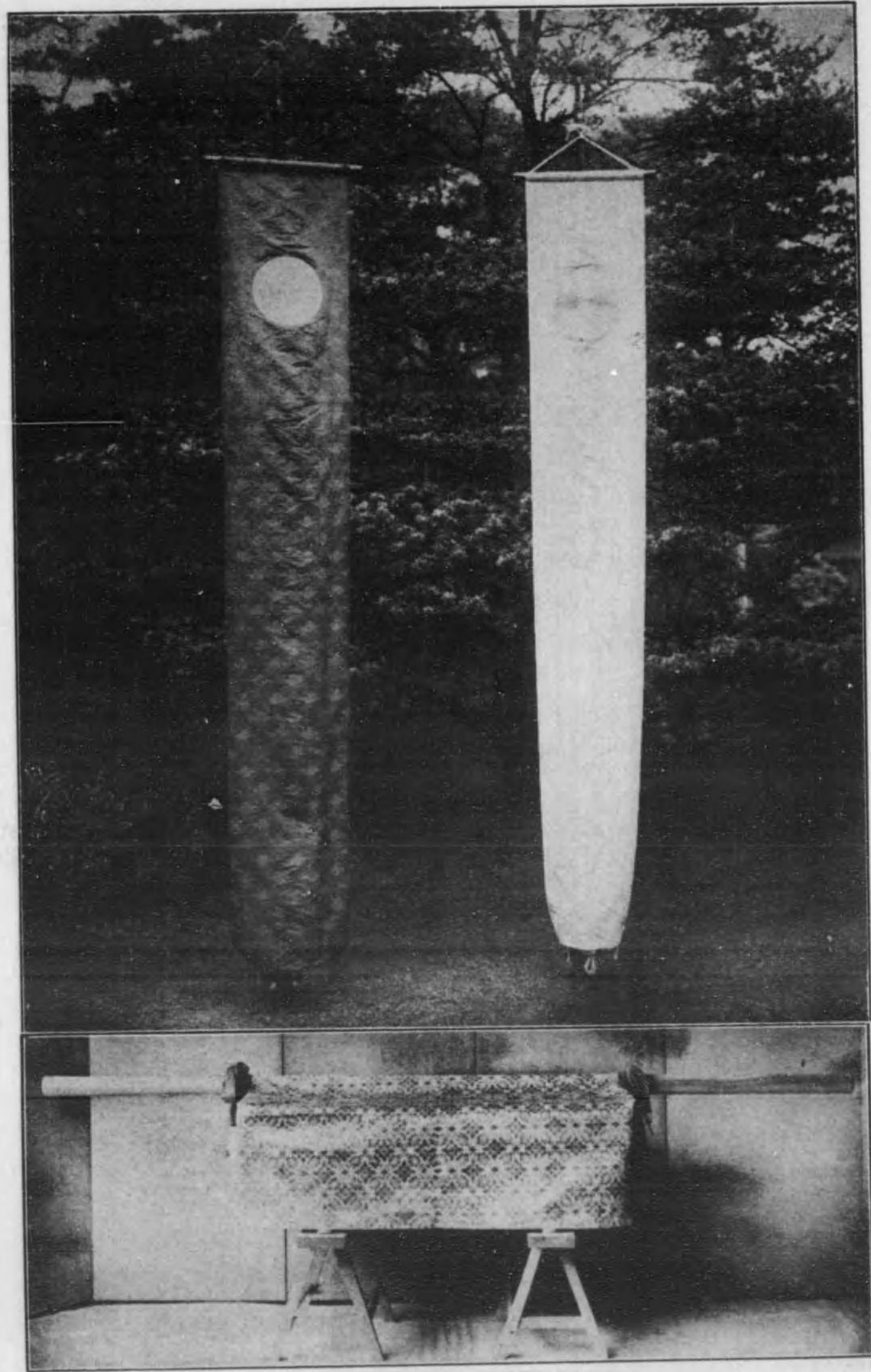
鉦



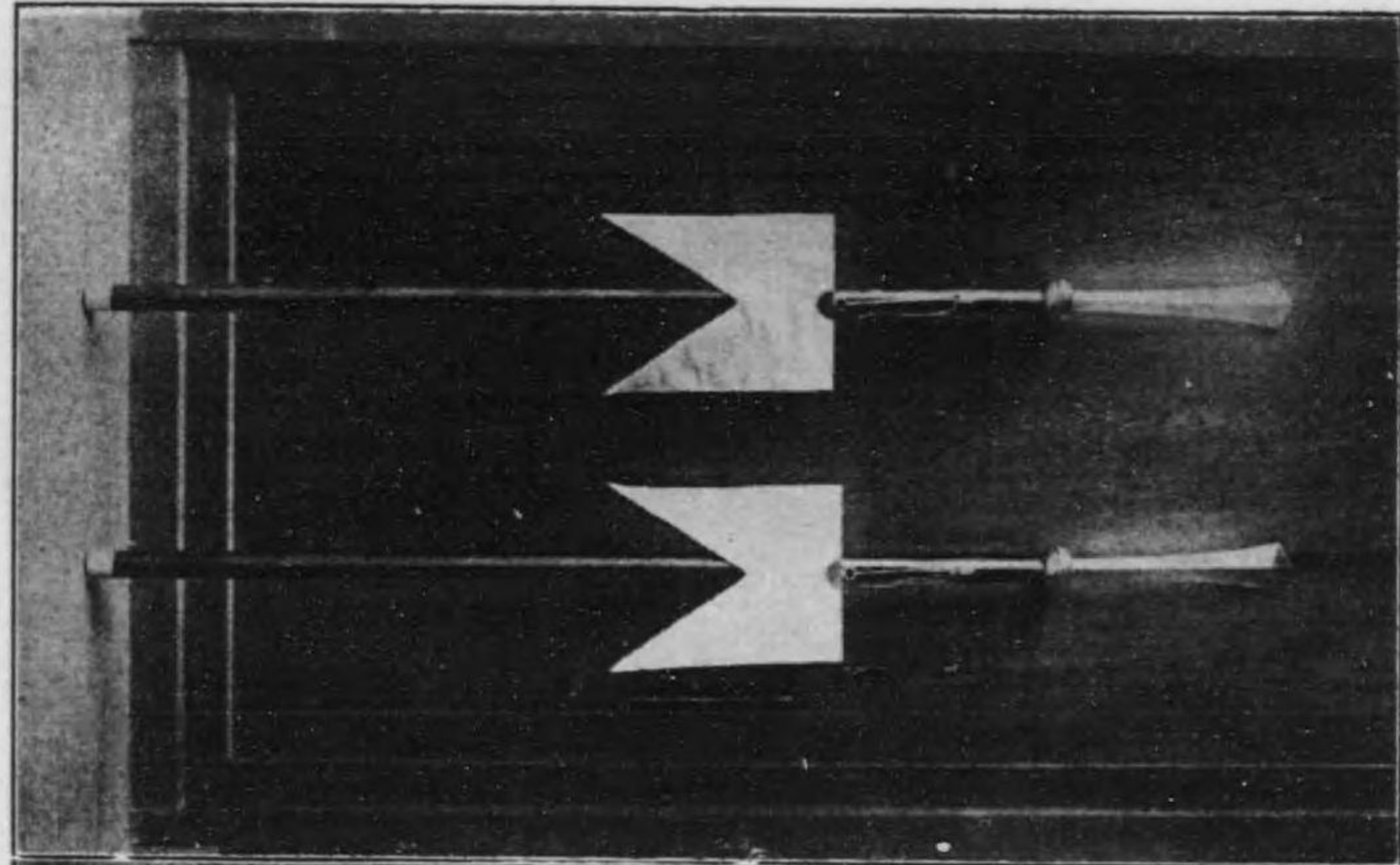
弓 胡



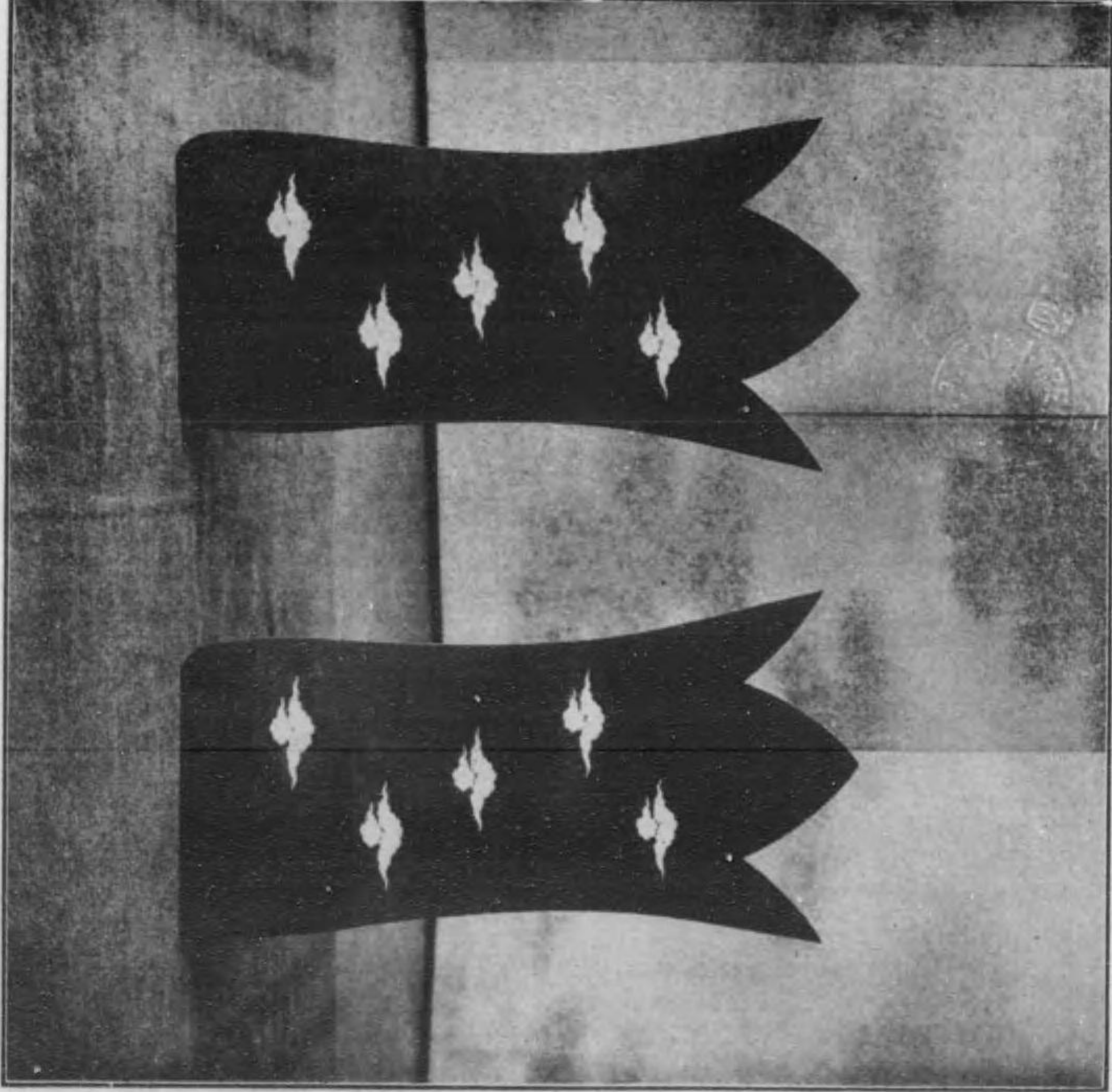
旛 白 旛 黄



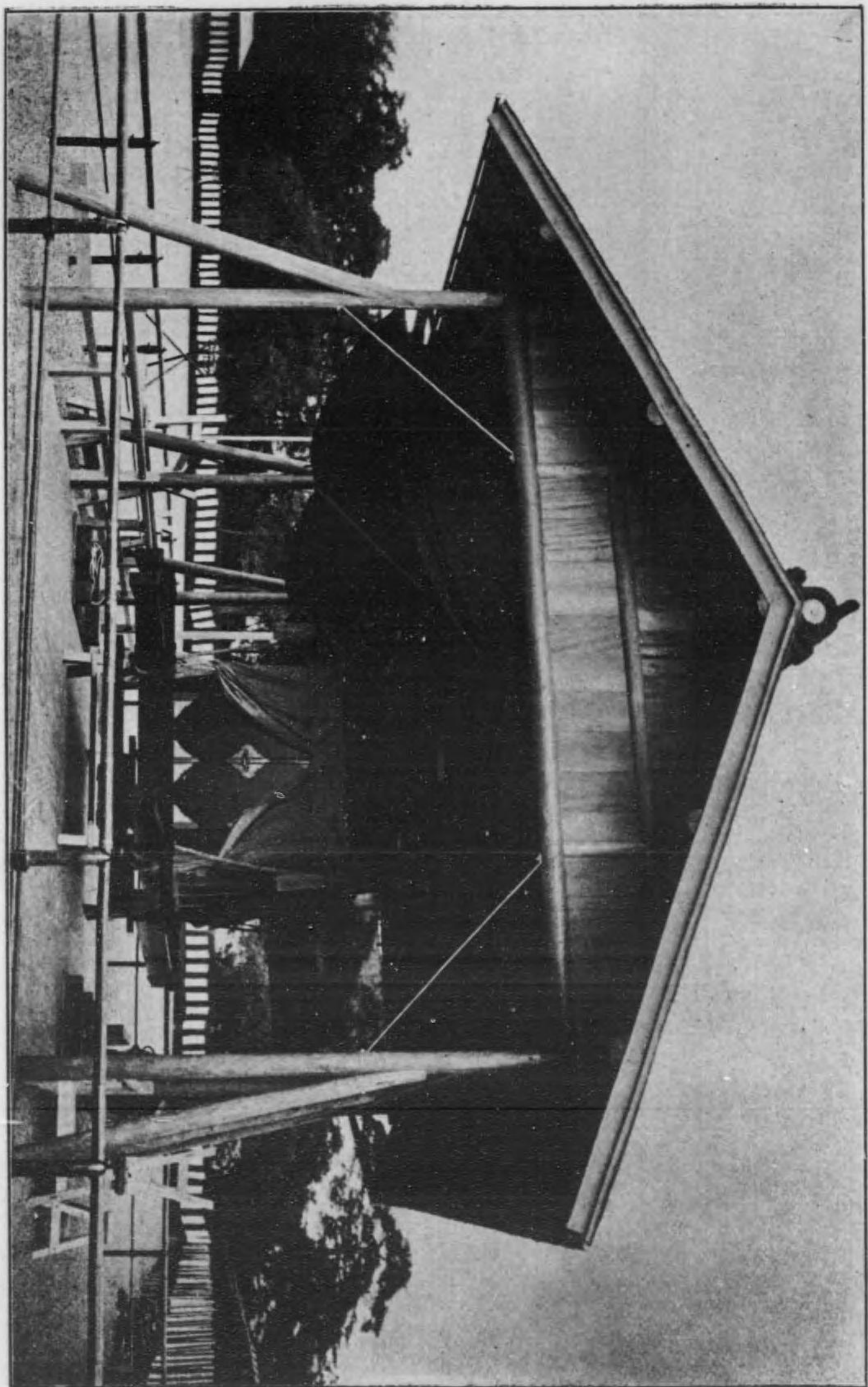
旛 月 像 御 箭 旛 像 日



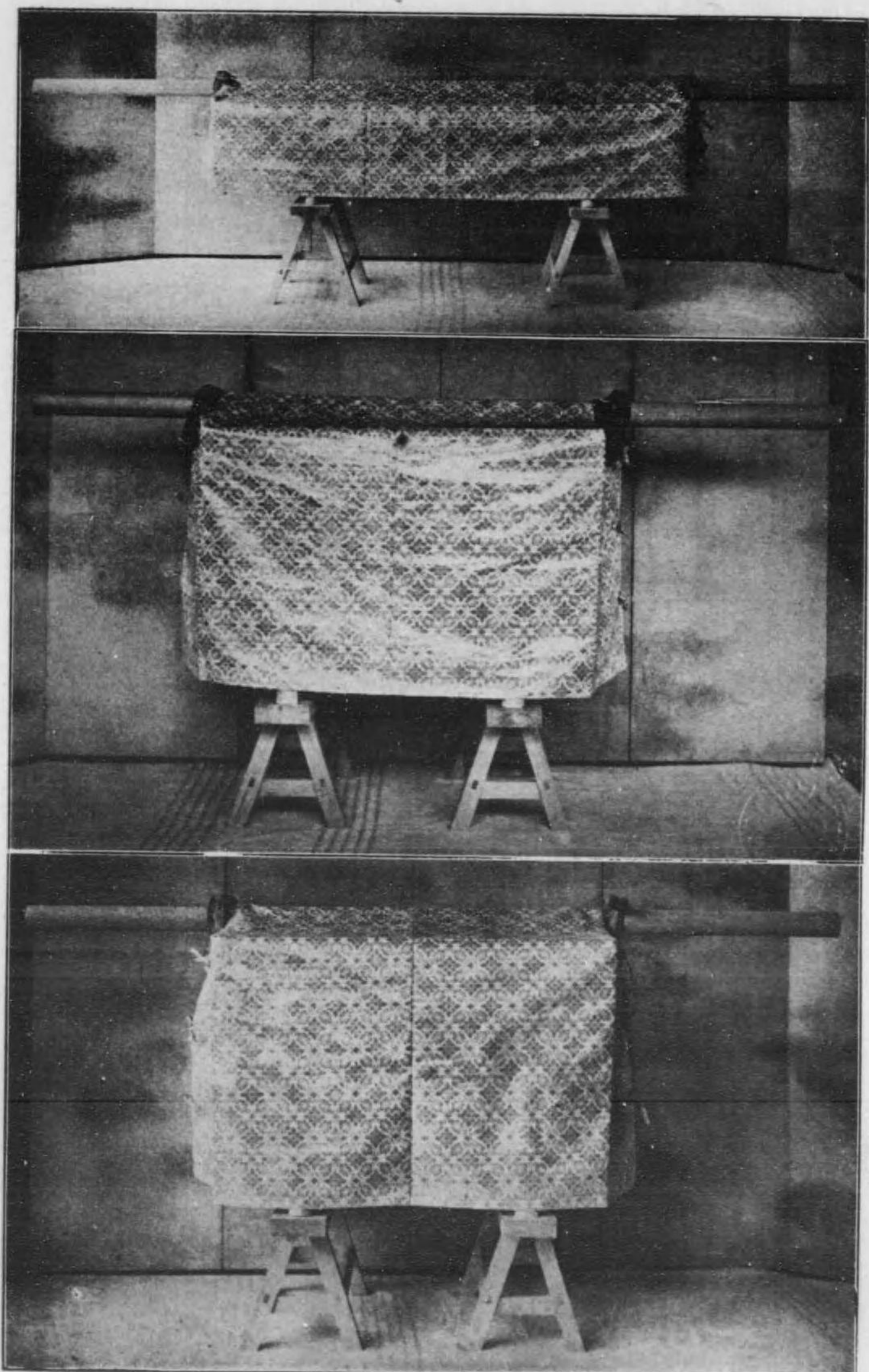
柁



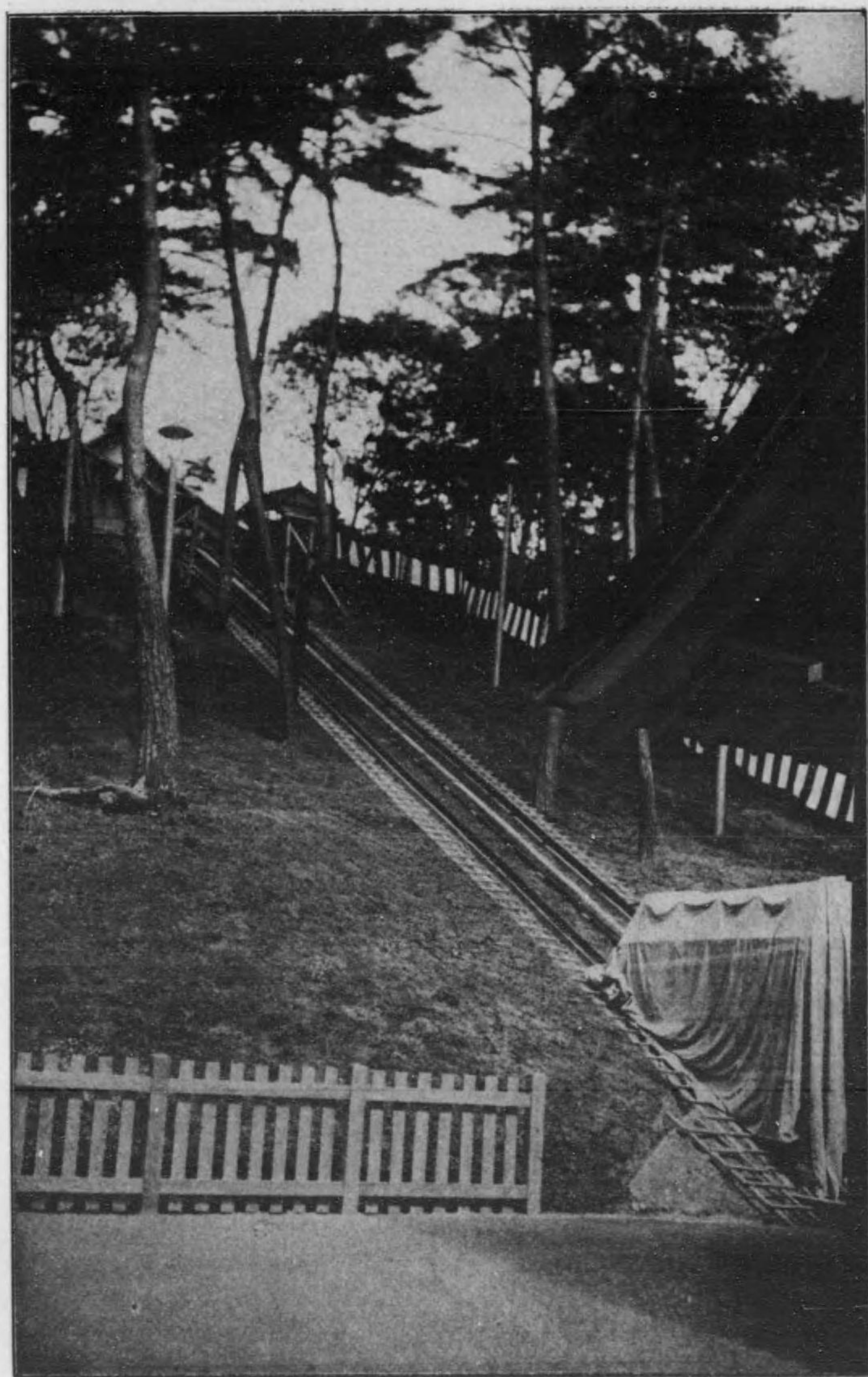
楯



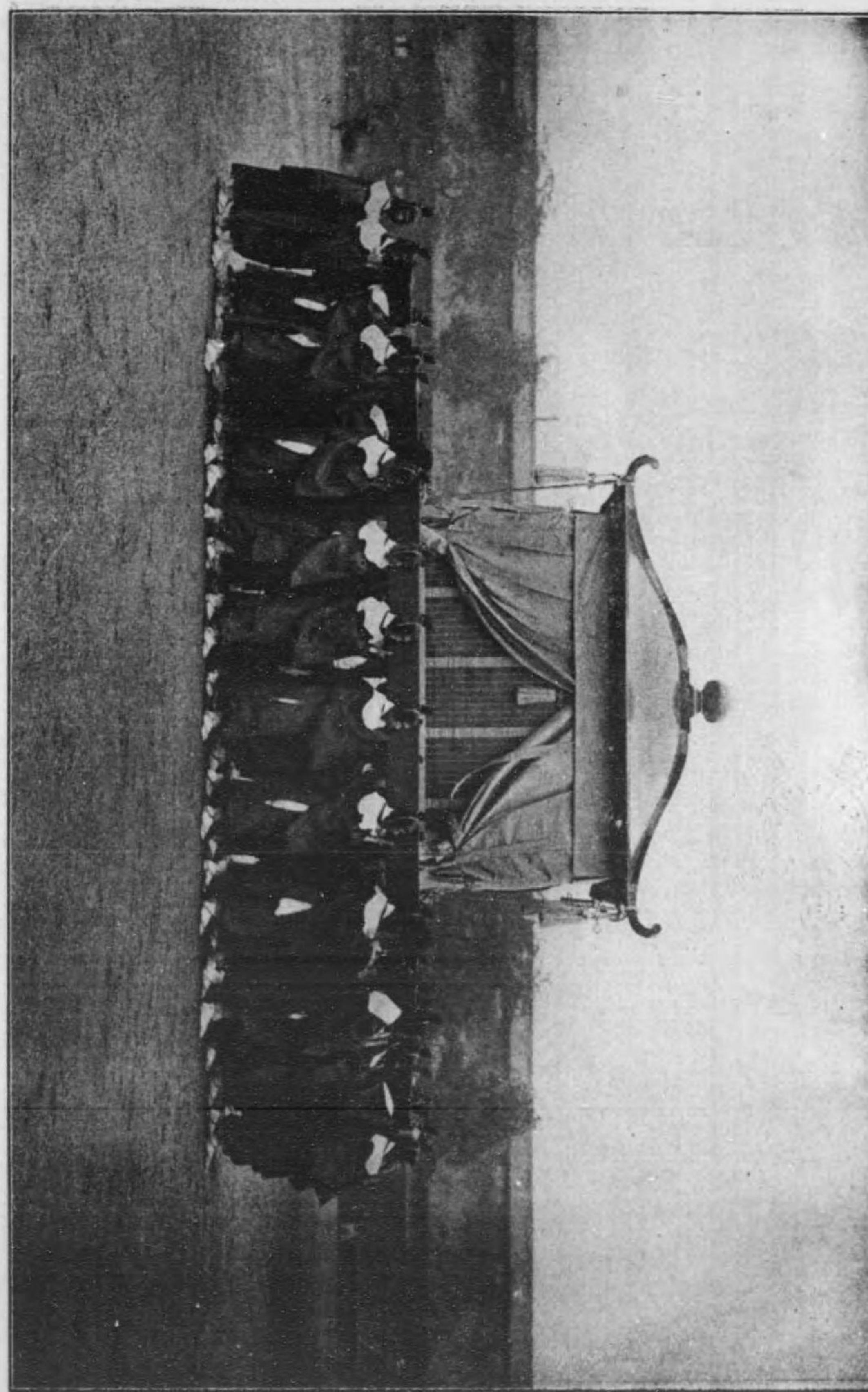
葦 葦 葦



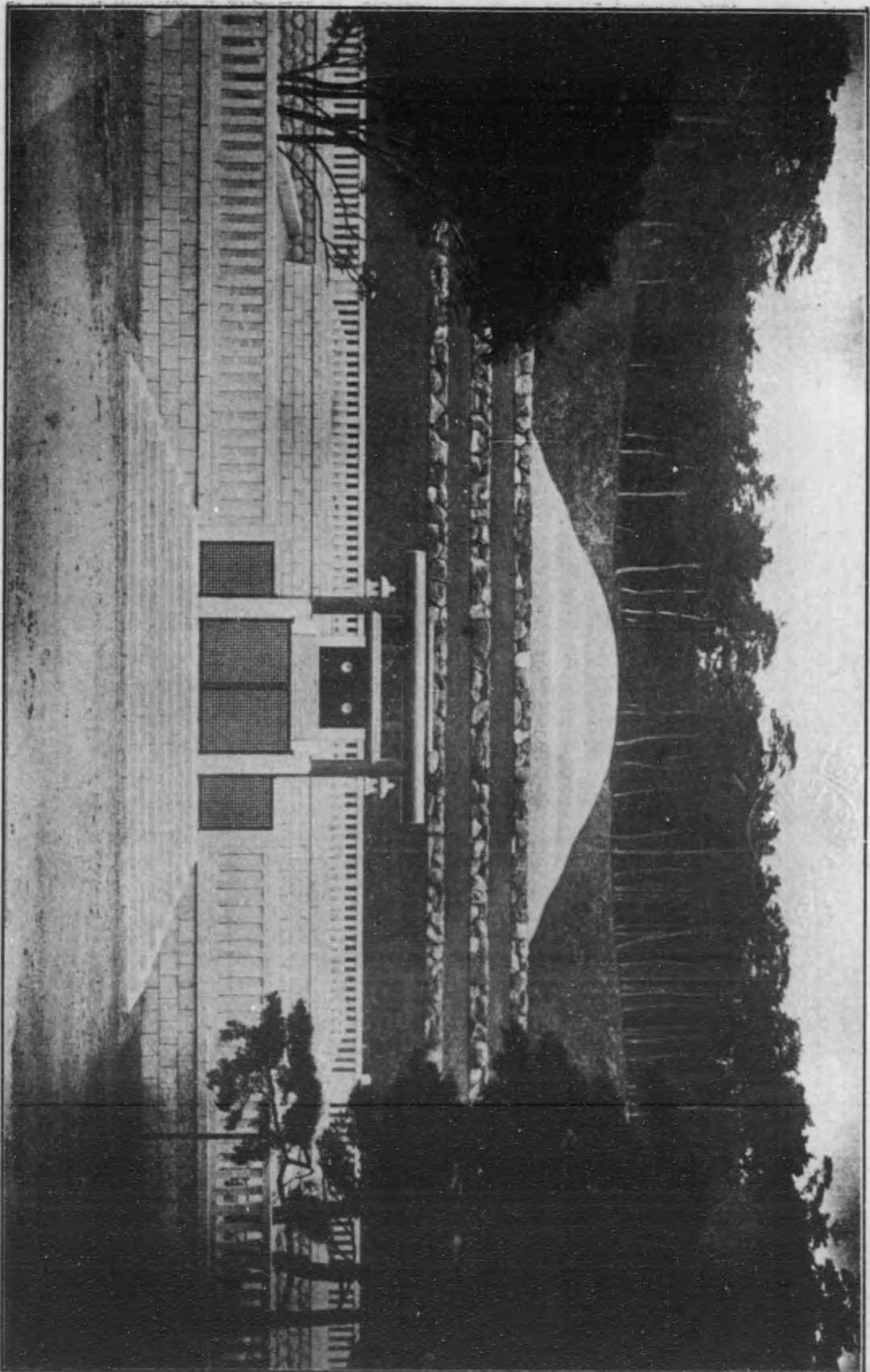
御御
弓饌幣
櫃櫃櫃



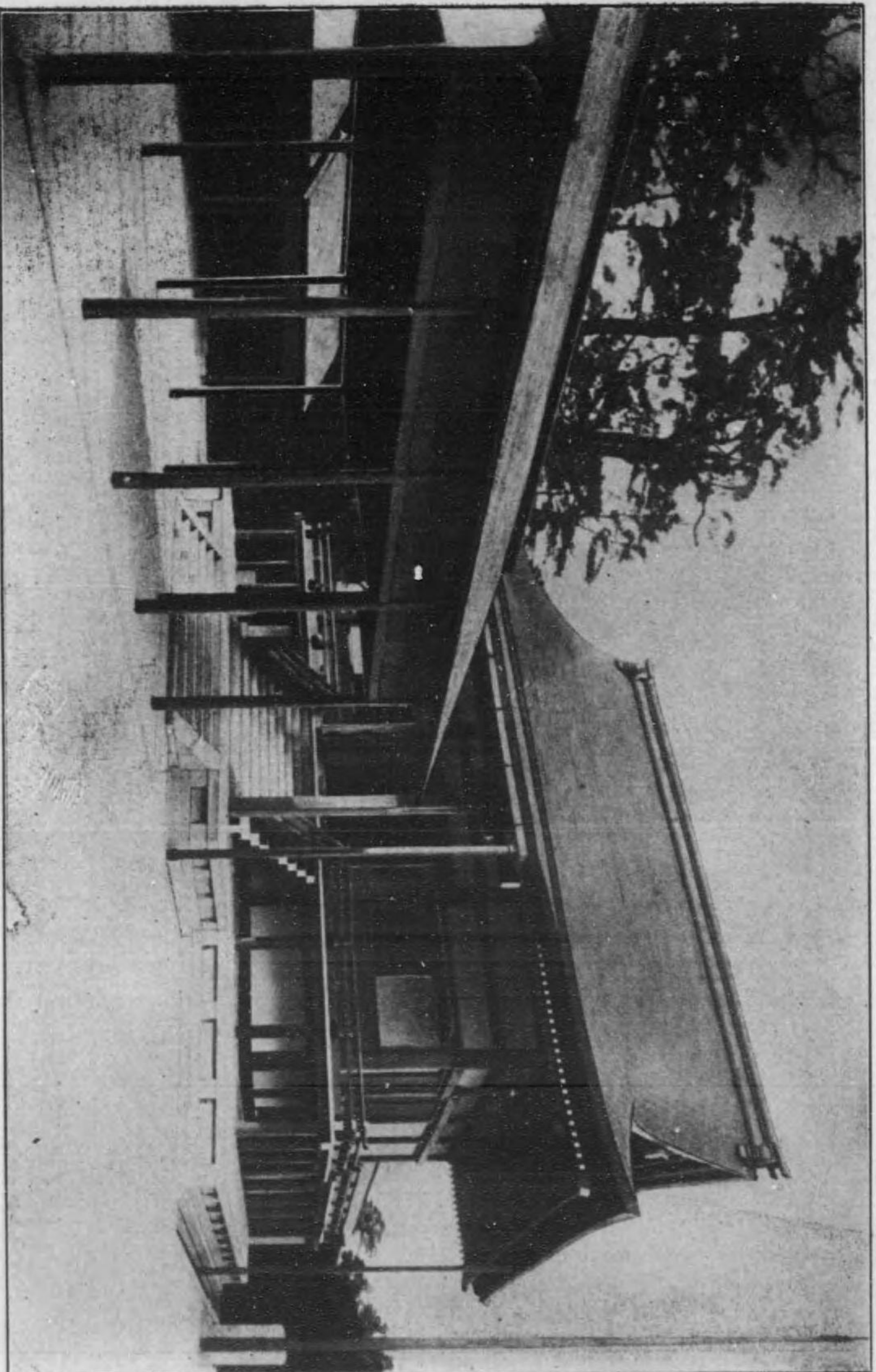
路順御ル至ニ屋須御リヨ殿場葬山桃



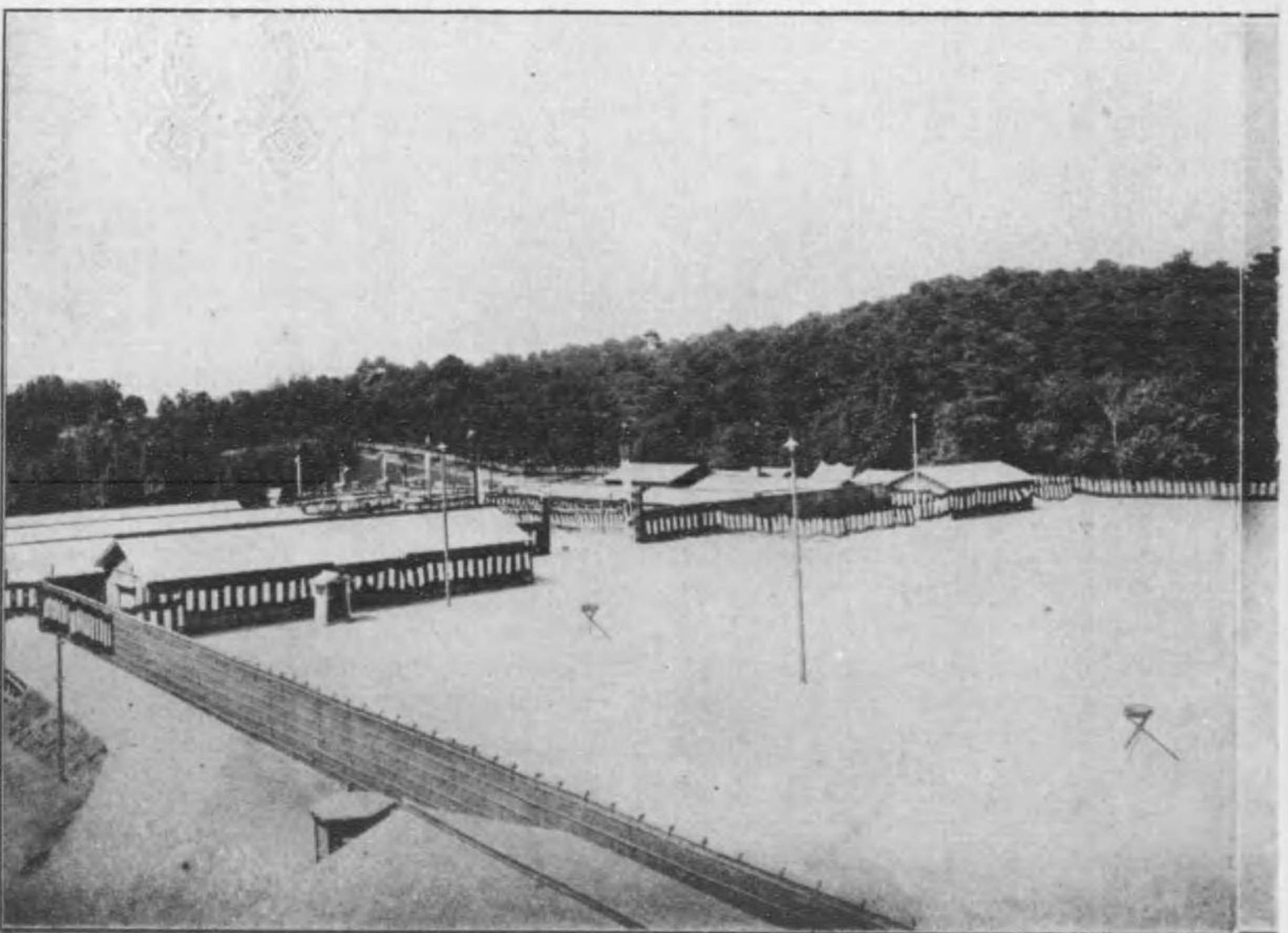
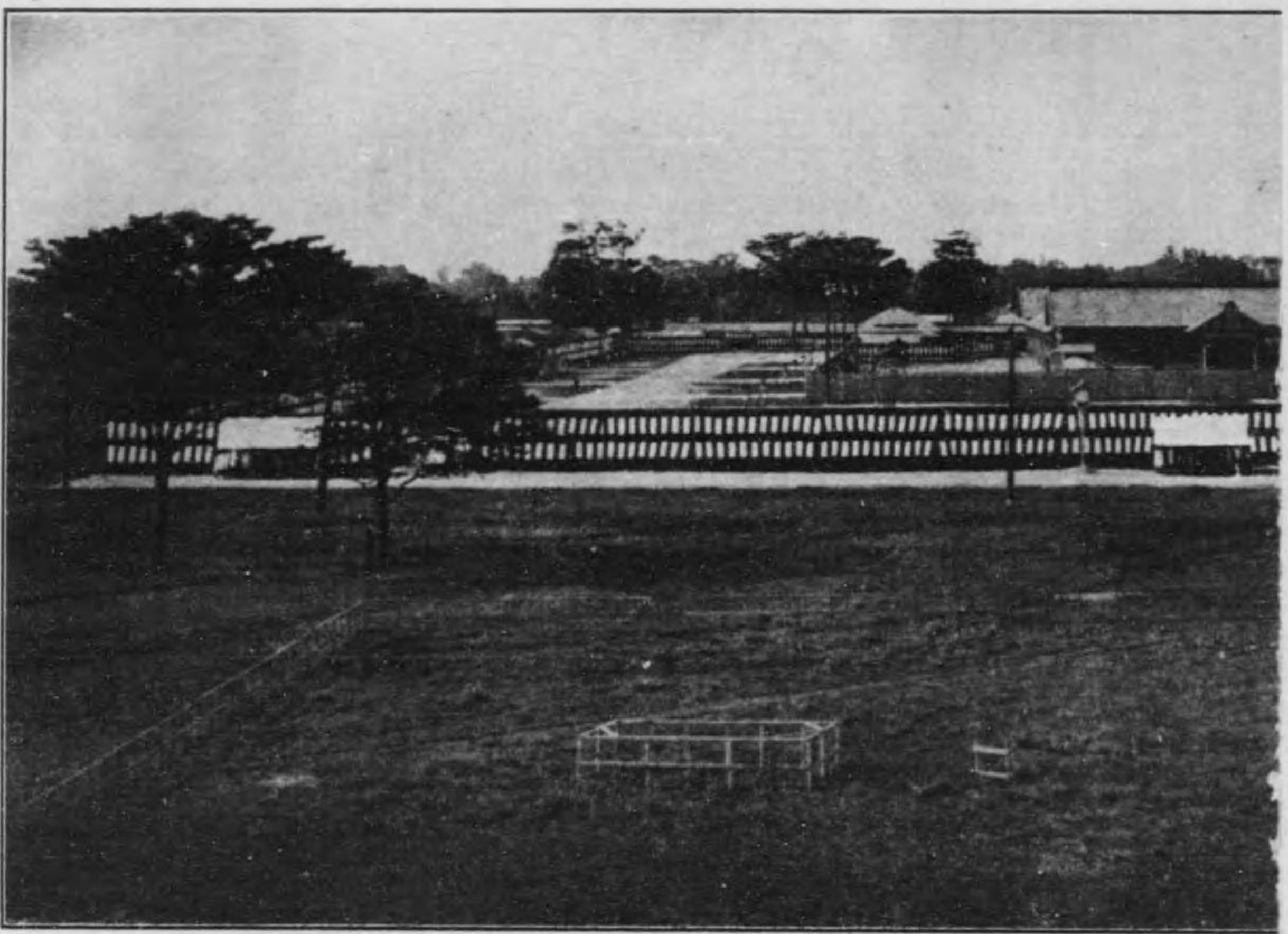
葦華葱ルタシ昇奉ノ丁興



陵御山桃ルセ工竣

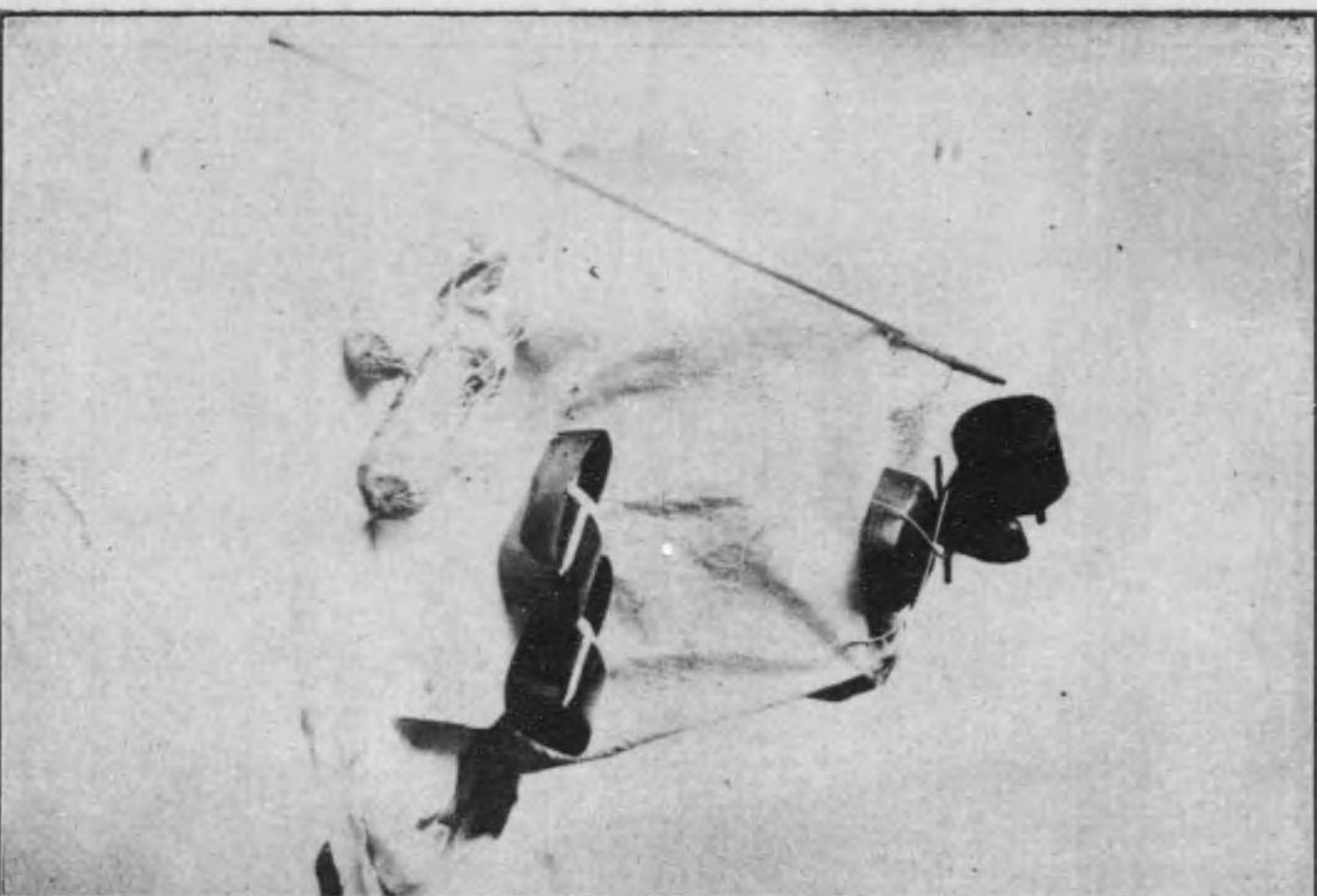


殿靈皇

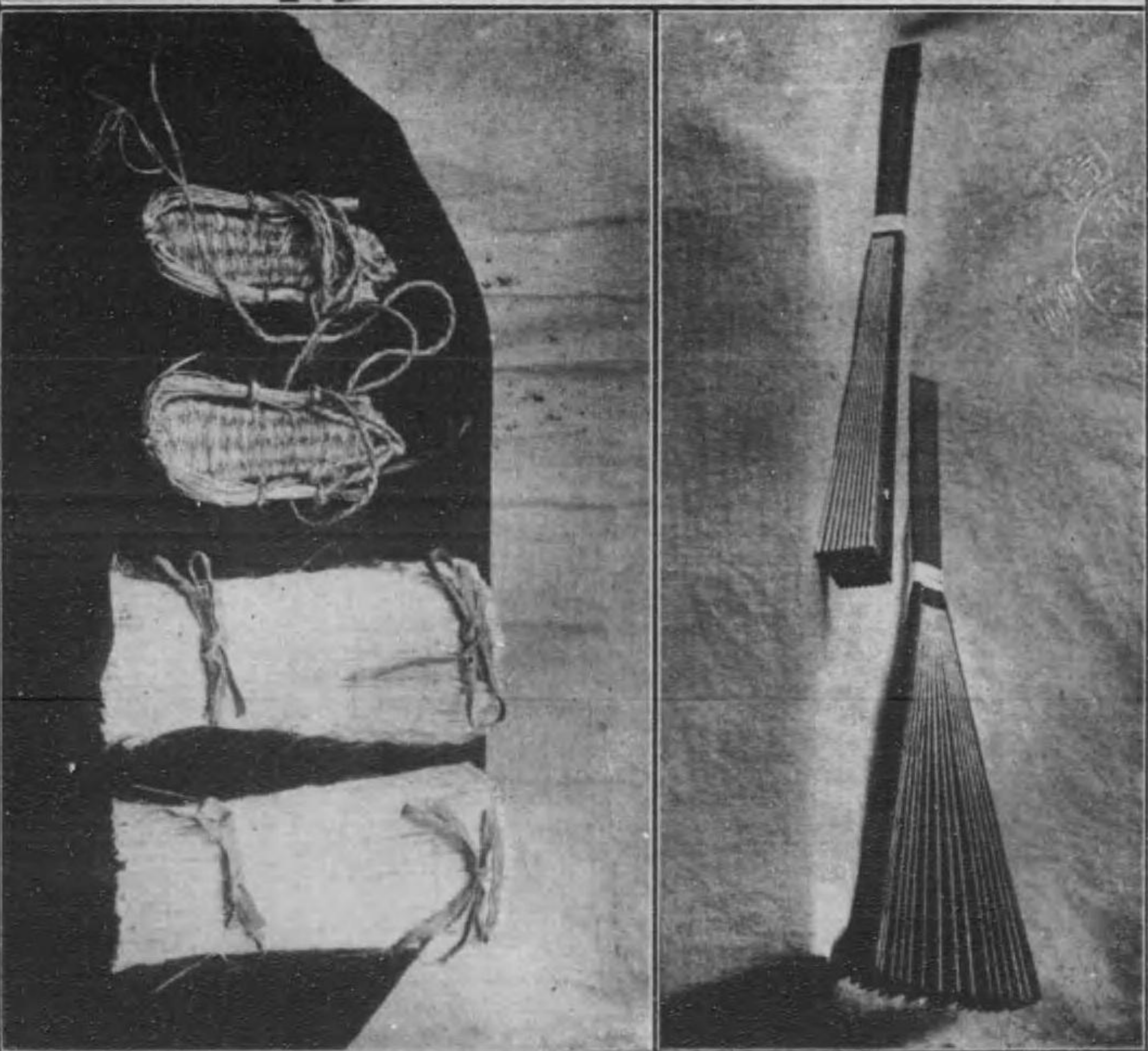


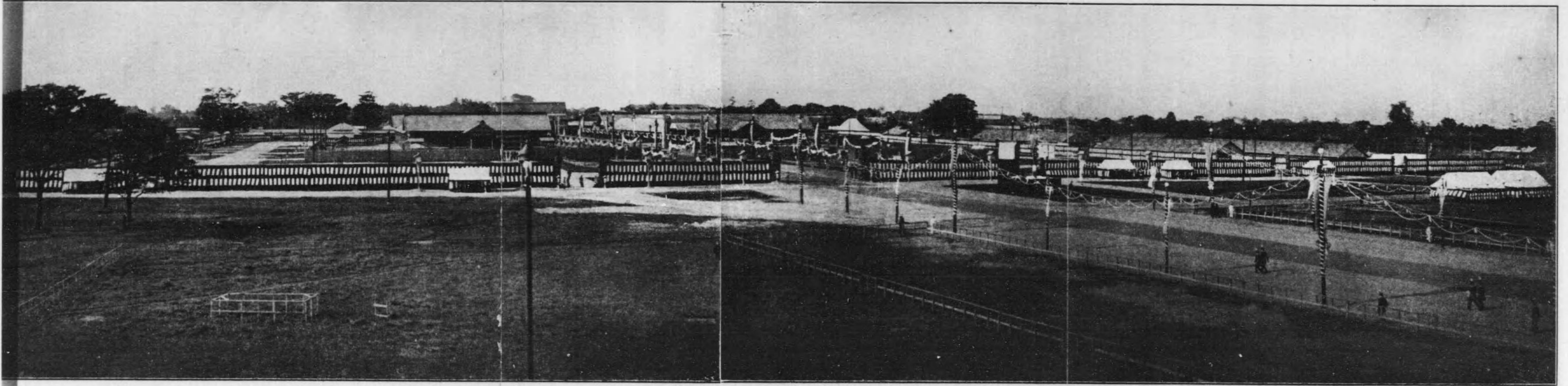
景

品用御宮裁總使喪大

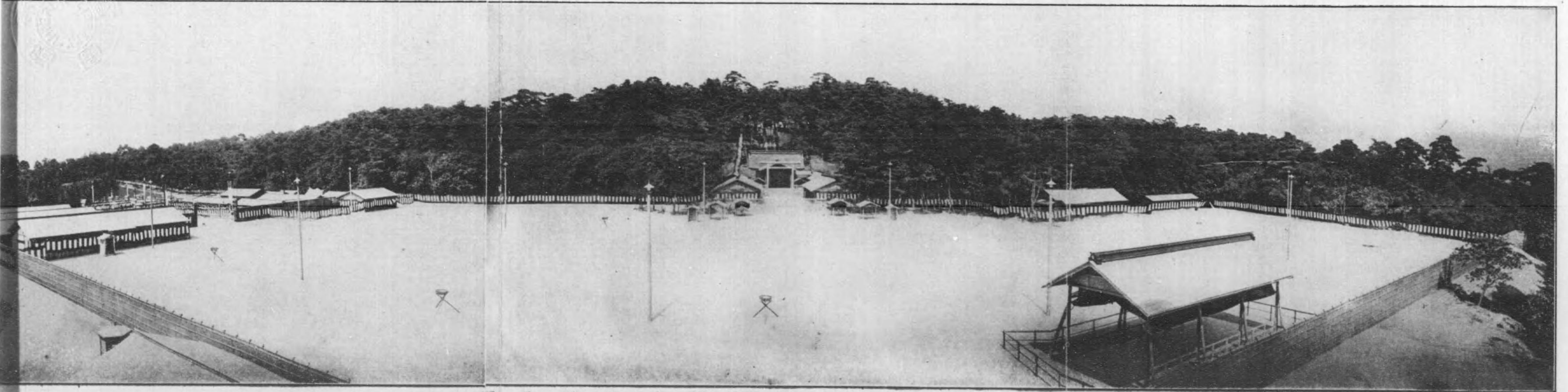


用官長官祭女

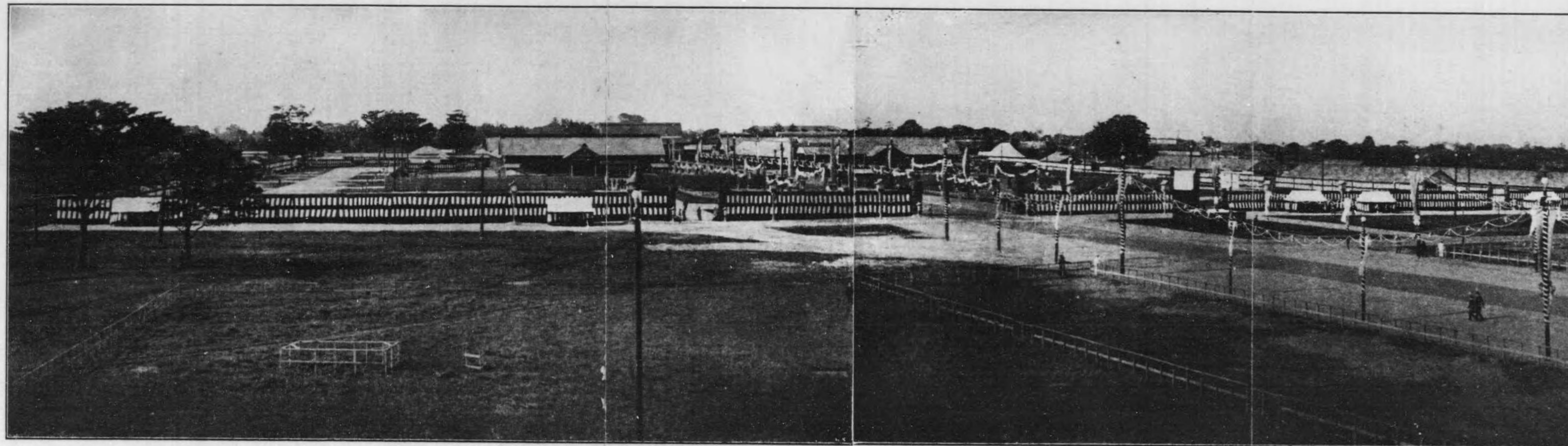




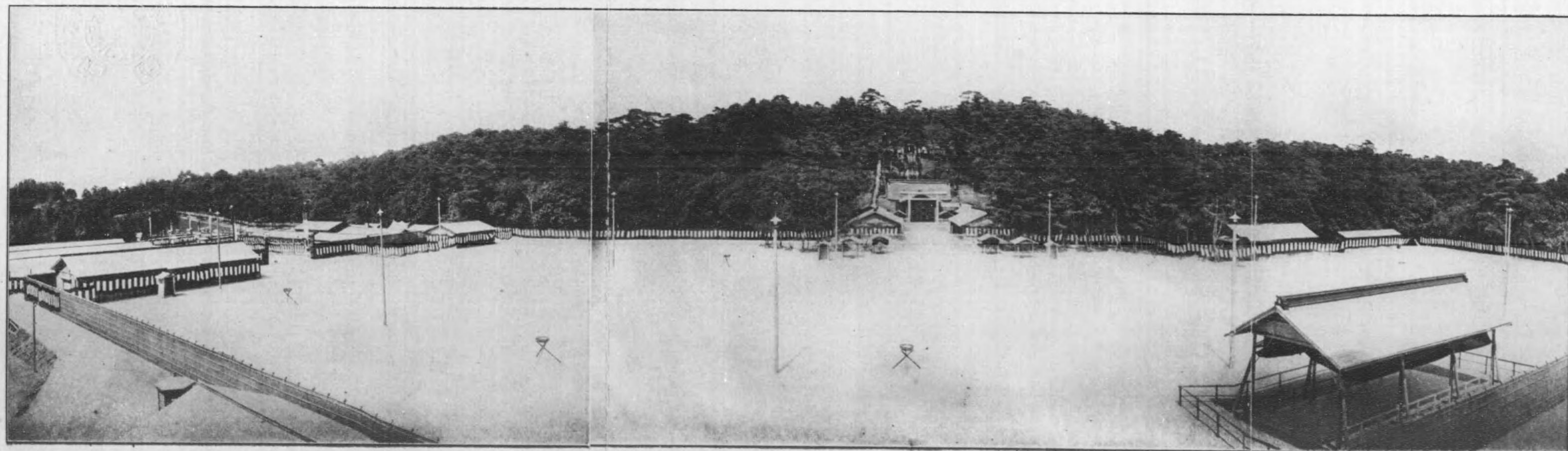
青 山 祭 場 殿 全 景



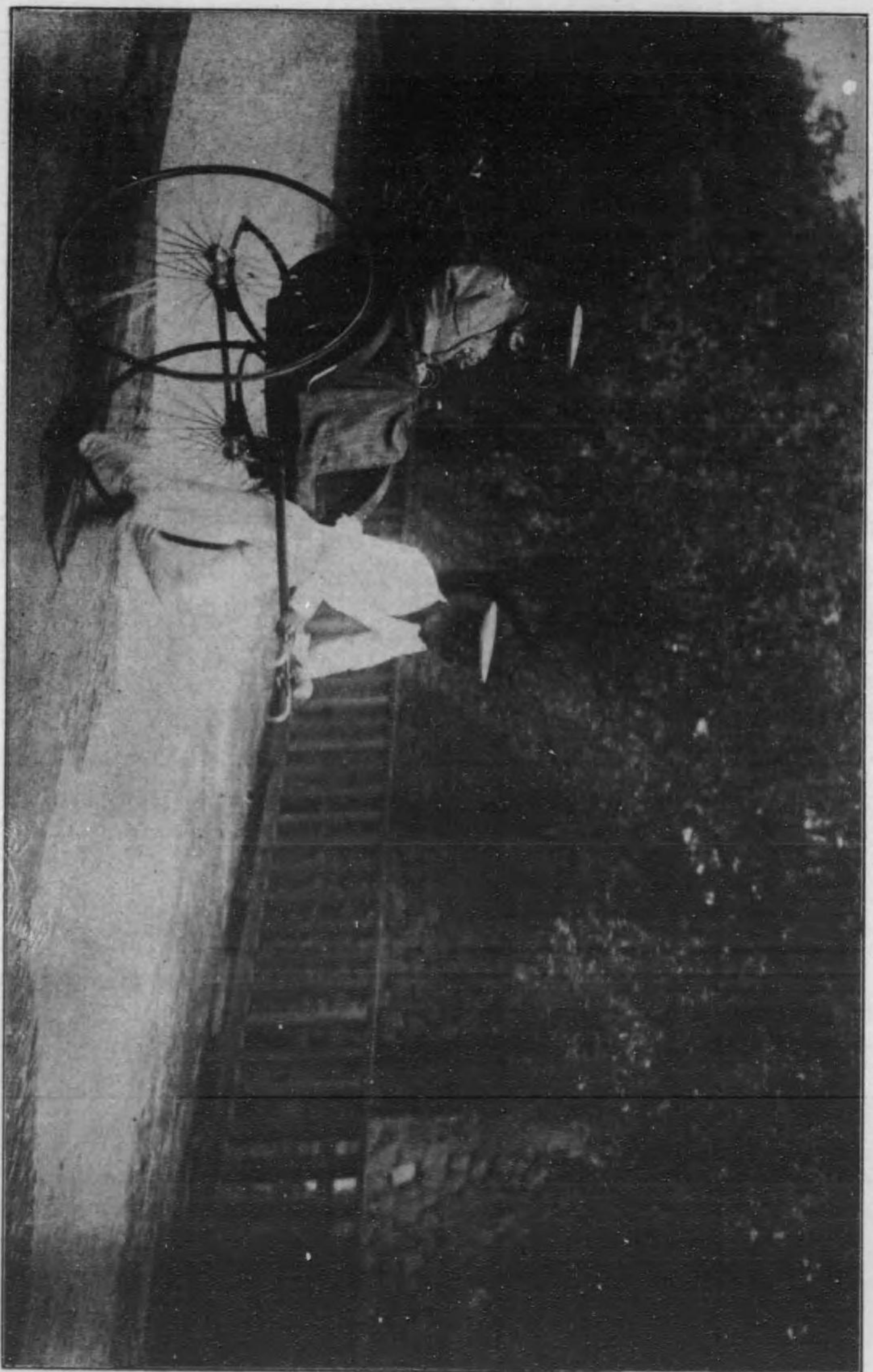
御 大 葬 當 時 の 京 都 桃 山 御 陵 全 景



青山祭場殿全景



御大葬當時の京都桃山御陵全景



軍將木乃の上途るた然愁るすとしんせ同奉に搭御

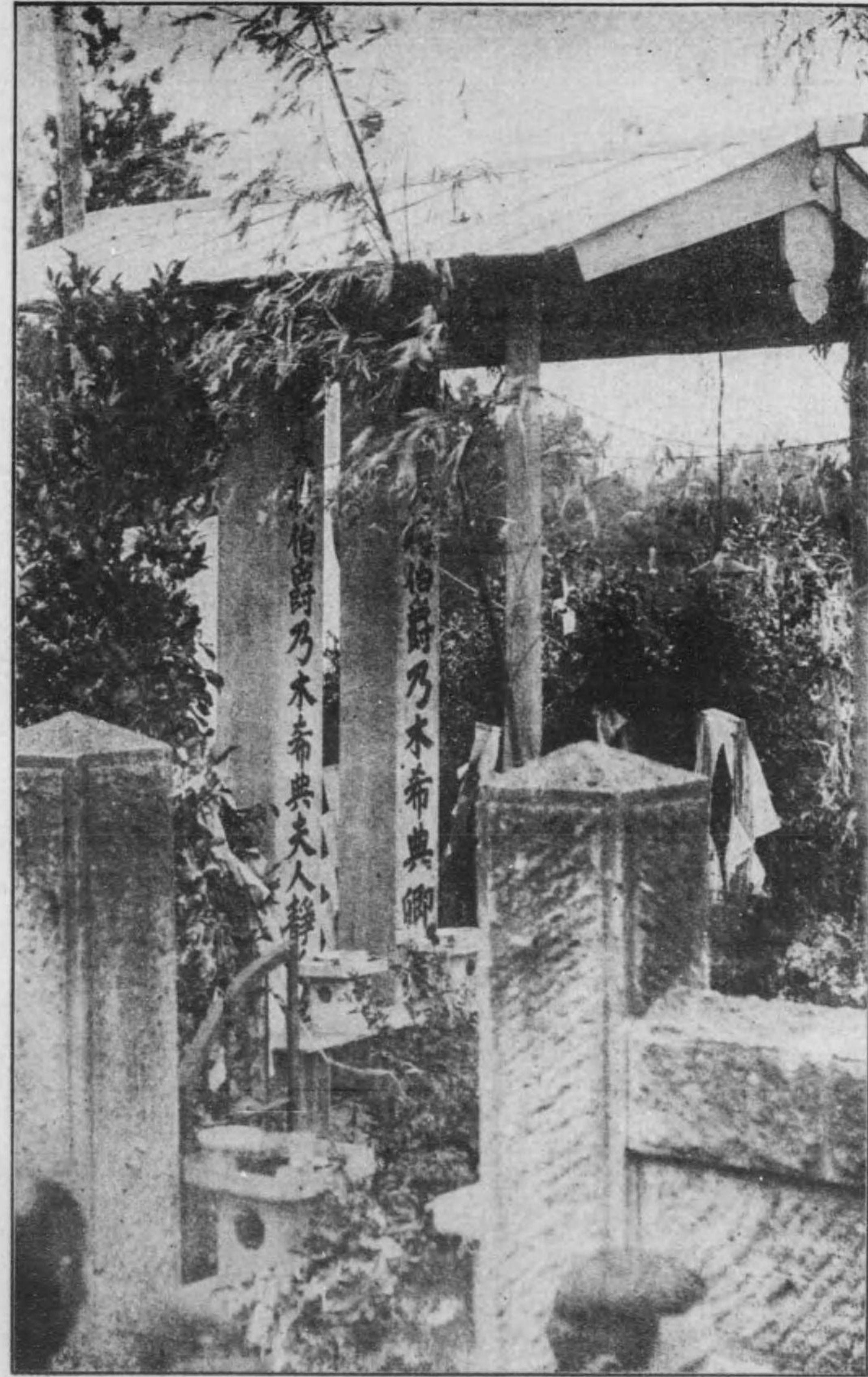
乃 木 大 將



乃木大將真蹟

平家毛少壯之花邊外
秋鵝り連日海悠
望風忽覺我袍冷
梅子峪通蒙右州
為善田平兒 五建也

乃木大将夫妻の墓



緒言

明治四十五年七月三十日嗚呼是れ如何なる日ぞや吾人六千萬同胞の終生
腦裡に印して忘れむと欲して忘るゝ能はざる叡聖文武なる 明治天皇陛
下の御登遐あらせられ給ひし日にあらず乎伏して惟みるに 聖上陛下乾
體瑕を生し天行順ならせ給はずと拜承する乎吾が六千萬の同胞赤子は恐
懼措く能はず貴賤を問はず老幼を論せず齋戒沐浴して日夜天地に禱り神
明に誓ひ復び明かなる天日の光を仰き奉らむことを願ひしかども至誠遂
に通せず聖靈六龍に駕して昇天し給ふ嗚呼哀しい哉嗚呼悼しい哉日月星
辰も爲に光を失ひ山河草木も爲に愁を帯び天地寂として聲なく乾坤黯と
して悲し矣嗚呼此の哀嗚呼此の悼天地の存せむ限り日月の照らさむ極み
千古萬世を経るとも盡くる期あらさむとすされば九月十三日御大喪の
儀あらせらるゝや北は樺太より西は鷄林の新領土に至るまで靈輦を奉送
せむことを欲し千里母國に來れるも參列法あり親しく拜觀することを得
ず志を空しうして故山に歸れるもの其幾何なりしを知らず等しく是れ

明治聖天子の恩澤に沐浴する吾人同胞にして將た 陛下忠良の臣民にして斯くの如し是れ豈に聖世治下の一大痛恨事にあらず乎本會茲に見る所あり是等不幸の同胞をして其希望の幾分を得しめむことを欲し青山原頭御大喪儀の御事より桃山御陵御埋棺の御式に至らせらるゝまで博搜旁羅細大漏さず謹みて之を詳記し附するに精巧端麗なる寫眞版、地圖を以てし御大喪儀の順序次第を更に審かにし收めて一卷となし題して 明治天皇御大喪儀明細録と稱し之を同志に頒ち之を子孫に傳へ永く聖徳を景仰し奉らむことを欲し敢て斯舉ありし所以也吾人同胞は固より然り況や身を軍人軍屬に列する所の諸子をや諸子は元是れ 陛下股肱の臣也幸に家に一本を藏めて以て子々孫々に傳へ千古未曾有の 明治天皇陛下の御遺徳を偲び奉らむことを敢て希望して止まざる也編成るに迨び謹みて一言を卷首に冕す

大正二年九月

帝國圖書普及會編纂局識

歷代天皇

第一世神武天皇	第二世綏靖天皇
第三世安寧天皇	第四世懿德天皇
第五世孝昭天皇	第六世孝安天皇
第七世孝靈天皇	第八世孝元天皇
第九世開化天皇	第十世崇神天皇
第十一世垂仁天皇	第十二世景行天皇
第十三世日本武尊 <small>景行天皇之子</small>	第十四世仲哀天皇
第十三世成務天皇 <small>成務天皇之兄</small>	
歷代天皇	

第十五代 應神天皇

第十六代 仁德天皇

第十七代 履仲天皇 仁德天皇之子
反正天皇之兄

第十八代 反正天皇 仁德天皇之子
履仲天皇之弟

第十九代 允恭天皇 仁德天皇之子
反正天皇之弟

第二十代 安康天皇 允恭天皇之子
雄略天皇之兄

第二十一代 雄略天皇 允恭天皇之子
安康天皇之弟

第二十二代 清寧天皇

第十八世 市邊押磐皇子

第廿三代 顯宗天皇 履仲天皇之孫
仁賢天皇之弟

第廿四代 仁賢天皇 履行天皇之孫
顯宗天皇之兄

第廿五世 武烈天皇

第廿六代 繼體天皇 應神天皇五世之孫

第十六世 稚淳毛二派皇子

第十七世 大富杼王

第十八世 宇非土

第十九世 彥宇斯王

第廿七代 安閑天皇 繼體天皇之子
宣化天皇之兄

第廿八代 宣化天皇 繼體天皇之子
安閑天皇之弟

第廿九代 欽明天皇 繼體天皇之嫡子
宣化天皇之弟

第三十代 敏達天皇 欽明天皇之子
用明天皇之兄

第卅一代 用明天皇 欽明天皇之子
敏達天皇之弟

第卅二代 崇峻天皇 欽明天皇之子
用明天皇之弟

第卅三代 推古天皇 欽明天皇之子
崇峻天皇之姊

第卅四代 舒明天皇 敏達天皇之孫
皇極天皇之伯父

第卅五世 皇極天皇 敏達天皇之曾孫
孝德天皇之姊

第卅六代 孝德天皇 敏達天皇之曾孫
皇極天皇之弟

第卅七代 齊明天皇 皇極天皇重祚

第卅八代 天智天皇 舒明天皇之子
天武天皇之兄

第卅九代 弘文天皇 天智天皇之子
持統天皇弟

第四十代 天武天皇 舒明天皇之子
天智天皇之弟

第四十一代 持統天皇 天智天皇之女
弘文天皇之姊

第四十二代 文武天皇 天武天皇之孫
元正天皇之兄

歷代天皇

三

二

第廿六世 崗宮天皇皇孫

第四十三代 元明天皇天智天皇之女
持統天皇之妹

第四十四代 元正天皇文武天皇之孫
文武天皇之妹

第四十五代 聖武天皇文武天皇之子

第四十六代 孝謙天皇

第廿八世 崇道蓋敬皇帝
舍人親王

第四十七代 淳仁天皇文武天皇之孫

第四十八代 稱徳天皇孝謙天皇孫

第廿六世 田原天皇皇孫

第四十九代 光仁天皇天智天皇之孫

第五十代 桓武天皇

第五十一代 平城天皇桓武天皇之子
嵯峨天皇之兄

第五十二代 嵯峨天皇桓武天皇之子
平城天皇之弟

第五十三代 淳和天皇桓武天皇之子
嵯峨天皇之弟

第五十四代 仁明天皇

第五十五代 文德天皇仁明天皇之子
光孝天皇之兄

第五十六代 清和天皇

第五十七代 陽成天皇

第五十八代 光孝天皇仁明天皇之子
文德天皇之弟

第五十九代 宇多天皇

第六十代 醍醐天皇

第六十一代 朱雀天皇醍醐天皇之子
村上天皇之兄

第六十二代 村上天皇醍醐天皇之子
朱雀天皇之弟

第六十五代 冷泉天皇村上天皇之子
圓融天皇之兄

第六十四代 圓融天皇村上天皇之子
冷泉天皇之弟

第六十五代 花山天皇冷泉天皇之子
三條天皇之兄

第六十六代 一條天皇

第六十七代 三條天皇冷泉天皇之子
花山天皇之弟

第六十八代 後一條天皇一條天皇之子
後朱雀天皇之兄

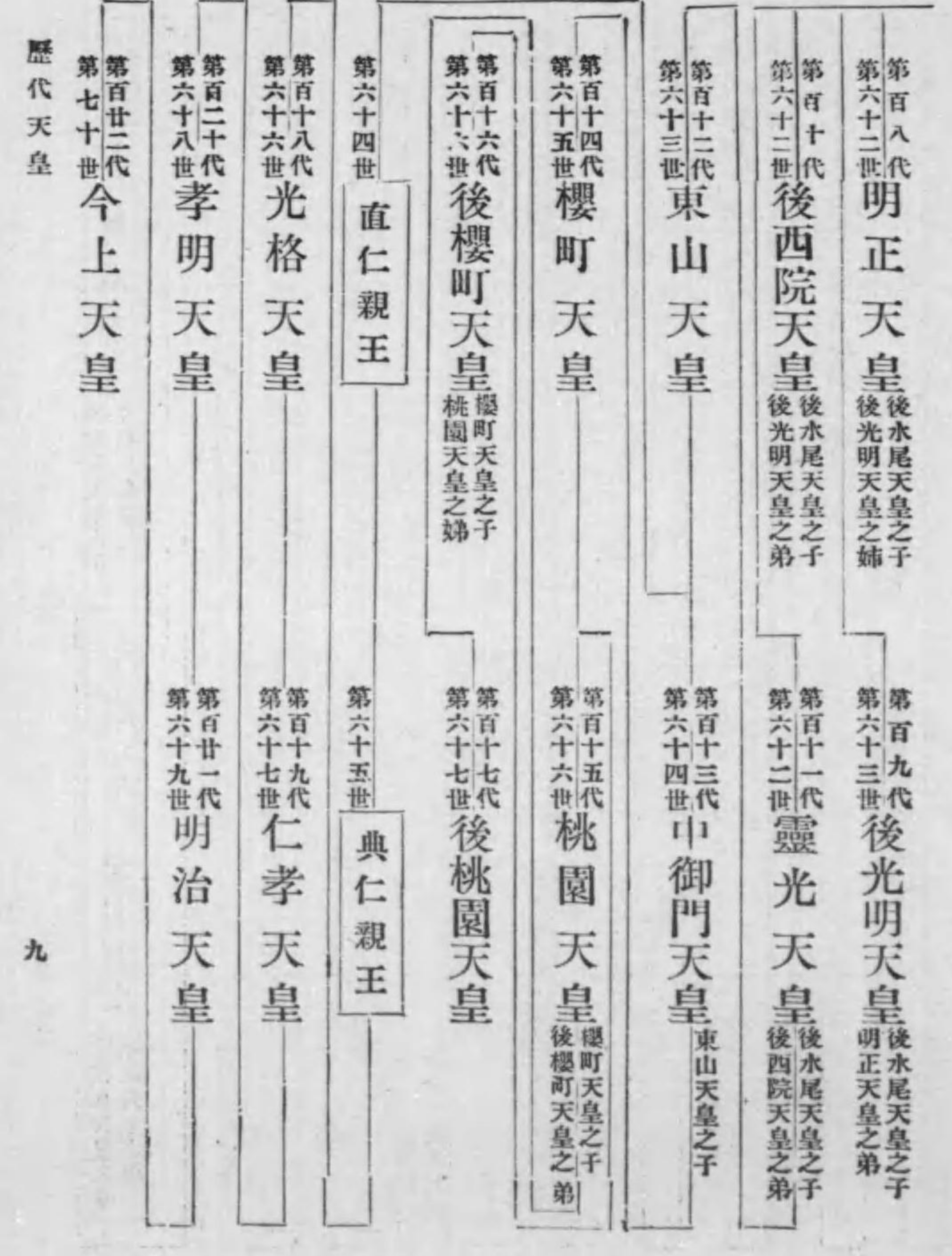
歷代天皇

五

四

第六十九代 後朱雀天皇 <small>一條天皇之子 後一條天皇之弟</small>	第七十代 後冷泉天皇 <small>後朱雀天皇之子 後三條天皇之兄</small>
第七十一代 後三條天皇 <small>後朱雀天皇之子 後冷泉天皇之弟</small>	第七十二代 白河天皇 <small>第七十二代</small>
第七十三代 堀河天皇 <small>第七十三代</small>	第七十四代 鳥羽天皇 <small>第七十四代</small>
第四十五代 崇德天皇 <small>鳥羽天皇之子 後白河天皇之兄</small>	第七十六代 近衛天皇 <small>鳥羽天皇之子 後白河天皇之弟</small>
第四十二世 崇德天皇 <small>鳥羽天皇之子 後白河天皇之兄</small>	第四十二世 近衛天皇 <small>鳥羽天皇之子 後白河天皇之弟</small>
第七十七代 後白河天皇 <small>鳥羽天皇之子 近衛天皇之兄</small>	第七十八代 二條天皇 <small>後白河天皇之子 高倉天皇之兄</small>
第四十二世 後白河天皇 <small>鳥羽天皇之子 近衛天皇之兄</small>	第四十三世 二條天皇 <small>後白河天皇之子 高倉天皇之兄</small>
第七十九代 六條天皇 <small>第七十九代</small>	第八十代 高倉天皇 <small>後白河天皇之子 二條天皇之弟</small>
第四十四世 六條天皇 <small>第七十九代</small>	第四十三世 高倉天皇 <small>後白河天皇之子 二條天皇之弟</small>
第八十一代 安德天皇 <small>高倉天皇之子 後鳥羽天皇之兄</small>	第八十二代 後鳥羽天皇 <small>高倉天皇之子 安德天皇之弟</small>
第四十四世 安德天皇 <small>高倉天皇之子 後鳥羽天皇之兄</small>	第四十四世 後鳥羽天皇 <small>高倉天皇之子 安德天皇之弟</small>
第八十三代 土御門天皇 <small>後鳥羽天皇之子 順德天皇之兄</small>	第八十四代 順德天皇 <small>後鳥羽天皇之子 土御門天皇之弟</small>
第四十五世 土御門天皇 <small>後鳥羽天皇之子 順德天皇之兄</small>	第四十五世 順德天皇 <small>後鳥羽天皇之子 土御門天皇之弟</small>

第八十五代 仲恭天皇 <small>第八十五代</small>	第四十四世 後高倉院親王 <small>第四十四世</small>
第四十六世 仲恭天皇 <small>第八十五代</small>	第八十六代 後堀河天皇 <small>高倉天皇之孫 第四十五世</small>
第八十七代 四條天皇 <small>第八十七代</small>	第四十六世 後嵯峨天皇 <small>土御門天皇之子 第四十六世</small>
第四十六世 四條天皇 <small>第八十七代</small>	第八十八代 後嵯峨天皇 <small>土御門天皇之子 第四十六世</small>
第八十九代 後深草天皇 <small>後嵯峨天皇之子 龜山天皇之兄</small>	第九十代 龜山天皇 <small>後嵯峨天皇之子 後深草天皇之弟</small>
第四十七世 後深草天皇 <small>後嵯峨天皇之子 龜山天皇之兄</small>	第四十七世 龜山天皇 <small>後嵯峨天皇之子 後深草天皇之弟</small>
第九十一代 後宇多天皇 <small>第九十一代</small>	第九十二代 伏見天皇 <small>第九十二代</small>
第四十八世 後宇多天皇 <small>第九十一代</small>	第四十八世 伏見天皇 <small>第九十二代</small>
第九十三代 後伏見天皇 <small>伏見天皇之子 花園天皇之兄</small>	第九十四代 後二條天皇 <small>後宇多天皇之子 後醍醐天皇之兄</small>
第四十九世 後伏見天皇 <small>伏見天皇之子 花園天皇之兄</small>	第四十九世 後二條天皇 <small>後宇多天皇之子 後醍醐天皇之兄</small>
第九十五代 花園天皇 <small>第九十五代</small>	第九十六代 後醍醐天皇 <small>後宇多天皇之子 後二條天皇之弟</small>
第四十九世 花園天皇 <small>第九十五代</small>	第四十九世 後醍醐天皇 <small>後宇多天皇之子 後二條天皇之弟</small>
第九十七代 後村上天皇 <small>第九十七代</small>	第九十八代 後龜山天皇 <small>第九十八代</small>
第五十世 後村上天皇 <small>第九十七代</small>	第五十一世 後龜山天皇 <small>第九十八代</small>



正位

皇位繼承一覽

神武天皇	綏靖天皇	安寧天皇	懿德天皇	孝昭天皇	孝安天皇	孝靈天皇	孝元天皇	開化天皇	崇神天皇
御父不詳 年不詳	御父神武天皇 十一月一日崩	御父綏靖天皇 十月十一日崩	御父安寧天皇 六月六日崩	御父懿德天皇 八月八日崩	御父孝昭天皇 五月五日崩	御父孝安天皇 九月九日崩	御父孝靈天皇 八月八日崩	御父孝元天皇 二月二日崩	御父開化天皇 九月九日崩
御父不詳 年不詳	御父神武天皇 丙子歲三	御父綏靖天皇 壬子歲五	御父安寧天皇 庚寅歲十	御父懿德天皇 甲子歲九	御父孝昭天皇 戊子歲八	御父孝安天皇 庚子歲正	御父孝靈天皇 丙戌歲二	御父孝元天皇 癸未歲九	御父開化天皇 癸未歲四
辛酉歲正月一日繼承	庚辰歲正月八日	壬子歲七月三日	辛卯歲二月四日	丙寅歲正月九日	己丑歲正月七日	辛未歲正月十日	丁亥歲正月十日	同年十一月十日	甲申歲正月十三日
皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子
皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子

皇位繼承一覽

垂仁天皇	景行天皇	成務天皇	仲哀天皇	應神天皇	仁德天皇	履仲天皇	反正天皇	允恭天皇	安康天皇	雄略天皇	清寧天皇
御父崇神天皇辛卯歲十 二月五日崩	御父垂仁天皇庚午歲七 月十日崩	御父景行天皇庚午歲十 一月七日崩	御叔成務天皇庚午歲十 六月十一日崩	御父仲哀天皇庚辰歲二 月六日崩	御父應神天皇庚午歲二 月十五日崩	御父仁德天皇己亥歲正 月十五日崩	御父履仲天皇乙己歲三 月十五日崩	御父反正天皇庚戌歲正 月廿三日崩	御父允恭天皇癸己歲正 月十四日崩	御父安康天皇丙申歲八 月九日崩	御父雄略天皇己未歲八 月七日崩
壬辰歲正月二 日	辛未歲七月十 一日	辛未歲正月五 日	壬申歲正月十 一日	同年同月同日	癸酉歲正月三 日	庚子歲二月一 日	丙午歲正月二 日	壬子歲十二月 四日	同年十二月十 四日	同年十一月十 三日	庚申歲正月十 五日
皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子				皇太子
皇子	皇子	皇子	諸王	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子

顯宗天皇	仁賢天皇	武烈天皇	繼體天皇	安閑天皇	宣化天皇	欽明天皇	敏達天皇	用明天皇	崇峻天皇	推古天皇	舒明天皇
御再從弟清寧天皇甲子 歲正月十六日崩	御弟顯宗天皇丁卯歲四 月廿五日崩	御父仁賢天皇成寅歲八 月八日崩	御四從兄武烈天皇丙戌 歲十二月八日崩	御父繼體天皇辛亥歲二 月七日讓位	御兄安閑天皇乙卯歲十 二月十七日崩	御兄宣化天皇己未歲二 月十日崩	御父欽明天皇辛卯歲四 月十五日崩	御兄敏達天皇乙己歲八 月十五日崩	御兄用明天皇丁未歲四 月九日崩	御弟崇峻天皇壬子歲十 一月三日崩	御從祖々姑推古天皇戊 子歲三月七日崩
乙丑歲正月一 日	戊辰歲正月五 日	同年十二月 四日	丁亥歲二月四 日	同年同月同日	同年十二月 五日	同年十二月五 日	壬辰歲四月三 日	同年九月五日	同年八月二日	同年十二月八 日	己丑歲正月四 日
皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子
皇子	諸王	皇子	諸王	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇女	諸王

皇極天皇	御伯父舒明天皇辛丑歲十月九日崩	壬寅歲正月十五日	舒明天皇皇后	王女
孝德天皇	御母皇極天皇乙未歲六月十四日讓位	同年同月同日	皇極天皇	皇子
齊明天皇	御弟孝德天皇日雉五年十月十日崩	乙卯歲正月三日重祚	皇重祚	諸王
天智天皇	御母齊明天皇辛酉歲七月廿四日崩	同年同月不明	皇太子	皇子
弘文天皇	御父天智天皇辛未歲十月三日崩	同年同月五日	皇太子	皇子
天武天皇	御姪弘文天皇壬申歲七月廿三日崩	同年同月同日	天武天皇皇后	皇子
持統天皇	御叔父天武天皇朱鳥元年九月九日崩	同年同月同日	皇太子	皇女
文武天皇	御祖母持統天皇丁酉歲八月一日讓位	同年同月同日	皇太子	皇女
元明天皇	御從姪文武天皇慶雲四年六月十五日崩	同年同月同日	皇太子	皇女
元正天皇	御從姪元明天皇靈龜元年九月三日讓位	同年同月同日	皇太子	皇女
聖武天皇	御叔母元正天皇神龜元年二月四日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
孝謙天皇	御父聖武天皇天平廿一年七月二日讓位	同年同月同日	皇太子	皇女

淳仁天皇	御從姪孫孝謙天皇天平寶字二年八月一日讓位	同年同月同日	皇太子	諸王
稱德天皇	御族叔祖父淳仁天皇天平寶字八年十月九日廢位	同年同月同日	皇太子	諸王
光仁天皇	御再從姪孫稱德天皇神護景雲四年八月四日崩	同年同月同日	皇太子	諸王
桓武天皇	御父光仁天皇天應元年四月三日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
平城天皇	御父桓武天皇延曆廿五年三月十七日崩	同年同月十八日	皇太子	皇子
嵯峨天皇	御兄平城天皇大同四年四月一日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
淳和天皇	御兄嵯峨天皇弘仁十四年四月十七日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
仁明天皇	御叔父淳和天皇天長十年二月廿八日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
文德天皇	御父仁明天皇嘉祥三年三月廿一日崩	同年同月同日	皇太子	皇子
清和天皇	御父文德天皇天安二年八月廿七日崩	同年同月同日	皇太子	皇子
陽成天皇	御父清和天皇貞觀十八年十一月廿九日讓位	同年同月同日	皇太子	皇子
光孝天皇	御姪孫陽成天皇元慶八年二月四日遜位	同年同月同日	皇太子	皇子

宇多天皇	醍醐天皇	朱雀天皇	村上天皇	冷泉天皇	圓融天皇	花山天皇	一條天皇	三條天皇	後一條天皇	後朱雀天皇	後冷泉天皇
御父孝光天皇仁和三 年八月廿六日崩	御父宇多天皇寬平九 年七月三日讓位	御父醍醐天皇延長八 年九月廿二日讓位	御父朱雀天皇天慶九 年四月廿日讓位	御父村上天皇康保四 年五月廿五日崩	御父冷泉天皇安和二 年八月十三日讓位	御父圓融天皇永觀二 年八月廿七日讓位	御父花山天皇寬和二 年六月廿三日遜位	御父一條天皇寬弘八 年六月十三日讓位	御父伯父三條天皇長和 五年正月廿九日讓位	御父後一條天皇長元九 年四月十七日讓位	御父後朱雀天皇寬德二 年正月十六日讓位
同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日
皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子
親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王
皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子
諸王											

後三條天皇	白河天皇	堀河天皇	鳥羽天皇	崇德天皇	近衛天皇	後白河天皇	二條天皇	六條天皇	高倉天皇	安德天皇	後鳥羽天皇
御父後冷泉天皇治曆四 年四月十九日崩	御父後三條天皇延久四 年十二月八日讓位	御父白河天皇應德三 年十一月廿六日讓位	御父堀河天皇嘉承二 年七月十九日崩	御父鳥羽天皇保安四 年正月廿八日讓位	御父崇德天皇永治元 年十二月七日讓位	御父近衛天皇久壽二 年七月廿三日崩	御父後白河天皇保元三 年八月十一日讓位	御父二條天皇永萬元 年六月廿五日	御姪六條天皇仁安三 年二月十九日讓位	御父高倉天皇治承四 年二月廿一日讓位	○御祖父後白河天皇ノ詔 依壽永三年八月廿日踐祚
同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	同年同月同日	壽延四年三月廿五 日正位二歸ス
皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	皇太子	後白河天 皇太子
親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	親王	
皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子	皇子

皇位繼承一覽

正位同	土御門天皇	御父後鳥羽天皇建久九年正月十一日讓位	同年同月同日	皇太子		皇子
	順德天皇	御兄土御門天皇承元四年十一月廿五日讓位	同年同月同日	皇太弟	親王	皇子
	仲恭天皇	御父順德天皇承久三年四月廿日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後堀河天皇	御從姪仲恭天皇承久三年七月九日遜位	同年同月同日			諸王
	四條天皇	御父後堀河天皇貞永元年十月四日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後嵯峨天皇	御再從兄四條天皇仁治三年正月九日崩	同年同月同日			皇子
	後深草天皇	御父後嵯峨天皇寬元四年正月廿九日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	龜山天皇	御兄後深草天皇正元元年十一月廿六日讓位	同年同月同日	皇太弟	親王	皇子
	御宇多天皇	御父龜山天皇文永十一年正月廿六日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	伏見天皇	御從弟後宇多天皇弘安十年十月廿一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後伏見天皇	御父伏見天皇永仁六年七月廿二日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後二條天皇	御再從兄後伏見天皇正安三年正月廿一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子

不正位	花園天皇	御再從弟後二條天皇德治三年八月廿五日崩	同年同月廿六日	皇太子	親王	皇子
	後醍醐天皇	御再從兄花園天皇文保三年三月廿六日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後村上天皇	御父後醍醐天皇延元四年八月十五日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後龜山天皇	御父後村上天皇正平三年三月十一日崩	同年四月廿九日	皇太子	親王	皇子
	光嚴天皇	御叔父花園天皇ノ詔アリ元弘元年九月廿日	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	光明天皇	御兄光嚴天皇元弘三年十二月七日遜位	延元元年(建武三年)八月十五日			
	崇光天皇	御叔父光明天皇正平三年十月廿七日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
	後光嚴天皇	御兄崇光天皇正平六年(觀應二年)十一月七日遜位	正平七年(觀應三年)八月七日			
	後圓融天皇	御父後光嚴天皇建德二年(應安四年)三月廿三日讓位	同年同月同日			
	後小松天皇	御父後圓融天皇弘和二年(永德二年)四月十一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
正位同	稱光天皇	御父後小松天皇應永十年八月廿九日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子

後花園天皇	御族弟稱光天皇正長元年七月廿八日崩	同年同月廿八日			諸王
後土御門天皇	御父後花園天皇寬正五年七月十九日讓位	同年同月同日		親王	皇子
後柏原天皇	御父後土御門天皇明應九年九月廿八日崩	同年十月廿五日		親王	皇子
後奈良天皇	御父後柏原天皇大永六年四月七日崩	同年同月廿九日		親王	皇子
正親町天皇	御父後奈良天皇弘治三年九月五日崩	同年十月廿七日		親王	皇子
後陽成天皇	御祖父正親町天皇天正十四年十一月七日讓位	同年同月同日		親王	皇嫡子
後水尾天皇	御祖父後陽成天皇慶長十六年三月廿七日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
明正天皇	御父後水尾天皇寬永六年十一月八日讓位	同年同月同日		內親王	皇女
後光明天皇	御姉明正天皇寬永廿年十月三日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
後西院天皇	御兄後光明天皇承應三年九月卅日崩	同年十一月廿八日		親王	皇子
靈元天皇	御兄後西院天皇寬文三年正月廿六日讓位	同年同月同日		親王	皇子
東山天皇	御父靈元天皇貞享四年三月廿一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子

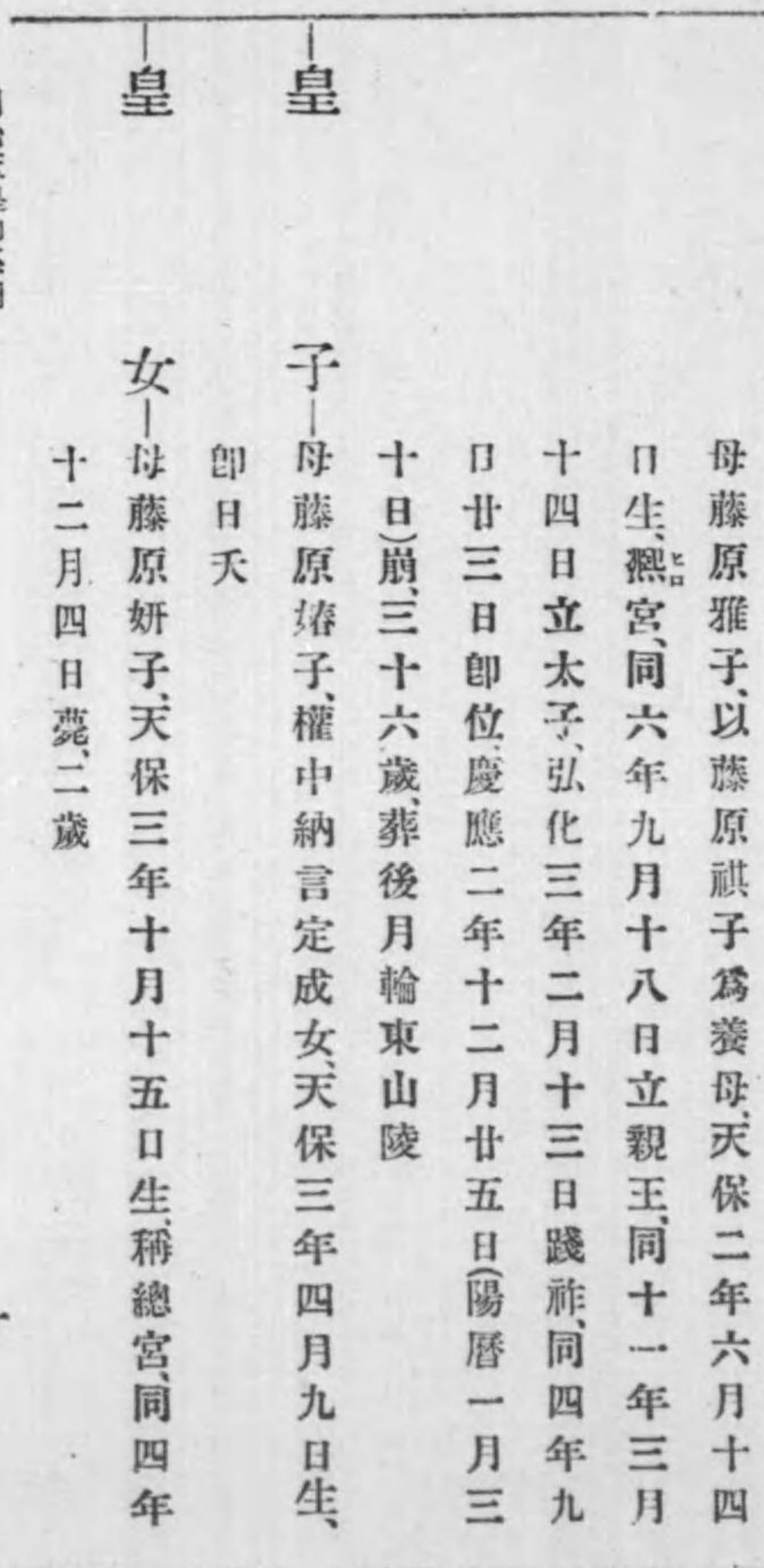
中御門天皇	御父東山天皇寶永六年六月廿一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
櫻町天皇	御父中御門天皇享保廿三年三月廿一日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
桃園天皇	御父櫻町天皇延享四年五月二日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
後櫻町天皇	御弟桃園天皇寶曆十二年七月一日崩	同年同月廿七日		內親王	皇女
後桃園天皇	御叔父後櫻町天皇明和七年十一月廿四日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
光格天皇	御再從姪後桃園天皇安永八年十一月九日崩	同年同月廿五日			諸王
仁孝天皇	御父光格天皇文化十四年三月廿二日讓位	同年同月同日	皇太子	親王	皇子
孝明天皇	御父仁孝天皇弘化三年二月六日崩	同年同月十三日	皇太子	親王	皇子
明治天皇	御父孝明天皇慶應二年十二月廿五日崩	慶應三年正月九日	皇太子	親王	皇子
今上天皇	御父明治天皇明治四十五年七月三十日崩	大正元年七月三十日	皇太子	親王	皇子

皇位繼承一覽

明治天皇御系圖

第一百二十代統仁

孝明天皇



明治天皇御系圖

節仁親王 母藤原雅子 天保四年十一月一日生 稱幹宮 同六年

桂宮相續 同七年三月五日為親王 即日薨 四歲

皇 女 母藤原妍子 天保七年四月十七日生 稱經宮 同年十

月廿八日夭

皇 女 母藤原雅子 天保八年正月廿六日生 稱恭宮 同九年

三月廿八日薨 二歲

皇 子 母藤原經子 權大納言實久女 弘化元年十一月一日

生 稱胤宮 同二年十月二日薨 二歲

親子內親王 母同 弘化三年閏五月十日 陽曆七月三日 生 稱和宮

文久元年四月十九日為內親王 同年適內大臣德川

家茂 慶應二年落飾 號靜寬院 明治十年九月二日薨

三十一年二月

順子內親王 母藤原夙子 左大臣尙忠女 嘉永三年十一月四日生

同五年六月十七日薨 三

皇 子 母藤原伸子 權大納言俊明女 嘉永三年十二月十七

日生 翌日夭

第百廿一代睦仁

明治天皇

母同順子內親王 實從一位忠能女藤原慶子所生 嘉

永五年九月廿二日 陽曆十一月三日 生 稱祐宮 萬延

元年九月廿八日 立親王 慶應三年正月九日 踐祚 明

治元年八月廿七日 陽曆十月十二日 即位 明治四十

五年七月三十日崩 六十一歲 葬伏見桃山陵

皇 女 母同順子內親王 安政五年六月十二日生 稱富貴宮

同六年八月二日薨 二歲

皇 女 母藤原紀子 權中納言康親女 安政六年三月廿二日

明治天皇御系圖

皇

生、稱壽滿宮、文久元年五月一日薨三歲
女、母同、文久元年十月八日生、稱理宮、同二年八月十日薨、二歲

皇

子、母葉室光子、從二位長順女、明治六年九月十八日生、即日天、諡雅瑞照彦尊

皇

女、母橋本夏子、正二位實麗女、明治六年十一月十三日生、即日天、諡雅高依姬尊

薰子

內親王、母柳原愛子、正二位光愛女、明治八年一月廿一日生、稱梅宮、同九年六月八日薨、一年六月

敬仁親王

母同、明治十年九月廿三日生、稱建宮、同十一年七月二十六日薨、十一月

第一百二十二代嘉仁

今上天皇

母皇后美子、實正二位柳原光愛女、愛子所生、明治十二年八月三十一日生、稱明宮、同二十年八月三十一日
皇后御實子儲君御治定、同二十二年十一月三日立
皇太子、大正元年七月三十日踐祚

紹子

內親王、母千種任子、正四位有任女、明治十四年八月三日生、稱滋宮、同十六年九月六日薨、二年二月

章子

內親王、母同、明治十六年一月廿六日生、稱增宮、同年九月八日薨、九月

靜子

內親王、母園祥子、從三位基祥女、明治十九年二月十日生、稱久宮、同二十年四月四日薨、一年三月

猷仁親王

母同、明治二十年八月廿二日生、稱昭宮、同廿一年十一月十二日薨、一年四月

明治天皇御系圖

昌子内親王—母同、明治廿一年九月三十日生、稱常宮
 房子内親王—母同、明治廿三年一月廿八日生、稱周宮
 允子内親王—母同、明治廿四年八月七日生、稱富美宮
 輝仁親王—母同、明治廿六年十一月三十日生、稱滿宮、同廿七年八月十七日薨、十月
 聰子内親王—母同、明治二十九年五月十一日生、稱泰宮
 多喜子内親王—母同、明治三十年九月二十四日生、稱貞宮、同三十二年一月十一日薨、一年五月
 裕仁親王—母皇后節子、九條道孝女、明治三十四年四月二十九日生、稱迪宮
 雍仁親王—母同、明治三十五年六月二十五日生、稱淳宮
 宣仁親王—母同、明治三十八年一月三日生、稱光宮

明治天皇御大葬儀 明細録口繪目次

- 明治天皇陛下最近、御尊影
- 明治天皇陛下御東帶の御尊影
- 明治天皇陛下御尊影
- 皇太后陛下御尊影
- 今上天皇陛下御尊影
- 皇后陛下御尊影
- 皇太子殿下、淳宮雍仁親王殿下、光宮宣仁親王殿下
- 泰宮聰子内親王、北白川宮妃房子内親王、朝香宮妃允子内親王、竹田宮妃昌子内親王四殿下
- 御大喪儀當日の宮城御車寄
- 殯宮葬場殿間鹵簿先
- 同 近衛騎兵隊
- 同 近衛軍樂隊
- 同 近衛步兵第一、二聯隊
- 同 海軍軍樂隊及海軍儀仗隊
- 同 鼓
- 同 黃旗、白旗
- 同 日月像、纛旗
- 同 大真神
- 同 祭官長及樂師
- 同 輜車通御
- 同 御名代宮
- 同 皇公族
- 同 親任官
- 同 貴、衆兩院議員
- 同 海陸軍儀仗隊
- 同 陸軍儀仗隊
- 同 陸軍儀仗隊
- 同 靈輦
- 同 葬場殿着御
- 同 英國海軍軍樂隊
- 同 靈柩車内部及靈柩列車安部川鐵橋通過
- 同 桃山に於ける鹵簿先
- 同 鼓、鉦、旛
- 同 胡篳、弓、楯、棹
- 同 日月像、纛旗
- 同 大真神
- 同 靈輦

口繪目次

- 同 御名代宮
- 同 總裁宮
- 同 皇公族
- 同 御親族總代
- 側面より見たる青山御祭場
- 葬場殿第一鳥居内及葬場殿
- 青山葬場殿内御轎車并に御轎車索引練習
- 陸軍代表者の入場
- 馬場先外
- 陵所祭場殿舎并に陵所御須屋
- 皇太后陛下桃山行啓
- 大喪使總裁伏見宮貞愛親王同妃利子殿下
- 御大喪天皇御名代閑院宮載仁親王同妃智恵子殿下
- 皇太后青山御名代并に桃山御名代の二殿下
- 大喪使副總裁及明治天皇御親族總代
- 大喪使祭官長并に祭官副長
- 陛下御登退後伏見宮貞愛親王殿下宮城御退出
- 日比谷公園前の陸軍塔列隊
- 第一師團塔列隊愛國生命保險會社前通過
- 鼓、鉦
- 黃旗、白旗、胡録、弓

- 楯、梓
- 日月像幟、御箭櫃
- 御弓櫃、御儀櫃、御幣櫃
- 葱華輦
- 輿丁の奉昇したる葱華輦
- 桃山葬場殿より御須屋に至る御順路
- 竣工せる桃山御陵
- 皇靈殿
- 大喪使總裁の宮用品并に女官、祭官長用品
- 青山葬場殿并に御大葬當時の京都桃山御陵の全景
- 御惱に奉伺せんとする愁然たる途上の乃木將軍
- 乃木大將軍眞蹟
- 乃木大將
- 同夫人靜子
- 乃木大將遺言十個條
- 乃木大將夫妻の墓

目次終

明治天皇御大喪儀 明細録目次

歷代天皇一覽 皇位繼承一覽 明治天皇御系圖

第一編 御大葬記

一	神路の旅	二
二	靈代奉安の御儀	二
三	御名殘の殯官祭	五
四	宮城前の拜送	七
五	御轎車	九
六	御轎車御當引	一
七	御輦進御砲	三
八	御鹵簿進御路	四
九	葬場殿御祭儀	五
一〇	各代山	七
一一	青國御代	七
一二	兩陛下御代	八
一三	御輦下御代	八
一四	御輦下御代	八
一五	御輦下御代	八
一六	御輦下御代	八
一七	御輦下御代	八
一八	御輦下御代	八
一九	御輦下御代	八
二〇	御輦下御代	八
二一	御輦下御代	八
二二	御輦下御代	八
二三	御輦下御代	八
二四	御輦下御代	八
二五	御輦下御代	八
二六	御輦下御代	八
二七	御輦下御代	八
二八	御輦下御代	八
二九	御輦下御代	八
三〇	御輦下御代	八
三一	御輦下御代	八
三二	御輦下御代	八
三三	御輦下御代	八
三四	御輦下御代	八
三五	御輦下御代	八
三六	御輦下御代	八
三七	御輦下御代	八
三八	御輦下御代	八
三九	御輦下御代	八
四〇	御輦下御代	八
四一	御輦下御代	八
四二	御輦下御代	八
四三	御輦下御代	八
四四	御輦下御代	八
四五	御輦下御代	八
四六	御輦下御代	八
四七	御輦下御代	八
四八	御輦下御代	八
四九	御輦下御代	八
五〇	御輦下御代	八
五一	御輦下御代	八
五二	御輦下御代	八
五三	御輦下御代	八
五四	御輦下御代	八
五五	御輦下御代	八
五六	御輦下御代	八
五七	御輦下御代	八
五八	御輦下御代	八
五九	御輦下御代	八
六〇	御輦下御代	八
六一	御輦下御代	八
六二	御輦下御代	八
六三	御輦下御代	八
六四	御輦下御代	八
六五	御輦下御代	八
六六	御輦下御代	八
六七	御輦下御代	八
六八	御輦下御代	八
六九	御輦下御代	八
七〇	御輦下御代	八
七一	御輦下御代	八
七二	御輦下御代	八
七三	御輦下御代	八
七四	御輦下御代	八
七五	御輦下御代	八
七六	御輦下御代	八
七七	御輦下御代	八
七八	御輦下御代	八
七九	御輦下御代	八
八〇	御輦下御代	八
八一	御輦下御代	八
八二	御輦下御代	八
八三	御輦下御代	八
八四	御輦下御代	八
八五	御輦下御代	八
八六	御輦下御代	八
八七	御輦下御代	八
八八	御輦下御代	八
八九	御輦下御代	八
九〇	御輦下御代	八
九一	御輦下御代	八
九二	御輦下御代	八
九三	御輦下御代	八
九四	御輦下御代	八
九五	御輦下御代	八
九六	御輦下御代	八
九七	御輦下御代	八
九八	御輦下御代	八
九九	御輦下御代	八
一〇〇	御輦下御代	八

(七) 陛下の御詠
(八) 御靈柩移御
(九) 御靈柩御發軔
……………三六
……………三七

第二編 函 簿

自一頁 ……至三二頁

第三編 桃山歛葬記

一 桃山

(一) 御安葬地
(二) 平安朝時代
(三) 離宮時代
(四) 豐臣秀吉時代
(五) 德川家康時代
(六) 明治年間
……………一
……………一
……………一
……………一
……………一
……………一

二 桃山驛の光景

三 各宮殿下の供奉

四 大葬列車着御

五 御函簿進御

六 御函埋柩

七 御陵前祭

八 第四編 函 簿

桃山假停車場御陵所間函簿……………自一頁 ……至三二頁

目次終

明治天皇御大喪儀 明細録

第一編 御大葬

一 神路の旅

九重の鳳闕、暗雲鎖して、百官色を失ひ、四達の廣區、凄氣満ちて、萬姓聲を呑み、三家の村十戸の邑もなほ哀痛の裡、悲慟の中、御生前の聖徳を仰ぎ慕ひまつりては、かすく目の前なる心地して、在すがごとく思ひけるに、神去りたまひしより、四十日餘をもあはたしく經て、早や今は兼て御定めの大葬日の九月十三日とはなりぬ。

明津御神と、大八洲知ろしめし、かけまくもあやに畏き 明治天皇は今日は殯の宮を出でまし
て、西の都に程近き、桃山の御陵を常宮として鎮りたまふ。あはれ 陛下が四十年あせり五年としもいへる長き年月の間、此處を大宮居として、萬づ政ごち聞こえたまへりし東京の都を後にして、今日を限りに神路の旅に上ぼらせ給ひ、いつの世までも還ります日のあるせられず。其行きます道し知らば、兼てより止めます關も置かましものを、あはれ、青人草もろく、誰しかも姿

へうらぶれて、哀み奉らざるべき。

仰がんも高き大内山のほとり 今上、皇后兩陛下の御かなしみ、分けて 皇太后陛下の御惜別いかばかりぞや。殯の宮に在しし間は、日日の視膳、なほ現世の御ありさまに異ならで、御嘆きの中にも、大御心を慰めたまひけんを。玉几空しく存して、永く晨夕に違はせられ、聖容在すがごとくして、遠く幽明を隔てたまふ。敬慮慈懷、推し測りたてまつるだに畏し。願へば天愁ひ、地悲しみ、日に異に空かきくもりて雲と凝り、雨と降りくらせるに、此日ばかりは、天の日の品品として、をりくりに雲間を洩れ吹く風さへ絶えつ、朝廷の人人は更なり。國民等が夜となく晝となく、いそしみて、心の限り盡くしまつりつる御行の設ども、や、榮あるやう見えて、今日を限りの大御別れをなしたてまつらんと、遠近より参集ひて御行の道に列なみ居り、膝をり伏せ、頸根つきて拜がみまつらむためには、いと便りよかるべかりしは 聖靈の今日の御行をば、天つ御神の神はかりたまひしにやあらむ。

二 靈代奉安の御儀

さて百敷の大宮にては、この日午前九時、宮中桐の間を權殿とし、靈代御奉安の御儀を行はせ

られたり。そも此の御儀は、今日を限りに殯殿を出でまし給ふ 明治天皇の尊靈を、神籬に移し参らせて、長しなへに宮中に止め奉らむとの意なり。いま其の御儀の次第を拜記せむに、初め大喪使事務官は、内陣の左右後三面に白色帛の壁代を代り、前面には白色帛に同じ色の紐付たる御幌として、褶ある短き幕やうのもの、並に白綾にて縁とりたる御籠を垂る。而してこの内陣上段の中央には、御濱床として厚さ、一尺、一丈四方許の臺を据へ、其上に御壘二枚を敷き、其上に更に赤地錦の縁とりたる白綾の御茵を設け、こゝに神籬を奉安す。神籬とは幣を串に挿みたるもの、下様に申す御幣の事にして、こゝに尊靈を宿らせ給ふなり。斯くして御扉を開ち、御前の左右に白色の細布にて、金色の燈籠を釣り、火を點し、御扉の左右には、更に木綿かけたる眞神を樹つ。斯くて權殿の用意全く終れば、午前九時四十分に至り、衣冠單に卷纓の冠を戴き、黒椽色の袍鈍色布の單奴袴を着け、帶劔して鈍色黒骨の扇を携へ、烏皮履を穿ちたる水野、吉田、市來、手塚、大木の五大喪使事務官出で、着床し、次に衣冠單を着たる祭官長鷹司公爵は正親町萬里小路兩祭司副長、大原伯、勸修寺伯、飛鳥井伯以下の各祭官を従へて着床す。之に續て、宮内勅任官、宮内奏任官總代各二名、明治天皇側近奉仕の高等官、同待遇、明治天皇の御親戚なる華族總代二條、九條兩公爵及び御達例中の拜診醫、岡侍醫頭、青山、三浦兩醫科大學教授、西郷、相

礎以下の各侍醫次を追ひて着床す。

茲に於て祭官進み出で、御簾奉げまつると同時に、伶人は笙箏の音も肅やかに、盤渉の調宗明樂を奏す。この奏樂中に、更に祭官副長等は海の物、山の物十六臺の御饌と、各々柳筥に納めたる錦、紅白帛倭文、木棉、麻の幣物を奠し終り、次に鷹司祭官長は進み出で、莊重の態度を以て「尊靈をこゝに移しまつり御饌幣物を奉れり安らかに聞し召せ」との意味の祭詞を奏し退下すれば、今上陛下には、御正装に喪章を附し給ひ戸田式部長官、渡邊宮内大臣の御先導にて出御遊ばさる。

其の御後よりは、侍從、茜染平絹の御覆したる劔璽を奉し、桂侍從長以下各侍從、中村侍從武官長以下各侍從武官扈從し、伏見宮貞愛親王、閑院宮載仁親王、東伏見宮依仁親王、久邇宮邦彦王、梨本宮守正王、朝香宮鳩彦王、東久邇宮稔彦王、北白川宮成久王、竹田宮恒久王供奉遊ばさる。次に喪服を召させられたる皇后陛下には一條皇后大夫心得の御先導、數多の女官を従へ給ひて出御遊ばさる。御後よりは、有栖川宮、故熾仁親王妃董子、久邇宮妃都子、梨本宮妃伊都子、北白川宮妃房子内親王、竹田宮妃昌子内親王妃供奉し遊ばさる。次に皇太后陛下には喪服にて女官を従へさせられ、香川皇太后宮大夫の御先導にて、出御遊ばさるれば、三陛下順次に御拜禮を遂

げさせられ、親王、親王妃、王、王妃も次ぎて御拜禮あり。供奉は出御の時の如くに出御遊ばさる。其後にて諸員拜禮を遂げ、伶人再び越天樂を奏して、幣物御饌を撤し、御簾を垂れ奉りて、式を終へさせられたり。

三 御名殘の殯宮祭

靈代奉安の御儀終りて、午前十時殯殿に於てお名殘の殯宮祭を執り行はせらる。されば九時半頃より山縣、大山、松方、井上、徳大寺、東郷等の大勳位、伊藤、奥、井上の各元帥、西園寺首相、齋藤、林、松田、原、内田、牧野、長谷場、山本、上原の各大臣及び寺内朝鮮總督、大隈、土方、田中、板垣、山本、平田、大浦の各大臣待遇及親任官たる文武の百官、夫人を伴ひて、男子は大禮服、正装、正服に喪章を附し、夫人は喪服にて參集し、控所にて時の來るを待つ一方殯殿に於ては、衣冠單に帶劔したる大喪使事務官五人、先づ着床し次に鷹司祭官長は正親町、萬里小路兩祭官副長及び祭官等を隨へて、逐次着床す。何れも服装は衣冠單なり。

次に宮内勅任官、宮内奉任官の總代二名、明治天皇側近く奉仕高等官同待遇、明治天皇の親戚たる華族總代二條九條兩公爵、及御達例中の拜診醫、岡侍醫頭、青山、三浦兩博士、各侍醫着

床し終れば、式部官の先導により、諸員參進して本位に就く。此時今上陛下には、御正装に喪章を附し給ひ、戸田式部長官、渡邊宮内大臣の御先導にて出御、御後よりは、茜染平絹の御覆ひしたる劔璽を侍從奉持し、桂侍從長、各侍從、中村侍從武官長、各侍從武官從ひ參らせ、伏見宮貞愛親王、閑院宮載仁親王、東伏見宮依仁親王、久邇宮邦彥王、梨本宮守正王、朝香宮鳩彦王、東久邇宮稔彦王、北白川宮成久王、竹田宮恒久王供奉し陛下は、御椅子に倚らせらる。

次に皇后陛下には、御喪服にて皇后宮大夫心得一條公爵の御先導に、數多の女官を從へさせられ出御御椅子に倚らせらる。皇后陛下に供奉し遊ばされたるは、有栖川宮故熾仁親王妃董子、久邇宮妃倪子、梨本宮妃伊都子、北白川宮妃房子内親王、竹田宮妃昌子内親王なり。

次に皇太后陛下には、御喪服にて、香川皇太后宮太夫の御先導にて出御遊ばさる。女官數多御後に候す。斯くて伶人盤涉調の白柱を奏すると同時に、祭官御簾を奉げ、御饌を奠し、紅白帛各一匹、白絹一匹、木棉一斤を柳筥に納め幣物として奠し、鷹司祭官長祭詞し今上、皇后、皇太后御拜禮に次ぎて、親王、親王妃、王、王妃の御拜禮あり。次で三陛下には、供奉出御の時の如くにして入御あり。次に諸員の拜禮を終ると共に再び奏樂中に幣物御饌を撤し御簾を垂れて御式を終らせられたり。

普通の臣下の家にては御葬儀の前夜は最後の御通夜として親族、昵近棺側に夜を徹するを習ひとすれども百敷の大内山には、其御例なく十二日の御通夜には宮内官陸海軍代表者華族方數十名交代にて殯宮に祇候申上げ、女性の方々は御着席なかりしかば、此日の殯宮祭には皇太后陛下は今上、皇后兩陛下の御後を續いて早朝出御靈前に御拜ありし後、更に午後三時三十分、殯宮最後の御訣れとして、各親王殿下を始め、高倉、柳原兩典侍並に權典侍、掌侍、權掌侍等先帝に直近奉仕の女官達十餘名を從はせられ、御靈柩近く出御、御着席、御默禱の間に永き御訣れを告げさせられ、一旦入御あらせらる。かくて大内山に於ては御斂葬前の準備は一切残りなく終らせられぬ。

四 宮城前の拜送

是日は蒼生皆戸を閉ちて業を休み、市中は弔旗弔燈の軒並に黒白の段段幕張り延へて、音もたえず。いと静けかり。かくて、御儀を拜觀せばや、御轎車を拜送して、盡させぬ御名残仕らばやと、二重橋より青山御祭場迄の御沿道は盡く諸團體の許されたる指定拜送所となりて新橋立錐の餘地だになく、南は九州、北は北海道の遠き極みの人迄も四五日以来、上野、兩國、飯田町と四方の停車場より入り込みたれば、曉方より御沿道に打集ひたり。因りて此處を過ぎる電車の運轉

は、正午迄と定めたりしとはいへど、毎車殆んど溢るゝまで人を載せたりければ、早や午前十時といふに、舊馬場先門附近は路の兩側に犇々と人垣を作り初め懸て十一時十二時扱は午後一時二時とも進めば、喪服、喪章の老幼男女次第に加はりて其數幾十萬といふを知らず。十重二十重に堵を作して、身動きすらなし得ざれど、諒闇に籠る人の心は押しもせて押されもせて、いと物靜かに御輦車の通御をぞ待ちたりける。

これより先き、丸の内の廣庭、二重橋前より凱旋道路を夾む兩側には一般の拜送者を禁じて只諸學校生徒をのみ許されたる事として、其左右四ヶ處の芝生には東京帝國大學、第一高等學校、高等工業學校、高等商業學校、高等師範學校、女子高等師範學校、音樂學校、美術學校、早稻田大學、慶應義塾大學、中央大學、明治大學、法政大學、女子大學等の各公私立大學校並に専門學校の生徒徒及び各中等學校の三年級以上の生徒代表者等總計約五萬六千人、中には東京盲聾學校の生徒代表者二十名程をも交へたるが、盡く參集して各其校旗の下にいと静肅に控へたり。

二重橋前の外庭、芝地内の天幕には貴衆兩院議員を初とし、帝國學士會員、高等官三、四、五等、東京市長、同市會議長、道府縣會の各議長等參集するあり、一隊の堵列兵、川村諸兵指揮官の指揮の下に來りて、二重橋前より馬場前門に至る間、左側には騎兵第一旅團司令部、同第十三、

十四の兩聯隊、右側には野砲兵第一旅團司令部、同第十三、十四聯隊馬場前門より日比谷公園に至る間、左側には交通兵旅團司令部鐵道聯隊、右側には電信隊、氣球隊の各部員に着けると見る間に是日の儀仗に加はるべし真紅の上着に黒の洋袴を穿ちて白毛を飾りし軍帽を戴ける海軍軍樂隊を先頭に、第一艦隊聯合大隊橫須賀鎮守府聯合大隊の水兵盛裝せる士官に引率せられて入場するあり。續いて同じく陸軍儀仗隊の參集するあり。海軍の白帽黃衣と相對して、陸軍の紅帽白衣の近衛軍樂隊先づ目ざましく、これを先頭にして約二萬の兵士形を正して居流れたる光景、嚴かなんど言ふばかりなし。暮色漸く迫りて利鎌なす三日の月影次第に光を放つと共に御沿道の短檠に焚く篝火稍色榮ゆるよと見る頃、大英國皇帝陛下より特に差遣はされたる五百名の英國海軍儀仗兵、赤衣の盛裝闇にも著しく、東洋艦隊司令長官ウキンズロー中將に引率せられて櫻田門より入場し等しく二重橋前皇城に面して整列す。

五 御輦車

夕日西に傾きて、時歸る鴉の物かなしげに大内山の森に鳴くころより、參内の馬軍、自働車引きも切らず。伏見宮貞愛親王、閑院宮載仁親王等の各皇族殿下を初め奉り、東京市長、東京市

會議長、英、米、露、獨、佛、伊、西其他訂盟各國の交際官は、何れも喪章を附したる大禮服、若くは通常禮服にて朝集所に參集したるが、聽て七時といふに、蜂須賀式部官の先導にて、宮城正面の御車寄の左右に肅然として聲もなく、臚列せり。時に御靈柩を御輦車に納め奉る、橋本、倉知、小原、上野等の大喪使事務官何も衣冠單に劍を佩きて、其左右に奉仕し、主馬寮技手瀧能維清、同平岡通元、同鈴木中次郎、主馬寮厩富澤勸一、同田中四郎吉、同西岡信次、同郡司源太郎、同新村駒次郎、吉田安寧、岩佐重三郎等の牛飼長に引牽せられたる五頭の牛やがて其御輦車を輓と御車寄に着しぬ。御輦車は御屋形、御車體、兩輪、心棒、御榻等悉く木造御黒塗、御屋形は夕顔型、高は御屋形頂上鳥衾迄七尺九寸、車輪に取付て總高さ一丈二尺、長さ一丈二尺七寸、輻一丈六尺四分五分を加へ、全長二丈九尺一寸九分、輦の御臺なる榻は經九型にて高さ二尺五寸、長さ三尺、幅一尺三寸、車輪は徑六尺、厚さ約八寸、七葉二十一骨、心棒は丸くして長一丈二尺、徑一尺、總重量約七百五十貫と承はる、御屋臺は光澤強ら蠟色の研出し、美しく御屋根より、垂懸れる網代は栗色漆を用ひ、之に飾れる環珞は黄金色御紋章、菊花と花菱にて御簾は四ヶ所に垂下、竹は本磨、縁、編糸とも鈍色、内側の御引立は四ヶ所とも近江表鼠色の平絹、御引立の上部より垂下すべし簾は、鈍色精好、屋根裏は黒塗格天井、萬一の雨天に備ふる爲、裏に防

水布を貼詰たり。總體に亘る御金物は三千餘個、金色燦爛、神々しく神々しく拜せらる。

御輦車を曳ら奉る牛は、京都より奉り、飴簾(二頭)位牌額(一頭)蓮華斑(二頭)等の名ある純日本牛なり。裝飾は頸飾、腹帶、尻掛飾、頸玉飾、面掛、胴綱、上鼻手繩、小胸掛、頸木紐、頸木結紐、鞭紐、掛杖紐、先絲繩(廻り七寸、長さ一丈一尺)曳綱を附し、尙附屬品として大面掛、大頭玉、追綱着衣、沓、鹽手、手先結元牛、小倉、頸木鞭等を用ふ。

御輦車は今御車寄垣道入口に其後部を密着せしめて、徐に出御を待ち渡りぬ。御車寄の垣道は、間口三間、奥行三間半、高さ四尺八寸にして豫て宮城の御床と高さを同じくし、樅材にて設けられしものにて、御輦車通御の際には、其上に薄く光澤あるいとも滑かなる板を敷き、徐にすべらせ其上を進ませまつるなり。

六 御輦車御當引

かくて御發引の御準備全く整へたれば、靈柩をば、北條侍從御縛を執り、渡邊宮相、戸田式部長官前行し、東園侍從御劍を奉じ、其他徳大寺前侍從長、中村侍從武官長、日野、西、清水、谷、河鱈、松浦の各侍從、西、山根、上田、島田、奥村の各侍從武官等何れも衣冠單に劍を帯び

て御後より押し奉れば大炊御門侍從職御用掛、石山侍從職勤務中の二人各長き脂燭を乗つて左
 右に立分れ御道筋を照し參らす。斯くて靈柩の坦道滑かに御車寄に至らせらるゝや、堵列したる
 元老大官一齊に頭を垂れ、誰一人仰き見たてまつるものとなき、寂たる中に、唯獻秋の聲のみ
 を洩れ聞ゆる、靈柩は其後部より御轎車に移御を終らせ給へば、御劔は白木の案上に安置せられ
 御二個の脂燭は同時に侍從の手より、舍人に授けられて、それより更に七十八對の御松明に火を
 移す。椽雑色の仕人之を奉侍し、茲に御轎車進御の御用意は全く成りぬ。七時三十分、大内山の
 静寂を破りて哀しき道樂は聞えぬ。樂は千有八百餘年の古へより傳はるとなむ申す。盤渉調の萬
 秋樂にて、笙、箏、篳篥、笛廿四人、鼓太鼓、鉦三人にて奏するなり。三管三鼓の六種の樂器、緩き
 調、低き韻、七十八對百五十六本の長柄の松明握りは細く、先太なるに、炎々の焔を吐かせつゝ、
 靜に御轎車は動き始めぬ。衣冠を正し、劔を佩きたる扈從の百官、力なき歩みを強ひても運ぶら
 ん様に、俛れたる頭に聲はなく、しと／＼とのみ二重橋の御正門へ練り出づれば、其處には、今
 上、皇后、皇太后の三陛下を初め奉り、是より直に青山の御祭場に向ひて、長き御葬列には加は
 らせ給はぬべき方々、即ち皇太子、皇子、内親王、親王妃、李王世子、其他御幼少の各殿下何れ
 も御正装若くは通常服に、喪章を附けさせられ、御正門内に御整列あり、殊に皇太子殿下には、

陸軍少尉の御正装に新に父帝より授けられ給ひし大勳位菊花大綬章、勳一等旭日桐花章の星章、
 勳一等瑞寶章の星章等御佩用の凛々しき御姿にて、村木武官長、木多、甘露寺、兩侍從等を従へ
 させられ、淳宮、光宮の御弟宮、及び李王世子殿下と御同列にて御轎車の二重橋を渡御遊ばさ
 るゝ迄一寸の御名殘だに長う惜み給はんとて御奉送あらせられぬ。御轎車の御出門と共に一同御
 入りあり。是ぞ宮城にての最後の御名殘。御方々の如何ばかり惜み給はんとて盡きさせらる期とて
 はなかるべきを。まして皇太后陛下には今宵御次第ありて、青山へ御名代の宮を立てさせられ、
 御親らの御行啓叶せられぬ由に洩れ承れば、一入の御胸懐とのみ拜察し奉るになむ。

七 弔 砲

一道の光明、大内山に輝けると見れば、懸て奥深き松の間にほの見ゆる二重橋鐵橋の彼方より
 御鹵簿の先軀を承はる仕人等の松明はしづく／＼と橋際に差懸れり。寂寞なる天地の闇を破りて一
 發の砲聲轟き渡りぬ。午後八時、今、御轎車宮城を離れて青山に向はせ給ふ時なり。大内山の邊
 り愁雲愈深うして、上林悲風に咽び、天地悉く聲を呑み、七千萬の民草一齊に息を潜め、今や
 我が大八洲は津々浦々にいたるまで、森嚴の氣、荒涼の感、滿目の風光、凄慘として只素風の咽

ぶを聞くのみ。續いて一發又一發、品川沖、士官學校の兩所より打出す弔砲の響轟き渡れば、時を計つて市内各寺院より撞き出づる梵鐘の響、闇を縫うて細く續きて漂ひ來る。かゝる間に長き御鹵簿の先驅は緩やかに橋を下りて馬場先の方へと打ち向ふ。天には弦月影を收むれども鹵簿を照す電燈の光、篝火の光眩し。

二重橋より馬場先門に出づる長さ三百五十間、幅四十間の廣き御道筋には飾砂清らに白く敷き並べられて雪の如く、其間に東京市の獻納として十二間の間隔を取り、高さ三間半の根越櫓十對を建て其根方には一尺五寸の白木の臺に、白木の低き枿を設け、櫓の梢より下枝に黒白或は鈍色の帛を垂れ、尙ほ其眞神との間には、約十間の間を置きて、瓦斯を用ゐたる高さ一丈の篝火二十五對を設けたり。此篝火は、赤松の丸太三本を組合せたる上に、赤銅の火皿を捧げたるにて、之に七五三繩を引渡したるものなり。更に篝火の彼方には、十對のアーケ燈を點じたれば、松の翠の一葉く、に置く露さへも數へらるゝ程なり。

八 御鹵簿進御

御輦車の肅々として二重橋の第二橋を渡らせらるゝを待ち、静まり居たる諸兵指揮官川村陸軍

大將、近衛師團長代理大井旅團長等近衛諸兵を指揮して全員最敬禮を行ふと共に、近衛軍樂隊及び喇叭手よりは「哀の極」なる曲を吹奏す。是ぞ鹵簿の御行手に立ち迷ふ蒼蠅なす煙燭をかき拂ふものなり。餘音嫋々として哀しむが如く、訴ふるがごとし。斯くて御輦車通御の後、それく列を正して儀仗の位置に就けば、御發引を待ちし警部の一隊警視廳警部、齋藤盛見、小泉伸三郎、山本猪之助、楠多美雄、岩村政壽、多賀谷岩次郎の六名、何れも正装に喪章を付けて先驅を爲し續いて安樂(兼道)警視總監同じく正装に喪章にて進み、次いで更に川淵、山崎、齋藤(眞橋)兼子、井熊、長野の六警部これに従ひ、次に近衛騎兵聯隊の一部、今日は馬を捨て、進む。長さ槍先に翻る紅白の旗、幾百旋、心なしにや打ちうなだれたり。次ぎには近衛軍樂隊、近衛歩兵第一旅團司令部、近衛歩兵第一聯隊、同第二聯隊、海軍々樂隊、海軍儀仗、聯合大隊司令部、海軍儀仗隊二個大隊約二千、四列になり、續々として、闇より闇に出で、行進す。筒口を逆にして地に向けたるまゝ肩に打ちかけられぬ。山行かば草蒸す屍、海行かば水つく屍と思ひまつれるに、還らせ給はぬ、御行幸の御前を承はる武夫が心、いひあはさねど、うち萎れて踏む足さへも力なければにや。砂を踏む音だにせて、物の擦るらばかりに、さやくと聞ゆるのみ。

つぎに鈍色の雑色二人、直径一寸二分長さ四尺の石綿および麻蠟を用ひて作りたる松明をば

尺、長さ五尺、總檜白木造にて六本の鼠足あり。銀色の御金具さらびやかなり。更に御弓櫃あり。長さ六尺深さ二尺幅三尺五寸、造りは御箭櫃に同じ。舍人二人にて之を昇き、二人の手代り附添ふ。次には雨皮と吳床とあり。次に松明二本道を照し、其後より大喪使書記早川政吉、木村徳辰大喪使事務官仲西清一、福羽逸人續き、此等を挾んで又松明あり。大真神一對あり。幣白く垂れて瀧の如く、梢に釣りし鏡揺れて寂びたる音す。布衣の祭官二人の後に衣冠帯劔、祭官久世通章行き、次に御饌櫃と二人の舍人にて昇ぐ、二人の手代り従ふ。其次に吳床雨皮あり。各舍人一人にて捧持し、其間に一人の手代りあり。次に松明二人、次に祭官補二人次に祭官裏松良次行く。次に御幣櫃、舍人二人、手代り一人にて昇ぐ。櫃の大きさは御饌櫃に同じく、中に紅白の御幣帛を納むるとぞ。次て又吳床、雨皮行き、次に松明二本、それより祭官二人行き、其後に祭官長谷信成續きぬ。次に松明二本、次に又祭官補二人、其後に祭官飛鳥井恒磨續きぬ。次に松明二本、其後に祭官補二人、祭官大原重朝續きぬ、凡て祭官補は布衣、祭官は衣冠帯劔なり。それより又祭官補二人、祭官副長正親町實正續き、次に松明二本、祭官補二人、祭官正親町季薫、同萩原殿雄二名二列を前導として續きぬ。その次に鷹司祭官長衣冠帯劔にて步調緩かに悄然として進む。其後より松明二本四邊を照して行く。次に鈍色布衣の樂師廿五名、次に松明二本、次に更に樂師

二名を前導に鉦鼓手代りとも併せて雜色五名を先たせ、樂長芝葛鎮衣冠單に帶劔にて進む。其後より松明二本紅蓮の炎を吐く。それに續いて橡布衣の宮内屬二人を前に衣冠單帶劔に素服を加へ、左手に三尺五寸の桐杖右手に黒骨鈍色の中啓を執りたる長驅の山口諸陵頭、頭を垂憂はしげに進み、次に橡雜式の松明二本、次に橡布衣の宮内屬二人を前導に、式部長官戸田伯爵同く衣冠單に素服を加へ劔を佩き、左手に桐杖、右手に中啓を執りて進む、次に又橡雜式の松明二本と橡布衣の宮内屬二名を前導に宮内大臣渡邊伯爵是も衣冠單に素服を加へ、左手に桐杖右手に中啓を執ること同じく、愁然として行く。次に橡關腋の舍人十二人、二列となりて手に松明を列外に向けて静に道を翳して進めり。斯くて間隔せず。續く十二本の松明に、兎もすれば間に薄れ行く御齒薄を照らし、明く拜する間もなく、橡布衫、平禮佩刀の平岡、鈴木兩牛飼長は同じき裝束、唯刀を佩かぬのみの各二人牛飼と共に先頭の副牛位牌額の左右に附添ひて進む。次には西岡、郡司の兩牛飼長、副牛飼長に次には吉田、岩佐の兩牛飼長は同じく副牛第二の館藤に、田中新村の兩牛飼長は本牛蓮華班に、富津、横瀬の兩牛飼長は同じく本牛第二の蓮華班に、孰れも各二名の牛飼と共に左右に立別れて附添ひたり。凡て五頭の牛は、此榮譽の選に入りたる程ありて、骨格筋肉言はん方なく逞し

きが、地に着く迄に首筋を低うし、重き歩にて静々と御轡車を挽き参らす。素絹を束ねて其廻り七寸、太さ腕の如くに見ゆる純白の強紐を牛の兩腹に平行せしめ、長く之を繋ぎ平に背より腹に掛け、同じく白無垢の絹布もて掩ふ。先絲綱の長さ一丈五尺更に曳綱あり。首と四足とのみに何ものにも包まれず。其兩側には此程東上したる桃山御陵の葱華輩奉昇の八瀬童子五十人、椽布衫の裝束着けて、各二十五人宛、附添へば、其後より大炊御門侍從職御用掛、石山侍從勤務の兩名何れも衣冠束帯に劍を帯び素服を加へ、大喪使書記及び附添各一名を從へてその中央に二列に並び共に松明を捧持して進めば、素破や通御ぞと眼張り胸轟かし、衣紋俄に掻き繕ふ沿道幾千萬の臣民の前に御轡車掲馬に現れましぬ。堵列の兵は捧銃捧劍の最敬禮を爲すとともに、喇叭手は「哀みの極」の譜を吹奏す。供奉の百官は更なり。拜送せる幾十萬の人々は水を打ちたる如く静まり返りて獻款する音のみぞ聞ゆる。

二列の右側には騎兵少佐壬生伯爵、白井(二郎)陸軍少將、高橋(義章)陸軍少將、左側には松村(龍雄)海軍大佐、山澄(太郎三)海軍大佐、有馬(良橋)海軍少將、何れも正裝正服に喪章を附して進み、更に御轡車の右側には、日野西侍從、北條侍從、米田侍從、左側には清水谷侍從、日根野侍從、東園侍從等の各侍從、何れも衣冠單に帶劍素服を加へ、桐杖を持ちて扈從し奉

り、其右の外側には伊藤(瀬平)陸軍少將、森岡(己三)陸軍少將、宮本(照明)陸軍中將、木(直)陸軍中將、比志島(義輝)陸軍中將、伊瀬地(好成)陸軍中將、又其左の外側には大城(源三郎)海軍少將(川島(令次郎)海軍少將、八代(六郎)海軍中將齋藤(孝至)海軍中將、寺垣(猪三)海軍中將、有地(品之允)海軍中將等、同じく正裝正服に喪章を附して、何れも徒歩扈從し奉れり。更に其後方には澤侍從手代り慈光寺侍從の二氏御挿鞋を奉持しぬ。即ち先帝の御料に捧ぐるものにて、木製の御淺沓形、表面に藤立梓の中に花菱の織出ある白紋浮織の布帛を張り、中は幸菱の綾にて張りしを、白木の御臺に載せたるものなり。

次に河崎侍從、素服桐杖にて進む。其右には沖原(光孚)陸軍中將(高島鞆之助)陸軍中將、大迫(尙敏)陸軍大將、黒木(爲楨)陸軍大將、奥(保鞏)元帥、左には伊集院(五郎)海軍大將、齋藤(實)海軍中將、井上(良馨)元帥、伊東(祐亨)元帥東郷(平八郎)海軍大將、是亦正裝正服に喪章を附して進む。次に椽布衫の仕人四人、棧榻を奉持し、次に同じ服裝の仕人六人にて掛竿三本二人にて雨皮を捧げ、次に主馬頭藤波(言忠)子爵、衣冠帶劍素服桐杖にて續き次に松明二本、次に侍從職幹事代侍從職御用掛九條道實公、次に侍從武官長中村(覺)男爵、次に侍從武官西、山根の兩男爵、同上田、島内、奥村の各々執れも正服喪章にて進み次に舍人職服に

喪章を附けし舍人二名松明を捧げて進む。其後より福島(正一)歩兵少佐榎村(寅之介)歩兵大尉に前を掃はせ、更に内舍人二名の捧ぐる松明に道を照させつゝ、正服喪章の千田(嘉平)男爵歩兵中佐、上田(嘉八)歩兵少佐を左右に従へさせ給へる。天皇陛下御名代閑院宮載仁親王殿下には今宵陸軍中將の御正装、左腕に黒紗を纏はせられ、皇族附武官鍋島(直明)男爵を従へさせられ、畏くも御徒歩にて運ばせたまふ。日頃の御雄姿など仄見るに由もなく、いと御やつ／＼しき御様子のみによせられぬ。其次には吉城(坦)歩兵大尉、島津(久家)歩兵大尉、及び松明を捧持する大喪使書記二名に前を打たせて大喪使總裁伏見宮貞愛親王殿下、左右に栗原、手塚兩大喪使事務官、其後に橋本(良美)皇族附武官を従へさせられ、椽色の御装束上より素服を打ちかけ、巻纏の冠に、御帶剣を吊させられ、勿體なくも御薬靴を穿たせたまひ、夜氣に打ち濡める砂の上を、桐杖をつき給ひつゝ、俯向き勝ちに歩を運ばせたまふ。

次に松明二本、次に東伏見宮依仁親王、伏見宮博恭王(御二列以下皇族同じ)次に久邇宮邦彦王、梨本宮守正王、次に朝香宮鳩彦王、東久邇宮稔彦王、次に北白川宮成久王、竹田宮恒久王、何れも御正装、喪章を附けさせられて二列御行進あり。次に李王家御名代李瑛公も亦正装喪章の御姿にて御行進あり次に清河(純一)四寇(李輔)陶山(操)村岡(警正)小島(録太郎)松田

(祐作正)の六皇族附武官は三列に行進し、次に李瑛公附武官野崎(善藏)福田(義彌)張寅根の三武官三列に行進し、次に松明二人、次に大禮服に喪章を附したる先帝御親族總代二條基弘公續き、次に松明二本、次に宮内省御用係青山三浦兩博士及び西郷侍醫は大禮服喪章にて三列に行進す。次に同じく大禮服にて相磯、森永、田澤、榎田、高田の各侍醫三列に行進す。續いて松明二本の次に、股野、長崎、平井(鐵道院副總裁)岡野(法學博士)片山(工學博士)河村(同)三事務官三列に行進、次に松井(慶四郎)南(弘)床次(竹二郎)の各事務官同じく三列、次に橋本(奎二郎)水野(鍊太郎)法學博士、古賀(廉造)法學博士、各事務官も亦三列に行進す。倉知(鐵吉)山之内(一次)市來(乙彦)齋藤(易)三室戸敬光下條(康麿)木子幸三郎の諸事務官及び大喪使囑託多田好問、同國府種徳の諸氏之に續く。

次に松明二本次に大勳位大山巖、松方正義、井上馨、西園寺首相、陸海軍元帥、寺内朝鮮總督、各大臣、各大臣待遇、各陸軍大將、各特命全權大使芳川樞密院副議長、樞密院顧問官、元田拓殖局總裁、福島關東都督等の親任待遇諸氏、順次三列を以て行進す、次に勳一等旭、日桐花大綬章佩用の諸氏次に公爵次に從一位、次に勳一等旭、日大綬章、次に勳一等瑞寶章(以上五列行進)次に高等官一等、次に侯爵、次に正二位、高等官二等、麝香間祇候、錦鷄間祇候、勅任待遇、伯

爵、從二位、勳二等旭日章、勳二等瑞寶章、子爵正三位、從三位、勳三等旭日章、勳三等瑞寶章、男爵、正四位。從四位の各員は大禮服に喪章を附して進行すれば、又次に二本の松明道を照して徳川貴族院議長、大岡衆議院議長、黒田貴族院副議長、關衆議院副議長等の進める後に貴衆兩院議員百餘名執れも大禮服に喪章を附して之に續き、次に松明二本、次に帝國學士會員、次に高等官三四五等の各員、次に松明二本、次に阪谷東京市長、杉原東京府會議長其他道府縣會議長、江間東京市會議長等行き、次に松明二本行く。是れよりは愈々後驅の儀仗隊にして、陸海軍諸兵指揮官、川村大將以下幕僚眞先に近衛師團司令部、海軍儀仗隊司令官以下幕僚、近衛歩兵第二旅團司令部、近衛歩兵第三旅團近衛歩兵第四旅團、近衛野砲兵聯隊、近衛工兵大隊、近衛輜重兵大隊と一隊送り去れば又一隊、何時果つべくも見えざる中、忽ち碩體長身紅裝の幾隊盡く負ひたる銃の双手を後に組みて行き、また列外にて、抜き放てる白刃を、しかと右腋下に刀背を上にして袂め、之を指揮しつゝ行くも異様なるは、是ぞ英國より特派の軍樂隊并に儀仗兵五百人の長列にて、率ゆるにウキンスロー海軍中將なりとこそ知られたれ。續いて我海軍々樂隊、海軍儀仗隊、聯合大隊司令部、海軍儀仗隊二個大隊執れも銃を逆にして軍樂隊の奏する悲曲「哀の極」に伴はれ、今宵の御葬列の殿をなむ奉仕しける。それより小松警視、警部八騎を前後に従へて一

里に餘れる御齒簿は、午後九時五十分、全く二重橋前を離れたり。入散じ更關けて電燈の光のみ、幽かに御轍を照したてまつる。あはれ今日よりは、吹く風のみぞ寒からむ。大内山のほとり、夜色ますます深くして御苑の松林瑟瑟たるを聞くのみ。

九 御通路

さて御輦車通御の御道筋は、宮城正門より凱旋道路を経て、馬場先門に出で、右に堀端に沿ひ日比谷公園東北角に至り、華族會館前を経て日比谷公園南角を右へ、内幸町通り外務省前を左へ、虎の門跡を出で、三年町御料地に沿ひ、溜池町通り田町一丁目一番地角を左へ、表町通り青山離宮正門前を経て、青山北町一丁目六番地角を右へ、葬場殿に入らせらるゝにて、馬場先門より虎の門迄は、道幅廿四間なれど、虎の門より赤坂見附附近僅に十二間に過ぎず。又青山通りは十五間幅なり。其間中六間のみ御通路として改修しあり。總じて一里十五町の御路筋を馬場先門よりは、二町置きに、地上三十尺の電柱を立て、其の上に千二百燭光のアーケライトを點じ、尙其間十間毎に黒白の布を捲きたる二十尺の間柱を建て、頂上より旛旗を吊し、中途にて柱に絞り付ける處に綠葉の環を付け、又柱と柱との間には、銀色或は唐草若は黒白の布もてチャイレン

形の喪飾を施しぬ。それより麴町、赤坂の境界及び勸業銀行、虎の門前等の場所には、一層其裝飾を鄭重にせんとてアーク燈の下部の兩端より黒布を下げ、日の丸 國旗を地紙形に逆に吊し、其兩端より更に旗を吊しあり。青山大葬場入口の左右に至れば、擦硝子を箱め三百燭光の燈火を點したる、高二丈五尺八寸角、白木造の春日大燈籠一對を建て、尙ほ御總門の左右に清涼殿形百燭光、高さ十五尺の吊燈籠四個を建てられたり。此路の左右には仰が人も高き 大元帥陛下の還らせ給はぬ御行幸の前を承はる數萬の軍隊が姿勢正しく拔刀や銃に劍を附して蟻の這ふ間もあらず、堵列を作るに、更に其後に五千に近き警官あり。

警官は一問置に立並びて警戒しつゝありて其背面には拜送を許されたる團體の占有せる場所あり。是亦遠く青山に連り一寸の隙をも存せざるに、更にその背後には一般庶民が、十重二十重と重り合ひてぞ詰めたりける。團體參拜者中には帝國劇場に於ける男女優、華族會館に於ける華族の家人達、扱は貴族院書記官長邸前の常陸山、梅ヶ谷等の力士連、赤坂見附に於ける各宗僧侶の色々様々なる法衣の一團等誰が目にも止まりつべく、虎の門外の盲人の一組が竹柵を結び廻らして場所を取り圍めるあり。

御葬列は斯かる間を刻一刻、徐々として過ぎ給ふ。御跡より畏れおほかれど、奉送の人々は皆

御名残惜しさに、伏して涕涙の滴るゝを禁じ得ず。

十時五分といふに、先驅青山葬場殿に着し、之に續ける陸海軍の儀仗兵各豫定の位地に着ける頃ほひ、御輜車牛鳴坂を上りて、青山離宮の邊を過ぐ。斯くて十時四十分といふに、御輜車滞りなく葬場殿に着御あり。後從 悉く大葬場に到着せるは十一時を過ぎたり。

一〇 葬場殿御祭儀

(一) 青山

日は青山に暮れて、暮色蒼然四邊に迫る時、仰げば紺碧の空に、星光すばらに輝き、西のかた夕照淡くのこりて、弓のごとき三日の月低く、かなたの樹の上に懸かれり。此頃よりぞをちこちに、もゆる篝の火漸く光を加へ、打列びたる燈籠の灯は、ものうげに砂利の上を照せり。一の鳥居を中にして、内には菊花の御紋章神々しく長提灯、葬場殿の奥深く連なり。外には正門に至るまで、兩側に黒白の幕打覆ひたる電燈の柱林の如く打立ち、其下には右に海軍將校、左に歩兵六十有餘、騎兵二十左右の聯隊旗を護して、各聯隊の代表將士堵列したり。聯隊旗の色々、旭日の色鮮なるもあれば、幾年の櫛風沐雨に打破れて形をも止めざるも見ゆ。此等を内に引包みて、外

には参入の群集、埒の外に十重二十重に打圍めり。孰れも肅然として咳きの聲をも得立てず。打控へたる様ゆかしくもたふとし。

(二) 各國御名代

頓て時移りて、暗は野を覆ひて、夜風寒く打渡る。總門の内、一の鳥居の内外に、参入を許されたるは、北は樺太、北海道より、南は朝鮮、滿洲、臺灣の邊より、高き低きおのがじ、或は正門より、或は權田原、或は霞ヶ岳の諸門より追々に入り来る。七時を過ぐるここと二十七分、馬蹄の響々々と聞えて先驅の槍騎兵四五、嚴かに權田原の方より入来るに、打續いて金光燦爛たる御馬車のさらびやかなるが入り来るを、何方の先頭を打たすにかと見上げ参らすれば、之なん西班牙皇帝の御名代宮オルレアン、ボルボンのアルフロンズ親王なりける。御馬車砂利道を軋りて横さまに葬場殿に入らせ給へば、後は又寂然たる静黙に立歸りて、花やかなれども、憂はしげなる電燈の光のみ輝きて見ゆ。之に續きたるは大隈伯爵なり。嗣子信常氏と家従とに扶けられて入る。之に續きては諾威の特使、更に之に次ぎて、ブラジル特使も走せ参するあり。和蘭特使の入り来るあり。各國の特使追々に走せ加はり、正門の方よりは松方侯夫妻、徳大寺公府引續いて先着す。兎角する間に般々たる砲聲宮城の方に聞えて、はや御葬列の出てましたるぞと締め合せ合

ふ内、コンノート殿下の御馬車、前後に槍騎兵に護せられて入り来りぬ。九時近くなりてよりは、マグネシウムの光、屢さらめさ渡りて、世は何とやらん物々しく見えたる頃、獨逸のハインリッヒ親王入らせらる。

(三) 兩陛下着御

これより先き、今上陛下は大元帥の御正装に、御紋章を纏はせ給ひ、桂内大臣以下扈從を承はりて、内葬門より、寶所を御通御、三角門を経て、先帝の御由緒最も深き振天、會寧、建安の三府を過ぎらせ給ひ、鐵橋外、南側に豫て設けさせ給ひし御幕舎に御臨御あり。皇后、皇太后の兩陛下も、同じ道にと急がせ給ひ、各皇族殿下も、亦續いてこゝに來らせて、御轎車の御通御を奉送あらせ給ふ。中にも皇太后陛下には、葬場殿への行啓を御見合あり。今を限りの大御訣を此處に惜ませ玉ふことゝて、打濕りたる御氣色に拜せられさせ玉ひぬと承はるも畏し。應て御轎車は七頭の靈牛の歩み遅々たるに牽かれ、御通御あるを、今上陛下は擧手の御軍禮に奉送あり。皇后、皇太后の兩陛下を首め、各殿下はいづれも最敬禮に見送らせ給ふ。かくて御轎車は八時十分と云ふに、石橋を辿りて、宮居の外に立出でさせ給へり。

御轎車に續き、今上陛下御名代閑院宮殿下御正装に紋章を附し、左右に近衛將校を従へて出門

あり。次で御喪主の伏見宮貞愛親王殿下御喪服を召し、桐杖を左手に執らせ御出門ある頃、三陛下は、宮中に還御あり。少時にして今上、皇后、兩陛下には、半藏御門より、青山葬場へ赴かせ給ひぬ。皇太后陛下のみ、宮居の裡にたれこめさせ夜すがら打曇る御氣色に過ごさせ給ひぬらんと推し奉るも畏し。九時近くなる頃獨逸のハインリッヒ親王の入らせられしに次ぎて今上陛下、皇后陛下着御あり。引續て皇太后陛下の御名代竹田宮妃昌子内親王殿下も、亦着御ありたり。仕つらへたる葬場殿前の帷舎には、追々に人々立籠めて滾々と溢れ流るゝ御手洗の水の音清げに、之に手洗ひ口すゞぎては入り来る。先着の人人着し盡くしたる頃、マグネシヤムの音益々繁さを加へ、何の音とも知れぬが、遠くよりざわ／＼とし初めたるに、スワこそ御輦車どと人皆仰上りて迎へ参らす。

(一三)

(四) 御輦簿着御

十三日も漸く暮て、御大葬場裡、煌たる弧光燈の、輝き初めし午後六時と言ふに、未だ人氣少き御式場の奥深く設へられたる葬場殿に、巻纒の冠して、椽色の装ひしたる大葬使事務官立あらはれ、數人の仕人召具して、いと物靜に壁代を張り、御簾を垂れ場殿鋪設のことを仕まつりたり。御簾は白色絹の縁取りて、初めは低く垂れたりしが、聽て白絲の紐もて、高く其半を掲げ

(一三)

られたり。時は漸く進みて十時をも過ぎぬ。葬場殿内燦たる禮装に憂き心包み兼たる幾千の先着は私かに耳を澄まして、今や御葬列の着きもやすると待つ程もなく、遙に青山一丁目の方に當りて、哀し氣なる軍樂の音聞え初めたり。自から襟正さるゝ心地して、聞たる中に哀音の漂ふに任せしが、聽て十時二十分ともなれば、三列の警部を最先頭に、次で警視總監、行列緩く練りて次々に式場正門を入り來り。聽て御葬列の先頭、總門前に達すれば、先驅の警部は此處にて列を離れ、葬場殿の東外廓、大葬使職員に着替所に入れり。かくて、警視總監は第一新門内に入りて、左帷舎の前方に立つ。前列陸海軍儀仗兵が森として正門外に長く堵列を爲し終りたる時、一聲の喇叭の號音鳴り響けば、帷舎内先着の諸員は、恭しく其場に起立して、先帝の輿簿を迎へ奉る。此間、御葬列は分に秒に到り着きて、前列、承りし衣冠單の大葬使事務官等は、列を解きて兩帷舎の前に向合ひて並び立ち、後より續きし鼓鉦及三人の舎人が捧げ持つ各十旒の黃白旗などとは、葬場殿前第一新門の内、先着諸員の着床せし左右兩帷舎に圍まれたる大廣庭の兩側に並べ樹てられたり。旗の並べ樹てられたる後には、御紋章打ちたる大きな數十の高張提灯並びて燈れり。

(五) 御輦車着御

次に胡録、弓、楯及び鉦續き来る。之をば更に奥深く進みて、第二新門内の左右兩側に布列し、鈍色の闕腋着たる舍人が、捧ぐる日月の露簾及御箭櫃、御弓櫃をば第二の新門をも入りて、葬場殿に程近き幔門の前左右兩側に之を置きて、其處に鈍色布絹の仕人が捧げ持つ一對の大真榊を樹てたり、大真榊に續きしは御饌櫃と御幣櫃にて、此二つをば幔門の内、葬場殿の右方に設へたる膳舎に昇き入る。かゝりし程に、御葬列その半は既に正門を式場に進み入りて、松明、祭官補、祭官杯に續きて卷纒の冠に、椽色の服着けし祭官長鷹司公は正親町、萬里小路の兩祭官副長以下を従へて、曩に大葬使事務官の並列したる前方に立ち並ぶ。祭官の後に鈍色布衣の樂師十三列續きて笙、笛、箏、篳篥等もて哀氣に「萬秋樂」打奏てつゝ、帷舎の前に立てば、次で衣冠單に帶劍し、肩より素服を加へて左手に桐杖を執りたる山口諸陵頭、戸田式部長官及び渡邊宮内大臣亦到りて帷舎の前に立つ。唯寂たるが中に藁沓の砂を踏み、桐杖の地を突く音を聞くのみなり。宮相の後は六列の松明續き来るが、懸て神々しく打飾られたる五頭の曳牛に續きて、兩側に打並ぶ人垣の上に、遙に御轎車の屋蓋を拜すと思ふ程もなく、便殿に入御在りし今上、皇后、兩陛下及皇太后陛下御名代宮には親王妃、王妃、侍從長以下を従へ、親しく第二新門の内に奉迎在せらる。嗚呼彼の飴色に塗られたる大きな御轎車が、夥多の陸海老將に護られて、黃白の

旛、高張杯の立並し間を徐々と進み行きし其瞬間の光景を如何てか忘れ得べき、心あらん如き牛に牽れて、砂を噛む車の轍のキイ／＼音して軋り行く哀音切々たるを聞きし時にこそ、満場の人々は期せずして腸九廻するが如き感じをこそ起しつるならめ。御轎車の幔門に入るを待て直に仕人之を閉ぢ、其内にて牛を御轎車の轅より解き離ちぬ。去る程に閉ぢたる幔門の内には、夥多の舍人仕人共、畏て御轎車を葬場殿に奉安し、今上、皇后、兩陛下及び皇太后陛下御名代は便殿に又御轎車に續きし御葬列中の今上陛下御名代閑院宮載仁親王殿下及び大喪使總裁伏見宮貞愛親王殿下以下御葬列に加はり給ひし東伏見、伏見若宮、久邇宮、梨本宮、朝香宮、東久邇宮、北白川宮、李王御名代李堀公並に各宮妃殿下は何れも休所に入らせらる。

(二六) 詠歌

幾程もなく幔門再び開かるゝや、親王殿下王妃は葬場殿前左方の帷舎の本位に就き、次で喇叭一聲總員起立の中に、今上陛下には式部長官の御先導にて、曩に親王の着座せられし帷舎に出御その最上位に就き給ふ。それより皇后及び皇太后御名代宮には、續いて便殿を出て、今上陛下に隣して御着座、桂侍從長、一條皇后宮大夫及香川皇太后宮大夫等は其後に着座したり。葬場殿内靈柩は、御轎車に載せたる儘にして之を横向にし、其前に六つの白木几を据へられたるが、正

親町、萬里小路兩祭官、副長は以下の祭官を具し、葬場殿の右側なる神饌所より渡廊を往き通ひて、野菜鮮魚等、山の物、海の物すべて廿一臺を靈前に供へまつれば、此間俗人共は絶ゆる間無しに、

たづぎの田の稻幹に、いながらに這ひもとほらふ。

這ひ纏ほらふ。ところ蔓

淺篠原、こしなづむ、空は行かす、あくよ行くな。

と節嚴かなる誄歌を奏す。御饌を奠しをはりて這度は柳宮に納めし九種の幣物を奠し、茲に祭壇の飾を終る。

海が行けば、こしなづむ、おほか原のうゑくさ、

うみがは、いさよふ。

濱つ千鳥、濱よゆかで、磯づたふ。

と猶も誄歌の調を聞くになん。

(七) 陛下の御誄

二度喇叭の音響さぬ。乃ち衣冠單の祭官長、鷹司公は諸員起立の中に、謹て靈前に進み出て、

畏みくして祭詞を奏す。祭官長の祭詞終ると共に大元帥の正装なる、今上陛下には静に幄舎の玉座を離れ、祭官長及び宮相に先導せしめて幔門内に進み給ひ、先づ祭官長の捧ぐる玉串を靈前に供へ、次に桂侍従長の捧ぐる御誄を取りて之を讀み給ふ。

御誄

(御名) 謹ミテ 皇考ノ靈前ニ白ス

皇考ノ登遐シ給ヒシヨリ夙夜夢寐温容ヲ諷ル能ハス視宮ニ殯殿ニ奉喪參拜シテ空シク靈前ニ感泣スルコト早ヤ已ニ四十餘日今ヤ伏見桃山ニ斂葬セムトシ輜車ヲ送リテ此ニ來レリ願フニ曩ニ皇考ノ病革ルヤ上下憂懼シテ天地ニ祈ルアリ茲ニ其ノ葬儀ヲ行フヤ朝野悲傷シテ已マヌ是レ皆ナ國民忠忱ノ發露スル所ニシテ即チ 皇考德澤ノ感孚スル所ナリ此ヲ思ヒ彼ヲ念ヒ痛悼ノ情倍マス切ナリ嗚呼哀イ哉

此時恰も十四日午前〇時二十分。其御聲など聞ゆ可くもあらねど、御胸の中察し奉りて一向に涙打ぐまれぬ。陛下幄舎に還御と共に皇后宮皇太后御名代宮それくの御先導にて同じく靈前に進み出で玉串を捧げて御拜あり。遙に灯の光に拜すれば、黒き洋装の喪服着けて、その上に深く黒紗を被られたる御二方が唯二個の黒き影となりて、葬場殿に昇り降りせらるゝ様哀しとも傷ましとも申さんやうもなかりき。之れに續ぎて同じやらの洋服喪服を着け給ひたる泰宮聰子内親

王殿下御拜次に獨、英、西の御名代米佛二國の特使、我が各宮及び妃殿下、各國使節次々に拜禮し、西園寺總理大臣及び渡邊宮内大臣の奏誄後、諸員着床して、これより山縣、大山、松方、井上、徳大寺、桂、東郷の大勳位、内閣諸大臣以下の親任官（これは夫人帯同）先帝陛下の御親族たる華族總代として二條公及び九條公次に青山三浦の兩博士以下先帝御達例中拜診醫及び大喪使事務官の拜禮後喇叭號音と共に諸員一齊に起立して遙に靈柩の方を望み、茲に最後の拜禮を終る。時に十四日午前零時二十分斯て祭官、副長及び祭官等は誄歌奏樂の間に御儀御幣を撤し、而して幔門を閉づれば式茲に全く終りて、今上皇后兩陛下及び皇太后陛下御名代宮には、便殿に入御次に親王妃、王、王妃殿下は相次て休所に入らせらる。あはれ葬場殿背後なる青山假停車場にては、最早靈柩車の仕度大方は整へたるなり。初めて天を仰げば星斗燦として悲風肌に泌み入るを覺ゆ。

(八) 御靈柩移御

葬場殿の御儀式型の如く終りて後、間もなく御殿の後方、音もせて静かに開くと見れば、今迄微動だになく、御輦車に奉安し參らせたる御靈柩は徐々（こほろ）に御輦車を離て手押車へと奉安せられしに、手押車は勾配の稍傾斜したる御殿續して二條の軌道の上をスル／＼と獨り手に停車場へと降るを後より綱もて速力を加減しつゝ、程よく曳き奉り、御靈柩は一の手落もなく、御手押車より

先刻來準備を整へて、ブラットホームに横に着られて、白晝をも欺く數知れぬ電燈のあたりまはゆき、それと知らるゝ善美を盡くせる靈柩列車にと移御あらせられたり。

靈柩の汽車乗御に續て幔門は再び開かれたり。唯見る金光朱色電燈の光と映發して衣冠燦然たる一隊の御殿より北へ起くあるを、扱はと熟視すれば是なん山縣、大山、井上、松方、東郷の各大勳位を筆頭に、續ては西園寺總理、齊藤海軍、上原陸軍、原内務、内田外務以下の各大臣其他文武の親任官、大臣待遇などの大官名流が停車場へ參進するにて、其後より東伏見、竹田、北白川、久邇、梨本の各宮殿下、同妃殿下の參進あり。暫くありて、今上陛下には桂侍從長、渡邊宮内大臣、中村侍從武官長其他を隨へさせられ、玉步静々と停車場へ出御あらせられ、皇后陛下と靈柩の前に立たせられしを拜し奉るに、兩陛下共龍顏に御愁色の漂はせ給ふにて、御胸中の程拜察し奉るに餘りあり。皇太后陛下には御不參にて竹田宮妃殿下御代理申上たり。

(九) 御靈柩御發轍

靈柩列車は機關車を除きて車輛の數都合八つなり。其中靈柩は前よりも、後よりも恰度中央なる四番目に位置し給へり。扱靈柩列車には、天皇御名代宮の載仁親王殿下と大喪使總裁宮の貞愛親王殿下とは靈柩車輛の隣りなる第七號室に御乗車あそばされ、原鐵道院總裁これに隨へり。靈

柩車輦より機關車の方に數へて、三番目の車輦なる第四號室には、明治天皇御親族華族總代の二條公、祭官長鷹司公、祭官萬里小路、大原、飛鳥井の三伯其他の祭官が乗り込みたり。其他に陸軍を代表せる宮本中將、伊藤、高橋、白井三少將、國務大臣及び海軍を代表せる齋藤海相、齋藤海軍中將（孝至）川島、有馬兩海軍少將及び股野琢氏以下大喪使事務官は靈柩供奉者にて、何れもそれ／＼定めの車輦に入る。時方に午前正二時。折しも陸軍の弔砲般々と鳴り始め、品川沖の方遙に海軍の弔砲の起る一刹那、木村車掌（房久）の號笛を合圖に、今迄默然として山の如く横はれる靈柩列車は徐々に進行を始め、兩陛下には是が此世の最終と汽車の後影を名殘惜氣に目守らせ給ひしが、汽車はやがて闇に没しぬ。靈柩御發軔の折、帷舎參集の諸員は一齊に起立して奉送す。兎角する中、兩陛下は祭場御着の時と同様の供奉にて、鹵簿肅々と還幸ありて、青山通を左に青山離宮に入らせられ、續いて諸員退散となれり。あはれ、明治天皇は四十五年の間、四海に臨みて政務を樹はせたまへる宮居を離れまし、東京を後にして千歲歸り給はぬ長への旅路に立せ給ひぬ。悲しきかな。

（八三）

第二編 鹵簿

殯宮葬場殿間鹵簿及堵列隊

警部 齋藏盛晃（正裝喪章ヲ附ス）

警部 山下猪之助（同上）

警部 岩村政壽（同上）

警部 小泉仲三郎（正裝喪章ヲ附ス）

警部 楠多美雄（同上）

警部 多賀谷岩次郎（同上）

警視總監 安樂兼道（正裝喪章ヲ附ス）

警部 川淵治馬（同上）

警部 齋藤直橋（同上）

警部 山崎晃（同上）

警部 兼子悌次（同上）

警部長 野義一(同上)

警部 井熊勝重郎(同上)

近衛騎兵聯隊

喇叭隊

陸軍騎兵二等卒 宮田安吉
陸軍騎兵二等卒 市毛藤次郎
陸軍騎兵二等卒 吉津豐
陸軍騎兵一等卒 菅原榮太郎

聯隊本部

聯隊長(代理) 陸軍騎兵中佐 功五等 牧野正臣

陸軍騎兵少佐 功五等 村上正

陸軍歩兵中尉從七位 礪谷屯

陸軍歩兵中尉從七位 小見山恭造

陸軍歩兵中尉從七位 田上耕一

陸軍歩兵中尉從七位 管野竹治

陸軍騎兵一等卒 高田秀 陸軍騎兵一等卒 五味淵定

聯隊旗手 陸軍騎兵少尉從五位 大島忠 陸軍騎兵一等卒 岩崎榮作

陸軍騎兵一等卒 石原禮左衛門 梶田昇位

分隊長一年志願兵 遠田寅太郎
小隊長陸軍騎兵中尉從七位 功五等 吉野竹次郎
中隊長(代理) 陸軍騎兵中尉從七位 功五等 男爵 寺島敏三

陸軍騎兵二等卒 安齋正吾

陸軍騎兵二等卒 鈴木房吉

陸軍騎兵二等卒 松原松五郎

一年志願兵 松平直富

陸軍騎兵二等卒 加藤木好

陸軍騎兵二等卒 中川三郎

陸軍騎兵二等卒 山中孝平

陸軍騎兵二等卒 榎井豐藏

陸軍騎兵二等卒 渡邊勇龜

陸軍騎兵二等卒 竹内金六

陸軍騎兵二等卒 小尾壽

陸軍騎兵二等卒 佐藤健次郎

陸軍騎兵二等卒 赤松利

陸軍騎兵二等卒 長池榮太郎

陸軍騎兵二等卒 關權次郎

陸軍騎兵二等卒 天間武信

陸軍騎兵一等卒 國屋義弘

陸軍騎兵二等卒 國本與平

陸軍騎兵二等卒 西澤和衛

陸軍騎兵二等卒 瀧澤虎太郎

陸軍騎兵二等卒 遠藤彌平太

陸軍騎兵二等卒 陣内浪次郎

陸軍騎兵二等卒 高市信一

陸軍騎兵二等卒 宮城恒次郎

陸軍騎兵二等卒 平川繁

陸軍騎兵二等卒 大木文平

陸軍騎兵二等卒 宮田豐一

陸軍騎兵二等卒 伊藤喜惠

陸軍騎兵二等卒 川崎光貴

陸軍騎兵二等卒 岩田潔

陸軍騎兵二等卒 矢野豐治

陸軍騎兵二等卒 今中登一

陸軍騎兵二等卒 小川榮三郎

陸軍騎兵二等卒 大塚彦市

陸軍騎兵二等卒 松田宇之松

陸軍騎兵二等卒 高橋武夫

陸軍騎兵二等卒 河原茂太郎

陸軍騎兵二等卒 清水源五郎

陸軍騎兵二等卒 元井源松

陸軍騎兵二等卒 管野司郎

分隊長 一年志願兵 入交鐵治

分隊長 陸軍騎兵軍曹 山添勸次郎

小隊長 陸軍騎兵少尉正八位 藤田朋

陸軍騎兵一等卒 藤崎彌三郎

陸軍騎兵二等卒 三浦八郎

陸軍騎兵二等卒 廣畝忠次郎

陸軍騎兵二等卒 熊谷健吉

陸軍騎兵二等卒 船山 喜作
 陸軍騎兵二等卒 岩佐 郁三郎
 陸軍騎兵二等卒 木村 悌三
 陸軍騎兵二等卒 上野 福督
 陸軍騎兵二等卒 澤野 愷吉
 陸軍騎兵二等卒 黒井 仁止郎
 陸軍騎兵二等卒 小倉 彌三郎
 陸軍騎兵二等卒 渡邊 理作
 陸軍騎兵二等卒 管井 源三郎
 陸軍騎兵二等卒 會田 安太郎
 陸軍騎兵二等卒 辻田 吉定
 陸軍騎兵二等卒 中川 辨之助
 陸軍騎兵二等卒 二宮 齊
 陸軍騎兵二等卒 田村 菊次郎
 陸軍騎兵二等卒 佐本 榮三郎
 陸軍騎兵二等卒 鎧田 卯三郎
 陸軍騎兵二等卒 石川 秀夫
 陸軍騎兵二等卒 淺野 萬藏
 陸軍騎兵二等卒 柳沼 徳江
 陸軍騎兵二等卒 山崎 耕作
 陸軍騎兵二等卒 長島 久治
 陸軍騎兵二等卒 高田 金十郎
 陸軍騎兵二等卒 鈴木 憲次郎
 陸軍騎兵二等卒 河野 正夫

陸軍騎兵二等卒 井上 善一
 陸軍騎兵二等卒 鶴海 丈衛
 陸軍騎兵二等卒 深澤 直次郎
 陸軍騎兵二等卒 米田 善五郎
 陸軍騎兵二等卒 佐川 近義
 陸軍騎兵二等卒 增岡 源七郎
 陸軍騎兵二等卒 山床 大五郎
 陸軍騎兵二等卒 金野 豊三郎
 陸軍騎兵二等卒 米田 善五郎
 陸軍騎兵二等卒 堀口 宜美
 陸軍騎兵二等卒 北野 政吉
 陸軍騎兵二等卒 香山 開太
 陸軍騎兵二等卒 横川 賢司
 陸軍騎兵二等卒 菅原 兵助
 陸軍騎兵二等卒 岡林 順吉
 陸軍騎兵二等卒 大中 虎一
 陸軍騎兵二等卒 富張 廣光
 陸軍騎兵二等卒 中村 官吾
 陸軍騎兵二等卒 菅原 兵助
 陸軍騎兵二等卒 彦坂 潭次

分隊長
 士官候補生
 小隊長
 見習士官
 中山 四郎

陸軍騎兵二等卒 大井 秀夫
 陸軍騎兵二等卒 西山 定吉
 陸軍騎兵二等卒 田代 長平
 陸軍騎兵二等卒 宮崎 久藏
 陸軍騎兵二等卒 土井 貫一
 陸軍騎兵二等卒 橋本 卯七
 陸軍騎兵二等卒 田淵 佐太治
 陸軍騎兵二等卒 大柴 續
 陸軍騎兵二等卒 川端 平三郎
 陸軍騎兵二等卒 松川 萬龜雄
 陸軍騎兵二等卒 小野 福吉
 陸軍騎兵二等卒 竹内 音八
 陸軍騎兵二等卒 河村 周一
 陸軍騎兵二等卒 伊藤 保
 陸軍騎兵二等卒 神末 彌平
 陸軍騎兵二等卒 阿部 秀夫
 陸軍騎兵二等卒 菅原 欽郎
 陸軍騎兵二等卒 川上 瀨
 陸軍騎兵二等卒 齊藤 清之丞
 陸軍騎兵二等卒 佐伯 經造
 陸軍騎兵二等卒 松本 清一
 陸軍騎兵二等卒 佐藤 喜四郎
 陸軍騎兵二等卒 宮本 文夫
 陸軍騎兵二等卒 齊藤 實

陸軍騎兵二等卒 渡邊 善教
 陸軍騎兵二等卒 近藤 義吉
 陸軍騎兵二等卒 增淵 薫郎
 陸軍騎兵二等卒 風見 芳之助
 陸軍騎兵二等卒 林 與助
 陸軍騎兵二等卒 谷野 佐武郎
 陸軍騎兵二等卒 一牛 善作
 陸軍騎兵二等卒 中村 美治
 陸軍騎兵二等卒 根岸 文太郎
 陸軍騎兵二等卒 谷野 佐武郎
 陸軍騎兵二等卒 一牛 善作
 陸軍騎兵二等卒 片野 卯之助
 陸軍騎兵二等卒 酒井 說時
 陸軍騎兵二等卒 菊地 虎之助
 陸軍騎兵二等卒 佐藤 岩治
 陸軍騎兵二等卒 林 與助
 陸軍騎兵二等卒 谷野 佐武郎
 陸軍騎兵二等卒 一牛 善作
 陸軍騎兵二等卒 片野 卯之助
 陸軍騎兵二等卒 的場 賢二
 陸軍騎兵二等卒 佐藤 岩治
 陸軍騎兵二等卒 林 與助
 陸軍騎兵二等卒 谷野 佐武郎
 陸軍騎兵二等卒 一牛 善作
 陸軍騎兵二等卒 片野 卯之助

陸軍騎兵特務曹長
 勳八等
 入木 藤吉
 分隊長
 士官候補生
 片野 卯之助
 隊 小 外 列

陸軍一等歌醫 加藤小次郎
 陸軍二等歌醫 志村太賀志
 陸軍一等軍醫 喜多 竝
 陸軍一等主計 豐行 秋
 陸軍見習歌醫 林 小市
 陸軍見習歌醫 鈴木 春次
 陸軍見習歌醫 飯田 定藏
 陸軍二等歌醫從七位 中山 寛二
 陸軍一等計手勳八等 早川 新吉
 陸軍一等統工長 德丸 喜一
 陸軍一等看護長 上田 孫吉
 陸軍一等鞍工長 松本 卯太郎
 陸軍上等看護卒 宇根 實
 陸軍三等縫工長 友利 玄永
 陸軍上等看護卒 岩 永 迪
 陸軍二等踏鐵工長 岡田 鐵太郎
 陸軍上等看護卒 長谷川 清

近衛師團軍樂隊

隊長 陸軍一等隊長 正七位 山本 銃三郎
 陸軍樂手補 星出 義男
 陸軍三等樂手 松本 藤之允
 陸軍樂手補 高橋 清
 陸軍樂長補助六等 守谷 範造
 陸軍三等樂手 齋藤 長七
 陸軍二等樂手 柳 橋 惇
 陸軍樂手補 和田 宣雄
 陸軍樂手補 寒川 薰倍
 陸軍二等樂手勳七等 河野 愛藏
 陸軍樂手補 平野 廣
 陸軍樂手補 前田 武造
 陸軍樂手補 内田 陌文
 陸軍三等樂手 蟹江 儀之助
 陸軍樂手補 菅野 長左衛門
 陸軍樂手補 瀬戸 操
 陸軍二等樂手 磯 總 藏
 陸軍樂手補 小川 利三郎
 陸軍二等樂手 加藤 敏平
 陸軍樂手補 入村 輝一
 陸軍二等樂手勳七等 竹中 房吉

陸軍三等樂手 水鉤 祐治
 陸軍樂手補 小林 寅吉
 陸軍樂手補 戸島 儀助
 陸軍二等樂手 鈴木 忠右衛門
 陸軍樂手補 市原 正臣
 陸軍樂手補 小倉 菊造
 陸軍樂手補 雨澤 鏡之丞
 陸軍三等樂手 堀内 英一
 陸軍二等樂手勳七等 阪野 小三郎
 陸軍樂手補 鏡 富三
 陸軍三等樂手 山口 力松
 陸軍二等樂手 行宗 壽一
 陸軍三等樂手 佐伯 一郎
 陸軍樂手補 水科 直策
 陸軍樂手補 平野 芳助
 陸軍三等樂手 橋爪 富一
 陸軍三等樂手 岡崎 幸之介
 陸軍樂手補 山本 半次
 陸軍樂手補 生井 常三郎
 陸軍一等樂手勳七等 木村 留

近衛步兵第一旅團司令部

旅團長(代理) 陸軍步兵大佐 功三級 金久保 萬吉
 旅團副官 陸軍步兵中尉 功七位 杉山 得一
 陸軍步兵大尉 功五位 土屋 齊
 陸軍步兵曹長 功八位 桑名 郡治
 陸軍步兵曹長 功七位 松岡 盛衛
 近衛步兵第一聯隊 唵 隊
 陸軍步兵曹長 大島 爲次郎
 陸軍步兵一等卒 小林 國次郎
 陸軍步兵伍長 川井 夏吉
 陸軍步兵曹 三浦 新四郎
 陸軍步兵曹 高橋 榮治郎